

# 上ノ久保遺跡 桜林遺跡・五ヶ遺跡

—市道東416号線・市道東418号線建設  
に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—

1998

群馬県安中市教育委員会

# 上ノ久保遺跡 桜林遺跡・五ヶ遺跡

—市道東416号線・市道東418号線建設  
に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—

1998

群馬県安中市教育委員会



上ノ久保遺跡出土の松鶴鏡

# 序

安中市は碓氷川中流域に広がる緑豊かな田園都市です。碓氷川の南の台地上に広がる畠地帯ではコンニャクやゴボウなどが栽培されています。その中に位置するのが鷺宮地区です。この鷺宮地区の中心には、咲前神社があります。この神社は貫前神社の「先の宮」であったことからこの名称が付けられ、鷺宮の地名もこれに由来します。伝承では白鳳元年（672年）の鎮座と言われ、古代からこの地域の人たちの信仰を集めていたところです。現在、ここで行われる太々神楽は市指定重要無形文化財に指定されています。

咲前神社周辺では、以前から多くの土器や石器が出土していて、縄文時代から平安時代まで連綿と続く大規模な集落遺跡が存在していることは周知されていました。今回、市道の建設に伴い発掘調査を行った上ノ久保遺跡・桜林遺跡・五ヶ遺跡も、この大規模な遺跡の一部と考えられます。調査の結果、遺跡の範囲が予想どおり広範囲に及んでいることが明らかとなりました。おそらく、咲前神社を中心とする遺跡群は、古代碓氷郡の重要な位置を占める集落であったことでしょう。

現在の生活の利便性を高める市道建設と、埋蔵文化財の保護は一見すると相反することのように思われます。しかし、こうした機会なくしては、発掘調査を行い遺跡の実際を目にすることができません。失われた遺跡と引き替えに得られた遺跡の情報や遺物は、貴重な歴史的遺産です。私たちは遺跡・遺物を通じて歴史や社会のあり様を科学的に理解し、その結果を未来へ継承して行く必要があります。そのために、学校教育・生涯教育などの機会を通じて、有効活用を計って行く所存です。

なお、発掘調査にご協力いただきました地権者の皆さまをはじめとする多くの方々に、厚く御礼申し上げたいと思います。

平成10年8月

安中市教育委員会

教育長 山 中 誠 次

## 例　　言

1 本書は安中市建設部土木課が実施した安中市道東418号線・同東416建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書であり、安中市鷺宮字上ノ久保、同桜林、同五ヶ地内に所在する上ノ久保遺跡(略称G-26)、桜林遺跡(G-16A)、五ヶ遺跡(G-16B)の正式報告である。

2 発掘調査及び遺物整理は、市道東418号線試掘調査については国庫補助金・県費補助金により実施し、それ以外の本調査及び遺物整理は市単独事業として実施した。

3 発掘調査及び遺物整理の期間は以下のとおりである。

桜林遺跡・五ヶ遺跡 発掘調査 平成3年7月16日～8月10日

　　遺物整理 平成3年9月～平成4年3月

　　平成10年3月～4月

上ノ久保遺跡 試掘・発掘調査 平成9年1月16日～平成9年3月31日

　　遺物整理 平成9年4月～平成10年4月

4 発掘調査は安中市教育委員会社会教育課文化財係主任(文化財保護主事)大工原豊が担当し、遺物整理は大工原と同主事井上慎也が担当した。

5 本書の編集は大工原が行い、本文の執筆は大工原のほか、井上、主事深町真、金井京子、中澤信忠が行ない、執筆か所は文末に記した。

6 繩文土器については、林克彦氏(青山学院大学文学部助手・市史調査員)、石坂茂氏(群馬県埋蔵文化財調査事業団)に、また、弥生土器については若狭徹氏(かみつけの博物館学芸員)に格別なるご指導・ご助言をいただいた。

7 遺物整理作業の分担は以下のとおりである。

全体の統括 大工原

遺構図の実測・トレース 伊田百合子、上原由美子、高瀬敦子、高林直美、平出紀子  
　　古立真理子、安川節子

遺構図版・土層観察表の作成 吉沢英子、伊田、高瀬

縩文土器の拓本・実測・トレース 中澤信忠、筑井美佐子

石器の分類・実測・トレース 井上

弥生土器の拓本・実測・トレース 中澤

土師器・須恵器の拓本・実測・トレース 金井京子、筑井、高林

土師器・須恵器の分類、土器観察表作成 金井

鉄器実測・トレース・観察表作成 中澤

遺物図版等の作成 高林、高瀬、中澤

8 遺構写真の撮影は大工原が行ったが、実測用及び図版用遺物写真撮影は、写真家小川忠博に委託して実施した。

9 発掘調査の際には神社境内及び鷺宮8区住民センターを利用させていただいた。その際、咲前神社宮司（鷺宮8区長）和田正氏には幾多の便宜をはかっていただいた。記して感謝の意を表したい。

10 調査・遺物整理期間中、以下の方々にご協力・ご指導・ご教示をいただいた。記して感謝の意を表したい。（敬称略）

青木 豊 飯田陽一 磯貝基一 小野和之 阪本英一 関根慎二 竹内 徹 外山政子  
藤巻正勝 前沢和之 若狭 徹 和田雅之 （株）磯部建設 地元地権者・関係者各位

11 調査組織は以下のとおりである。

安中市教育委員会事務局

教育部長 真下 仁（平成9年3月転出）

阿久津浩司

社会教育課長 多胡泰宏（平成9年3月退職）

横田道夫

文化財係長 杉山 弘（平成9年3月転出）

佐藤輝男

主任 大工原 豊（発掘調査・遺物整理担当）

（文化財保護主事）

同 千田茂雄

主任 深町 真

主任 井上慎也（遺物整理担当）

社会教育指導員 中嶋昇太郎（平成9年3月転出）

小板橋 靖

発掘調査従事者 大手弓子 清水 正 下マス江 須藤ダイ 多胡 静 田島元治

田島かつ子 田島せい子 田中利策 西村水子 湯川光子

遺物整理従事者 伊田百合子 上原由美子 小川久美子 金井京子 神宮幸四郎 高瀬敦子

高林直美 筑井美佐子 中澤信忠 平出紀子 古立真理子 安川節子

吉沢英子 和田宏子

## 凡例

- 1 遺構実測図は1/80を基本とした。また、遺跡全体図は1/200とした。
- 2 遺構図中の各種スクリーントーンの意味は下図のとおりである。また、遺構図中の北マークは磁北である。なお、磁北は真北より西へ6°30'ずれている。
- 3 遺物実測図の縮尺は次のとおりである。

縄文土器：1/4 弥生土器：1/4 土師器・須恵器：1/4 須恵器大甕 1/16

石器：2/3、1/2、1/4、1/8

鉄器・鉄滓・和鏡：1/2

- 4 スクレイパー類の二次調整に付された記号の意味は次のとおりである。

▼ : 主剝離の打点と方向

P : 押圧剝離的な調整加工

P + D : 直接打撃と押圧剝離の併用または粗雑な押圧剝離

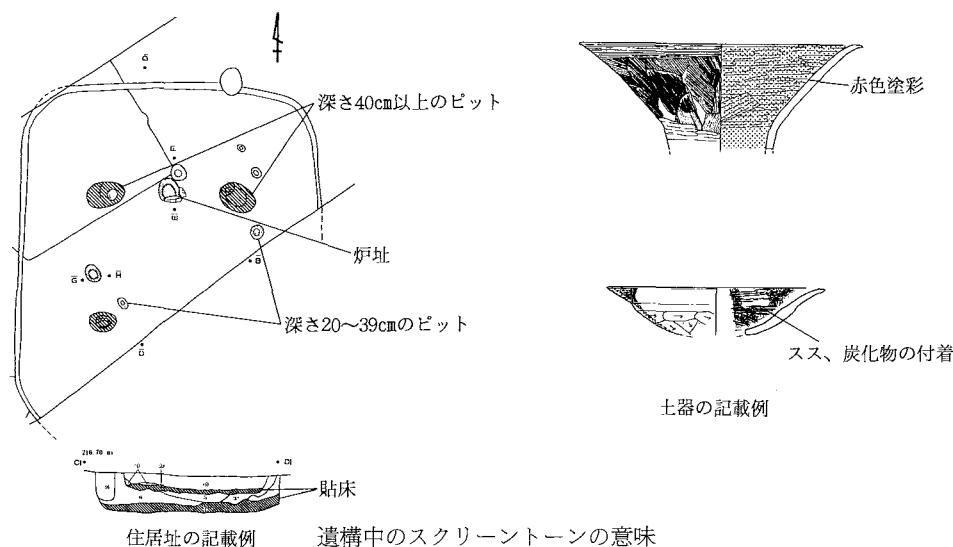
D : 直接打撃による調整加工

M : 使用などによると推定される連続した微細剝離 (Micro-Flaking)

- 5 磨石・凹石・敲石では、自然面を点描で示し、磨耗部分を白抜きで示している。凹痕と磨面の切り合い関係については次のとおり区別して表現した。

磨面→凹痕：凹痕の外枠は実線 凹痕→磨面：凹痕の外枠は破線

区別できないもの：凹痕の外枠は一点鎖線



# 目 次

口 紋	IV 遺構各説	14
序	1 上ノ久保遺跡	14
例 言	(1) 繩文時代	14
凡 例	(2) 弥生時代	54
目 次	(3) 古墳時代～平安時代	61
I 調査の経過	(4) 中世	128
1 市道東416号線関連遺跡	2 桜林遺跡	132
(1) 調査に至る経過	(1) 平安時代	132
(2) 調査の経過	(2) 中・近世	132
2 市道東418号線関連遺跡	3 五ヶ遺跡	142
(1) 調査に至る経過	(1) 平安時代	142
(2) 調査の経過	V 成果と問題点	148
II 調査の方法	1 弥生時代～平安時代の集落の 変遷について	148
1 発掘調査の方法	(1) 鷺宮地区遺跡群の集落変遷	148
(1) 調査の方針と目的	(2) 新寺・大王寺地区遺跡群との 関係	150
(2) 試掘トレンドと本調査区の設 定	(3) 小結	151
(3) 遺構確認面	2 中世館址について	152
(4) 遺構の調査方法・記録方法	(1) 遺構と地割りとの関係につい て	152
2 遺物整理の方法	(2) 咲前神社関係の文献記録	156
(1) 遺物整理の方針と目的	3 上ノ久保遺跡出土の和鏡に ついて	158
(2) 遺構の記載・分析の方法		
(3) 遺物の記載・分析の方法		
III 遺跡の地理的・歴史的環境		
1 地理的環境		
2 歴史的環境		
3 層序		

## I 調査の経過

### 1 市道東416号線関連遺跡

#### (1) 調査に至る経過

平成8年4月16日、市教育委員会へ市土木課より東416号線建設の照会があった。道路建設場所は詳細分布調査により遺物散布地であることが確認されており、咲前神社の南から南西部にかけての地域であり、集落遺跡の存在が予測された。そこで、市教育委員会では同年4月19日、工事に先立ち発掘調査を行う必要がある旨の「土木工事等に係る意見書」を市土木課へ回答した。その後、市教育委員会と市土木課で調査時期等に関する協議を行った。市教育委員会では十分な調査期間を確保する必要性があることで、市土木課で用地買収の問題があることから工事実施時期は翌平成9年度に実施することで合意した。また、発掘調査については平成8年度後半で、用地買収問題が決着した時点で実施することとした。

#### (2) 調査の経過

試掘調査は平成9年1月16日に開始した。道路建設部分は約300mであったため、北東から順に試掘トレーニングを設定し、順次遺構の有無についての確認作業を行った。その結果、すべての試掘トレーニングで遺構・遺物の存在が確認された。期間が年度内までであること、排土置き場の確保の問題、土壤の凍結を防止するため、全体を一度に調査することはせず、北東から調査区を小さく区切り、順に本調査を行うこととした。調査期間中は厳寒期であったため、ビニールハウスなどを用いて調査環境の維持と凍結防止に努めた。そして、3月31日までに調査を終了した。

遺物整理は継続して平成9年4月から断続的に実施した。遺構の重複が激しかったことや、他の事業との並行作業で作業効率が低下したことなどから、予想以上に長期間に及ぶこととなった。当初平成10年3月に報告書の刊行を予定していたが、7月までずれ込むこととなった。

### 2 市道東418号線関連遺跡

#### (1) 調査に至る経過

平成2年度に市道東418号線の建設工事が開始された。事前に市道建設の照会があったものの、当初年度工事実施区域では、遺跡の存在する可能性が低かったことから、工事に際し立ち会いを行った。その結果、奈良・平安時代の集落遺跡の一部が道路にかかって存在していることが判明した。そして、平成3年度工事予定区域は、さらに遺構が存在する可能性が高い部分に該当する

## II 調査の方法

ことが推定された。そこで、安中市教育委員会（以下市教育委員会）では安中市建設部土木課（以下、市土木課）と調査に関する協議を行い、次年度の道路建設工事に先立ち発掘調査を実施することを決定し、予算措置を講じた。

平成3年4月15日には市土木課より正式に「土木工事等に係る意見聴取（照会）」があった。そこで、市教育委員会では同年7月に発掘調査を実施する旨の「土木工事等に係る意見書」を同年4月18日付けで市土木課へ回答した。7月からの調査となったのは、この時点ですでに「すみれ工業団地」造成事業に伴う大規模な発掘調査（大下原遺跡・吉田原遺跡）が開始されていたためである。

### (2) 調査の経過

発掘調査は平成3年7月16日に開始した。桜林遺跡の調査から実施し、次いで五ヶ遺跡の調査を行った。期間の前半は雨天が多く、後半は暑さが厳しかったものの、遺構密度が低かったため、発掘調査は順調に進行した。8月10日にはすべての調査を終了した。

水洗・注記・土器接合・復元などの基礎的整理作業は平成2年度中に終了したが、それ以外の遺物整理は他の事業との関係で、継続して行うことができなかった。報告書作成のための図面作成等の作業は平成10年3月から4月にかけて、上ノ久保遺跡と並行して実施した。

（大工原 豊）

## II 調査の方法

### 1 発掘調査の方法

#### (1) 調査の方針と目的

咲前神社を中心とした集落遺跡は、古代碓氷郡の中心的集落の一つであったと推定される。咲前神社の北方に存在する荒神平・吹上遺跡の調査結果から、集落の継続時期については判明している。また、集落の範囲も、北方についてはある程度確認されている。しかし、南方や西方についての範囲ははっきりしていない。また、時期ごとに集落の規模の変化などもはっきりとしていなかった。このように集落の基本的内容について明らかにすることを調査目的とした。

また、この集落がどの郷に属していたか、あるいはどんな名称で呼ばれていたか、どんな豪族が支配していたか、といった基本的内容については、今までのところほとんど不明である。これらの課題を解明する資料を得ることも目的の一つとした。

次に、より具体的な調査方針について述べる。今回の調査は市道建設に伴うものであることか

ら、調査区区域は距離が長いものの、幅が約6mと狭く、住居址1軒を全掘するのも難しい。したがって、個々の住居址ごとの出土遺物の組成を捉えることもできない。こうした調査上の制約から、遺構相互の関係を定量的に比較する分析方法を採用できない。また、集落論的分析も面的遺構分布状況を把握できないので難しい。したがって、遺跡を対象としたアプローチは、集落遺跡の範囲を確認することと、遺跡としての時期別変遷を把握することが限界である。端的に言えば、集落遺跡に対しての試掘調査の域を出るものではない。こうした制約のある条件下では限定的な分析しか行えないので、新たな方法論的アプローチは不可能である。ゆえに、現場段階では①各遺構の重複関係の確認、②遺構内から原位置を留めて出土した遺物と覆土中の混在遺物の分離により一括性のある単位として遺物を取り上げる、といったごく一般的な調査を行うことで本遺跡群に関する考古学的データを蓄積することを一義的な調査方針とした。

## (2) 試掘トレントと本調査区の設定

**上ノ久保遺跡** 試掘トレントは、20mごとに設置された市道建設用の中心杭（ナンバー杭）を基準として、その南側に2m×4mの大きさで設定した。

また、試掘調査ですべてのトレントから遺構が検出されたため、中心杭No.2からNo.13までの220mの区域を本調査の対象区域とした。ただし、中心杭No.10からBC.4（No.11+12.54）杭までの約32.5m間は地権者の了承が得られず本調査区域から除外した。また、道路にカーブが多いためと、グリッド法がこうした調査区には有効でないことが明らかとなため、調査区全体を含めたグリッドは設定しなかった。小刻みに調査区を設定したため、その都度調査区内に含まれる中心杭2点を基準点として遺構測量用に使用した。

**桜林遺跡・五ヶ遺跡** 試掘調査は道路の中心線に沿って幅1mの試掘トレントを設定した。そして、遺構が確認された部分についてのみ本調査の区域とした。また、市道道路建設用の中心杭を利用してグリッドを設定した。のうちNo.10とNo.15を結んだ直線をグリッドのEラインとし、西に位置するNo.15をE-8、東のNo.10をE-33としてグリッドを設定した。4m×4mのグリッドとし、グリッドの呼称は北西隅の座標値とし、北から南へアルファベットでA・B・C・・・、西から東へ算用数字で1・2・3・・・と4m進法で呼称することとした。なお、こうした幅の狭い道路では、グリッド法はあまり有効ではなく、便宜的に付けたに過ぎない。○○住周辺で十分出土位置を把握することができるので、測量用の基準点に過ぎず、実際にはグリッドとしての遺物の取り上げはほとんどない。本調査の区域は、東に位置するE-35からE-43グリッド付近までの区域をA区とし、西に位置するE-3からE-9グリッド付近までをB区とした。A区を桜林遺跡、B区を五ヶ遺跡と呼称することにした。

## II 調査の方法

### (3) 遺構確認面

本遺跡群の基本層序は、中野谷地区遺跡群とほぼ同じ堆積状態であった。そして、ほとんどが古墳時代から平安時代の遺構であったため、中野谷地区遺跡群と同じようにIVa層上面を遺構確認面とした。ただし、上ノ久保遺跡の中央、J-2号住居址周辺ではIII層が薄く、V層が確認面となった。

### (4) 遺構の調査方法・記録方法

各遺跡における遺構の調査方法は第1表のとおりである。上ノ久保遺跡と桜林遺跡・五ヶ遺跡では調査年次が6年違っており、すべてが同じ方法とはなっていない。ただし、デジタル方式による遺物分布図、土層断面図でのビニール転写法などの独自の方法はほぼ同じである。詳細については、『中野谷地区遺跡群』(安中市教育委員会 1994年) 及び『中野谷松原遺跡』(同 1996年)などを参照されたい。なお、桜林遺跡・五ヶ遺跡の調査は大下原遺跡・吉田原遺跡と並行して行っているので、『大下原遺跡』(同 1993年)を参照されたい。

遺跡名	上ノ久保遺跡			桜林遺跡・五ヶ遺跡			
遺構名 作業工程	住居	土坑・ピット 埋設土器	溝	住居	溝		
グリッド杭設置	直営(トランシット)			道路規準杭利用			
表土掘削・除去	バックホー			バックホー			
遺構確認	ジョレン			ジョレン			
遺構精査・掘削	移植ゴテ ねじり鎌 竹箆	移植ゴテ ねじり鎌 バックホー	移植ゴテ ねじり鎌 竹箆	移植ゴテ ねじり鎌 竹箆	移植ゴテ ねじり鎌 バックホー		
遺物取り上げ法	分層16分割法	一括	2m毎に分割 層毎	分層16分割法	2m毎に分割 層毎		
遺構平面図	平板測量			航空写真利用方法			
遺物分布図	デジタル方式	なし		デジタル方式	なし		
土層断面図	ビニール転写法 ペンタグラフで縮小			ビニール転写法 写真で縮小			
遺構断面図	図面起こし			図面起こし			
遺構写真 地上	リバーサル(35mm) モノクロ(35mm)			リバーサル(35mm) モノクロ(35mm)			
遺構写真 航空				リバーサル(35mm) モノクロ(35mm・6×7)			

第1表 作業工程別調査方法一覧表

住居址の精査は原則として床面までとし、掘り方まで完掘はしなかった。なお、柱穴・土坑の確認も床面精査で行った。ただし、土層観察面に沿って細いサブトレンチを作り、地山まで掘削し、張床や掘り方の状態の観察及と土層断面図の作成を行った。竈についても掘り方まで完掘しなかった。基本的には分層16分割法で遺物を取り上げ、遺物整理段階でデジタル方式の遺物分布図を作成するため、現場での遺物分布図は作成していない。例外的に、竈周辺に遺棄された状態で遺物が出土した場合に限り、アナログ方式の遺物分布図を作成した。

土坑は半截し半分ずつ精査を行った。土坑では分布図は作成せず、一括で遺物を取り上げた。掘立柱建物址は、柱穴の配列は柱穴の深さ・位置を検討して決定した。

## 2 遺物整理の方法

### (1) 遺物整理の方針と目的

調査の方針と目的についてはすでに述べたとおりであり、所期の方針に沿って遺物整理は行うこととした。今回の調査で得た資料は、予期したとおり集落の全体像を復元するためには断片的で不十分なものであった。したがって、分析の対象は住居址・土坑といった遺構単位ということになる。この場合、遺構単位で他の遺跡との客観的対比が可能なデータを抽出する必要がある。そこで、すでに継続的に実施されていてある程度の成果が認められる中野谷地区遺跡群の遺物整理の方法に準拠して実施することにした。また、今回の作業により分析及び解釈のレベルまで到達し得ないことは明らかなので、基本的データの提示を主眼とした記載方法をとることにした。

### (2) 遺構の記載・分析の方法

住居址は平面図・土層断面図・遺構断面図・遺物分布図・写真・調査時の所見等を総合的に判断し、遺構図版を作成した。住居址に重複がある場合、土層堆積状態から新旧関係の確認に努め、住居ごとに分離して図版を作成した。時期の決定は竈出土土器・床直遺物・最下層遺物を総合的に検討して決定したが、ほとんどの住居址が完掘されていないことと、混在遺物が多いため、質的評価によるところが大きく、定量分析によるものではない。

住居址平面図・同遺物分布図（デジタル方式）・同土層断面図・同遺構断面図・竈（炉址）土層断面図・土層観察表・住居址観察表を掲載した。なお、主要な遺物については、分布図中に出土位置を図示した。

また、土坑・溝については住居址に準じ、平面図・土層（遺構）断面図・土層観察表を掲載した。埋設土器はこれ以外に掘り方も提示した。縄文時代の土坑で土壤墓群と推定される部分については、個々の土坑の図示ではなく、全体を一つの図版化するように心がけた。

## II 調査の方法

### (3) 遺物の記載・分析の方法

**[縄文土器の分析・記載方法]** 実測は長焦点法による写真実測法と、レーザーセンサーを利用した断面図化機（T & F社製クロシス）により断面図を作成する方法を用いて行った。また、拓本は掃除機を用いた拓本採取法により行った。

土器群は型式学的方法により分類を行い、図示した土器は残存率の高いもの・時期的特徴を有するものを選択的に掲載した。また、共伴関係を把握し易いように、出土層位・出土位置を明示した。また、掲載資料については観察表を作成した。

**[石器の分析・記載方法]** 上ノ久保遺跡から出土した石器で、住居址に伴い石器群としてまとめて扱うことのできる資料は、J—5号住居址1軒分に過ぎない。したがって、この住居址出土の石器のみ種別組成・器種組成・石材組成を提示した。それ以外の石器については、各器種をカタログ的に提示するにとどめた。石器の実測は簡易写真実測と一般的な手実測により行った。全点について石器観察表を作成した。

**[土師器・須恵器の分析・記載方法]** 実測は長焦点法による写真実測と、レーザーセンサーを利用した断面図化機を用いる方法で行った。図示した遺物は残存率の高い資料を中心に選択したものであり、図示可能遺物の全個体ではない。なお、土師器・須恵器は、原則として坂口・三浦編年（坂口・三浦1986）により時期の決定を行った。また、遺物の共伴関係についての検討も併せて行った。ただし、住居址が完掘されていないものが多いので、分析単位としての一括性に欠ける面があり、資料的にはやや劣る。

**[金属器の分析・記載方法]** 鉄製品は実測図と観察表を示し、簡単な所見を記載するにとどめた。また、白銅製の和鏡は実測図・拓本・写真の提示と観察所見を記載し、最後にデータ分析と考察を記述した。

**[編み物石の分析・記載方法]** 編み物石については図示せず、石材及び計測データの表とグラフを提示するにとどめた。計測値と石材が分かれば、十分分析可能と判断したためである。

（大工原 豊）

### III 遺跡の地理的・歴史的環境

#### 1 地理的環境

安中市は関東平野の周縁部である群馬県西部（西毛地域）に位置する（第1図）。碓氷峠付近を水源とする碓氷川が西から東へ流れ、市域を南北に分断する。また、碓氷川の北側にはこれと並行して九十九川が流れ、安中市東部で碓氷川に合流する。これらの河川流域には河岸段丘が発達し、下位段丘（磯部地区）、中位段丘（原市・安中地区）、上位段丘（東横野地区）が存在する。また、市域の北部にあたる後閑・秋間地区は丘陵地帯であり、後閑川・秋間川により開析された谷地形となる。東横野地区は南で富岡市と接する。境界線は丘陵性の台地の分水嶺であり、急峻な斜面が連続している。その下には鏑川の支流星川が流れ、深く浸食された峡谷が存在する。

本遺跡群は鷲宮地区の中央、碓氷川の南岸の上位段丘上に位置する。この場所は上位段丘の中でもなだらかな台地が広範囲に広がっている。台地と下位段丘面との間に急峻な段丘崖線が東西に延びており、崖線下を柳瀬川が東流する。また、南側は猫沢川が深く台地を浸食されており、この台地は北西方向へ延びる舌状台地となっている。この台地内には猫沢川へ流れ込む小河川により浸食された谷地がいくつか存在する。特に、深く咲前神社付近まで入り込んでいる谷地が最も大きく湧水量も多い。

咲前神社は宮本地区の中心に位置している（第2図）。この付近の地形についてさらに詳しく観察すると、神社の東で谷地は大きく南へ曲がるとともに、南北に分岐する。この二つの谷地はそのまま平行して西側へ延びる。そして、それぞれの谷頭付近には湧水点が存在する。また、神社周辺にもいくつかの湧水点が存在し、「六方水」と呼ばれている。

上ノ久保遺跡は咲前神社の南西部分に位置する。宮本地区と五ヶ地区の間で、現在は人家が途切れた畠地帯の部分にあたり、全体的に緩やかに南傾している。標高は213m～218mである。また、桜林遺跡は神社の南に存在する谷地のさらに南側に当たり、地形は全体的に北傾している。標高は218m～219mである。五ヶ遺跡は桜林遺跡と同じ台地のさらに西方、五ヶ地区に位置する。標高は218.5～219mである。

なお、平成2年、同4年に調査を行った荒神平・吹上遺跡は神社の北の谷地を挟んで、さらに北の舌状台地上に位置する。

### III 遺跡の地理的・歴史的環境



第1図 本遺跡群と周辺関連遺跡

	遺 跡 名	旧	繩 文				弥 生		古 墳			奈良	平安	中世	近世
			草	早	前	中	後	晚	中	後	終				
1	上 横ノ久	保林ヶ上保原良II	*	○	*				○	○	○	○	○	△	
2	五 荒神平・吹	木峰煙II	*	○	○	△			○	○	○	○	○		
3	荒道日野藏	原良II	○	○	○	○			○	○	○	○	○		
4	前向毛	峰煙II	*	○	○	○			○	○	○	○	○		
5	後 烟	原良II	*	○	○	○			○	○	○	○	○		
6	藏 諏山	峰煙II	*	○	○	○			○	○	○	○	○		
7	經堀	峰煙II	*	○	○	○			○	○	○	○	○		
8	西 平三	峰煙II	*	○	○	○			○	○	○	○	○		
9	落 落	峰煙II	*	○	○	○			○	○	○	○	○		
10	北 下	峰煙II	*	○	○	○			○	○	○	○	○		
11	東 中	峰煙II	*	○	○	○			○	○	○	○	○		
12	金 東下	峰煙II	*	○	○	○			○	○	○	○	○		
13	井 宿	峰煙II	*	○	○	○			○	○	○	○	○		
14	連 引	峰煙II	*	○	○	○			○	○	○	○	○		
15	連 原	峰煙II	*	○	○	○			○	○	○	○	○		
16	中 田	峰煙II	*	○	○	○			○	○	○	○	○		
17	下 田	峰煙II	*	○	○	○			○	○	○	○	○		
18	細 和	峰煙II	*	○	○	○			○	○	○	○	○		
19	東 天	峰煙II	*	○	○	○			○	○	○	○	○		
20	中 田	峰煙II	*	○	○	○			○	○	○	○	○		
21	下 田	峰煙II	*	○	○	○			○	○	○	○	○		
22	北 田	峰煙II	*	○	○	○			○	○	○	○	○		
23	北 田	峰煙II	*	○	○	○			○	○	○	○	○		
24	中 田	峰煙II	*	○	○	○			○	○	○	○	○		
25	金 井	峰煙II	*	○	○	○			○	○	○	○	○		
26	東 宿	峰煙II	*	○	○	○			○	○	○	○	○		
27	下 連	峰煙II	*	○	○	○			○	○	○	○	○		
28	注 連	峰煙II	*	○	○	○			○	○	○	○	○		
29	大 吉	峰煙II	*	○	○	○			○	○	○	○	○		
30	吉 下	峰煙II	*	○	○	○			○	○	○	○	○		
31	細 和	峰煙II	*	○	○	○			○	○	○	○	○		
32	和 東	峰煙II	*	○	○	○			○	○	○	○	○		
33	東 天	峰煙II	*	○	○	○			○	○	○	○	○		
34	天 中	峰煙II	*	○	○	○			○	○	○	○	○		
35	中 田	峰煙II	*	○	○	○			○	○	○	○	○		
36	田 野	峰煙II	*	○	○	○			○	○	○	○	○		
37	田 中	峰煙II	*	○	○	○			○	○	○	○	○		
38	田 野	峰煙II	*	○	○	○			○	○	○	○	○		
39	中 田	峰煙II	*	○	○	○			○	○	○	○	○		
40	田 裏	峰煙II	*	○	○	○			○	○	○	○	○		
41	田 裏	峰煙II	*	○	○	○			○	○	○	○	○		
42	西 井	峰煙II	*	○	○	○			○	○	○	○	○		
43	松 盆	峰煙II	*	○	○	○			○	○	○	○	○		
44	塩 築	峰煙II	*	○	○	○			○	○	○	○	○		
45	清 築	峰煙II	*	○	○	○			○	○	○	○	○		
46	杉 后	峰煙II	*	○	○	○			○	○	○	○	○		
47	砂 閑	峰煙II	*	○	○	○			○	○	○	○	○		
48	三 本	峰煙II	*	○	○	○			○	○	○	○	○		
49	尾 崎	峰煙II	*	○	○	○			○	○	○	○	○		

○ 住居5軒以上・古墳・記念物  
△ 遺構有り(土坑・溝など)

○ 住居5軒以下・大溝・水田・畠など  
\* 遺物のみ

第2表 周辺遺跡一覧表

### III 遺跡の地理的・歴史的環境

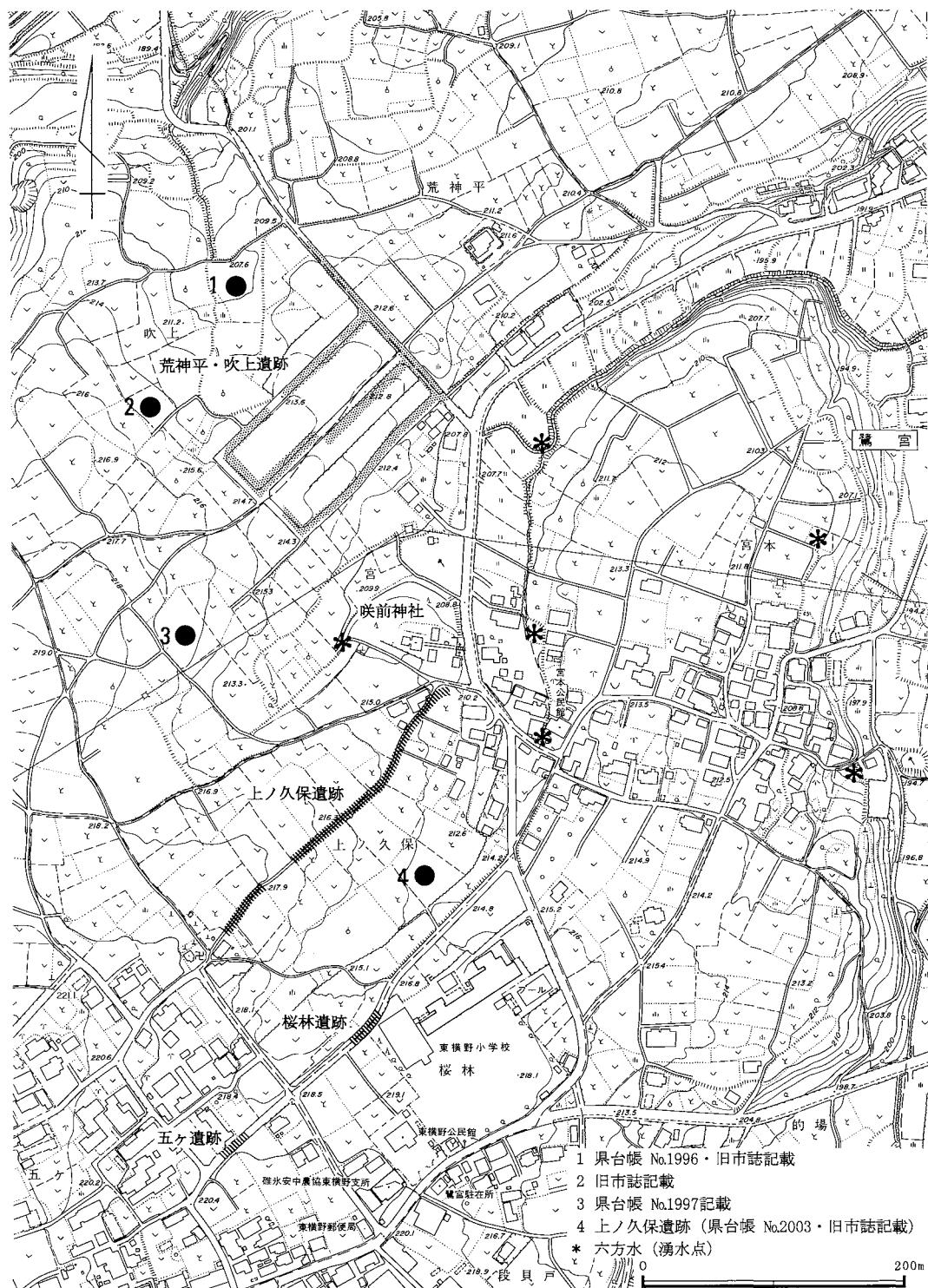
## 2 歴史的環境

発掘調査が実施された遺跡を中心に、周辺地域について概観する(第1図)。咲前神社周辺には縄文時代から平安時代にかけての集落遺跡が集中する。これを総称して鷺宮地区遺跡群と呼称することにする。

縄文時代の遺跡は鷺宮地区の西に位置する中野谷地区遺跡群に集中している。草創期～晚期まで連綿と集落遺跡が形成されており、早期後半以外のほとんどの時期の遺跡が確認されている。縄文時代をとおして、碓氷川・鏑川流域の集団領域の中心的位置を占めている。前期の中原遺跡(24)、大下原遺跡(30)、中野谷松原遺跡(37)、後・晚期の天神原遺跡(36)などが代表的な遺跡である。しかし、中期後葉の拠点集落はこれまで確認されておらず、中野谷地区では空白の時代である。この時代を埋めると推定されるのが鷺宮地区遺跡群の荒神平・吹上遺跡(4)や上ノ久保遺跡(1)であり、中期後半の比較的規模の大きな集落遺跡と推定される。また、南方に位置する上間仁田地区には前期～後期の道前久保遺跡(5)が存在するが、大規模な集落遺跡ではない。

弥生時代では、注連引原遺跡(28)、同II遺跡(29)などが前期まで遡る集落遺跡である。また、三本松遺跡もこの時期の壺が検出されており、再葬墓と推定されている。なお、注連引原II遺跡は調査当初は環濠集落と推定されたが、大溝はその後の調査結果から奈良・平安時代の「牧」の遺構であったことが判明し、環濠集落は否定された。現在では弥生時代前期～中期前葉の時期では、小規模な集落が上位段丘上に点々と存在していたものと考えられている。次の中期後半では遺跡は、松井田工業団地遺跡(41)などがあるが、遺跡数も少なく実体は不明である。後期になると、鷺宮地区遺跡群が拠点集落として登場する。荒神平・吹上遺跡(4)で多数の住居址が検出されている。九十九川流域では杉名菴師遺跡(45)が立地環境も似ており、同様な性格の集落と推定される。

古墳時代前期になっても、諫訪ノ木遺跡(10)のような樽式と赤井戸・吉ヶ谷系の土器群を有する集落遺跡の存在が確認されており、弥生文化の伝統が継続していたと考えられる。やや遅れて古式土師器(いわゆる石田川式)が伴う集落が現れる。荒神平・吹上遺跡(4)や諫訪ノ木遺跡(10)がそれである。古墳時代中期になると、遺跡数は急増する。蔵畠遺跡(9)では居宅の堀と推定される大溝が検出されている。また、経塚古墳(12)はこの時期の中・小豪族の古墳である。田中田・久保田遺跡(38)の方形周溝墓もこの時期のものである。集落遺跡は鷺宮地区遺跡群をはじめ、中野谷地区遺跡群、新寺地区遺跡群などに存在し、その後平安時代まで継続する。後期には碓氷川中・上流域を統括する首長墓、築瀬二子塚古墳(43)が築造されるようになる。集落遺跡は中期の集落が発展する形でさらに遺跡数が増える。



第2図 鶰宮地区遺跡群と六方水

### III 遺跡の地理的・歴史的環境

古墳時代終末から奈良時代にかけて、中野谷地区には「牧」に関連遺跡群が出現する。中原遺跡（24）、下宿東遺跡（27）、細田遺跡（33）など横野台地のいたる所で「牧」の放牧施設の遺構とみられる大溝が検出されている。また、天神原遺跡（36）における馬洗場と推定される遺構や、下塙田遺跡（22）の鍛冶工房群なども「牧」に関連する施設群と推定される。集落遺跡はこの鷺宮地区遺跡群と新寺地区遺跡群が碓氷川の以南では最大規模である。いずれも継続性が強く、磯部郷との関連性が推測される。

また、中世以降についての遺跡では、本遺跡群の北東約1kmの位置、下磯部大竹に尾崎館址（49）がある。この館址は単郭に二重に堀と土塁を巡らす形態であり、榎下城と類似する。『群馬県碓氷郡志』所収の尾崎家文書には、咲前神社の正神主が磯部郷小崎（尾崎）に居住していたとの記録があり、この館址に比定される。なお、上ノ久保遺跡（1）で確認された館址との関連性が窺える。

次に、咲前神社周辺についてさらに詳しくみることにする（第2図）。鷺宮の地名は咲前神社の旧名「先宮明神」に由来すると言われている。先宮明神は安閑天皇元年下総国香取神宮より経津主命を磯部郷へ遷座し、その後、白鳳元年（672年）にこの場所に鎮座させたと伝えられている。さらに、富岡一の宮貫前神社へ遷座されたことから「前の宮」と呼ばれるようになったとも伝えられている。この神社の周辺は以前から多くの遺物が出土することから遺跡群の存在は周知されていた。神社がこの場所とされた理由として、「雷斧石が3個出現せるを以て新に宮殿を造り経津主命の神靈を奉祀す。」（『群馬県碓氷郡志』）との伝承があるほどで、ここで言う「雷斧石」は縄文時代の石斧類を指していると推定され、相当以前から遺物がたくさん出土することが知られていたと考えられる。また、昭和39年刊行の『安中市誌』には上ノ久保、吹上、荒神平、下荒神平、諏訪の地内から縄文時代中期、弥生時代後期、古墳時代～平安時代にかけての遺物の出土が記載されている。『群馬県碓氷郡東横野村誌』（昭和58年刊行）にも、昭和20年代頃の神社周辺の遺跡の状況についての記載があり、出土遺物のスケッチが掲載されている。なお、神社に縄文時代の石棒が所蔵されており、周辺の民家にも多くの出土遺物が所蔵されている。このように、咲前神社周辺には縄文時代から平安時代までの大規模な集落遺跡群が存在していることは良く知られていたのである。

しかし、考古学的な発掘調査が行われたことは平成に至るまで全くなく、平成2年7月に市道建設に伴って実施された荒神平・吹上遺跡（4）の調査が最初である。その後、市道や住宅団地（さざんかタウン）関連で今回の報告を含め、現在までに4回の発掘調査が行われている。

（大工原 豊）

### 3 層序

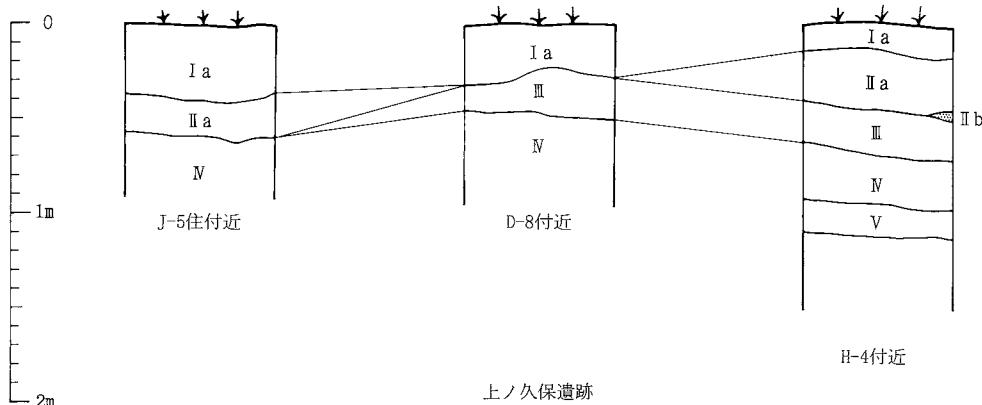
本遺跡群の基本層序は第3図及び第3表のとおりである。鍵層となる降下テフラは、1783年(天明3年)の浅間A軽石層(As-A)と1108年(天仁元年)の浅間B軽石層(As-B)、約13,000年前の浅間板鼻黄色軽石層(As-YP)である。浅間A軽石層(I b層)は耕作による搅乱によって土壤化し、表土層(I a層)を形成している。また、同様に浅間B軽石層(II b層)は耕作による搅乱によって土壤化し、旧表土層(II a層)を形成している。したがって、I b層・II b層は遺構覆土や窪地には堆積しているが、平坦な場所ではほとんど認められない。

弥生時代から平安時代の遺構はIV層上面で確認が可能である。本来はIII層(黒褐色土層)から掘り込まれていたと推定される。そのため、この時期の遺構覆土はIII層をベースとしたものである。縄文時代中期以前の遺構はIV層中位以下で確認が可能である。これまでの調査により蓄積されたデータによれば、IV層は縄文時代後期以前の堆積層と推定される。IV層は非常にしまり、粘性のある土層で硬い。本遺跡では確認されていないが、場所によってはIV層上面がソフト化し、IV a層が認められる場合がある。ちょうどハードロームとソフトロームの類似した現象が生じたものと推定される。

(大工原 豊)

層名	色調	しまり	粘性	混入物			備考
				As-A	As-B	As-YP	
I a層	黒褐色土層	△	△	○			
I b層	灰白色軽石層	Ⅰ a < I b	×	×	◎		As-A純層
II a層	黒色土層	Ⅰ b > II a	△	△		○	
II b層	灰褐色軽石層	Ⅱ a < II b	×	×		◎	As-B純層
III層	黒褐色土層	Ⅱ b > III	△	○			
IV層	暗褐色土層	III < IV	○	○			
V層	黄褐色粘質土層	IV < V	◎	◎			*
VI層	黄色軽石層	V < VI	×	×		◎	As-YP純層

第3表 基本層序土層説明



第3図 基本層序柱状図

## IV 遺構各説

### 1 上ノ久保遺跡

#### (1) 繩文時代

##### a 遺構

縄文時代の遺構としては、住居址3軒、土坑31基、埋設土器1基などが検出された。これらの遺構はすべて中期のものである。

**住居址 形態・規模などの諸属性は第4表のとおりである。**

##### J-2号住居址（第4図）

調査区のほぼ中央に存在する。石囲炉が検出されたことにより、住居址の存在が確認されたもので、竪穴は確認されていない。本来掘り込みは浅かったものと推定される。また、古墳時代以降のH-18A・18B・20号住居址によって半分ほど破壊されている。柱穴も確認されなかった。石囲炉は石皿・凹石・磨石が転用されたものである。焼土の形成は非常に弱い。検出された土器からみて勝坂2式の住居址と判断される。

**[遺物出土状態]** 掘り込みが浅かったため、出土遺物は極めて少なく、出土傾向は把握できなかつた。

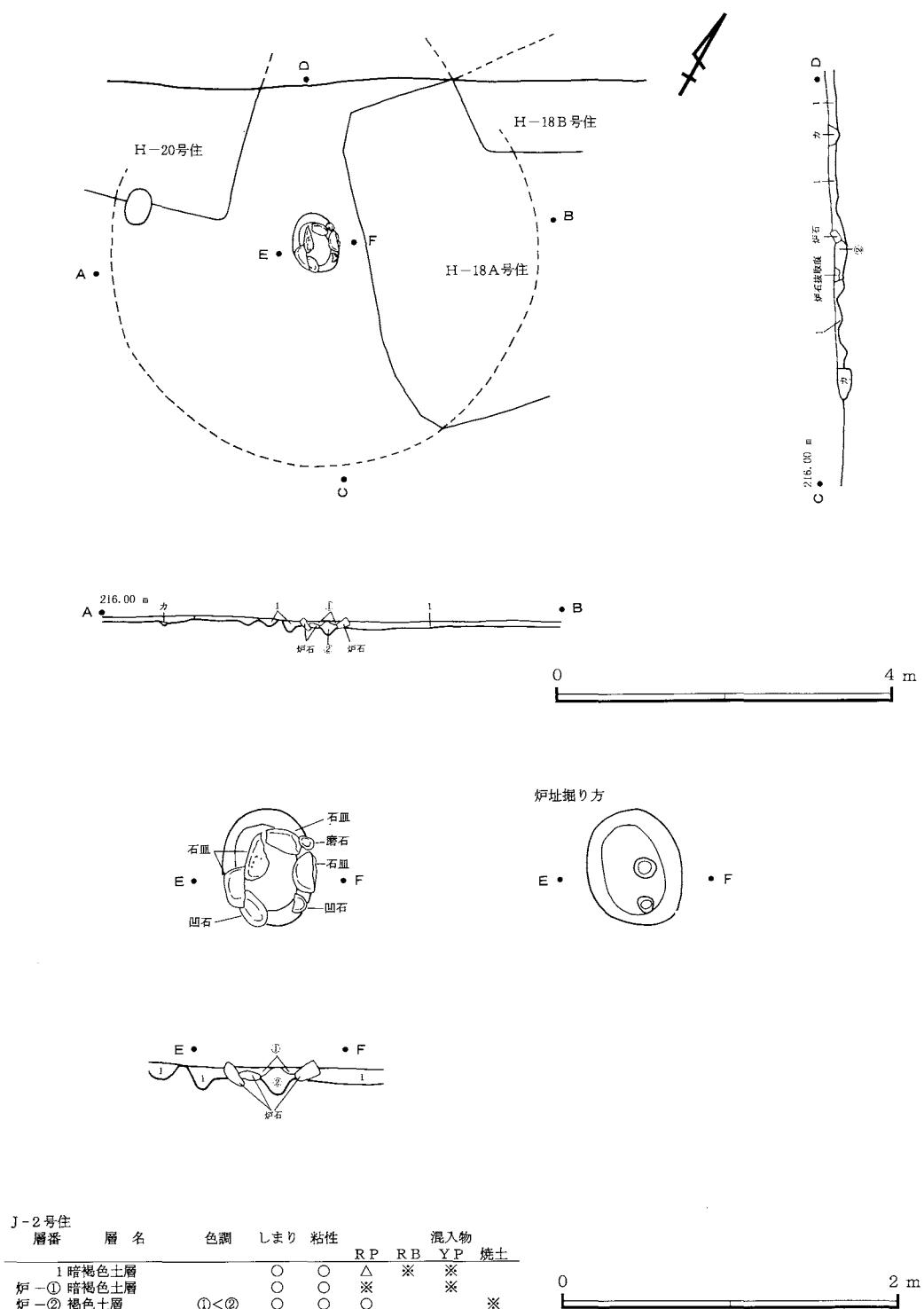
##### J-3号住居址（第5図）

調査区の中央西寄りに存在する。弥生時代後期のY-2号住居址によって、西半分が破壊されている。炉址は石囲炉でちょうど西半分が破壊されている。円形に狭い壁溝が3重に存在しており、2回の拡張が行われたことが確認されている。壁溝により規模が判明したもので、掘り込み自体は浅い。出土遺物は極めて少ないが、加曾利E2式と判断される。

**[遺物出土状態]** 掘り込みが浅かったため、出土遺物は極めて少なく、出土傾向は把握できなかつた。

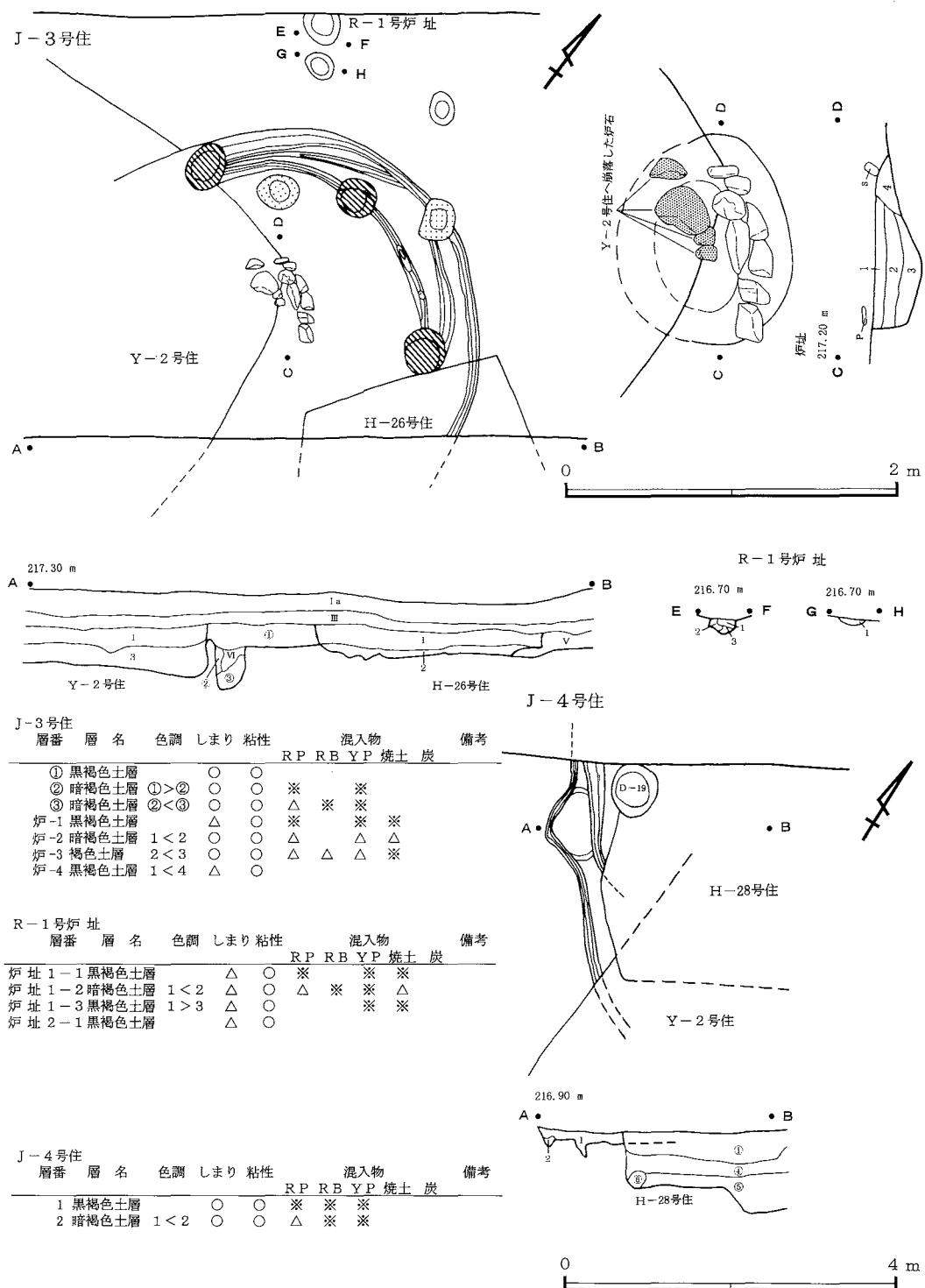
##### J-4号住居址（第5図）

J-3号住居址の西に近接して存在する。Y-2号住居址、H-28号住居址によって大部分が破壊されている。西側の壁溝が2重に存在していることから、少なくとも1回以上の拡張が行われていることが確認された。覆土から遺物はほとんど検出されなかつたが、重複するH-28号住に含まれる出土遺物から加曾利E2式と推定される。

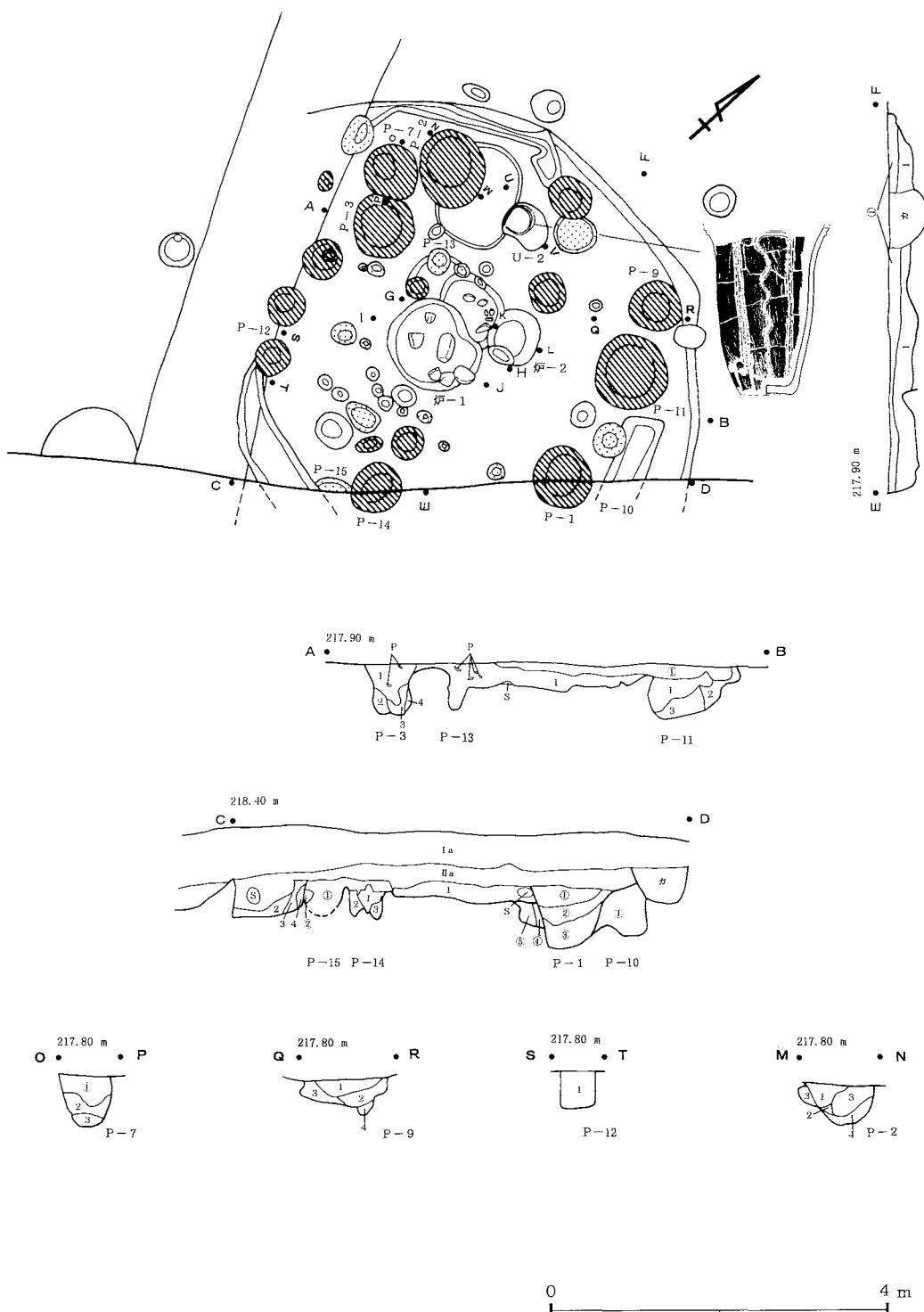


第4図 J—2号住居址実測図

#### IV 遺構各説

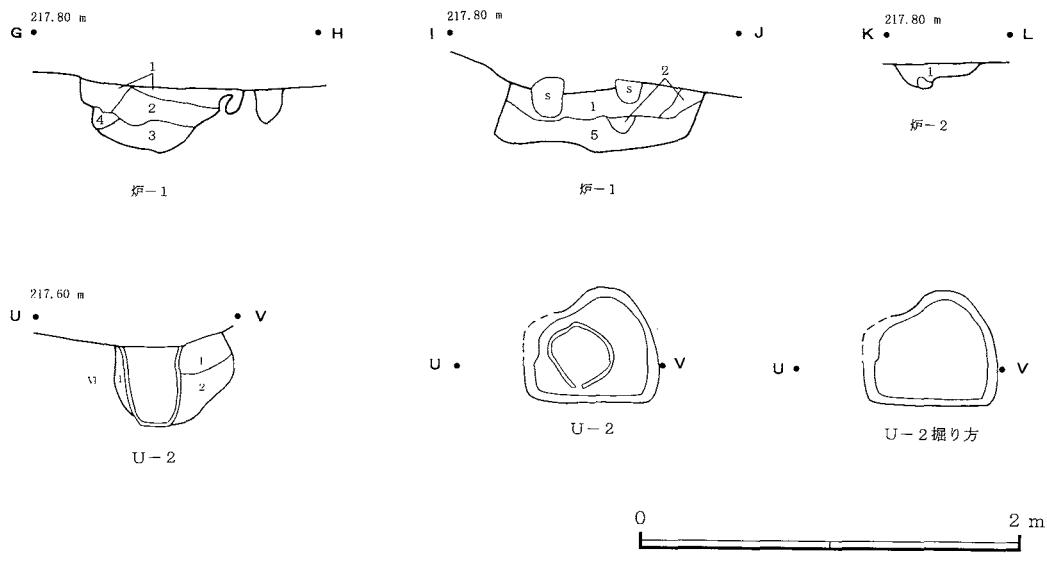


第5図 J-3号・J-4号住居址実測図



第6図 J-5号居住址実測図（1）

#### IV 遺構各説



J-5号住	層番	層名	色調	しまり	粘性	R.P	R.B	混入物	Y.P	焼土	炭	備考
	1	暗褐色土層	○	○	※	※	※	△	※	※	※	
P1-①		暗褐色土層	○	○	※							
P1-②		黒褐色土層	1 > 2	△	○							
P1-③		褐色土層	1 < 3	○	○							
P1-④		黄褐色土層	3 < 4	○	○							
P1-⑤		暗褐色土層	1 < 5	○	○							
P2- 1		黒褐色土層	○	○	○							
P2- 2		褐色土層	1 < 2	△	○							
P2- 3		黒褐色土層	1 > 3	○	○							
P2- 4		褐色土層	2 < 4	○	○							
P3- 1		黒褐色土層	○	○	○							
P3- 2		黒褐色土層	1 < 2	○	○							
P3- 3		暗褐色土層	2 < 3	○	○							
P3- 4		暗褐色土層	3 < 4	△	○							
P7- 1		暗褐色土層	○	○	○							
P7- 2		褐色土層	1 < 2	○	○							
P7- 3		褐色土層	2 < 3	○	○							
P9- 1		暗褐色土層	○	○	○							
P9- 2		暗褐色土層	1 < 2	○	○							
P9- 3		暗褐色土層	2 ≈ 3	○	○							
P9- 4		暗褐色土層	2 > 4	△	○							
P10-①		暗褐色土層	○	○	○							
P11-1		暗褐色土層	○	○	○							
P11-2		暗褐色土層	1 < 2	○	○							
P11-3		暗褐色土層	2 < 3	○	○							
P12-1		暗褐色土層	○	○	○							
P13-1		黒褐色土層	○	○	○							
P14-1		黒褐色土層	○	○	○							
P14-2		褐色土層	1 < 2	△	○							
P14-3		褐色土層	1 < 3	△	○							
P15-①		黒褐色土層	○	○	○							
P15-②		黒褐色土層	1 ≈ 2	○	○							
炉 1-1		黒褐色土層	○	○	○							
炉 1-2		暗赤褐色土層	1 < 2	○	○							
炉 1-3		暗褐色土層	1 < 3	○	○							
炉 1-4		暗褐色土層	1 < 4	△	○							
炉 1-5		黒褐色土層	1 < 5	○	○							
炉 2-1		黒褐色土層	○	○	○							
U-2-1		暗褐色土層	○	○	※							
	2	暗褐色土層	1 < 2	○	○	△						

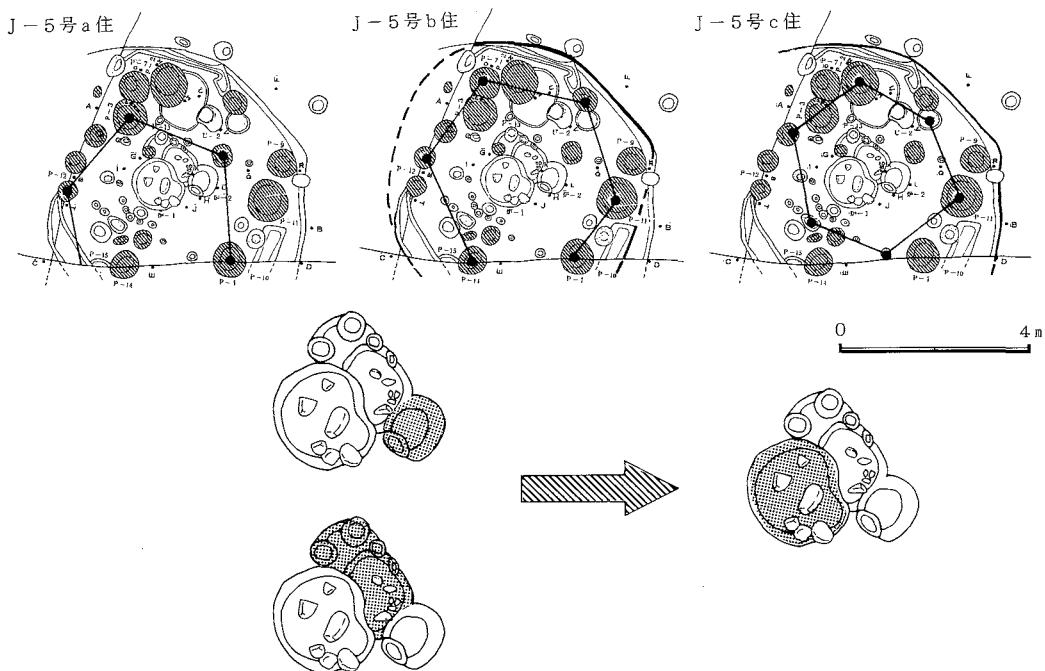
第7図 J—5号住居址実測図(2)

[遺物出土状態] ごく一部しか残存していなかったため、出土遺物はほとんどなく、出土傾向は全く把握できない。

#### J—5号住居址（第6図・第7図）

調査区の西端に存在する。この住居址に重なってH—35号住居址が構築されており、覆土の上部は掘り方により大きく攪乱を受けている。また、西側は中世のM—2号溝により切られている。円形を呈する住居址が3回重複し、いずれの住居も主柱穴は壁に沿って5～6基ほぼ等間隔で配列していたと判断される。また、南半分には深い壁溝が巡る。

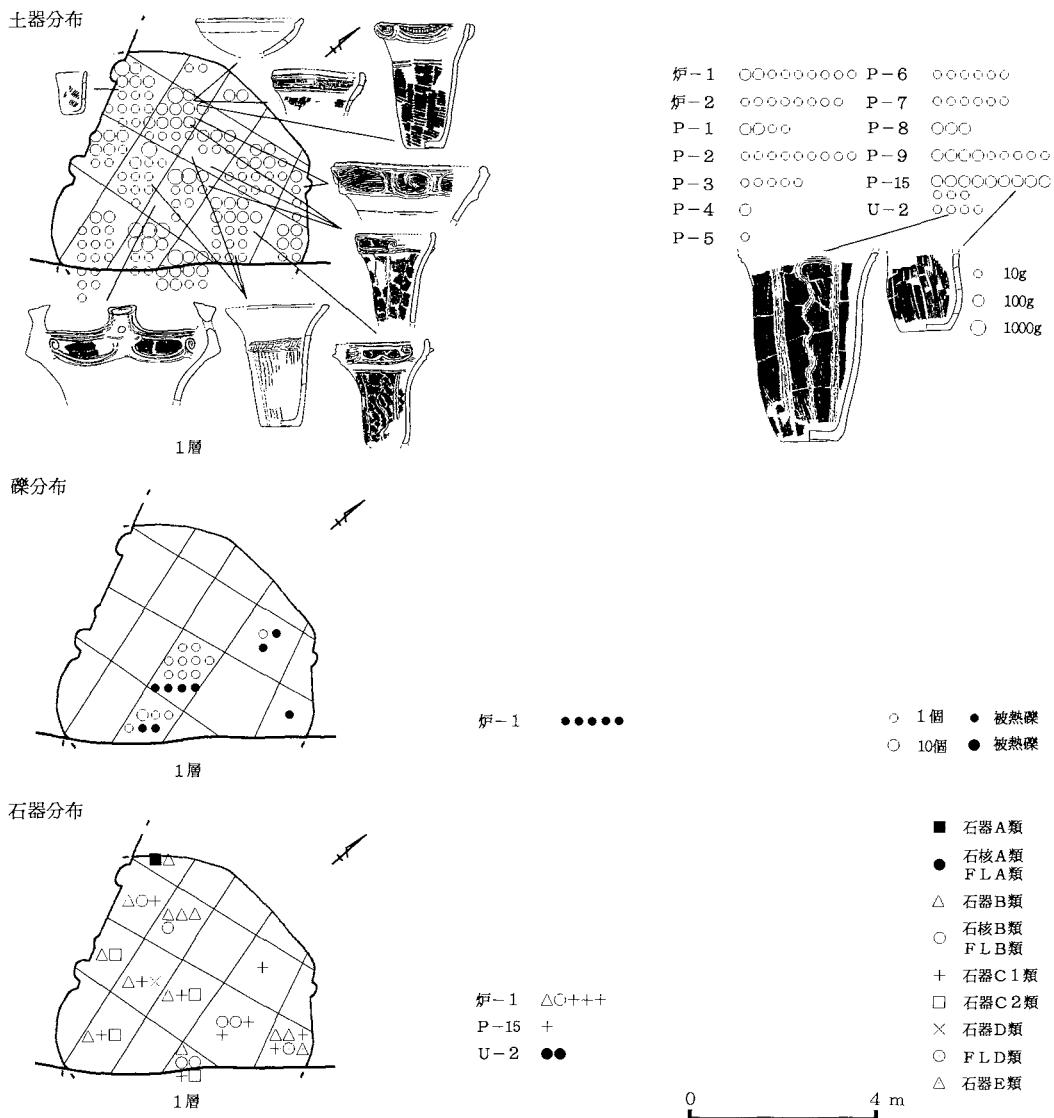
本来は石囲炉と推定されるが、炉址は3基が重複し、かつ炉石が著しく乱れている。炉石の抜き取り行為、または攪乱を受けたものと思われる。また、正位の埋設土器が炉址の北側から検出された。この埋設土器（第17図4）は頸部から口縁部が失われており、底部穿孔は認められない。埋設土器と出土土器から加曾利E2式と判断される。



第8図 J—5号住居址の柱穴配置

#### IV 遺構各説

[遺物出土状態] (第8図) 全体として見た場合、礫のみが炉址付近に集中する傾向がある。しかし、これらの礫は石囲炉の残骸の可能性が高い。これを除けば、土器・石器の偏在性は認められない。なお、土器では小形深鉢(第17図8)のような完形品もあるが、大部分は破損品であり、廃棄されたものと判断される。なお、ピット中からの土器片の出土が多い傾向がある。次に石器であるが、この時期としては数量が比較的少なく、大きな偏在性も認められない。よって、土器と同様に廃棄行為によるものと判断される。



第9図 J-5号住居址遺物分布図

住居名	重複拡張	平面形態	壁溝	柱穴配列	炉址形態	時期	規模(m)		主軸方向
							直径	深さ	
J-2号住		円形?			石囲	勝坂2式	(5.1)	0.1	N-32°-W
J-3号a住	3回	円形	全周		—	加曾利E2式	(3.6)	0.3	
J-3号b住		円形	全周		—	加曾利E2式	(4.0)	0.3	
J-3号c住		円形	全周		石囲	加曾利E2式	(4.4)	0.3	
J-4号a住	2回	円形?	全周?		—	加曾利E2式	—	0.1	
J-4号b住		円形?	全周?		—	加曾利E2式	—	0.1	
J-5号a住	3回	円形?	南半分	B6	—	加曾利E2式	(5.0)	0.3	
J-5号b住		円形	南半分	B6	石囲?	加曾利E2式	5.4	0.3	
J-5号c住		円形	南半分	B6	石囲	加曾利E2式	5.7	0.3	

第4表 繩文時代の住居址観察表

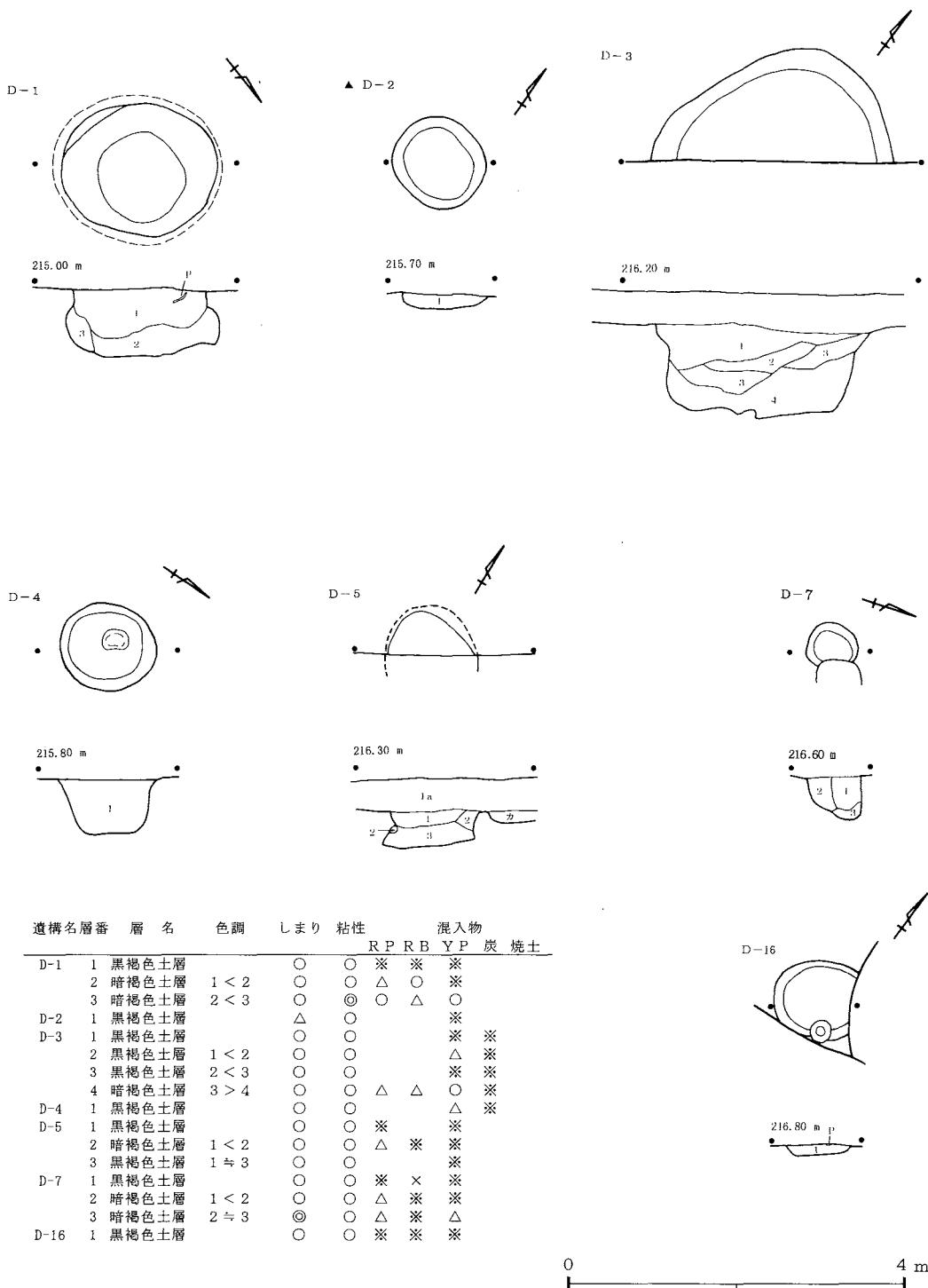
**土坑**（第10図～第13図） 繩文時代の土坑は31基検出された。それぞれの属性等は第5表のとおりである。このうち土坑群は2カ所に存在する。

**A群**（第11図） J-3号住居址の東側に存在する。12基検出されており、多様な形態の土坑で構成される。比較的掘り込みは浅いが、遺構確認面が低かったことによる。土坑出土土器と隣接する住居址からみて、加曾利E2～3式のものと判断される。土坑どうしでの重複関係が認められることから、ある程度の時間幅があることが分かる。出土遺物をみると、土器は破片のみであり、石器は石錐・スクレイパーA類・スクレイパーB類などが検出されているが、典型的な副葬品と判断される器種は認められない。ただし、D-10号土坑からは比較的大形の安山岩製の棒状礫が出土しており、土壙墓抱石の可能性も捨てきれない。

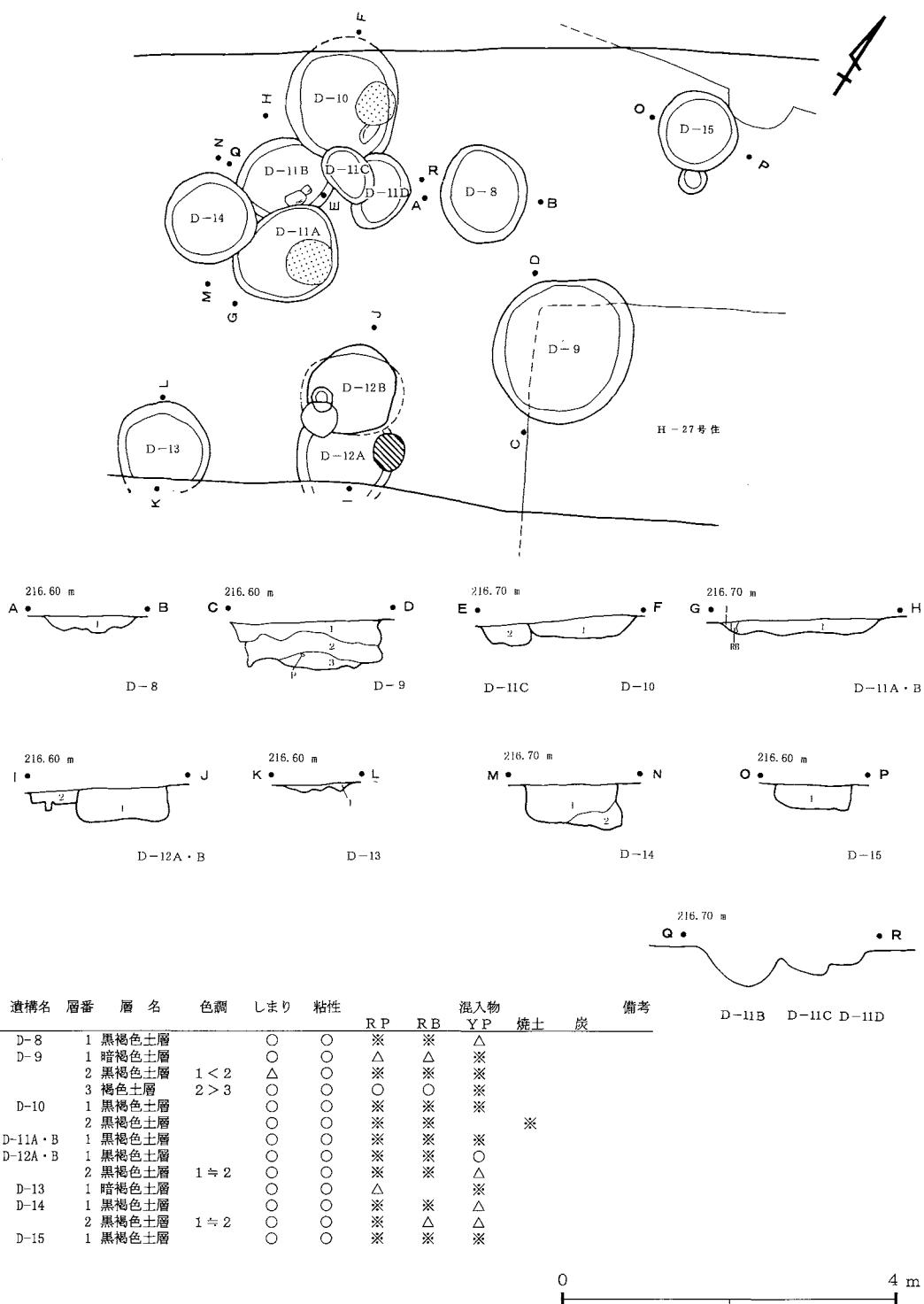
**B群**（第13図） J-5号住居址の東方に存在する。10基の土坑から成り、ほかに埋設土器（U-1）も存在する。椀状を呈する比較的深いものが多い。この土坑群の特徴としては、周囲にピット群が存在していることが挙げられる。出土土器からみて、加曾利E4式～称名寺式にかけてのものと判断される。出土遺物は比較的少なく、石器では敲石・磨石・打製石斧などが検出されている。埋設土器の存在と、D-23号土坑の抱石と推定される礫の出土状況、覆土の状態などからみて、土壙墓群の可能性が高い。

**埋設土器**（第13図・第21図） 屋外埋設土器は1基検出されたのみである。U-1号埋設土器は土坑群B群に位置しており、この土坑群の性格を理解する上で示唆的な施設である。正位で埋設されており、底部穿孔は認められない。土器の上部からは凝灰岩製の小礫、打製石斧、剝片A類、B類が各1点出土したが、内部からは何も検出されなかった。また、周囲に方形の深い豊穴が認められる。D-23号土坑と重複関係にあり、U-1の方が新しい。用いられた深鉢形土器は加曾利E4式の新段階から称名寺1式のものと考えられる。

#### IV 遺構各説

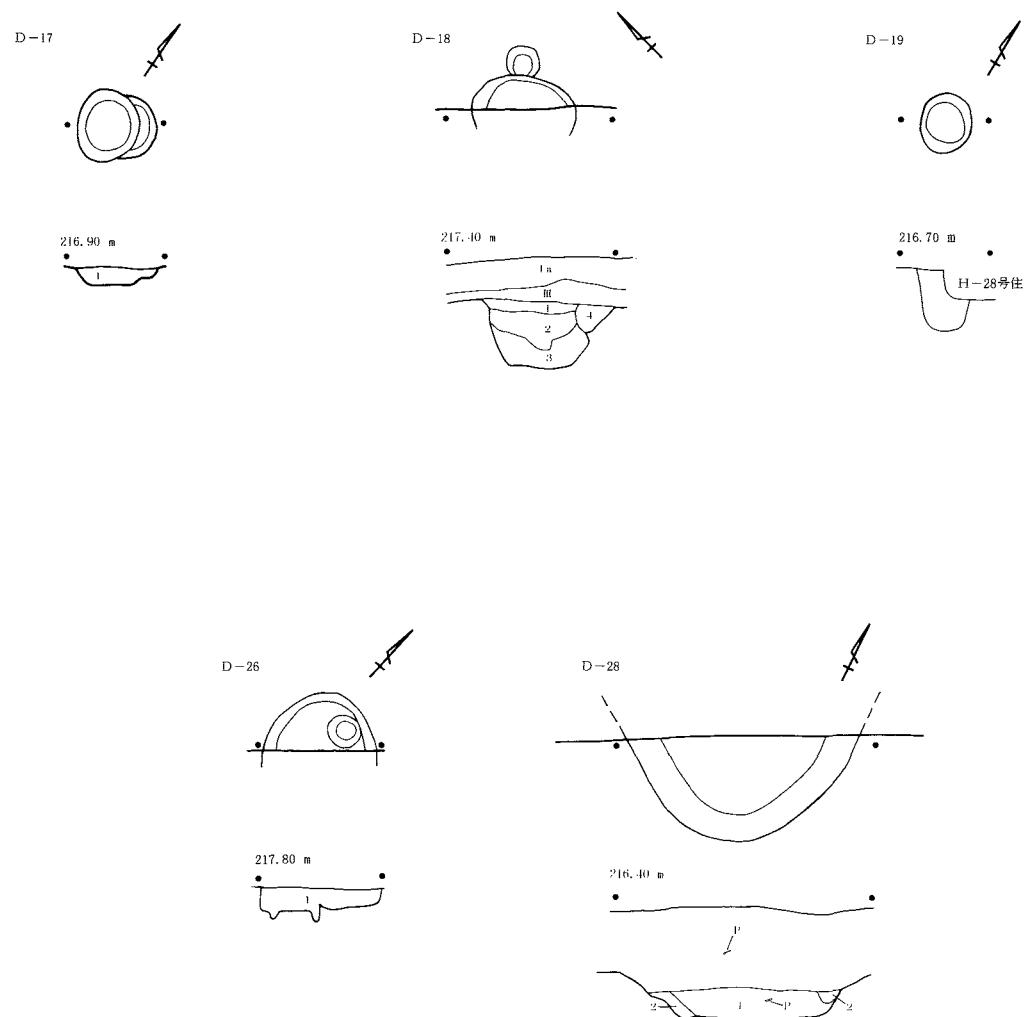


第10図 繩文時代土坑実測図（1）



第11図 繩文時代土坑実測図（A群）

#### IV 遺構各説

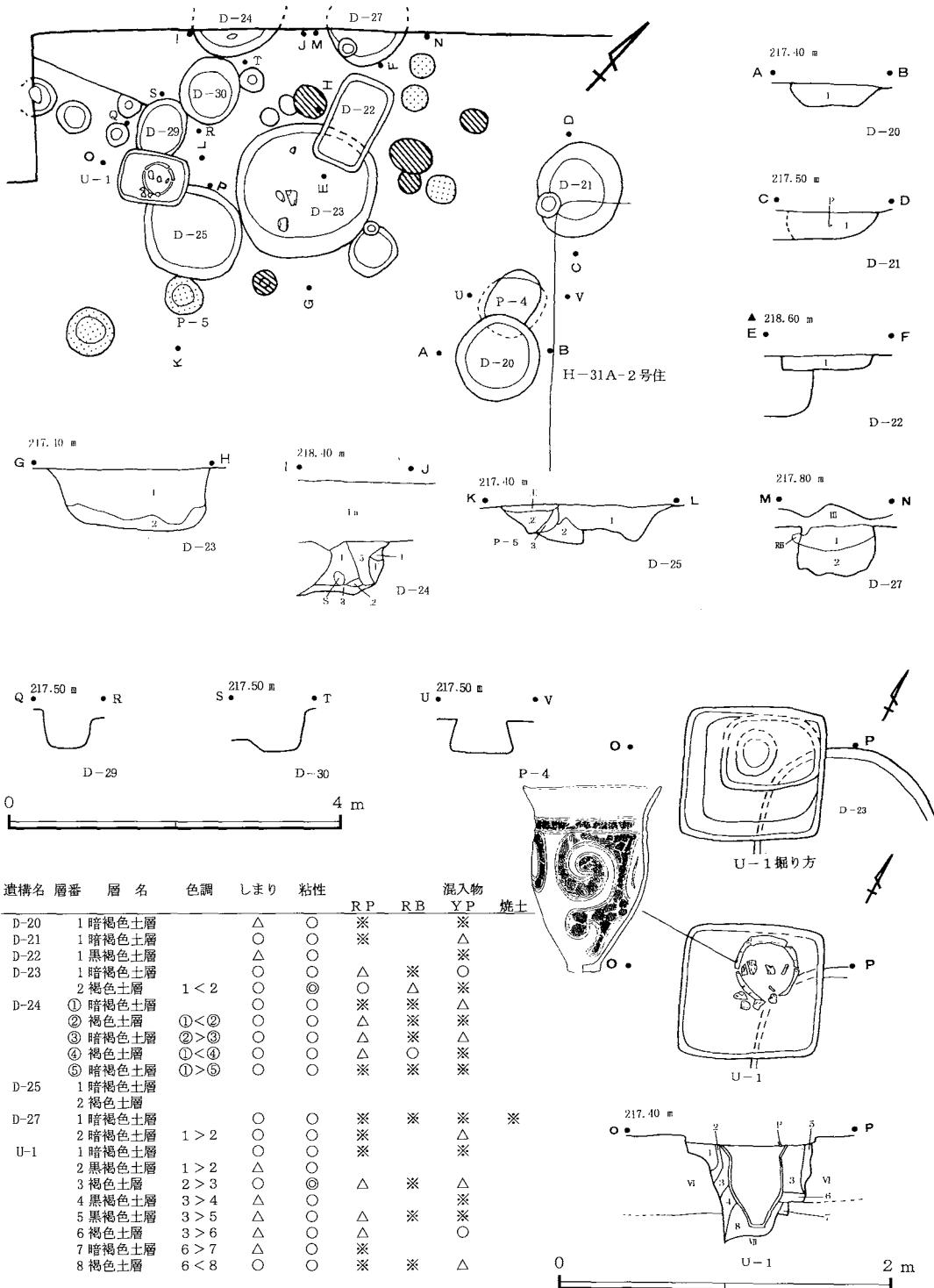


遺構名	層番	層名	色調	しまり	粘性	R P	R B	混入物 Y P	焼土	炭	備考
D-17	1	黒褐色土層	○	○		※	※	※			
D-18	1	黒褐色土層	○	○							
	2	黒褐色土層	1 < 2	○	○		※	※			
	3	黒褐色土層	2 < 3	○	○				△		
D-26	1	黒色土層	△	○		※	△		※		
D-28	1	黒褐色土層	○	○		※	※		※		
	2	暗褐色土層	1 < 2	○	○	△	△		※		



第12図 繩文時代土坑実測図（2）

1 上ノ久保遺跡



第13図 繩文時代土坑実測図（B群）

#### IV 遺構各説

土坑番号	規模(上端)規模(下端)				深さ WE NS WE NS 深さ	土坑群	形態		時 期	土器 数量	石器		礫
	W	E	N	S			平面	断面			石器 石器(狭義)	剝片・石核	
D-1	1.82	1.58	1.04	1.08	0.84		大形円形	袋状	加曾利E	△			
D-3	2.82	—	2.37	—	1.13		大形楕円形	碗状	称名寺	◎	S C A · S C A	FLA3 · F L B	
D-4	1.14	1.02	1.86	0.87	0.63		中形円形	碗状	称名寺	△		石皿(抱石?)	
D-5	1.02	—	1.07	—	0.45		中形円形	袋状	勝坂3～加曾利E 1	◎		F L B 3	
D-7	0.62	—	0.45	—	0.52		小形円形	柱状	加曾利E 2	◎	打斧・磨石	F L B	
D-8	1.02	1.14	0.79	0.95	0.2	A	中形円形	皿状		△		FLB2 · FLD	
D-9	1.68	1.8	1.34	1.56	0.59	A	大形円形	袋状	加曾利E 2	△			
D-10	1.33	1.43	1.11	1.09	0.28	A	中形円形	皿状	加曾利E	△	S C B	F L B	棒状礫(抱石?)
D-11A	1.29	1.16	1.15	1.06	0.17	A	中形円形	皿状	加曾利E 3	○	石錐	F L A	
D-11B	1.15	0.97	0.96	0.86	0.45	A	中形円形	碗状	加曾利E 3	○			
D-11C	0.72	0.53	0.62	0.36	0.21	A	小形楕円形	碗状					
D-11D	0.74	0.88	0.66	0.74	0.3	A	小形円形	碗状					
D-12A	1.15	—	0.95	—	0.13	A	中形円形	皿状	加曾利E	△	S C A		
D-12B	1.07	1.1	1.24	0.96	0.42	A	中形円形	袋状					
D-13	1.14	—	0.98	—	0.11	A	中形円形	皿状					
D-14	1.13	1.09	0.89	0.84	0.55	A	中形円形	袋状					
D-15	0.96	0.97	0.75	0.79	0.31	A	中形円形	碗状	加曾利E	△	S C B	F L B	
D-16	—	0.94	—	0.74	0.15		小形円形	皿状	加曾利E 2	◎	S C A		
D-17	0.83	0.75	0.59	0.49	0.21		小形円形	皿状	加曾利E	△			
D-18	1.09	—	0.8	—	0.78		中形円形	碗状	加曾利E 2	△		F L B	
D-19	0.55	0.67	0.42	0.4	0.65		小形円形	柱状					礫
D-20	1.01	1.04	0.78	0.8	0.28	B	中形円形	碗状	勝坂3	○	敲石		
D-21	1.03	1.16	0.74	0.74	0.33	B	中形円形	碗状	加曾利E	△			
D-23	1.69	1.62	1.58	1.24	0.75	B	大形円形	碗状	加曾利E 4	◎		F L B	礫2(抱石?)
D-24	1.01	—	0.78	—	0.63	B	中形円形	碗状			打斧・磨石		
D-25	1.21	1.13	1.02	0.86	0.34	B	中形円形	碗状	加曾利E 4～称名寺1	△		F L B	
D-26	1.17	—	0.93	—	0.25		中形円形	皿状					
D-27	0.95	—	0.77	—	0.61	B	中形円形	碗状	加曾利E	△		F L A	
D-28	2.46	—	1.8	—	0.49	B	大形楕円形	碗状	後期前半				
D-29	0.61	—	0.52	—	0.38	B	小形円形	碗状					
D-30	0.75	0.8	0.53	0.55	0.52	B	小形円形	碗状					
P-4	0.61	0.8	0.87	0.71	0.38	B	小形円形	袋状		△			
* D-2	1.1	1.02	0.86	0.74	0.17		中形円形	皿状		—		F L A	
* D-6	1.52	1.75	1.16	1.27	0.74		大形円形	碗状	中世～近世	—			礫
* D-22	0.72	1.15	0.51	0.77	0.38		中形長方形	皿状	中世 N-345°-E	—		F L B	

\*は縄文時代以外

◎>1000g ○>500g △>1g

第5表 土坑観察表

#### b 遺物

##### 土器

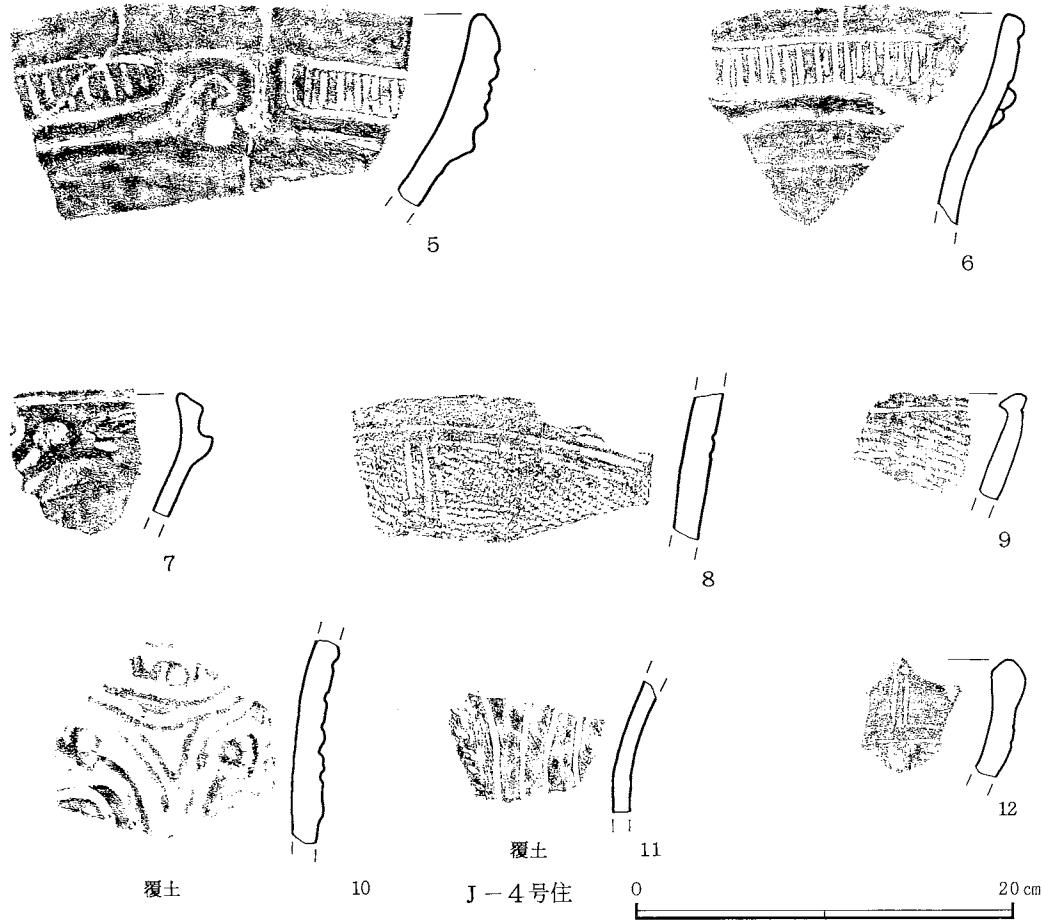
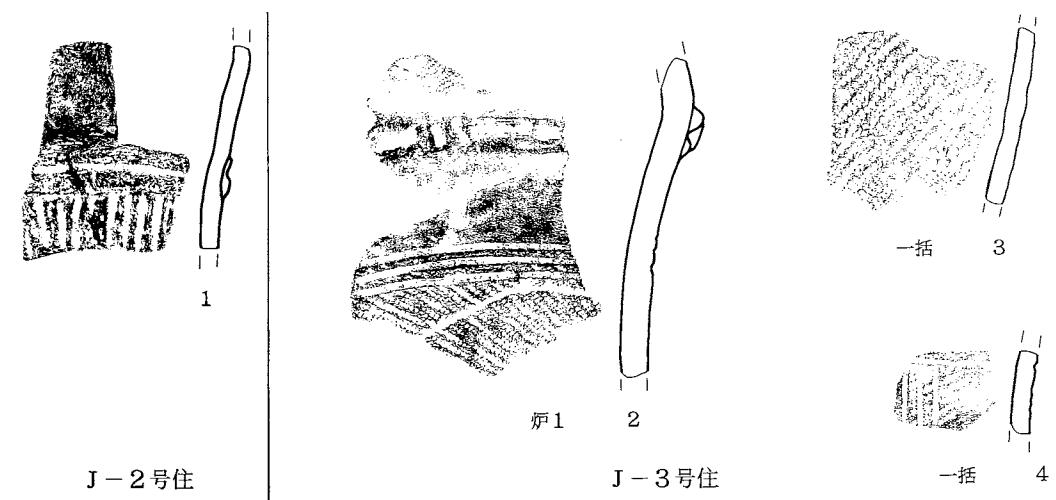
###### [住居址出土の土器]

J-2号住居址出土の土器（第14図1） 本遺構の遺物出土量は大変少ない。1は唯一時期決定ができる資料であり、口縁部に無文帯を有し、隆帶で区画し、縦位に太い沈線が引かれる。第2群土器（勝坂2式：土器分類については後述）に属する。

J-3号住居址出土の土器（第14図2～4） 第3A群土器（加曾利E2式）の一群である。2は口縁部、胴部とも縄文が施文されており、頸部無文帯が存在する。4は胴部に沈線の懸垂文が認められる。いずれも第3A群1類に属する。

J-4号住居址出土の土器（第14図5～12） 基本的には、第3A群土器（加曾利E2式）の一群である。5・6は口縁部文様帯が区画され、その中を縦位の沈線によって充填する。また、頸部

1 上ノ久保遺跡



第14図 J-2号・J-3号・J-4号住居址出土の土器

#### IV 遺構各説

には無文帯が存在する。第3A群2類に細分されるものである。7は口縁部文様帶の地文に縄文が施されるものである。また、8は胴部文様帶との境界には横位沈線が引かれ、胴部文様帶には縄文施文の後に縦位沈線による懸垂文が認められる。いずれも第3A群1類に細分される。

なお、覆土中には第2群土器(勝坂式に並行する焼町類型)・10と、第4群土器(称名寺1式)・11、第5群土器(堀之内式)・12の資料が混在して出土している。

J—5号住居址出土の土器(第15図～17図) この住居址からは第3A群土器(加曽利E2式)の良好な資料がまとめて出土している。これらはさらに3類に細分される。

第3A群1類(第15図1～11、第16図1、第17図4) 口縁部、胴部とも単節斜縄文を地文とするものである。原則として、口縁部文様帶では横位に施文し、胴部では縦位に施文している。口縁部文様帶では隆帶と沈線の文様要素の組み合わさった渦巻文によって単位性を表現している。中には8・11のように隆帶が突出し、橋状となる例も認められるが、この場合口唇部にも突起を有し、その箇所に渦巻文が施文される。第15図1は渦巻文の箇所に縄文施文が残り、渦巻文を構成する沈線がそこで完結している。こうした例はこの遺跡では唯一である。基本的には頸部無文帯が存在するが、2のように頸部無文帯が存在しない例もある。なお、頸部無文帯を有する場合、胴部文様帶との境界に横位沈線を引く。胴部文様帶では縄文地文上に縦位の波状、直線の沈線を懸垂文として施文している。3A群1類は典型的な加曽利E2式の一群として捉えられよう。

第3A群2類(第16図2～8) 胴部は単節斜縄文で、口縁部文様帶には縄文を施文せず、代わりに縦位の沈線を施文する一群である。口縁部文様帶は、2・4・7のように隆帶で渦巻文を構成するもの、3・8のようにこれが省略されて簡単な隆帶で区画を構成させるものがある。頸部には8のようにはっきりとした無文帯を有する例と、3のように頸部無文帯が不明瞭なものが存在している。また、この一群では胴部文様帶には懸垂文は認められない。このように口縁部文様帶に縄文を施文しない本群は、この地域に多出する加曽利E2式である。

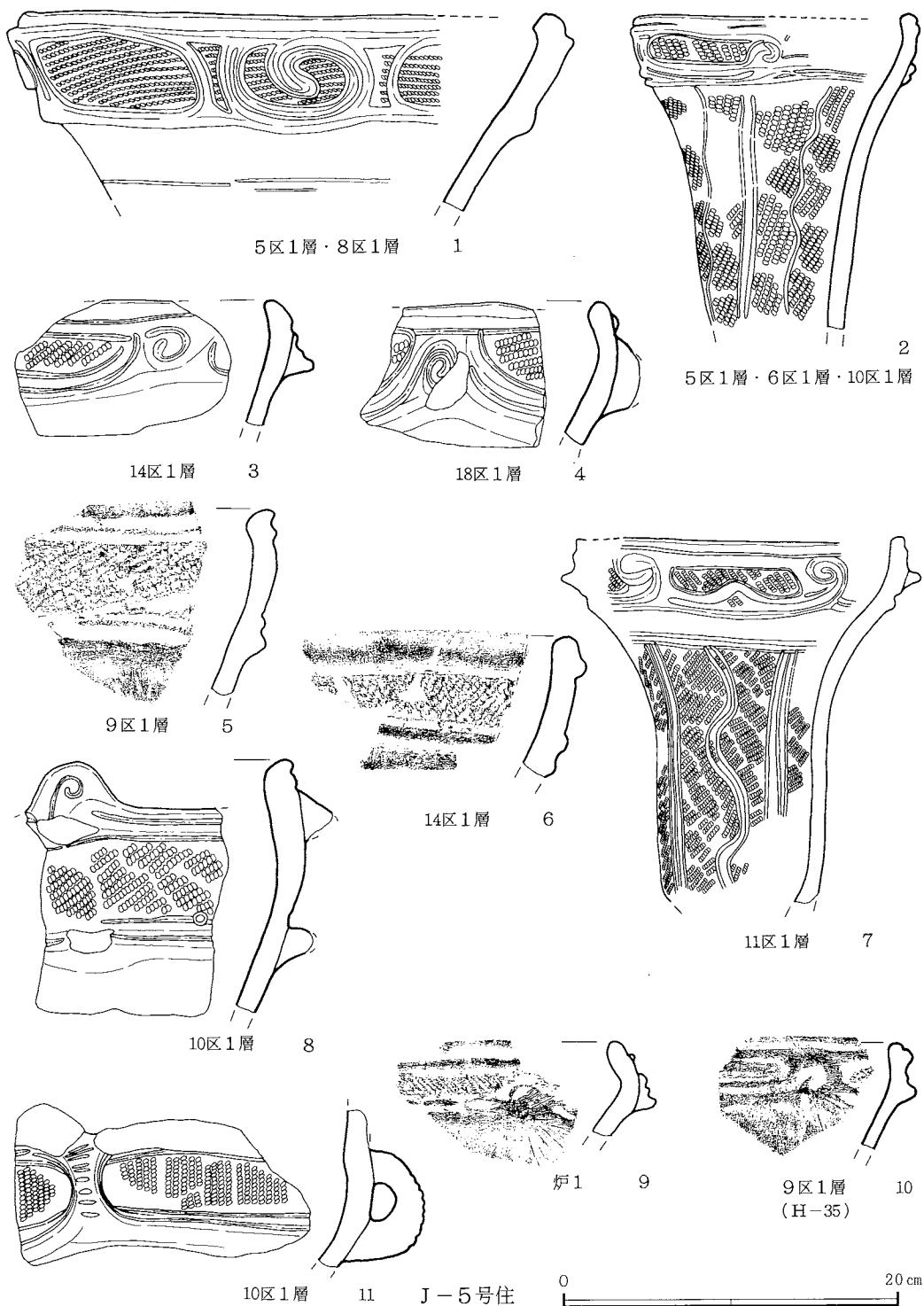
第3A群3類(第17図1～3) 口縁部は無文で、胴部に縦位沈線が施文される一群である。2では頸部には隆帶による斜め梯子状の文様が横位に施文される。また、胴部には1本の隆帶で懸垂文がつけられている。この一群は中部地方の曾利II式の範疇で括られる資料である。

これ以外に、浅鉢(第17図6)、器台または台付鉢と推定される例(同7)、小形深鉢あるいはミニチュア土器(同8)などが出土している。

#### [土坑出土の土器](第18図～第20図)

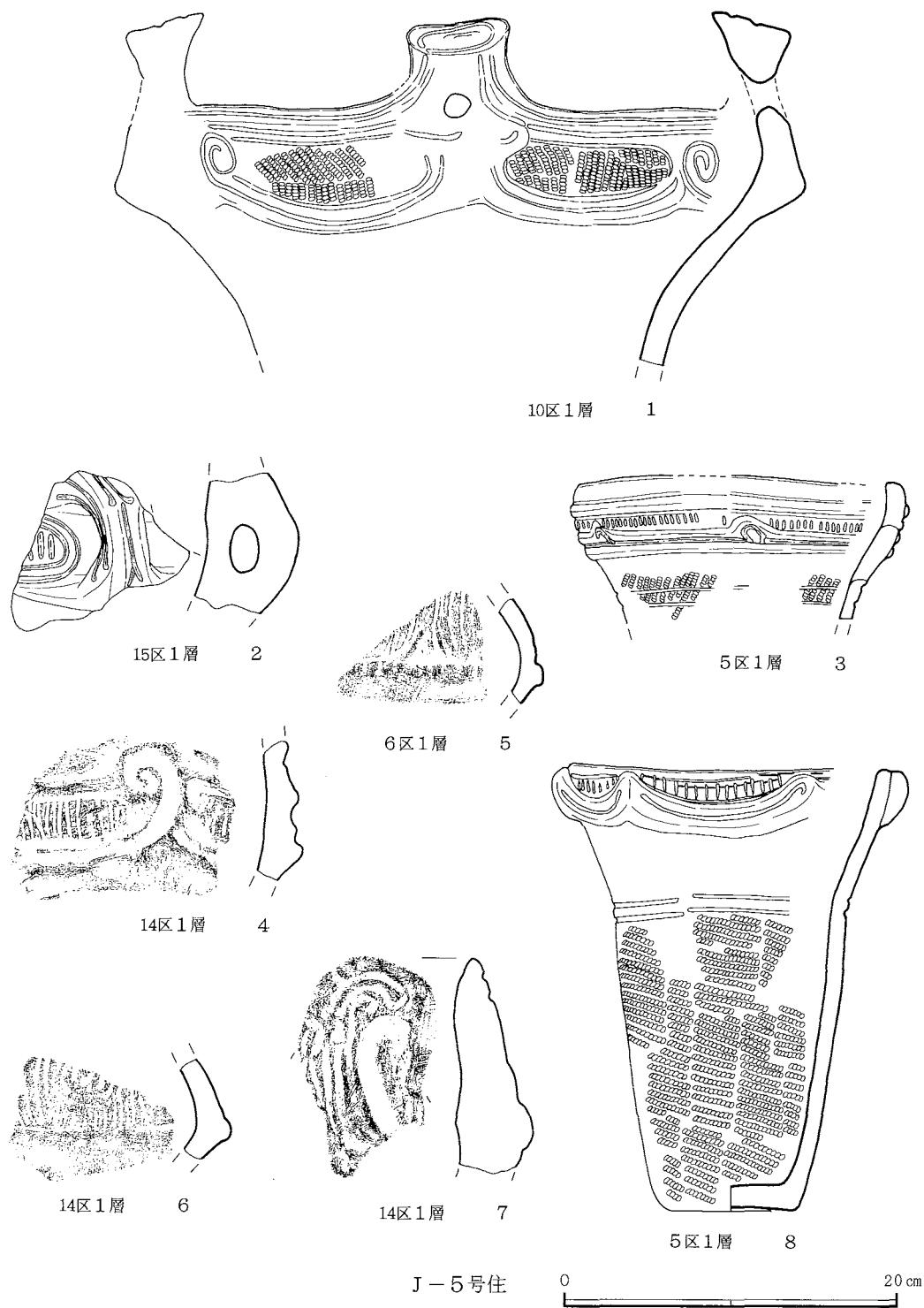
##### A群出土の土器

D—7(第19図1・2) 1は無文の浅鉢で、2は赤色塗彩がされている無文の口縁部である。他の共伴遺物から第3A群土器(加曽利E2式)と判断される。



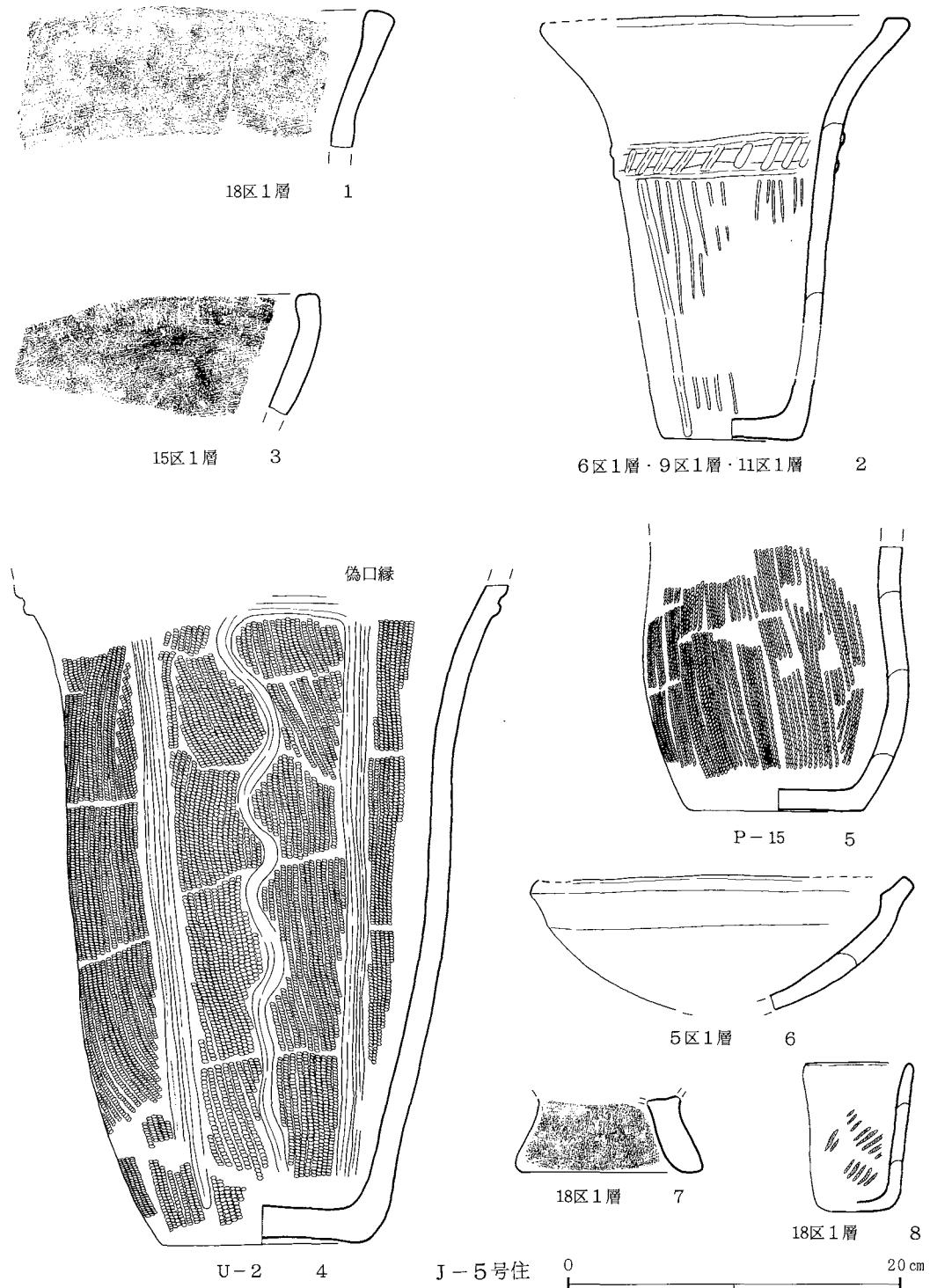
第15図 J-5号住居址出土の土器（1）

IV 遺構各説



第16図 J-5号住居址出土の土器（2）

1 上ノ久保遺跡



第17図 J-5号住居址出土の土器（3）

#### IV 遺構各説

D-11 (第19図3～9) 4は胴部に深めの沈線による懸垂文が見られ磨消しが行われている。内・外側に黒色の付着物が認められる。6は連弧文土器で、8は4単位に円孔を有する器台である。9は加曾利E2式並行の大木8b式と関係が深い資料である。単位性は不明だが波頂部を持ち、頂部にはJ字状沈線文、口唇部には深めの3本の平行沈線文、波頂下部には円孔を有する。頸部に括れがあり、地文は撚糸が施文され、胴部は2本1組の平行沈線で大きな渦巻文が施されるが、大木8b式に見られるような沈線の先端に渦巻文は認められない。沈線区画内は磨消しが行われている。本遺構出土の共伴資料は第3B群土器（加曾利E3式）である。

#### B群出土の土器

D-20 (第20図8) 隆帯に縄文が施文され、幅の広い沈線が引かれる大型把手である。第2群土器（勝坂3式）である。

D-23 (第20図9・10) いずれも口縁部が無文で、胴部との境界に微隆起帯が存在する鉢である。第3C群土器（加曾利E4式）に分類される。

#### その他の土坑

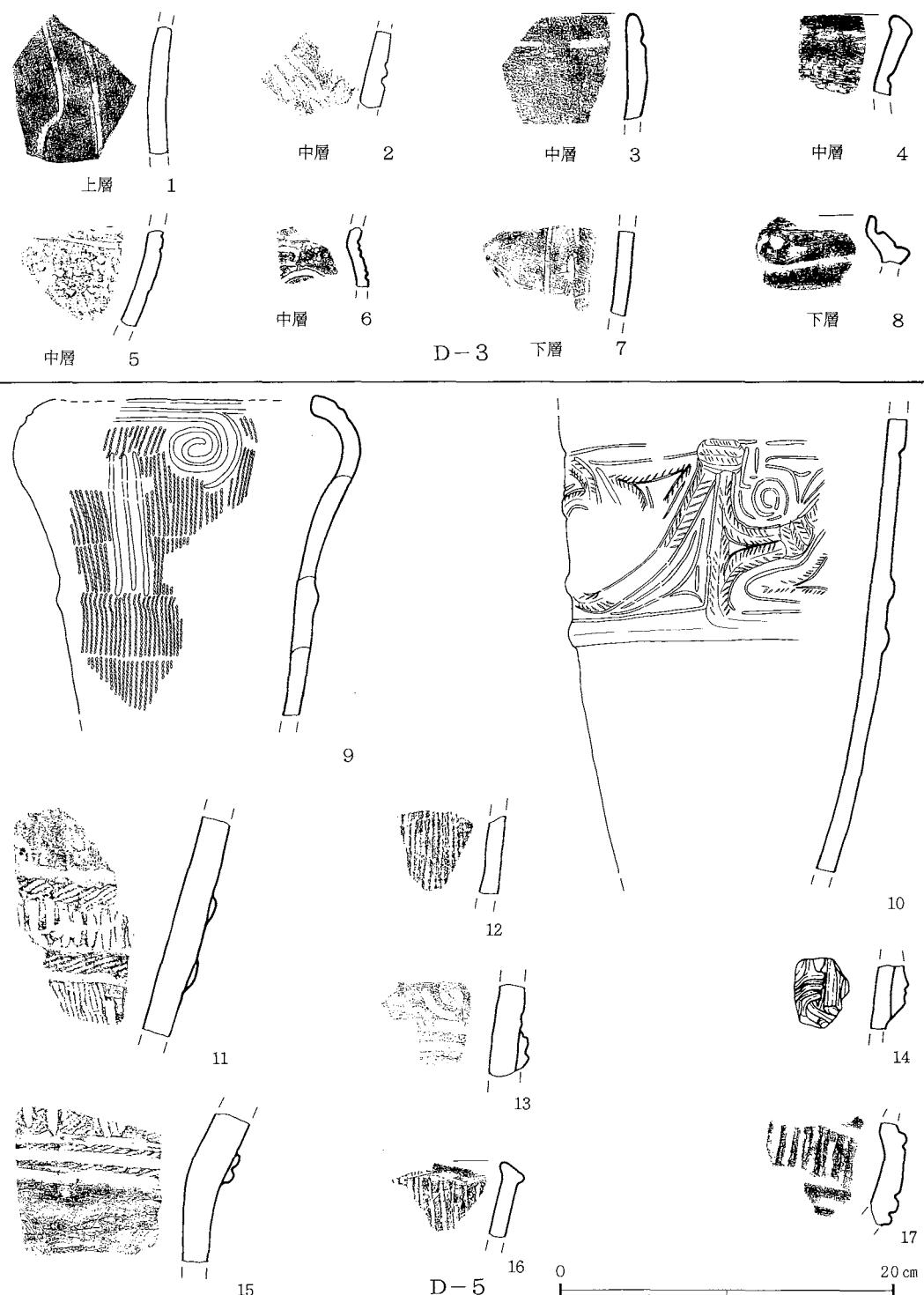
D-3 (第18図1～8) 口縁は平縁と波状があり、口唇部は外削ぎ状と、そうでないものがある。沈線区画内は縄文を充填する資料は見られず、列点状刺突や細かい円形竹管文で充填するもの、沈線のみのものがある。第4群土器（称名寺2式）である。

D-5 (第18図9～17) 文様帯を区画する隆帶上に縄文を施文し、幅の広い沈線によって渦巻きや平行線などの文様が引かれる。高崎市大平台遺跡の加曾利E式出現期、北橘村房谷戸遺跡のV群3類土器に比定される資料である。9は地文が撚糸で頸部の境界に凸部が見られ、文様帯を区画している。10は隆帶に縄文施文は見られず、頸部と胴部の境界の隆帶以外には矢羽状沈線が施文されており、口縁部と胴部は無文帯である。この土坑出土資料は勝坂3式から加曾利E1式であり、本遺跡の第2群土器と第3A群土器の間を埋めるものである。しかし、検出された資料はこれのみであり、ほかに検出されていない。

D-16 (第20図1～7) 第3A群土器（加曾利E2式）の一群である。1・5は口縁部文様帯に太い沈線が縦位に施文されるもので、第3A群2類に細分される。また、7は口縁部文様帯に縄文が施文されるもので、第3A群1類に細分される。

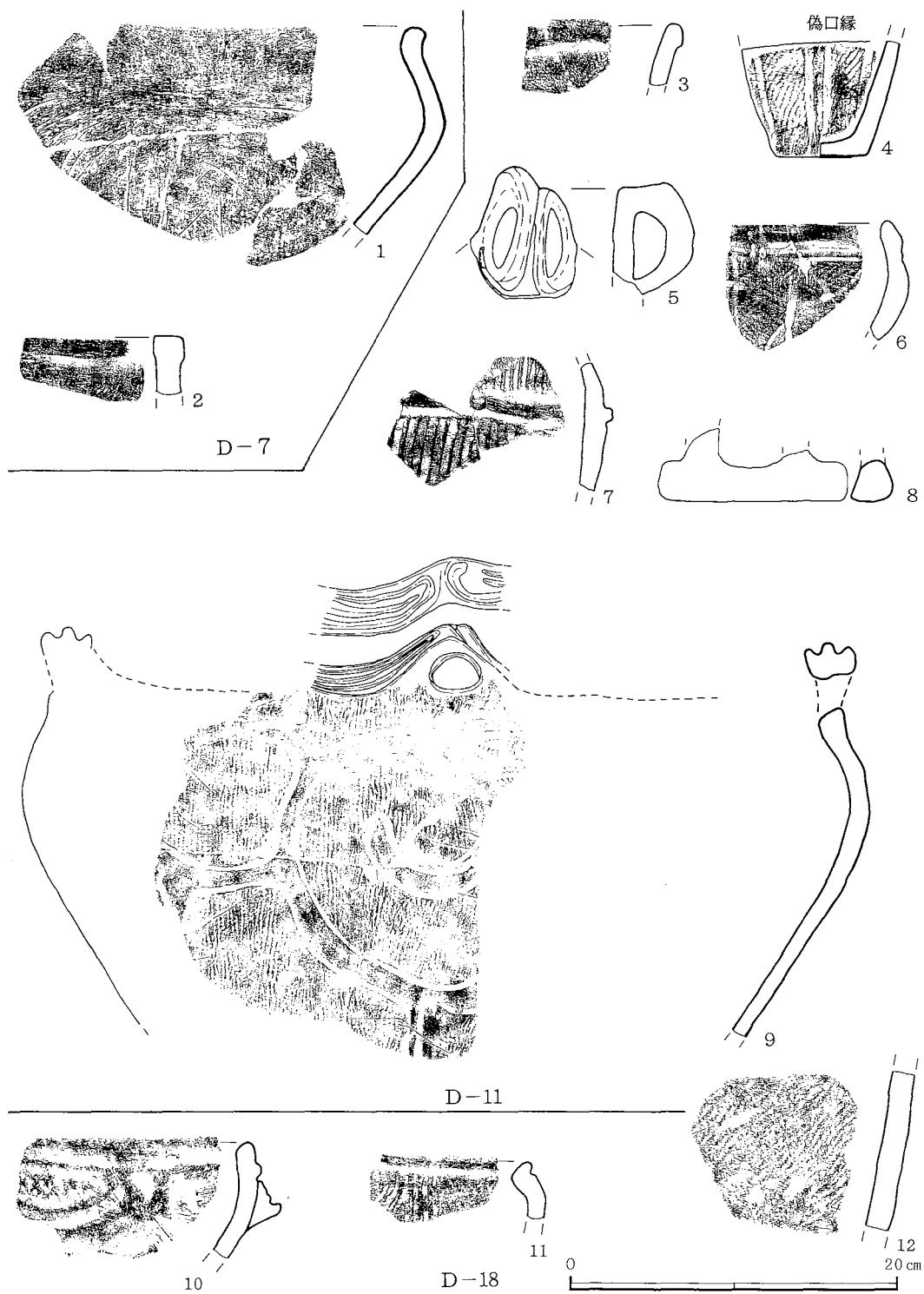
D-18 (第19図10～12) 第3A群土器（加曾利E2式）の一群である。10は口縁部文様帯に縄文が施文されるもので、第3A群1類に細分される。

1 上ノ久保遺跡



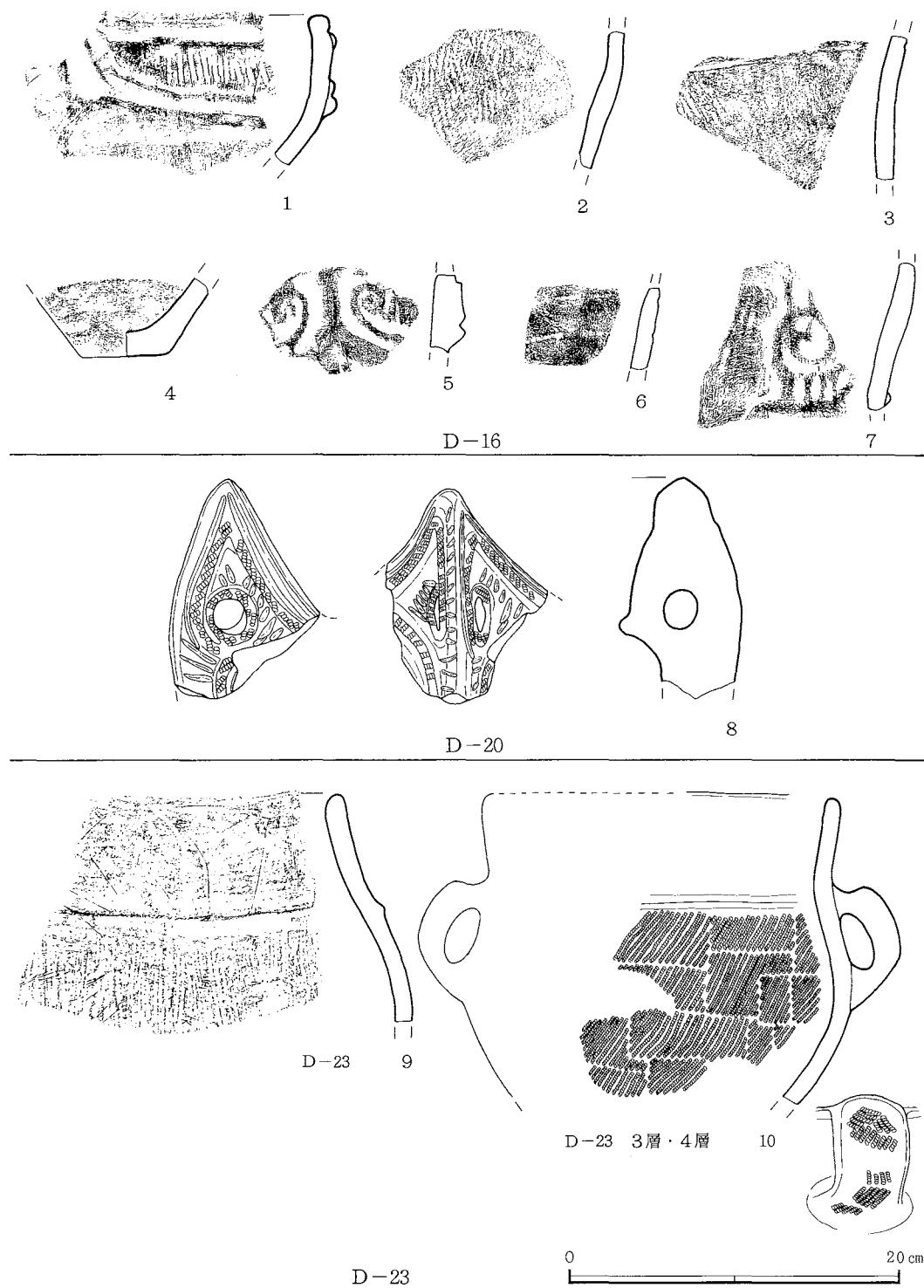
第18図 縄文時代土坑出土の土器（1）

IV 遺構各説



第19図 縄文時代土坑出土の土器（2）

1 上ノ久保遺跡



第20図 縄文時代土坑出土の土器（3）

#### IV 遺構各説

##### 〔埋設土器〕(第21図1)

U—1号埋設土器 口縁部が無文帯で外反し、文様帯は隆帯によって区画されている。胴部文様はJ字状文を想定させるものを中心に構成されているが、文様要素が沈線でなく磨消しの過程で両端を隆起させ、それを撫でて微隆起としている。中期から後期(加曾利E4式～称名寺1式)にかけての過渡的な資料である。

##### 〔調査区出土の土器〕(第22図～第23図)

第1群土器(第22図1～4) 前期中葉の纖維を含む一群を一括した。口唇部は平坦に成形されており、単節斜縄文を横位に施す。文様帯部分は検出されていないものの、口唇部の特徴から有尾式の一群と判断される。

第2群土器(第22図6～7) 中期中葉に相当する一群を一括した。勝坂式とそれに並行する焼町類型の一群である。6・7は沈線で渦巻文や曲線が描出されている。勝坂3式である。

第3群土器(第22図5・8～24) 中期後半に相当する一群を一括した。加曾利E式であり、さらに以下のように細分される。

第3A群(5・8～14) 加曾利E2式の一群であり、J—5号住居址の資料によれば、さらに3類に細分可能である。詳細はJ—5号住居址出土土器の項を参照されたい。ここに示した資料では、9・10・13は第3A群1類、5・11・12・14は第3A群2類に細分される。

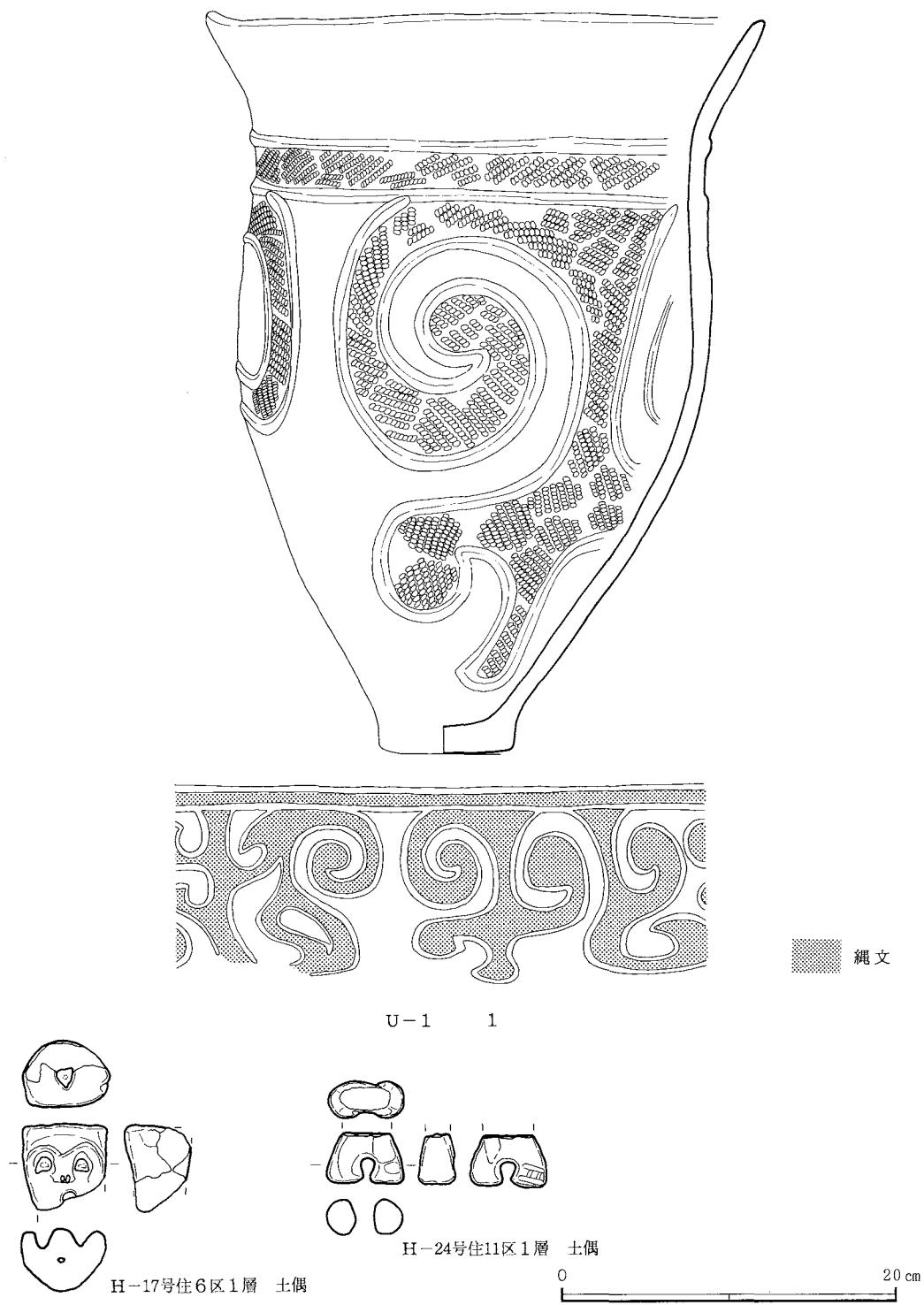
第3B群(15～19) 加曾利E3式の一群である。15は胴部に磨り消しによる幅広い懸垂文が施文される典型例である。また、16、17、18はそれに並行するとみられる連弧文土器であり、地文は縦位の撫糸文である。

第3C群(20～24) 加曾利E4式の一群である。23、24は口縁部に橋状把手が認められる例である。なお、20は矢羽状の沈線が縦位に施文されており、曾利系と判断される。

第4群土器(第22図25、第23図1～3) 後期初頭に相当する一群を一括した。称名寺式である。25は沈線で区画された内側を縄文で充填するものである。1は口唇部に沈線で渦巻文が施文されるものである。いずれも称名寺1式と判断される。2と3は無文の口縁部に横位の隆帯が張り付けられ、その上を指頭圧痕で連続的に押しつけたものである。称名寺2式と判断される。

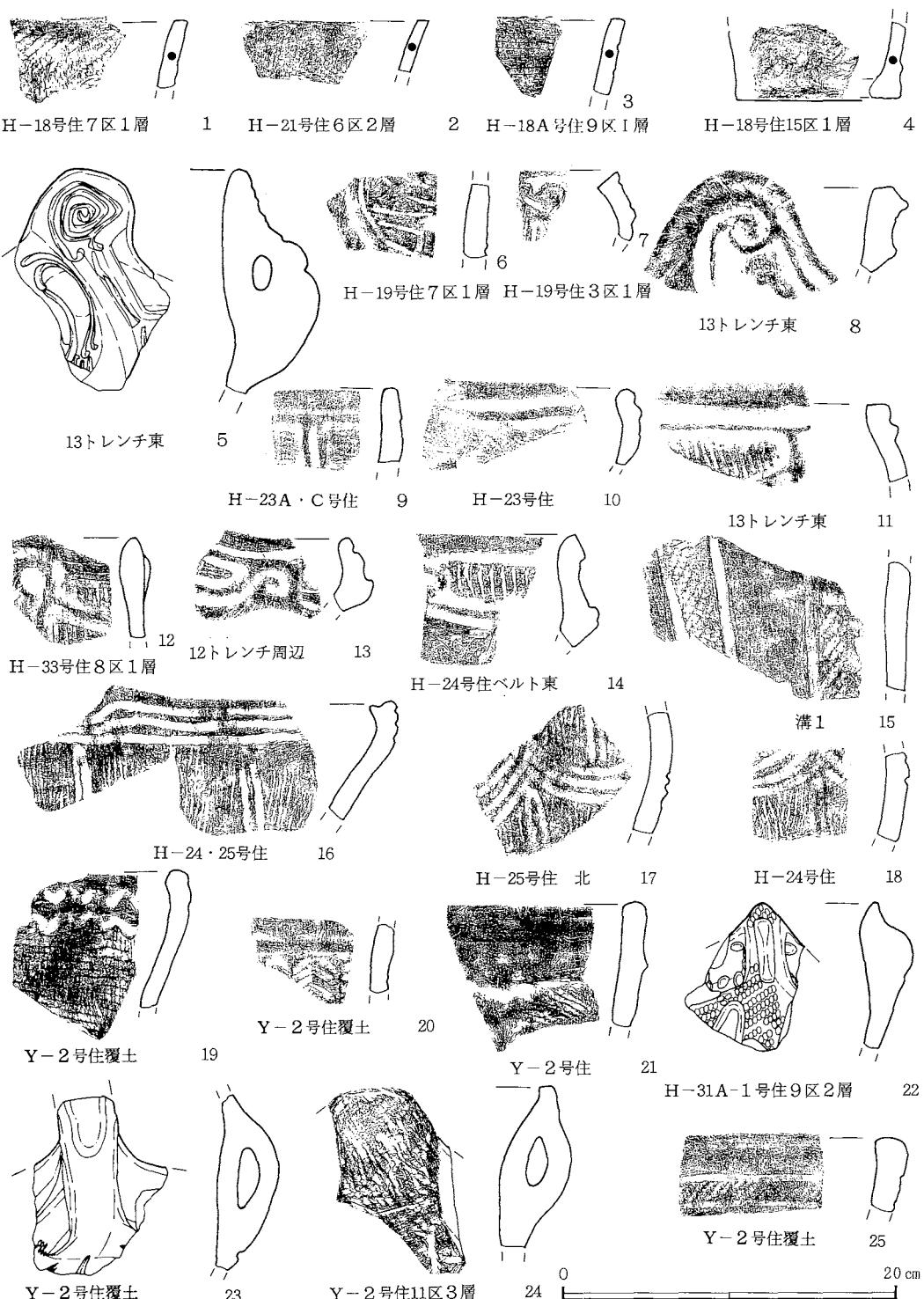
第5群土器(第23図4～23) 後期前葉～中葉に相当する一群を一括した。堀之内の一群である。文様構成から4～10は堀之内1式、11～23は堀之内2式に分類される。

第6群土器(第23図24～31) 後期後葉に相当する一群を一括した。加曾利B式である。文様構成から24は加曾利B1式、25～31は加曾利B2式に分類される。

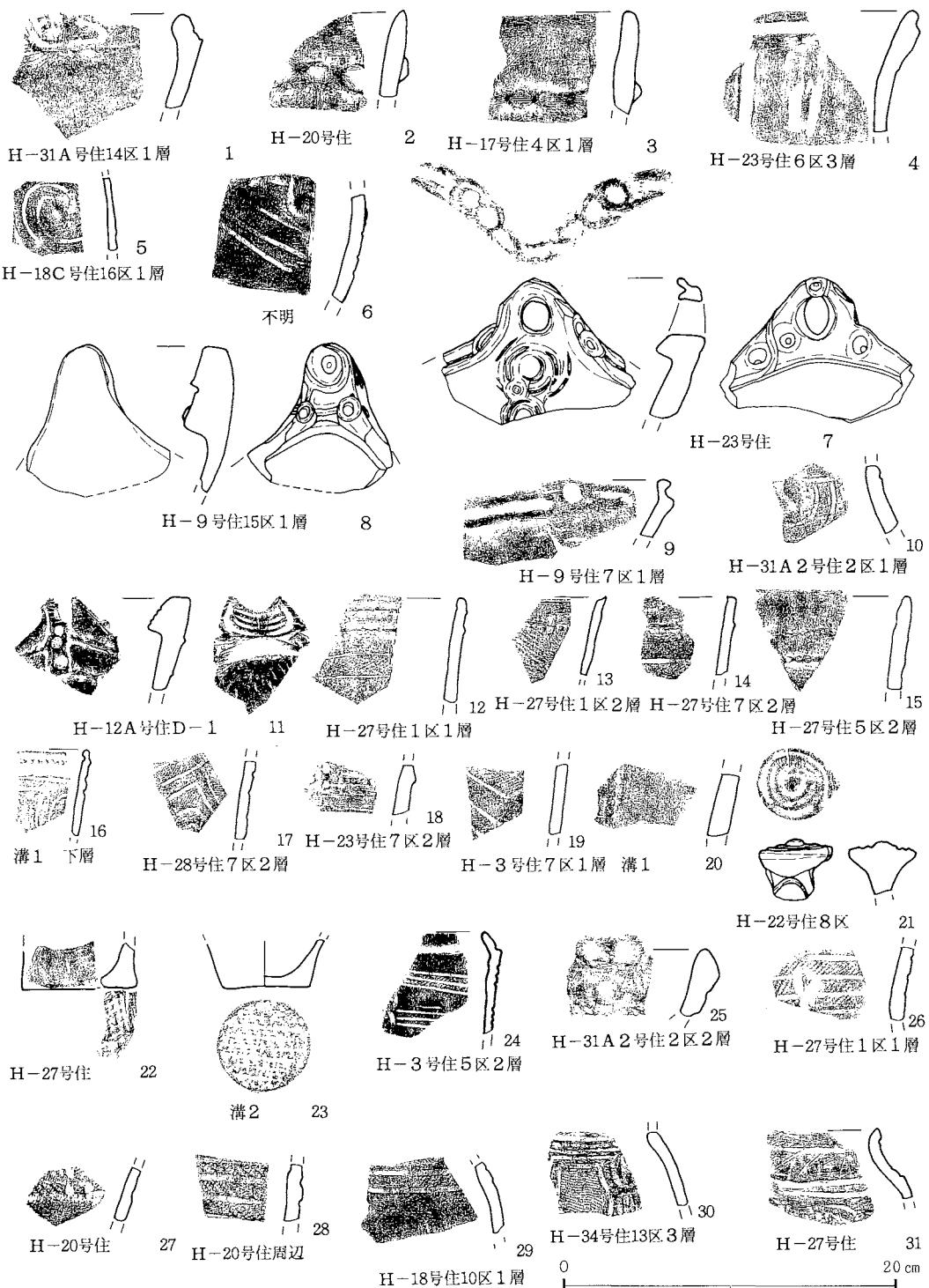


第21図 埋設土器・土偶

IV 遺構各説



第22図 グリッド出土の土器（1）



第23図 グリッド出土の土器（2）

#### IV 遺構各説

##### [所見]

J—5号住居址からは、加曽利E2式の良好な一括資料が検出されている。もちろん、この住居址で使用されたものとは言い難く、住居廃絶後に廃棄されたという意味での時期の一括資料であり、必ずしも一つの住居で使用されたセットと言う意味ではない。ここでは、第3A群1類と細分した南関東地方における典型的な加曽利E2式と、第3A群3類とした曾利II式が共伴しているが、曾利II式の比率は少ない。また、第3A群2類とした、両者の特徴を兼ね備えた当地域に特徴的な加曽利E2式の一群が存在している。この一群は、曾利II式よりも出土比率が高い。同じ鷺宮地区遺跡群の荒神平・吹上遺跡J—3住には、第3A群1類に属する口縁部、胴部とも縦位の撚糸文を地文とし、頸部無文帯を有する深鉢が存在している。同2類と文様的には類似しており、同2類の成立過程を理解する上で注目される。

群馬県の東毛地方で加曽利E2式の住居址が確認されているは、高崎市大平台、下佐野、前橋市清里・長久保、国分寺中間地域、大胡町上ノ山、西小路、太田市小町田、館林市大袋II遺跡の計8遺跡である。この地方の特色は大平台遺跡で第3A群1類と同2類の共伴関係がまったく認められないこと、小町田遺跡における1類と2類の共伴が認められる住居址の出土資料では、箱状把手の多用や頸部無文帯を持たず本来の加曽利E式土器とはかなりかけ離れていること、そして第3A群1類、2類、3類の共伴関係が大胡町の上ノ山遺跡だけにしか認められないことがあげられる。

北毛地方で加曽利E2式の住居址が確認されているは、渋川市行幸田山、赤城村三原田、沼田市寺入、長野原町勘場木遺跡の計4遺跡である。この地方の特色は行幸田山遺跡以外の3遺跡で第3A群1、2、3類の共伴関係が認められることである。なお、長野県に極めて近い場所に位置する長野原町勘場木遺跡では出土遺物の大半がほぼ純粋な曾利式土器であり、加曽利E式土器は1、2類とも客体的な出土状況であることがあげられる。

西毛地方の状況は当遺跡をもって推し計るしかないが、恐らく北毛地方と同じ傾向を示すと思われる。このように東に向かうにしたがい、第3A群3類の曾利式土器の範疇で括られる資料の出土が減少していく現象が確認できる。そして、第3A群2類土器は1類土器と比較して比率的には少ないがほとんどの遺跡で出土している。また、1類もしくは2類土器のみ出土する住居址も存在する。

次に、埼玉県北部の様相をみてみよう。児玉町古井戸遺跡、本庄市将監塚遺跡は第3A群1類と2類の共伴関係が認められる住居址が多い。そして、比率的に1類が最も多く、次いで2類、3類土器の順である。これは北毛、西毛地方と同様な傾向である。

長野県御代田町の川原田遺跡では2類と3類土器の共伴、滝沢遺跡では一括資料という部分で問題があるが、2類土器のみで両遺跡とも1類土器は認められなかった。

このように、第3A群1～3類の遺跡における在り方には、ある程度地域性が反映されていることが理解できる。今後とも、注目しておく必要があろう。

また、A土坑群のD-11出土の9は器形や文様構成から大木8b式と関連する資料である。周辺遺跡における出土状況を概観すると、渋川市行幸田山遺跡のB区7号住居址と16号住居址出土の土器は加曾利E2式並行の大木8b式であるが、加曾利E3古式と共に伴していることからこの時期に該当させている。特に7号住居址の出土状況は大木8b式が石囲炉内の埋設土器で、加曾利E3式が住居南東部から出土した埋設土器という一括資料である。

前橋市清里・長久保遺跡の13区2号住居址出土の土器も大木8b式と関連があるが、炉埋設土器、共伴資料から加曾利E3式の段階に設定している。他にも加曾利E3式の13区3号、5号、6号、8号、10号住居からも大木8b式に関連のある資料が覆土から出土している。

このように大木8b式は加曾利E3式と共に伴する例が認めら、本遺跡のD-11においても加曾利E3式が共伴しており、上述した遺跡と同じ傾向がうかがえるが、これはこの地域において普遍的な様相と推定される。D-11の遺物出土状況は良好ではなかったことから、問題もあるが、今後も大木8b式の出土状況については留意する必要がある。

(大工原 豊・中澤信忠)

### 土偶 (第21図2・3)

本遺跡からは土偶が2点検出されている。いずれも遺構に後世の住居址覆土中から出土しており、帰属時期は土偶の形態的特徴から判断するしかない。2は中期の有脚立像形土偶（いわゆる「河童形土偶」の系譜）の頭部と推定される。比較的大形の土偶で、眼・口は深く穿孔される。頭部上面は平坦で、同様な穿孔が施されている。3は土偶の下半身部分である。裏面脚部には太い棒が井桁状に押しつけられた跡が観察されるが、装飾的なものではなく、製作の際に付いてしまったものとみられる。

(大工原 豊)

### 石器

#### [石器組成]

上ノ久保遺跡の石器組成は第24図・第25図に示したとおりである。出土した石器は調査区全体では430点である。遺跡の性格上、弥生時代以降の遺構覆土中に混入しているものがほとんどであるため、遺構に伴なって出土した石器は極めて少ない。したがって、大部分の石器については遺構から帰属時期を特定することはできない。同様に弥生時代以降の遺構から出土した土器からみて、前期から後期までのものが含まれていると推定される。J-5号住居址と土坑群出土の石器

#### IV 遺構各説

は土器型式にほぼ対応する資料である。ただし、土坑群は資料数が少なく組成論的分析はできないので、J-5号住居址出土の石器についてのみ様相を述べる。

**J-5号住居址の石器組成** 土器から加曾利E2式に帰属する石器群であり、全部で45点出土している。系列組成をみると、A類は石器の製作・消費ともに低調である。B類では石器（狭義）の方が剥片類の2倍以上であり、石器消費の傾向が著しい。器種組成をみると、B類の打製石斧が最も多く、C1類の磨石・凹石・石皿も比較的多い。また、石材重量組成をみると、頁岩・安山岩・結晶片岩がほぼ同じ重量であり、それ以外の石材は少ない。打製石斧が多いことなど中期的石器組成の様相を示している。

##### [石器各説]

###### A類石器

**石鏃**（第26図1～5） 8点検出された。すべて凹基無茎鏃（I形態）である。1・2は局部磨製石鏃である。1は黒曜石製で関東型局部磨製石鏃の範疇に含まれるものであり、後期のものと判断される。また、2は大形で黒色安山岩製であり、関東型というよりも中部型の範疇に含まれる資料であり、注目される。また、3～5は一般的な凹基無茎鏃である。

**石鏃未成品**（第26図6・7） 2点検出されている。6は凹基無茎鏃の未成品、7は製作の初期段階の未成品と判断される。

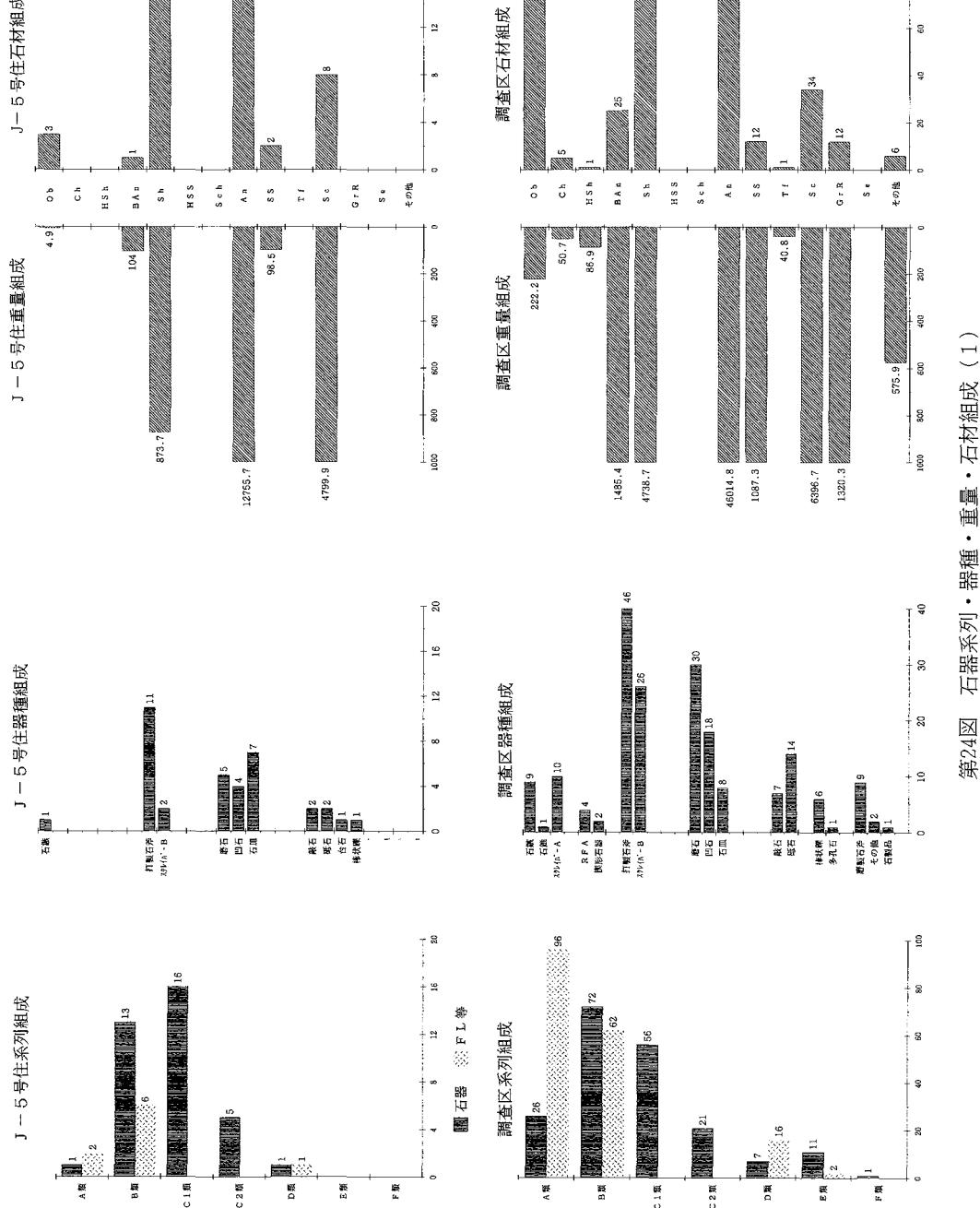
**石錐**（第26図8） 2点検出された。8は摘みの無い形態で、チャート製である。

**楔形石器**（第26図9・10） 2点検出された。9は縦長剥片素材で両極剥離面を有する。2点とも黒曜石製であり、石鏃製作工程の中で作出されたものと推定される。両極技法が石鏃製作に一般的に用いられるのは中期以降であり、これらの資料は石鏃が中期以降のものである可能性を示す資料と言えよう。

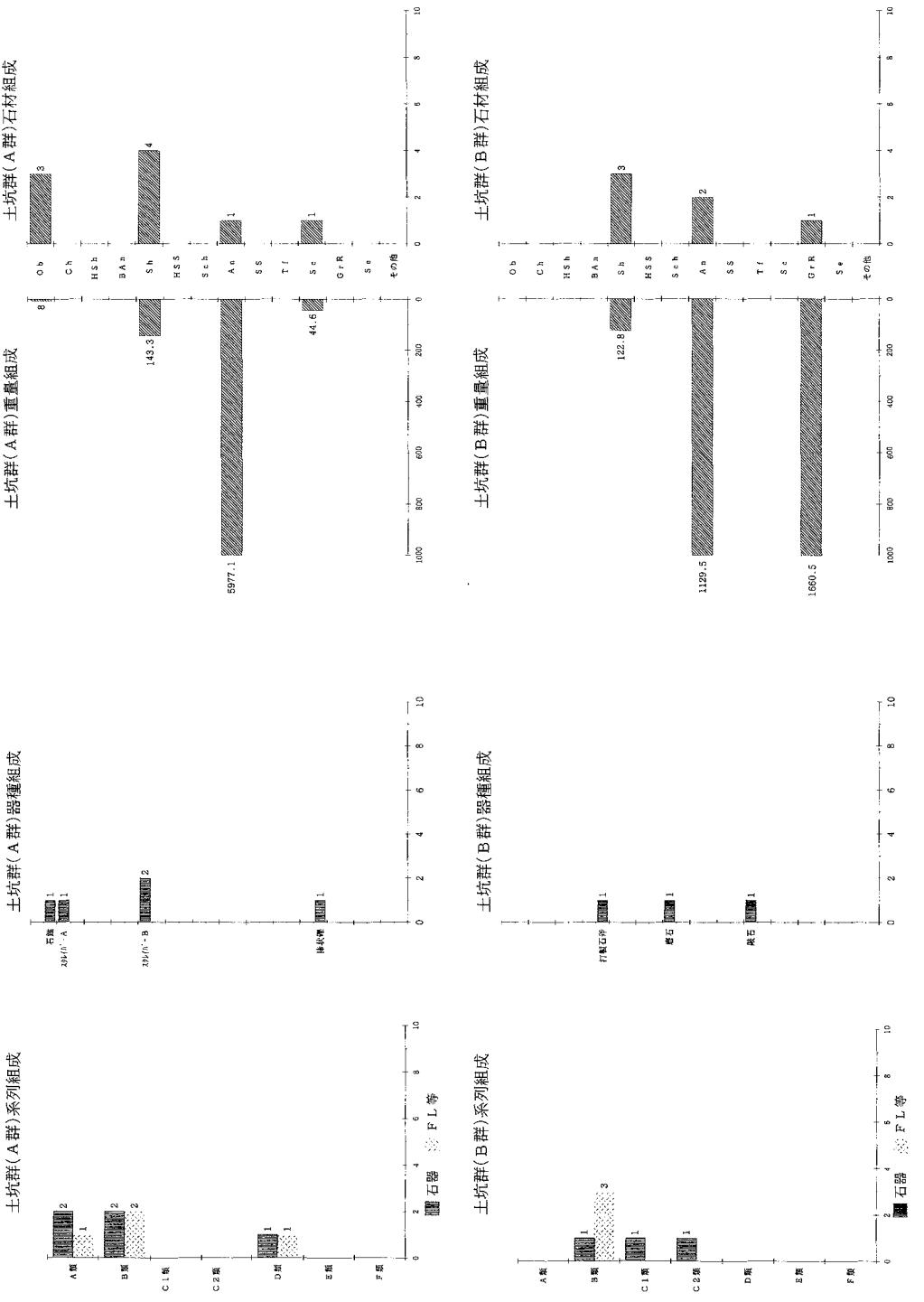
**スクレイパーA類**（第26図11～17） 11点検出された。Ia形態（押圧剥離：11）2点、Ib形態（押圧剥離+直接打撃：15・16）2点、II形態（直接打撃：12・17）3点、III形態（縁辺微細剥離：13・14）4点である。黒曜石は小形縦長剥片と小形横長剥片、黒色安山岩は横長剥片を素材とする傾向が認められる。

**リタッヂド・フレイクA類** 4点検出された。剥片の縁辺1／2に微細な剥離痕が残るものである。図化していないが、素材の形状はスクレイパーA類と同じような小形不定形剥片である。すべて黒曜石製である。

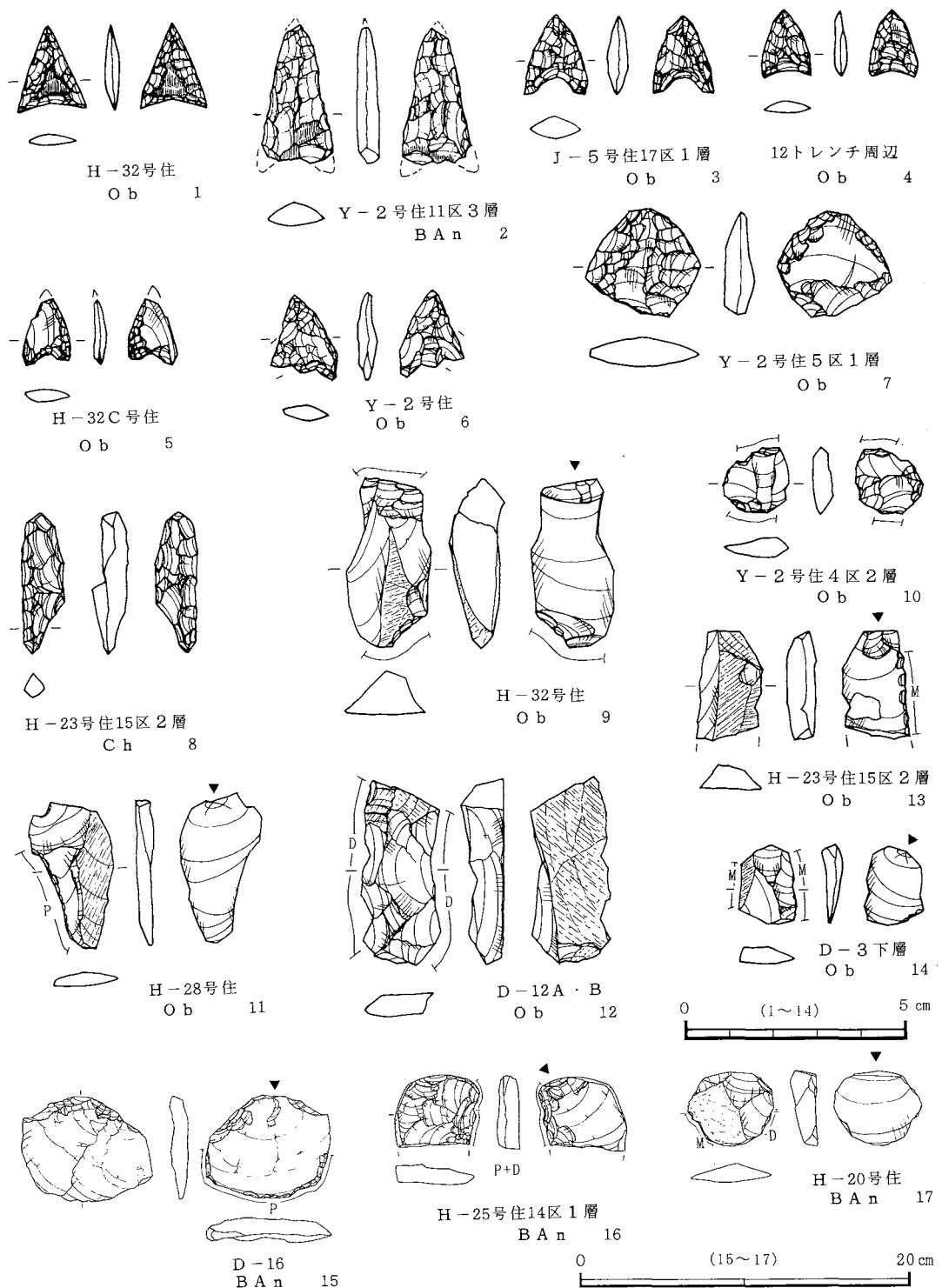
**石核A類** 図示していないが、10点出土している。石核A類では、打面と作業面を頻繁に転移するものが多く、両極技法も認められる。また、自然面を残すものも多い。黒曜石製の石核は、剥離作業面の大きさから石鏃の素材を作出したものと判断される。



第24図 石器系列・器種・重量・石材組成（1）



1 上ノ久保遺跡



第26図 石器実測図（1）

#### IV 遺構各説

原石A 図示していないが2点出土している。赤玉（鉄石英）と黒色安山岩が各1点である。

#### B類石器

打製石斧（第27図1～12） 58点検出された。II形態（撥形・短冊形、両面階段状剥離、断面レンズ状、両刃の「土掘具」的特徴）が主体である。10は片側縁に抉入部があるが、二次加工によるものであり、III形態とは区別される。また、中にはスクレイパー状を呈するもの（11）も存在する。欠損により形態が不明なのも13点存在しているが、先端部に摩耗痕が観察されるものがほとんどであり、大部分はII形態の破損品と推定される。III形態（側湾形）は12のみである。中期末以降のもの（おそらく後期）と判断される。

打製石斧は頁岩が主体であり、他に安山岩・黒色安山岩・結晶片岩等も少数認められる。

スクレイパーB類（第28図1～14） 29点検出された。Ia形態1点（1）、II形態18点（2～12）、III形態10点（13・14）である。スクレイパーB類の中には打製石斧と素材、調整技術に共通性をもつものが大部分である。4・7～9は横長剝片の両端部に調整を施したもので、II形態の打製石斧の調整段階の剝片を素材としたものの典型例である。頁岩製が大部分である。

石核B類（第28図15） 2点検出された。15は頁岩製の求心状剝離により、幅広剝片を作出する石核である。円盤状石器とも呼称される形態であり、打製石斧III形態と技術的親和性が強く、スクレイパーB類の素材剝片を作出するためのものと判断される。

#### C1類石器

凹石（第29図1～7） 22点検出された。Ia形態2点、Ib形態2点（1・2）、IIa形態3点、IIb形態9点（3～5）、IIIa形態2点、IIIb形態2点（6・7）、Va形態1点、Vb形態1点である。5は敲打痕が全周し、両面が良く磨られている。ほとんどの形態に磨石との機能転用が認められる。全て安山岩製である。

磨石（第29図8・9） 33点検出された。I形態7点（8）、II形態18点（9）、III形態2点、IV形態3点、V形態3点（10）である。全て安山岩である。

特殊磨石（第29図11～13） 片側面に敲打及び磨面が形成され、断面形がやや三角形を呈する。こうした形態的特徴を有していることから、早期から前期の器種と推定される。安山岩製である。

石皿（第30図1～6） 15点検出された。Ia形態3点（1・2）、IIa形態3点（3・4）、IIb形態2点、IIIb形態3点（5・6）、形態不明4点である。石材は作業面が平坦なものは安山岩、凹面なものは結晶片岩を多用している。両面を使用し、裏面には凹を有しているものが多い。住居址出土の石皿は炉構築材として転用されている（1・3～5）。

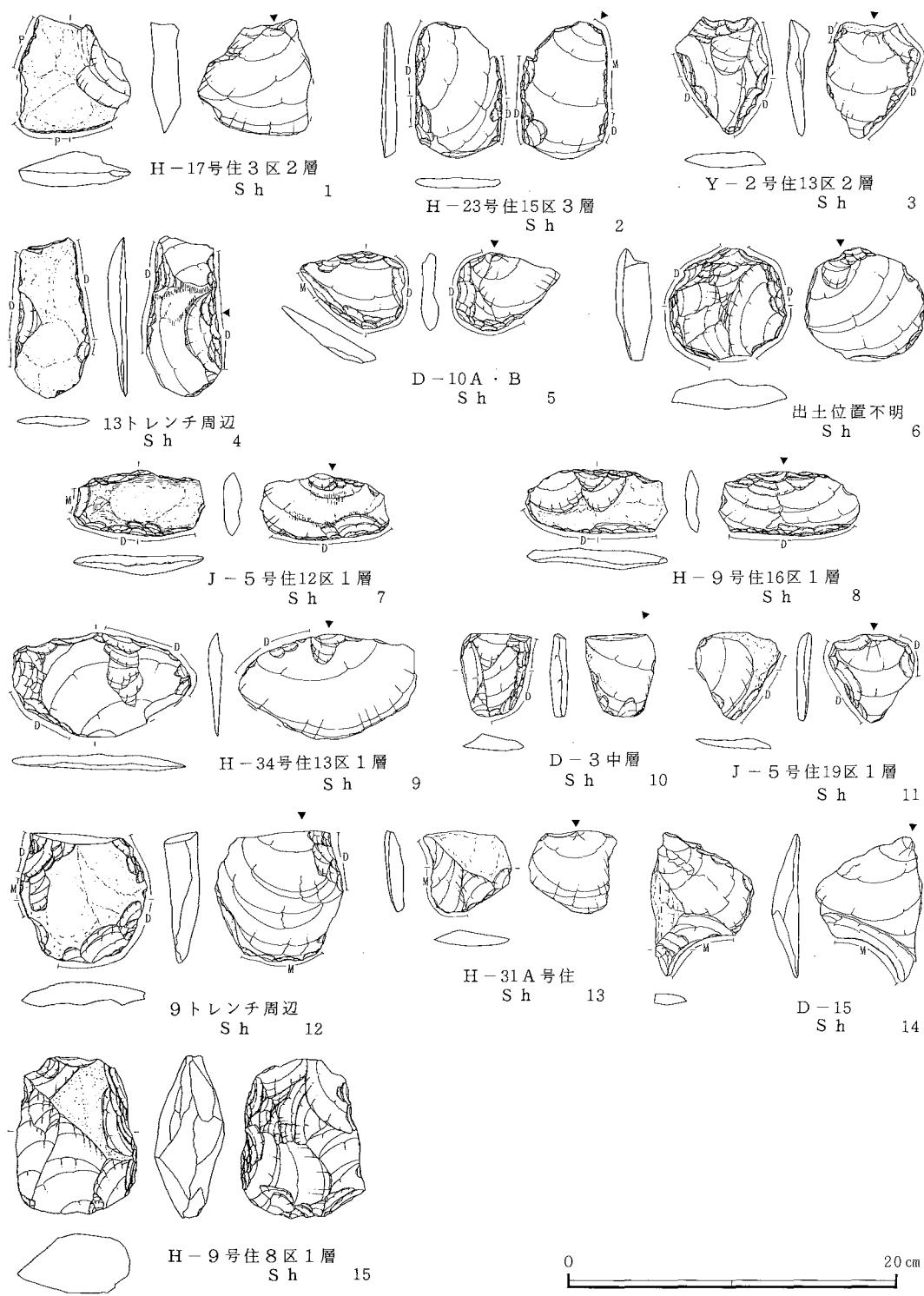
#### C2類石器

敲石（第31図1～5） 10点検出された。I形態1点（4）、II形態1点（1）、III形態4点（2・3）、V形態3点である。このうち4は緑色岩類製であり、石材と大きさからみて磨製石斧の初期

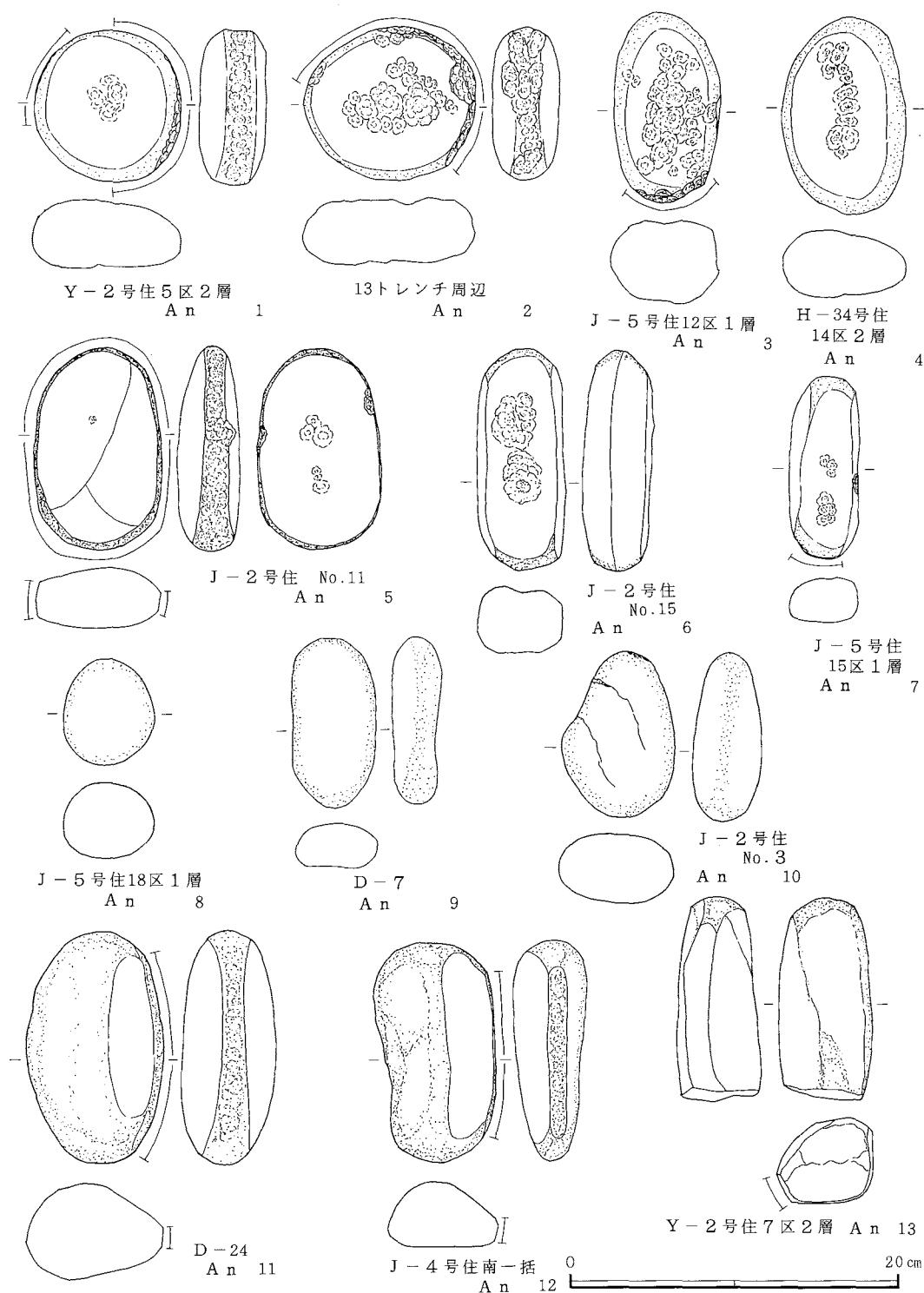


第27図 石器実測図（2）

IV 遺構各説

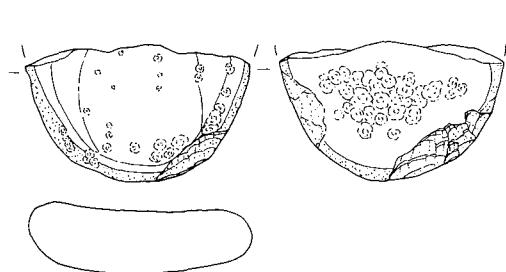


第28図 石器実測図（3）

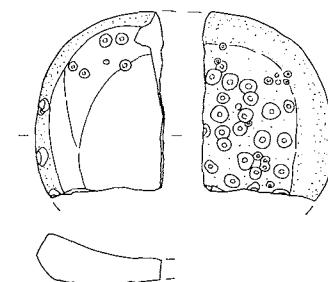


第29図 石器実測図 (4)

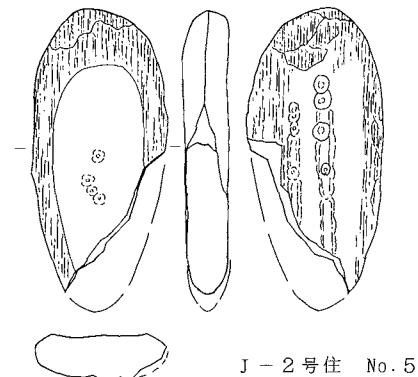
IV 遺構各説



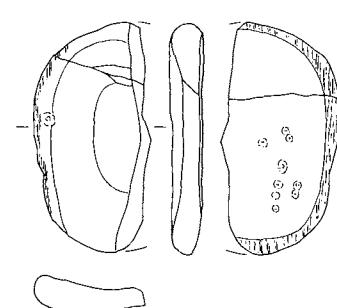
J - 2 号住 No. 2  
A n 1



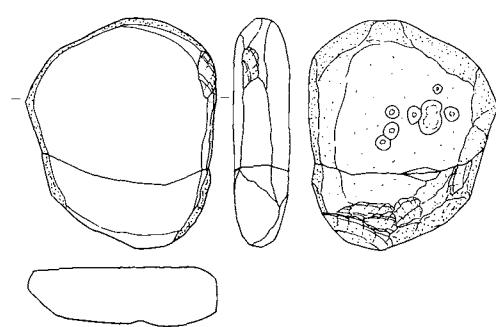
J - 5 号住 11区 1層  
A n 2



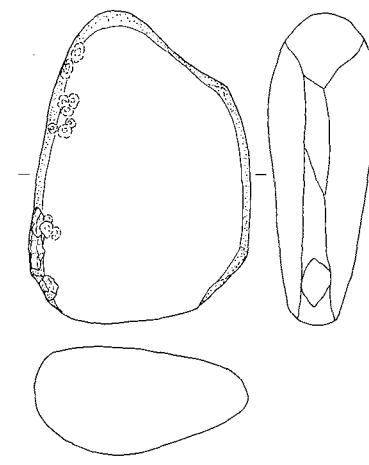
J - 2 号住 No. 5  
S c 3



J - 2 号住 No. 6  
S c 4



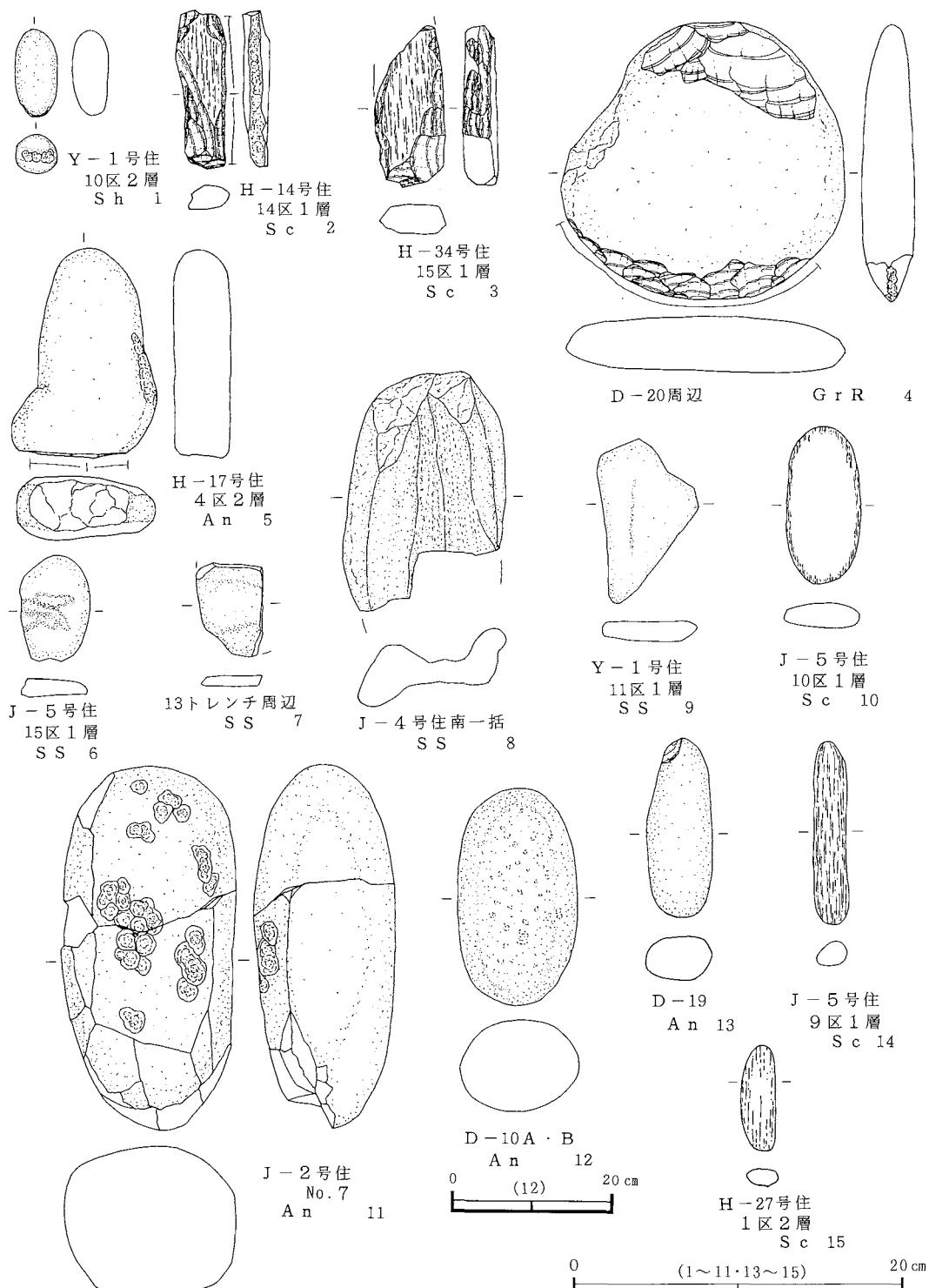
J - 5 号住炉址 1 No. 5  
A n 5



D - 4 A n 6



第30図 石器実測図 (5)



第31図 石器実測図（6）

#### IV 遺構各説

段階の未成品の可能性が高い。なお、5は敲石に分類したが、形態的にスタンプ形石器に類似している。結晶片岩製が大部分を占める。

**台石** 1点検出されている。図示していないが、破損しており、安山岩製で台石の一部と推定される。

**砥石** (第31図6～10) 14点検出された。I形態(荒砥)10点(6～8)、II形態(中砥)3点(9)、III形態(仕上砥)1点(10)である。線状の研磨痕が観察される例も認められる。8は有溝砥石である。大部分は牛伏砂岩製であり、III形態では結晶片岩が用いられている。

#### D類石器

**多孔石** (第31図11) 1点検出された。J—2号住居址の炉址に転用されたもので、破碎している。安山岩製である。

**棒状礫** (第31図12～15) 8点検出されている。12は安山岩製の大形のもので、全体に弱い敲打痕が観察される。13～15は小形のもので加工痕は認められない。土坑から検出されたもの(12・13)があり、用途を暗示させる。大部分は結晶片岩製で、僅かに安山岩製も認められる。

#### E類石器

**磨製石斧** (第32図1～6) 9点検出された(未成品を含む)。Ib形態(小形定角式)2点(1・2)、Iia形態(中形・断面橢円形)4点(3・6)、Iib形態(中形・断面定角式)1点(4)未成品2点(5)である。5はIb形態の未成品と考えられる。6は打製石斧的を研磨したものであり、敲打工程が存在せず本来的な磨製石斧ではない。4は蛇紋岩、それ以外は緑色岩類である。

**石錘** (第32図7・8) 2点検出された。切目(II形態:7)と、有溝(III形態:8)がある。後期の所産と推定される。それぞれ砂岩と緑色岩類が用いられている。

#### F類石器

**石製品** (第32図9) 1点検出された。台形を呈する軽石製で、全体を研磨と剝離により整形している。用途不明の石製品である。

#### [所見]

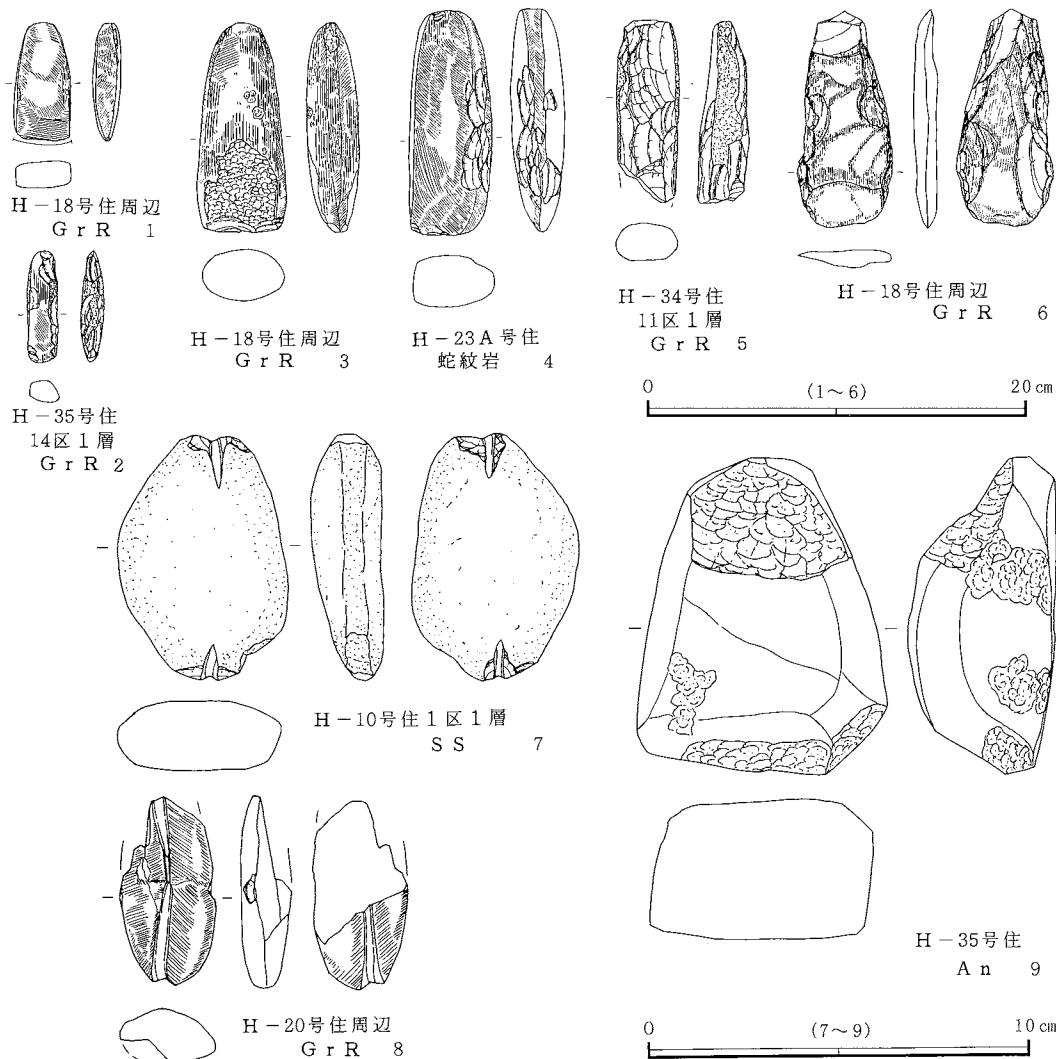
最初にも述べたが、本遺跡出土の石器は帰属時期が明確でないものが大部分である。したがって、石器群として遺跡の様相を捉えるには無理がある。ここでは、個別の器種について、注目される点や、留意すべき点について列記する。

まず、局部磨製石鎌(第26図1・2)であるが、これは中期末以降一部は弥生時代初頭まで存在することが確認されている(大工原 1990)。形態と石材から関東型1例、中部型1例である。1は関東型である。関東地方を中心に分布する関東型の場合、黒曜石製で凹基無茎鎌であることを必要十分条件としている。また、大きさに対する偏差も少ない。しかし、2は中部型である。

中部地方（岐阜周辺）に分布する中部型はこうした制約がほとんどなく、黒曜石以外の石材（主に下呂石）で多様な形態を有している。関東地方で確実に中部型に分類される例はこれまでにはなく、今回の事例が初出である。この例の場合、弥生時代後期の住居址から出土しており、弥生時代のものである可能性が高い。こうした事例の存在する点について、今後も留意する必要がある。

打製石斧はII形態（短冊形）が大部分であり、多くは中期のものである可能性が高い。しかし、後期以降も一定量は存在し続けており、この時期のものも存在していると推定される。ただし、後期になって激増するIII形態（側湾形）は非常に少なく、また、有茎鍬も存在していないことから、後期の石器群の比率は相当低いものと考えられる。

（大工原 豊・井上慎也）



第32図 石器実測図（7）

## IV 遺構各説

### (2) 弥生時代

#### a 遺構

弥生時代の遺構は後期樽式期の住居址2軒のみである。諸属性については第8表のとおりである。いずれも後世の遺構によって、破壊されており、遺存状態はあまり良くない。

#### 住居址

**Y-1号住居址**（第33図） 調査区の中央に位置する。中世のM-1号溝によって全体の1/3ほど壊されている。隅円方形とみられる。主柱穴は4ヵ所と推定されるが、東側はM-1号溝で壊されており検出されなかった。炉址は辛うじて確認されたが遺存状態は悪い。炉の枕石とみられる河原石がすぐ北のピット上部から出土している。

**遺物出土状態**（第35図） 各層とも全体から万遍なく土器片が出土しており、層位的・平面的分布に偏在性は認められない。また、復元個体の出土状況をみても、廃棄や流れ込みによるものと推定される。

**Y-2号住居址**（第34図） 調査区の中央西寄りの位置で検出された。J-3・4号住居址を壊しているが、H-28号住居址により北西部を壊している。また、南東部分は調査区外に及んでいる。出土遺物から樽式と判断される。推定床面積は50m<sup>2</sup>を越えており、大形住居址に分類されるものである。主柱穴は4ヵ所である。炉址は主柱穴の中間に2ヵ所あるが、これも当期の大形住居址の特徴のひとつである。北奥に位置する炉1は枕石を有するが、西側の炉2は小規模な地床炉である。いずれも焼土の形成は弱い。

**遺物出土状態**（第35図） 全体から土器片が出土しており、層位的・平面的偏在性はほとんど認められない。下層遺物は少なく、遺棄された形跡は認められない。なお、北西部はH-28号住居址により破壊されているので、1区・2区は攪乱を受けている。

住居名	平面形態	規模(m)			主軸方向	柱穴配列	炉	
		長軸	短軸	深さ			位置	構造
Y-1号住	隅円方形	4.7	—	0.2	N-303°-E	B 2 < B 4	中央北	
Y-2号住	隅円長方形	7.8	6.4	0.5	N		中央北 中央西	地床炉+枕石 地床炉

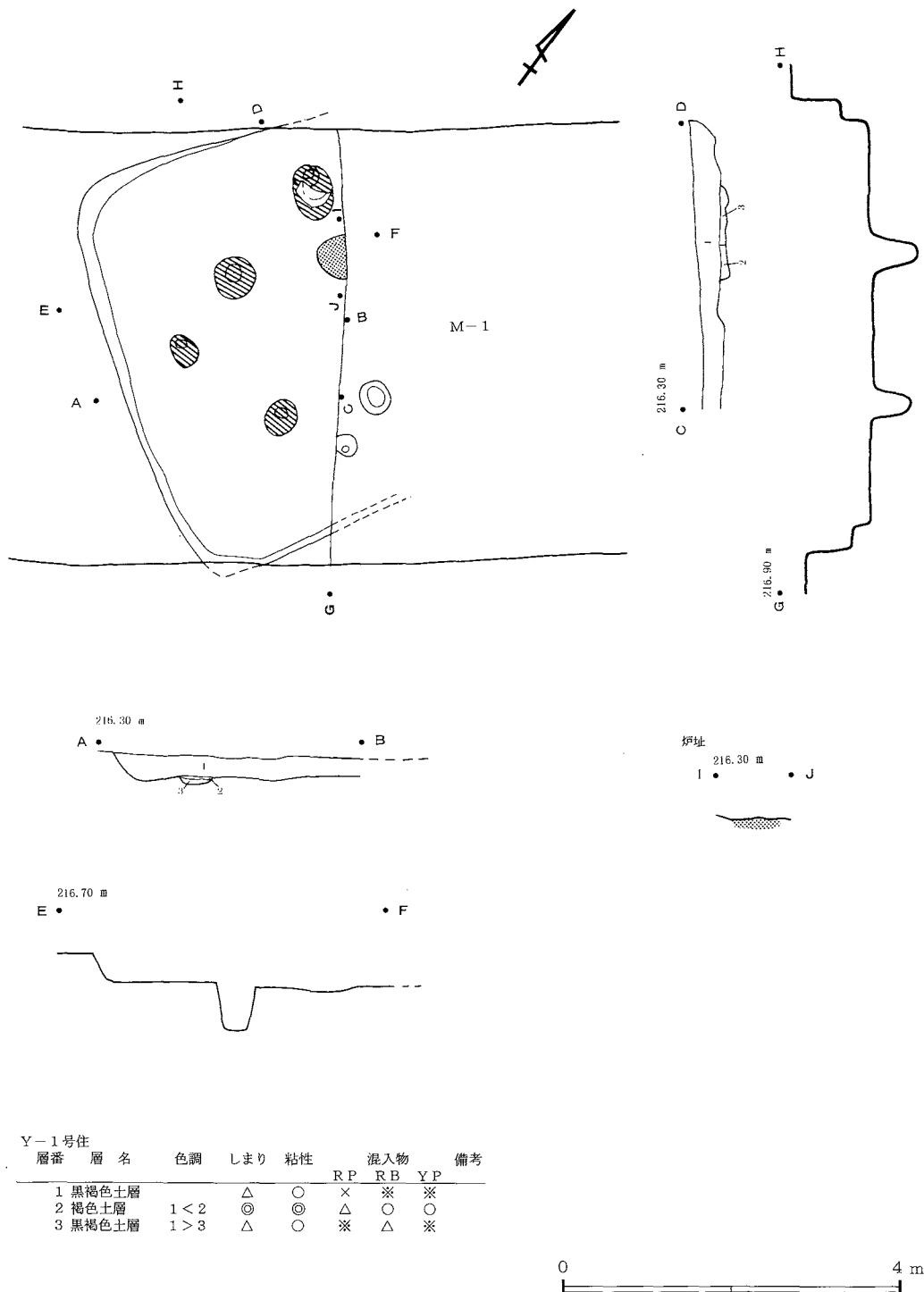
第6表 弥生時代の住居址観察表

#### b 遺物

##### 土器

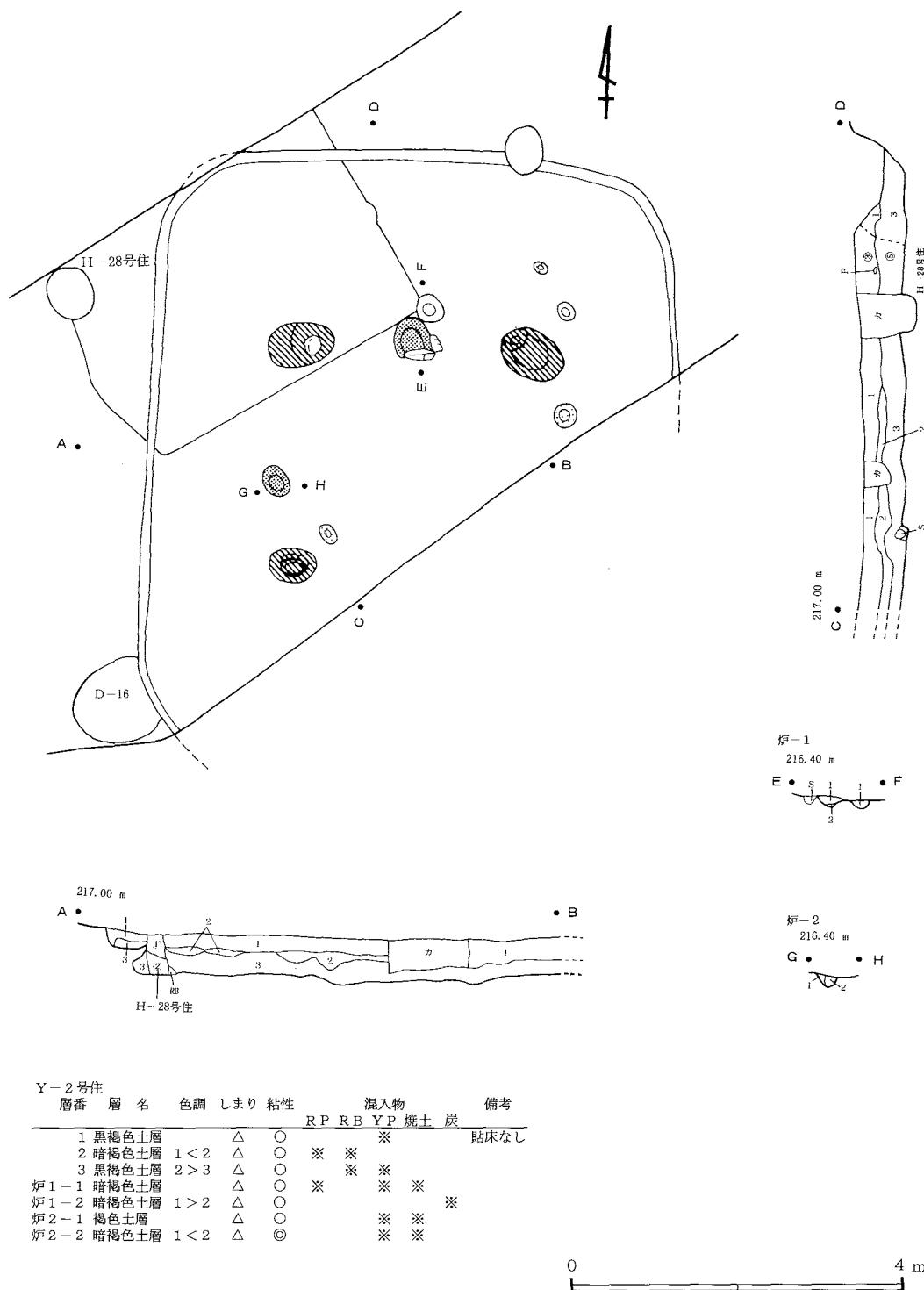
###### [Y-1住居址出土の土器]（第36図）

1～8は壺である。1は内面に赤色塗彩を施し、外面は櫛歯状工具で整形されている。また、簾状文・波状文の施された肩部（2・3）、T字文（4）、波状文に縦位の直線文が施文されたも



第33図 Y-1号住居址実測図

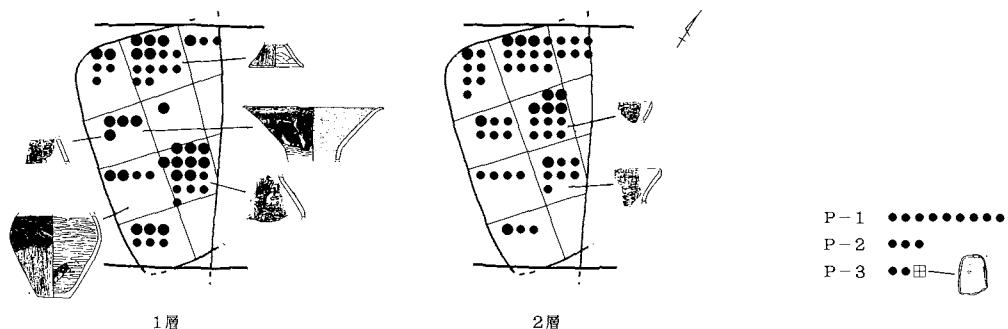
#### IV 遺構各説



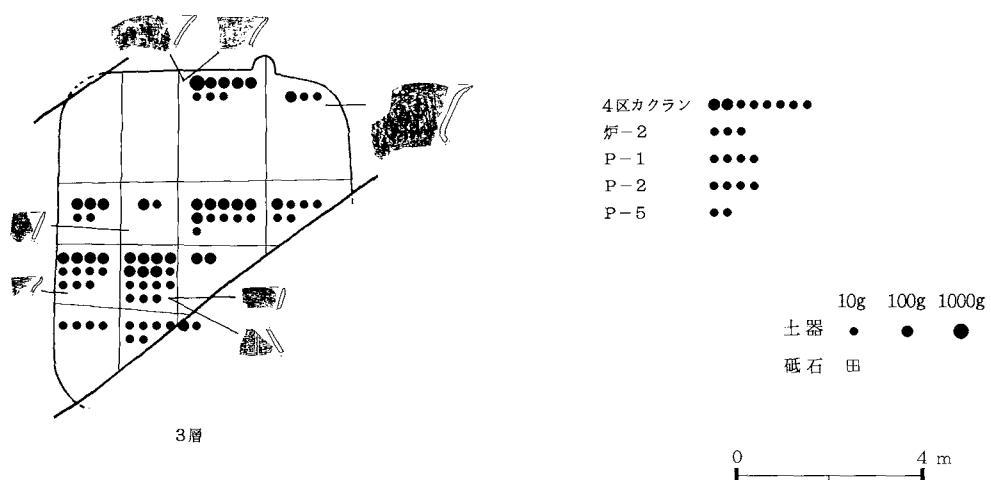
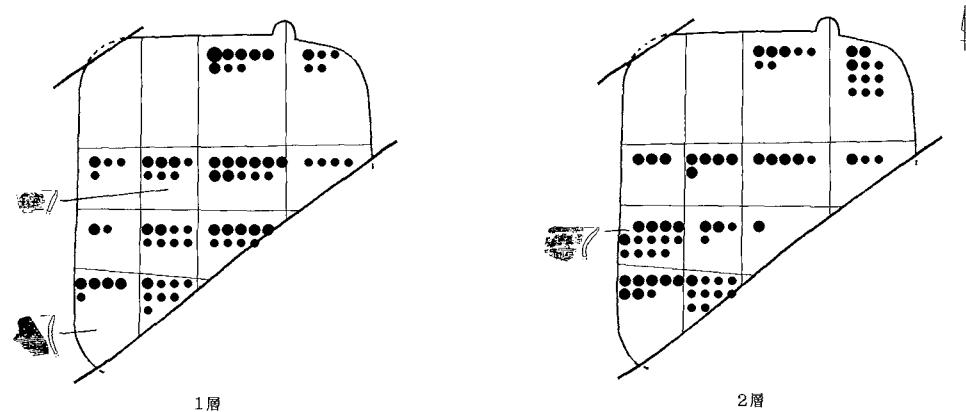
層番	層名	色調	しまり	粘性	混入物			備考
					R P	R B	Y P	
1	黒褐色土層	△	○	※				貼床なし
2	暗褐色土層	1 < 2	△	○	※	※		
3	黒褐色土層	2 > 3	△	○	※	※	※	
炉1-1	暗褐色土層	△	○	※			※	
炉1-2	暗褐色土層	1 > 2	△	○			※	
炉2-1	褐色土層	△	○		※	※		
炉2-2	暗褐色土層	1 < 2	△	○	※	※		

第34図 Y-2号住居址実測図

Y-1号住



Y-2号住



第35図 Y-1号・Y-2号住居址遺物分布図

#### IV 遺構各説

の（5）、ボタン状貼付文（5・6）が認められる。9～14は甕である。内側が丹念に磨かれているものが多い。口唇部を面取りして波状文が施文され、受口状を呈する口縁部（10・11）や、波状文の施文された肩部（12・13）がみられる。なお、14の底部には刻みが入っている。15・16・18は台付甕である。17は高杯である。

##### [Y-2住居址出土の土器] (第37図)

1～8は壺である。1は内面に、2は内・外両面に赤色塗彩が施されている。外面を櫛齒状工具で整形しているもの（1・5・6）、波状文（3）、波状文に縦位の直線文が施文されたもの（4）がみられる。9～21は甕である。内側が丹念に磨かれているものが多い。口唇部に波状文が施文され、受口状を呈する口縁部（9・10・11）や、無文の口縁部（12・13・14・15）、肩部に波状文（16）、そして簾状文（9・14・17）の施文されたものがみられる。22は台付甕の口縁部である。23～26は高杯である。23は内・外両面に赤色塗彩が施され、口唇部に波状文が施文されている。24は口唇部が刺突され内面に赤色塗彩が施されている。25は外面が丹念に磨かれ、26は外面に赤色塗彩が施され、非常に丁寧な作りである。

##### [所見]

2軒の住居址から出土した土器は、形態・施文方法等の特徴から、ほぼ同時期のものと判断される。若狭徹・飯島克巳によって示された編年観（若狭・飯島 1988）に照らし合わせると、壺・甕の口縁部が受口状を呈する例や、折り返し口縁が存在していないことなどから、若狭・飯島編年の樽式1期の新しい段階から樽式2期の古い段階に相当しよう。

また、この時期の壺は本来内面にだけ赤色塗彩が施されるのが一般的であるが、Y-2住居址出土の壺（第37図2）は内・外両面ともに丁寧に赤色塗彩が施されており、地域性とも思われる。

Y-1住居址出土の壺（第36図1）は口縁部が大きく外反し、ラッパ状を呈しており、長野県の箱清水式の影響が強く認められる。また、同図4も櫛齒によるT字文の施文手法などから箱清水式の特徴がうかがえる。なお、Y-2号住居址出土の高杯（第37図26）は系統が不明であり、今後注意を要する資料である。（註1）

註1 本遺跡の弥生土器に関する所見は、若狭徹氏の教示による。

(中澤 信忠)

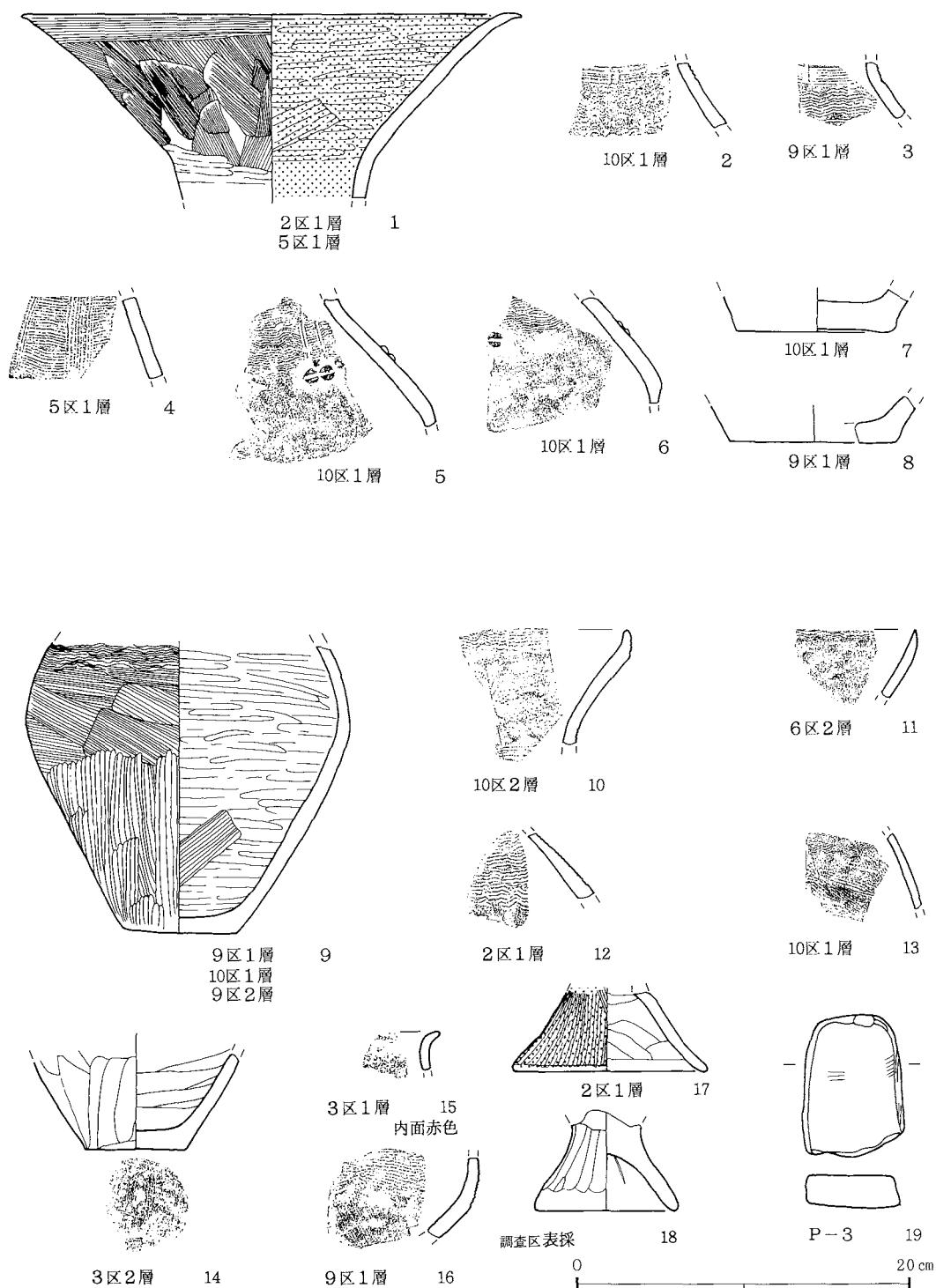
##### 石器

砥石（第36図19） 1点検出されている。比較的粒子の細かい牛伏砂岩製で中砥に分類される。やや湾曲した平坦な研磨面が認められる。

(大工原 豊)

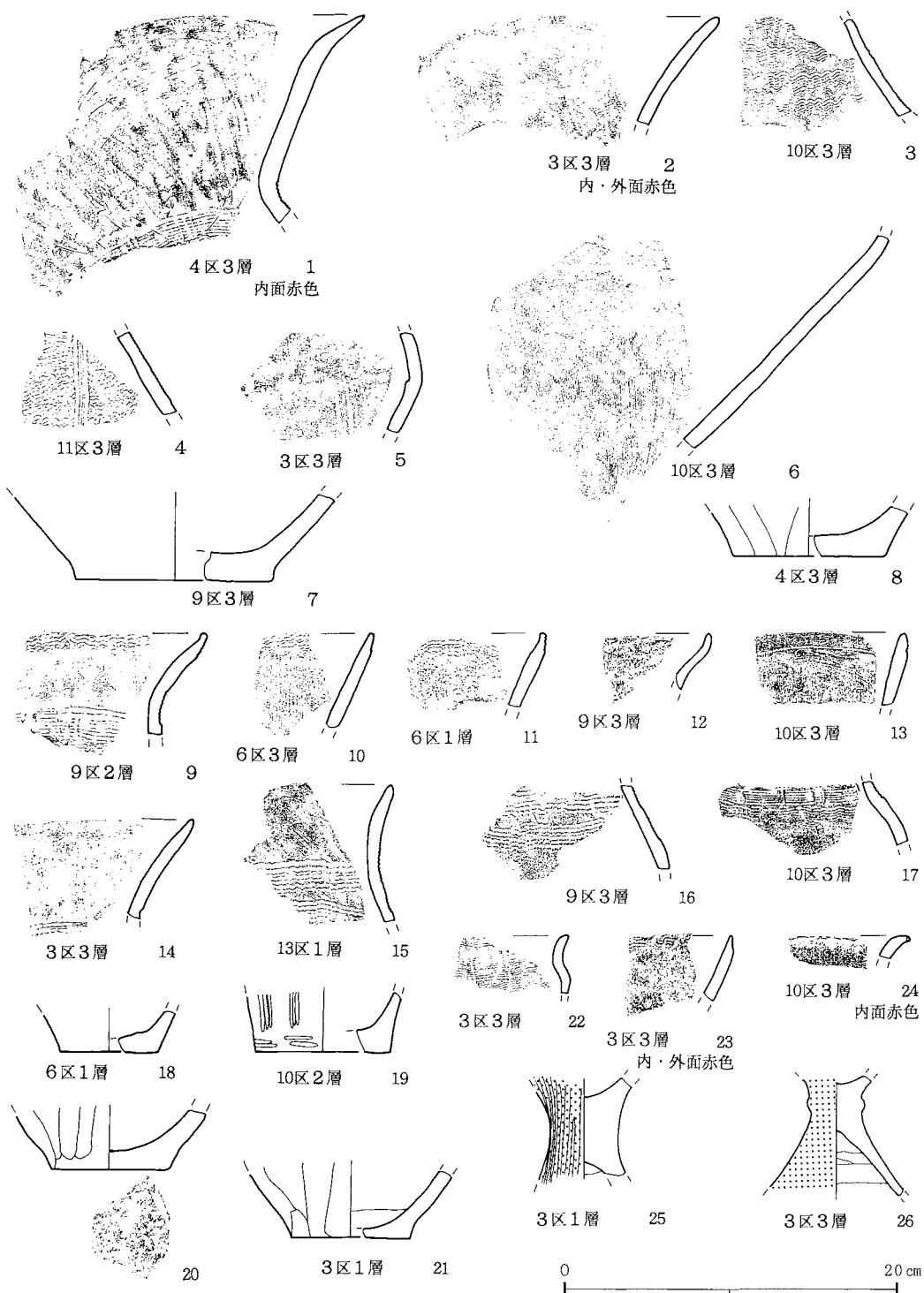
挿図No	番号	遺構名	区	器種	石材	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)
36	19	Y-1	P-3	砥石	砥沢石	84.87	61.46	38.25	218.5

1 上ノ久保遺跡



第36図 Y-1号住居址出土の土器

IV 遺構各説



第37図 Y-2号住居址出土の土器

## (3) 古墳時代～平安時代

## a 遺構

古墳時代以降の遺構は住居址43軒、掘立柱建物址2棟である。この時期は遺構密度は高く、集落の継続時期も長い。荒神平・吹上遺跡でも同様な状況が認められており、大規模な集落遺跡の一部に相当するとみられる。

## 住居址（第39図～第64図）

諸属性については第7表のとおりである。調査区が道路幅であるため、完掘された住居址は非常に少なく、竈が調査区外に存在しているなどで形態がはっきりしないものが多い。さらに、重複例が多いため、出土遺物の混在が多く、時期がはっきりしないものもある。特に、H-31号住居址は耕作による攪乱も激しく、不明な点も多い。ここでは、制約があるものの各属性について若干検討を行ってみたい。

**時期** 住居址の時期は出土遺物等から第8表のとおりである。6世紀に住居が出現し、この時期が最も多い。そして、7世紀後半まではほぼ5軒前後で推移する。集落自体、安定した状態であったとみられる。しかし、8世紀前半から9世紀後半にかけては減少する。

特に、9世紀代には集落自体がこの場所から消滅するようである。8世紀前半に集落に大きな変化が生じたものと考えられる。

また、10世紀前半になると再び5軒程度に回復する。その後、10世紀後半以降には再び減少する。ただし、この時期では堅穴住居の検出事例自体極めて少なくなることから、居住形態の変化によるものであろう。

時 期	軒数
6世紀前半	2
6世紀後半	6
7世紀	2
7世紀前半	5
7世紀後半	6
8世紀前半	1
8世紀後半	3
9世紀前半	1
9世紀後半	0
10世紀前半	5
10世紀後半	1
11世紀	3
不 明	8
計	43

第8表 住居址時期別軒数

**重複関係** 確認できる住居址は8例28軒であり、全体の65%が重複している。3軒以上重複する例が6例あり、最多は6軒である。この集落の安定期においては定住性が高かったことが分かる。ただし、重複が激しい場合、遺物の混在が著しく、時期が特定できない事例が多い。重複関係は以下のとおりである。

①H-5住(6C) → H-3住(6C後半) → H-4住(11C3)

②H-9住(6C前半) → H-10住(6C後半)

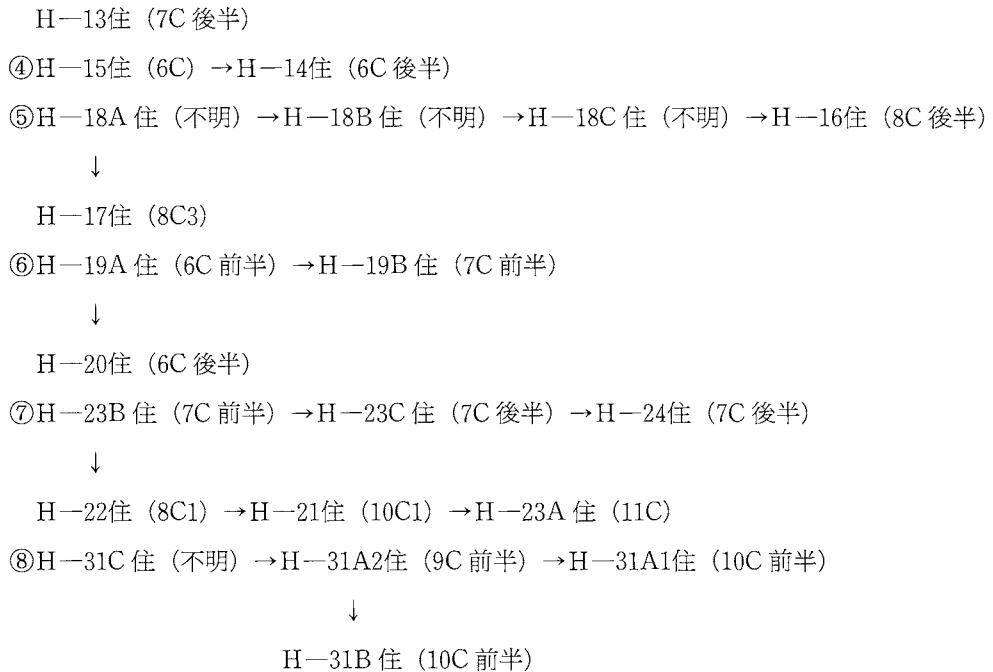
③H-12A住(6C前半) → H-12B住(不明)

↓

住居名	平面形態	規模(m)		貼床	主軸方向	柱穴	床下	位	體	櫛道	天井	支脚	主動方向	竪	出土器重量(kg)	備考
		長	幅													
H-1号住	中形方形	-	-	0.14	○	N-352°-E			A		N-111°-E		7C後半		1.075	
H-2号住	大形正方形	-	-	0.45	○	N-340°-E			D		N-339°-E		11C?		0	10.578
H-3号住		7.1	0.52	○	N-344°-E			B		N-78°-E		6C後半			1.342	
H-4号住		-	0.44	○	N-8°-E			A		-			11C第3四半期		5.012	
H-5号住		-	0.6	○	N-336°-E			B		N-70°-E		7C前半			2.435	
H-6号住	中形正方形	4.8	0.32	○	N-325°-E			A		N-318°-F		6C前半			2.637	
H-7号住	小形正方形	4.1	0.43	○	N-325°-E			B		N-65°-E		6C前半			5.995	
H-8号住	中形正方形	4.1	0.44	○	N-332°-E			B		-		6C前半			0.818	
H-9号住	大形正方形?	-	7.1	0.36	○	N-330°-E			A		N-61°-E		6C前半			0.865
H-10号住	中形正方形	-	5.6	0.45	○	N-336°-E			B		N-72°-E		8C第4四半期			3.384
H-11号住	中形横長方形	2.6	3.4	○	N-330°-E			A		-		6C前半			1.338	
H-12A号住	中形正方形	-	5.1	0.61	○	N-335°-E			B		-					0.439
H-12B号住	中形方形	-	5.4	0.52	○	N-322°-E			A		-					1.308
H-13号住	中形正方形?	-	4.8	0.23	○	N-328°-E			A		N-62°-E		6C後半			2.557
H-14号住	小形正方形	-	3.7	0.63	○	N-332°-E			B		N-65°-E		6C後半			0.698
H-15号住	小形横長方形	3.8	3.0	○	N-330°-E			B		-			8C第3四半期			0.383
H-16号住	小形横長方形?	-	3.6	0.32	○	N-330°-E			A		-					1.551
H-17号住	小形方形	-	3.5	0.42	○	N-346°-E			B		-					1.027
H-18A号住	中形正方形	4.2	4.3	○	N-315°-E			A		-						
H-18B号住		-	0.08	○	N-306°-E			A		N-332°-E		6C後半			0.555	
H-18C号住		3.4	0.12	○	N-320°-E			A		N-71°-E		6C後半				
H-19A号住	-	-	0.1	○	—			A		N-42°-E		7C前半				
H-19B号住	小形正方形	2.8	2.9	0.44	○	N-318°-E			A		-		6C後半			0.286
H-20号住	中形正方形	-	4.6	0.16	○	N-334°-E			A		N-74°-E		8C第1四半期			0.154
H-21号住	中形正方形	-	4.6	0.26	○	N-331°-E			B		N-67°-E		11C			4.948
H-22号住	小形正方形	3.6	3.4	0.22	○	N-335°-E			A		N-350°-E		7C前半			14.363
H-23A号住	中形正方形	-	4.8	0.34	○	—			B		-		7C後半			4.055
H-23B号住	中形正方形	3.8	4.2	0.32	○	N-350°-E			A		-					7.043
H-23C号住	小形正方形	-	2.5	0.44	○	N-321°-E			B		N-88°-E		7C後半			5.202
H-24号住	小形正方形	3.2	3.7	0.42	○	N-337°-E			A		N-325°-E		10C第1四半期			0.67
H-25号住	小形正方形	-	0.48	○	N-342°-E			B		-						0
H-26号住	小形正方形	-	2.6	0.26	○	N-316°-E			A		N-62°-E		7C前半			12.941
H-27号住	大形正方形	-	6.5	0.38	○	N-328°-E			B		-					
H-28号住	小形正方形	-	3.7	0.54	○	N-329°-E			A		N-62°-E		7C第3四半期			2.044
H-29号住		-	0.64	○	N-338°-E			A		-						0
H-30号住	小形正方形	-	3.9	0.4	○	N-347°-E			B		N-71°-E		10C前半			13.505
H-31A-1号住	小形正方形	-	3.9	0.46	○	N-325°-E			A		N-67°-E		9C前半			0.02
H-31A-2号住		-	—	—	○	N-359°-E			B		-		10C前半			0.067
H-31B号住		-	—	—	○	N-345°-E			A		-					0.049
H-31C号住		-	—	—	○	N-350°-E			B		-					0.124
H-32号住		-	—	—	○	N-343°-E			C		N-56°-E		10C後半			0.589
H-33号住	中形正方形?	-	2.7	0.32	○	N-334°-E			B		-		7C後半			3.625
H-34号住		-	—	0.59	○	N-335°-E			A		N-56°-E		10C第1四半期			3.562
H-35号住		-	—	0.1	○	N-335°-E			B		-					

平面状態 大形：6m以上 中形：4～6m 小形：4m以下  
電構造 A：ローム+黒色土 B：ローム+黒色土+施芯河川藻 C：ローム+黒色土+施芯河川藻 D：地山削り出し

第7表 古墳時代～平安時代の住居址観察表

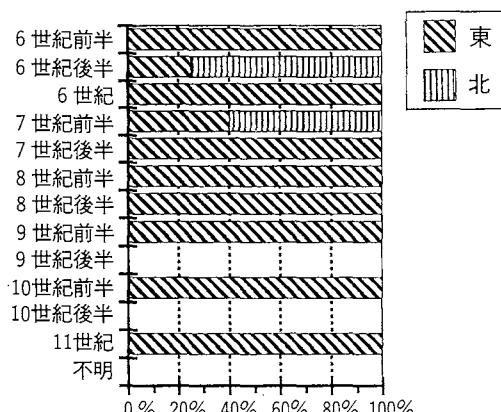


**形態** 完掘事例が少ないので、はっきりしない部分が多いので、大雑把な傾向について触れるに留める。

規模では一辺が 6 m を越え、35m<sup>2</sup>以上の住居址が 6 世紀前半から 7 世紀前半までの間に各 1 軒ずつ存在しているが、それ以降は、中形（一辺 4 ~ 6 m）と小形（一辺 4 m 以下）のもののみである。

住居の主軸方向は各時期ともほぼ同じで、北北西を向くものが大部分である。これは、集落のある台地が東北東を向いているためと判断される。そのため、竈の主軸もこれに影響されてやや主軸が振れている。

竈の位置は第38図のとおりであり、6 ~ 7 世紀代までは北と東に位置するものがある。しかし、7 世紀後半以降はすべて東となる。また、構造をみると、ロームと黒色土により構築されたものと、それに加え袖芯に河川礫を用いたものが大部分を占める。H-12A 号住は竈でつぶれておらず、こうした竈の構造が良く分かる事



第38図 住居址の時期別竈位置

#### IV 遺構各説

例である。なお、H-34号住（7世紀後半）は唯一、石を多用した構造の竈であった。

張床はほとんどの住居で確認された。また、床下土坑の存在する例も8例存在した。竈の脇に土坑が存在するものは、8例確認されている。南西隅に土坑が存在する例も2例認められる。

#### 遺物出土状況（第65図～第72図）

各住居址の遺物出土状況は第65図～第72図のとおりである。住居址では重複関係を有するものが多く、遺物も他の時期のものが混在している例も多い。遺物分布図から出土傾向をみると、竈周辺から残存率が高い（実測可能な）土器が多く出土している。これは、この時期の遺物出土状況としては、一般的な傾向であり、住居廃絶時に破損したものも含め、置き去りにされることが多かったことによると推定される。つまり、ある程度使用時の位置関係が残されていたと見なされる。鉄製品の出土状況をみると、竈に近接せずやや離れた場所から検出される傾向がある。これも使用時の位置関係が多少は保存されていたことによるものであろう。

なお、遺物が遺棄された状態と判断される事例と、特殊な出土状態であった事例は次のとおりである。

H-3号住居址（第40図・第65図） 竈の左袖部分に壊が1点置かれた状態で出土している。また、竈正面の位置で甕（底部欠損）が倒れた状態で出土している。

H-6号住居址（第42図） 南東隅（竈と土坑に囲まれた部分）から大形礫がまとまって出土しているが、規則性はない。また、土坑上層からも礫が出土していることから、住居廃絶後に大形礫が廃棄されたものと判断される。

H-8号住居址（第70図） 粘土塊が南西隅に置かれた状態で出土している。

H-9号住居址（第66図） 編物石が竈の前面からまとめて出土している。

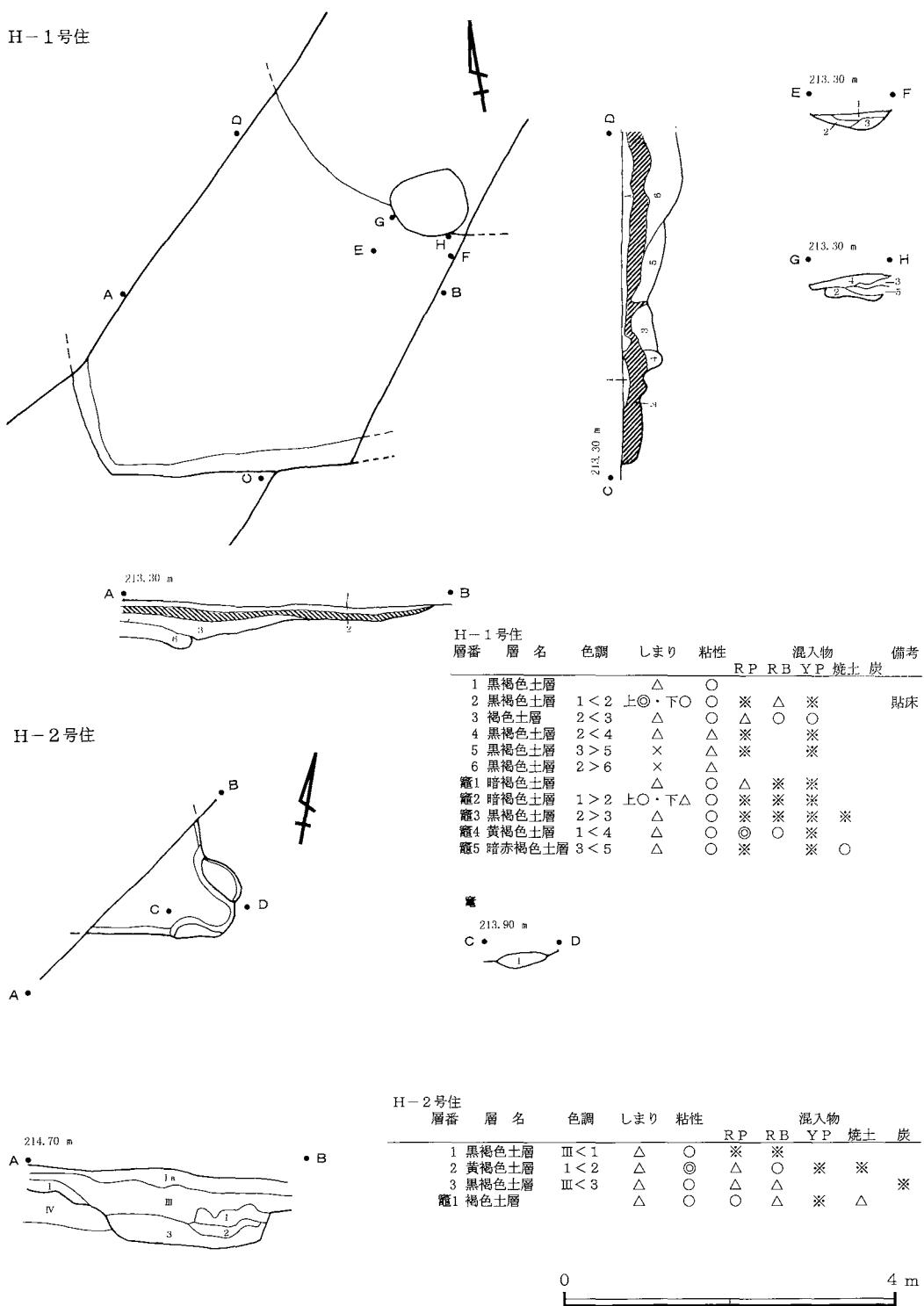
H-12A号住居址（第67図） 竈に甕が架けられ、そのまま潰れた状態で出土した。そして、竈及び土坑の周囲からは小形甕・壊・高壊が出土している。編物石もまとめて出土している。

H-17号住居址（第68図） 編物石が床面直上からまとめて出土している。

H-22号住居址（第69図） 須恵器高台付壊が床面直上から出土している。

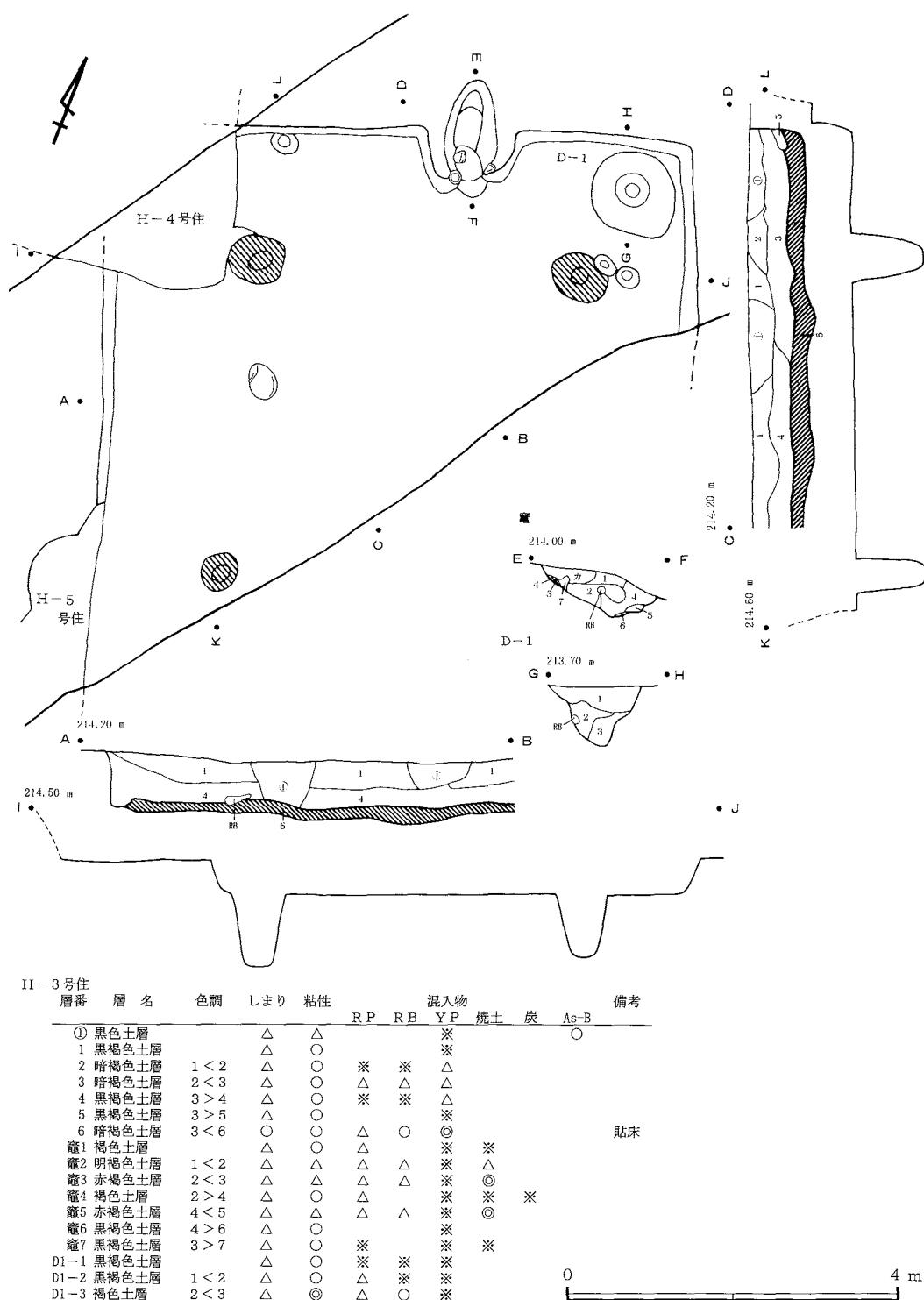
H-23A号住居址（第70図） 小皿が床面直上から出土している。

（大工原 豊・金井京子）

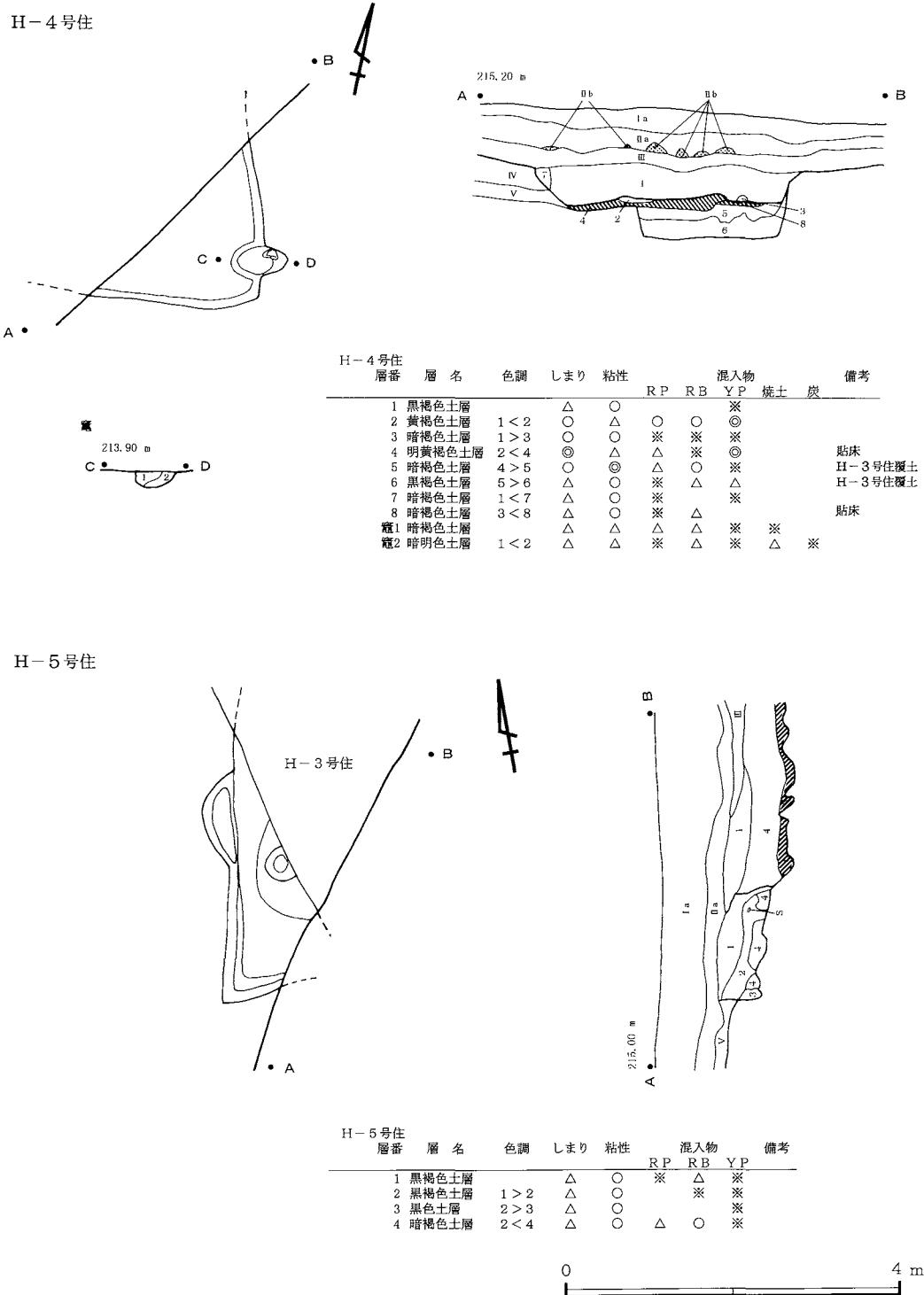


第39図 H-1号・H-2号住居址実測図

#### IV 遺構各説

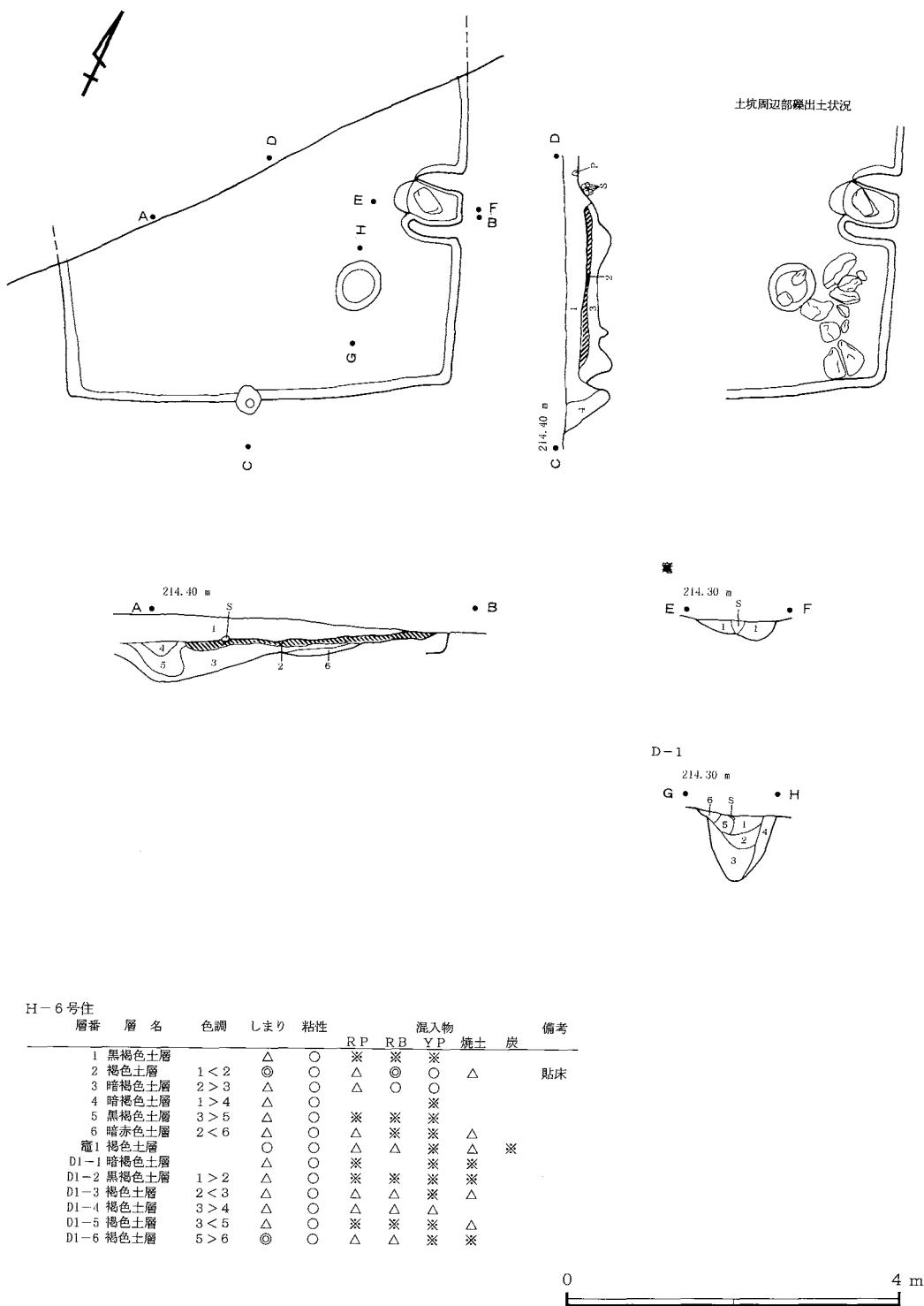


第40図 H-3号住居址実測図

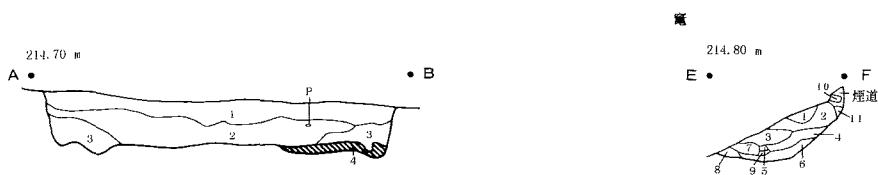
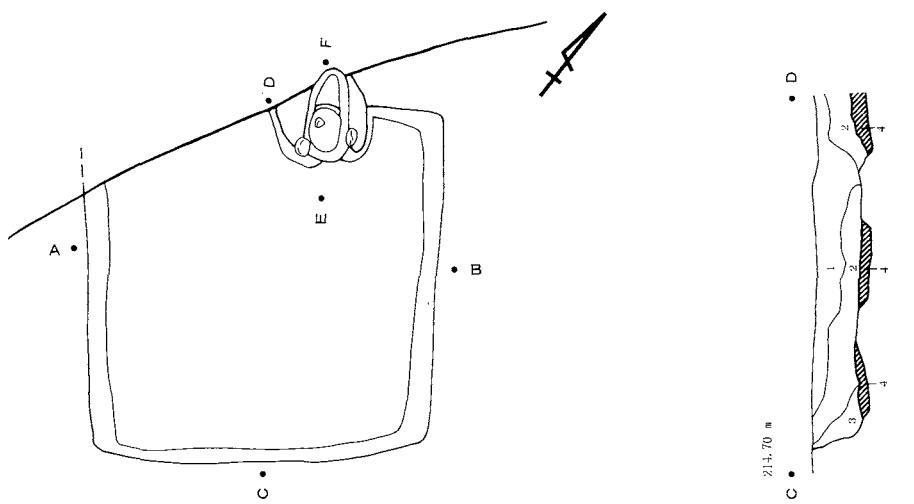


第41図 H-4号・H-5号住居址実測図

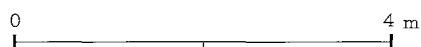
#### IV 遺構各説



第42図 H-6号住居址実測図

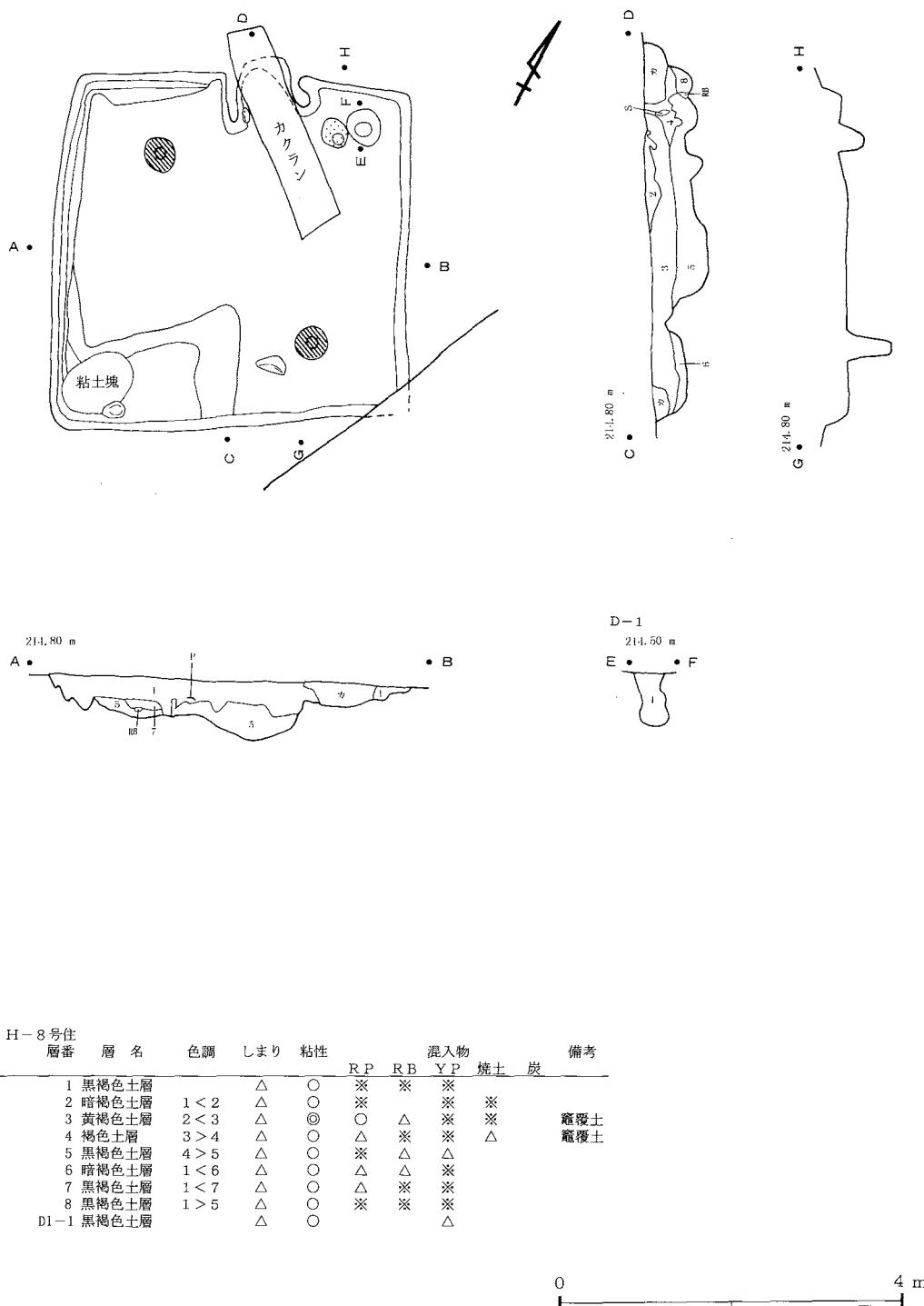


H-7号住 層番	層名	色調	しまり	粘性	混入物				備考
					R P	R B	Y P	焼土	
1	黒褐色土層	△	○	※	△	○	※	※	
2	暗褐色土層	1 < 2	△	○	△	○	※	※	
3	黒色土層	2 > 3	△	○	○	○	※	※	
4	暗褐色土層	2 < 4	○	○	○	○	○	○	貼床
竈1	褐色土層	△	○	○	△	△	※	△	
竈2	褐色土層	1 > 2	△	○	○	○	※	※	
竈3	褐色土層	2 < 3	△	○	○	○	※	※	
竈4	暗褐色土層	3 > 4	△	○	○	○	※	※	
竈5	褐色土層	3 < 5	△	○	○	○	※	※	
竈6	暗褐色土層	4 > 6	△	○	○	○	※	※	
竈7	暗褐色土層	5 > 7	△	○	○	○	※	※	
竈8	黒色土層	7 > 8	△	○	○	○	※	※	
竈9	赤褐色土層	5 > 9	○	○	△	△	※	○	
竈10	褐色土層	2 > 10	○	○	※	△	※	※	
竈11	黒色土層	10 > 11	○	○				※	

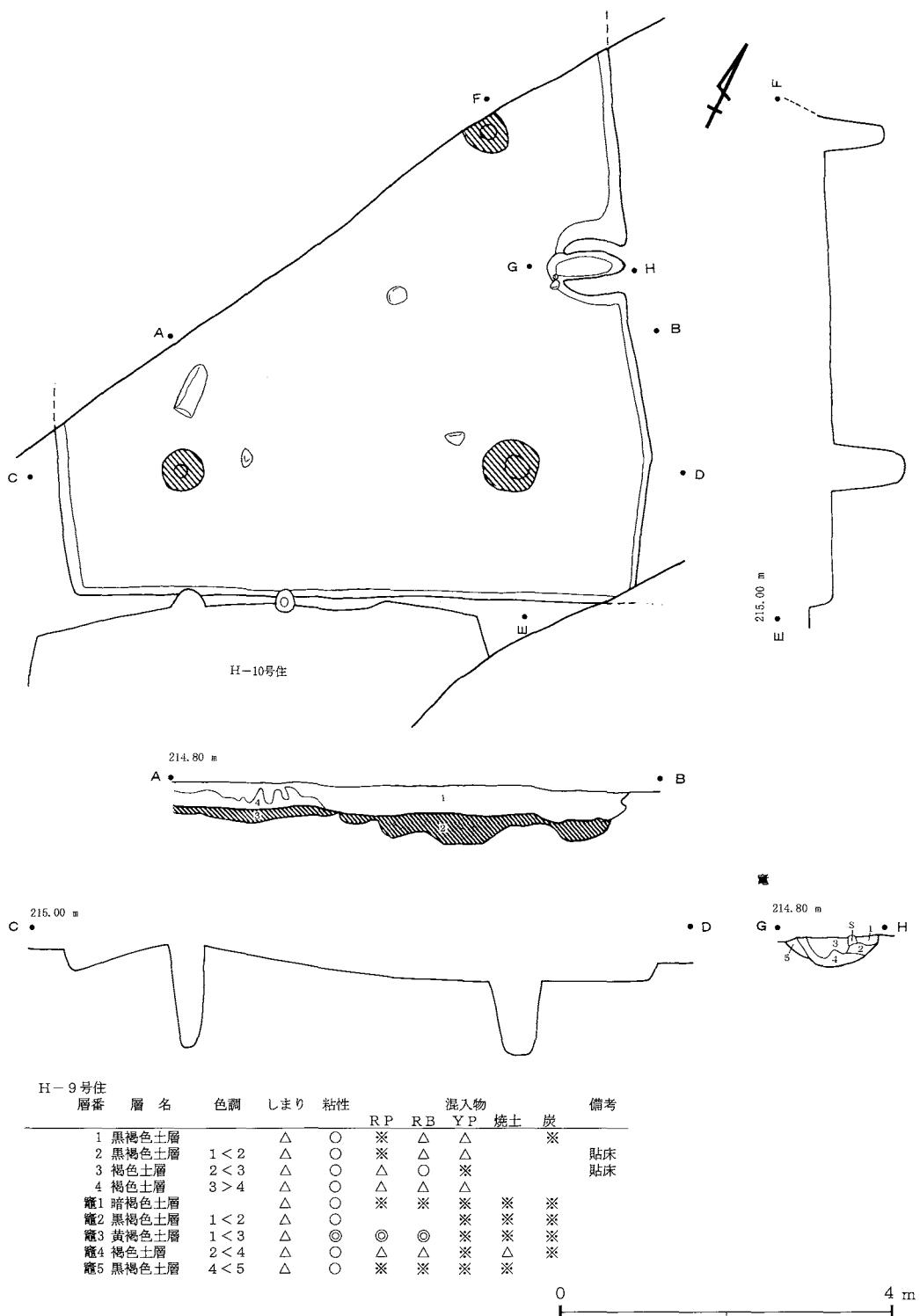


第43図 H-7号住居址実測図

#### IV 遺構各説

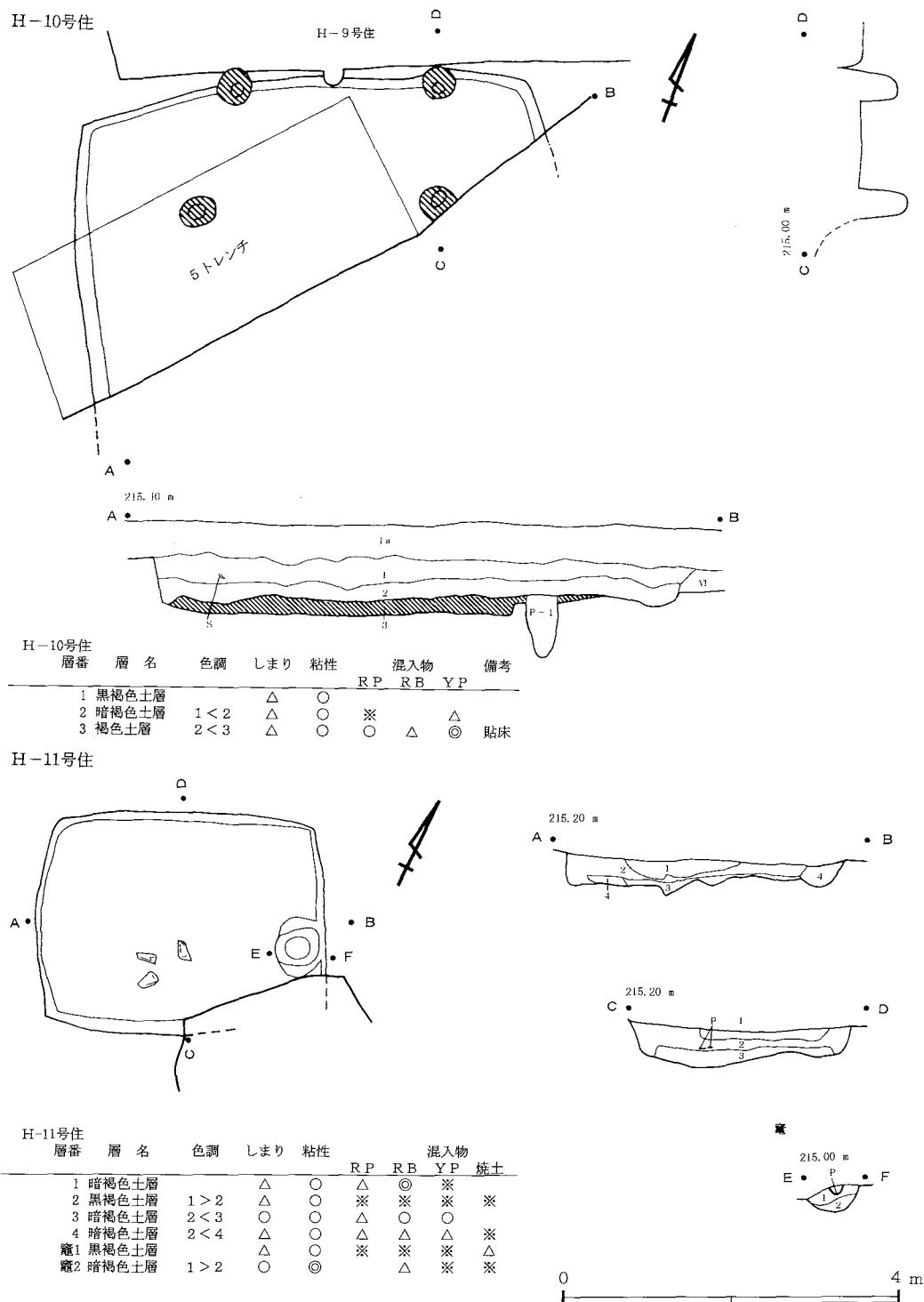


第44図 H-8号住居址実測図

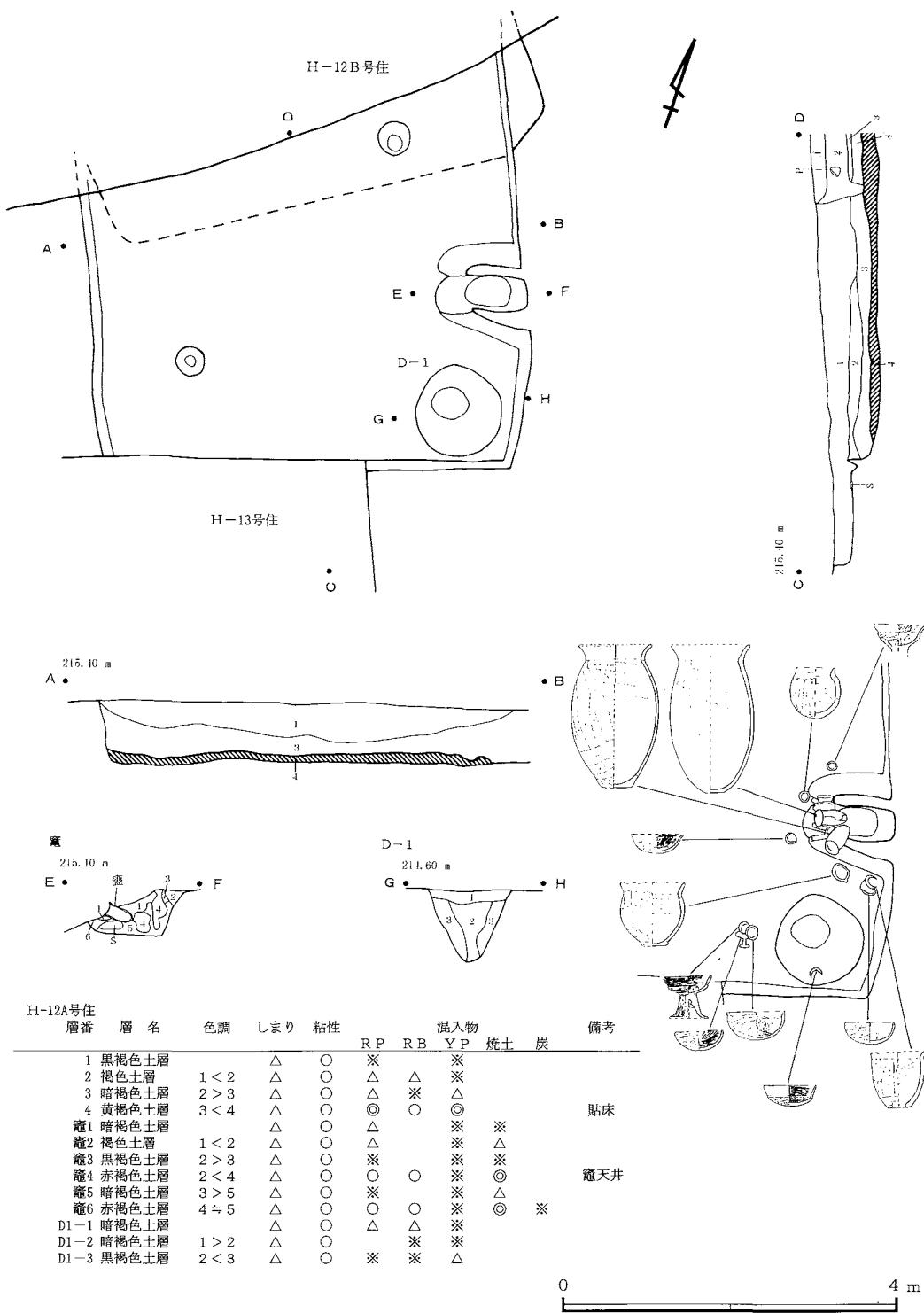


第45図 H-9号住居址実測図

#### IV 遺構各説

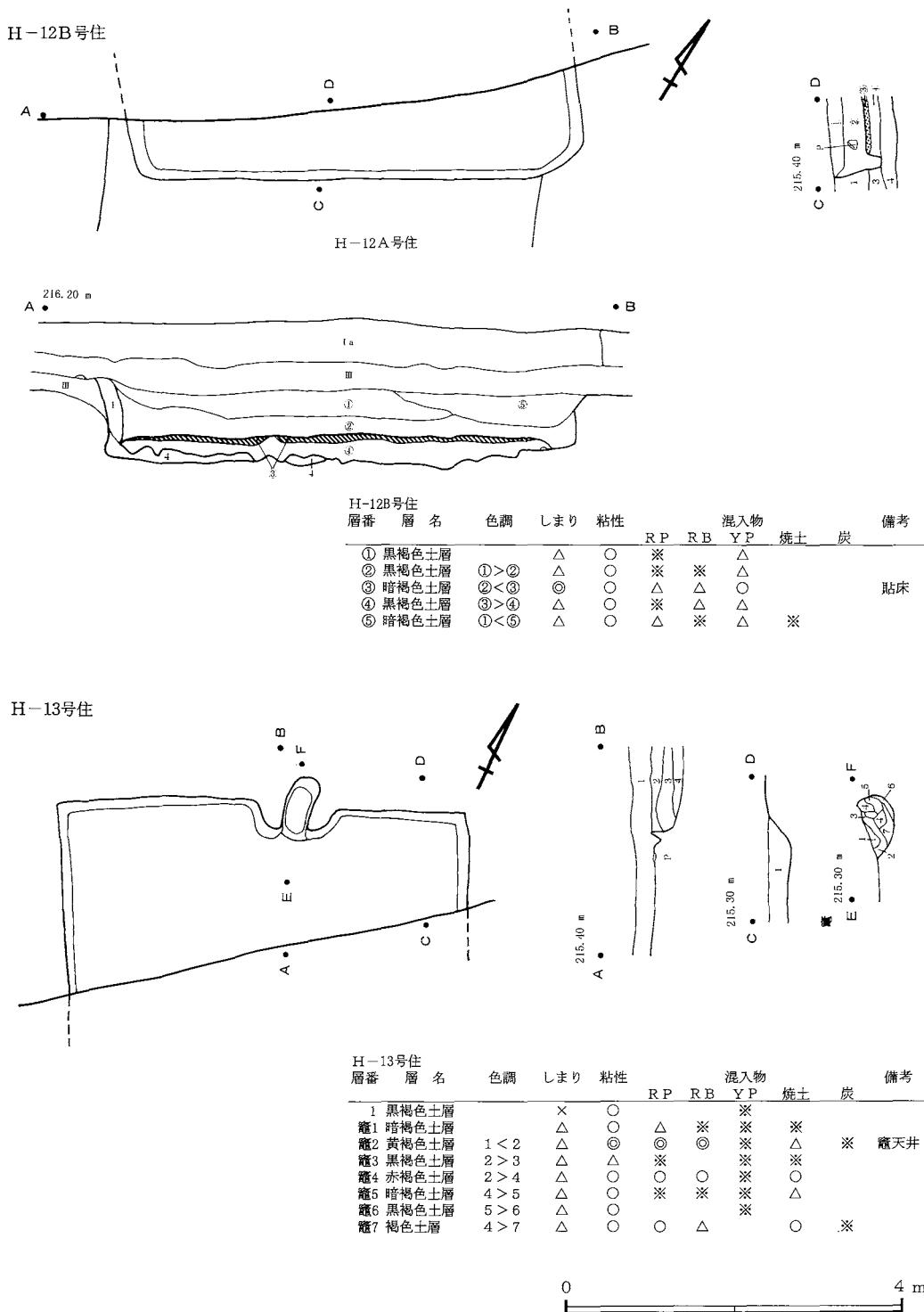


第46図 H-10号・H-11号住居址実測図

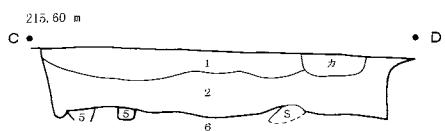
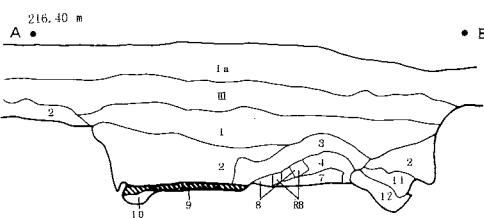
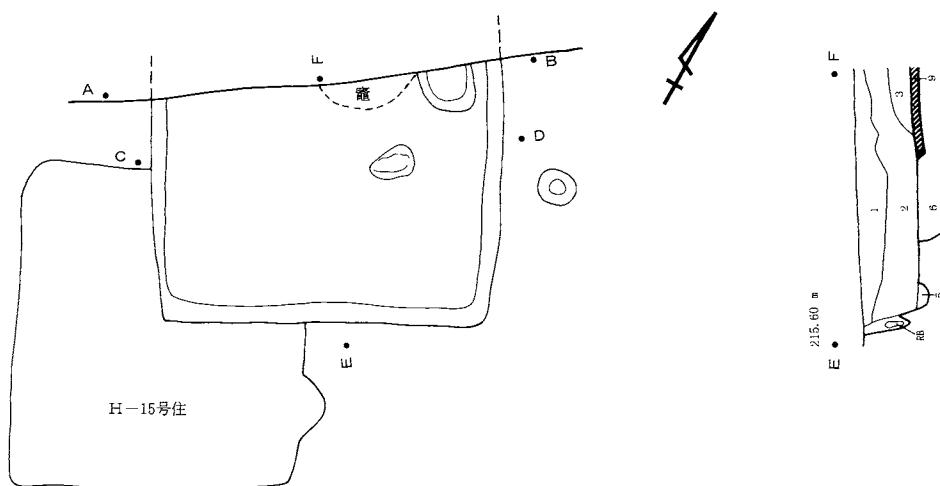


第47図 H-12A号住居址実測図

#### IV 遺構各説



第48図 H-12B号・H-13号住居址実測図

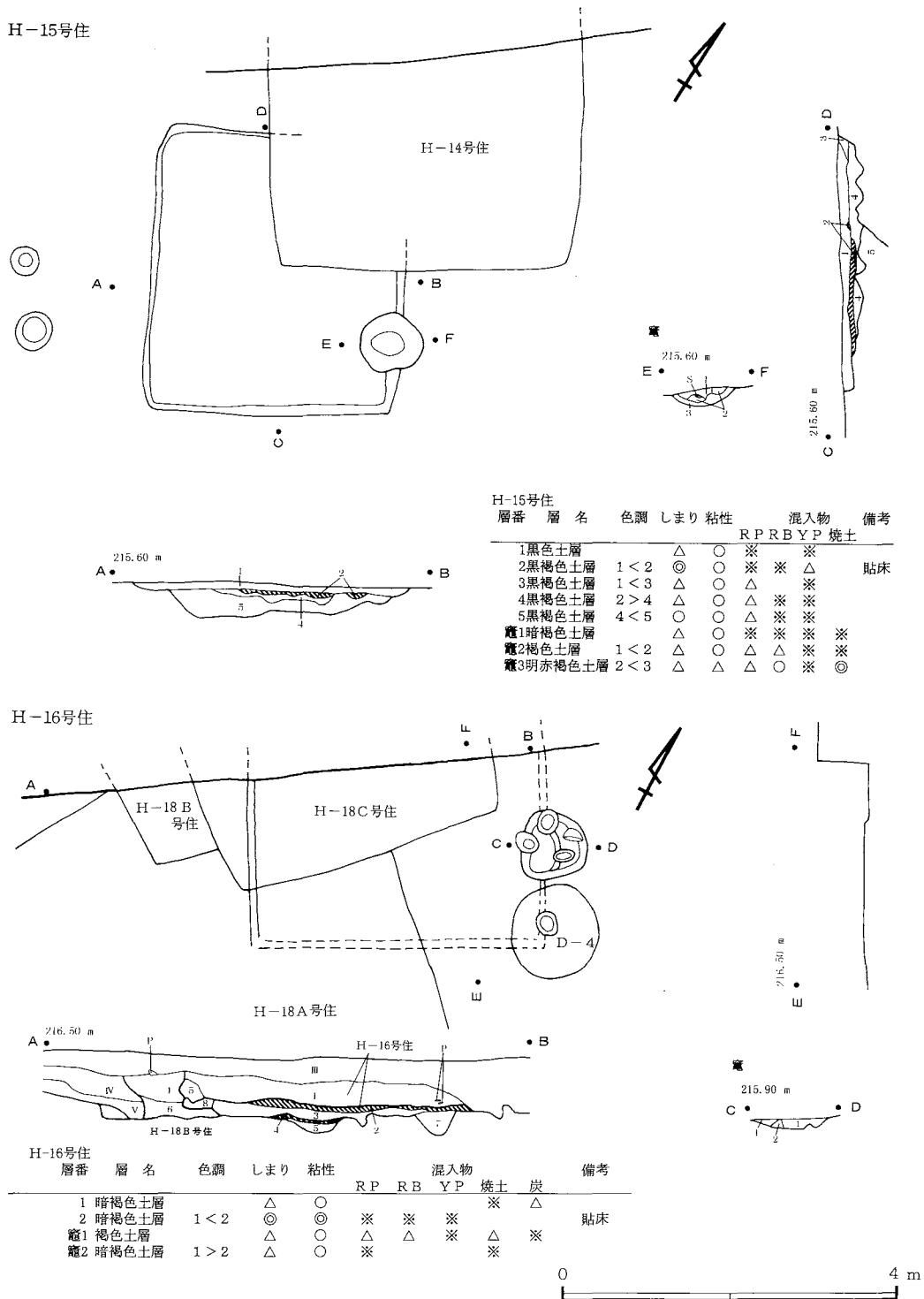


H-14号住 層番	層名	色調	しまり	粘性	R P	R B	Y P	混入物	焼土	炭	備考
1	暗褐色土層		△	○	△	※	△				
2	黒褐色土層	1 > 2	△	○	※	※	△				
3	暗褐色土層	2 < 3	△	○	△	※	△				
4	褐色土層	3 < 4	△	◎	○	○	○	※	※	※	竈
5	暗褐色土層	2 < 5	△	○	※	※	※	△	※	※	
6	暗褐色土層	5 < 6	△	△	△	※	△	○	△	△	
7	褐色土層	4 < 8	○	○	○	○	○	△	△	△	竈
8	暗褐色土層	4 > 8	○	○	○	※	※	※	※	※	貼床
9	黄褐色土層	2 < 9	△	△	△	△	※	○	△	○	
10	暗赤褐色土層	9 > 10	×	△	△	※	※	△	△	△	
11	暗褐色土層	2 < 11	△	○	※	○	○	△	△	△	
12	褐色土層	11 < 12	△	◎	○	○	○	△	△	△	

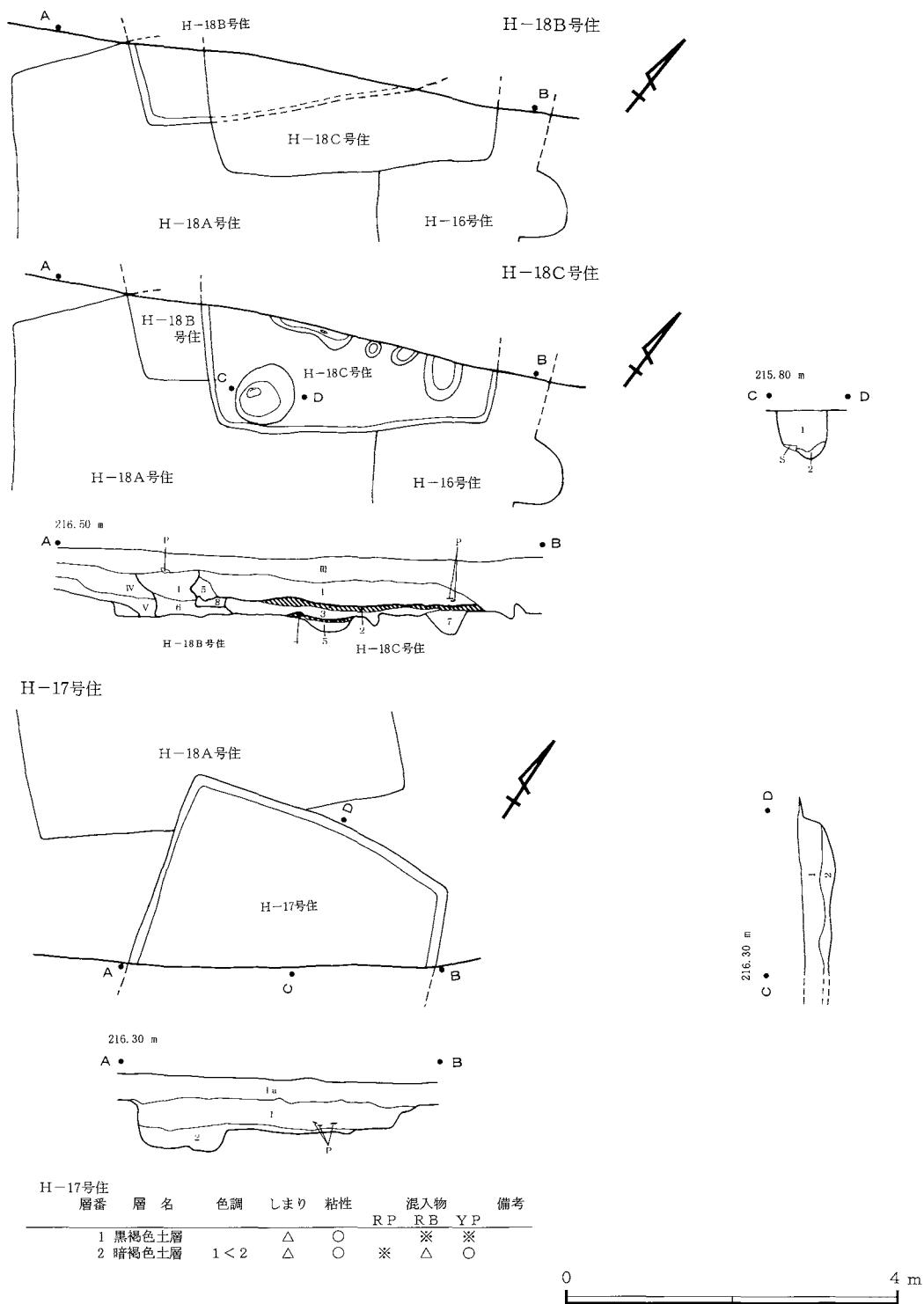
0 4 m

第49図 H-14号住居址実測図

#### IV 遺構各説

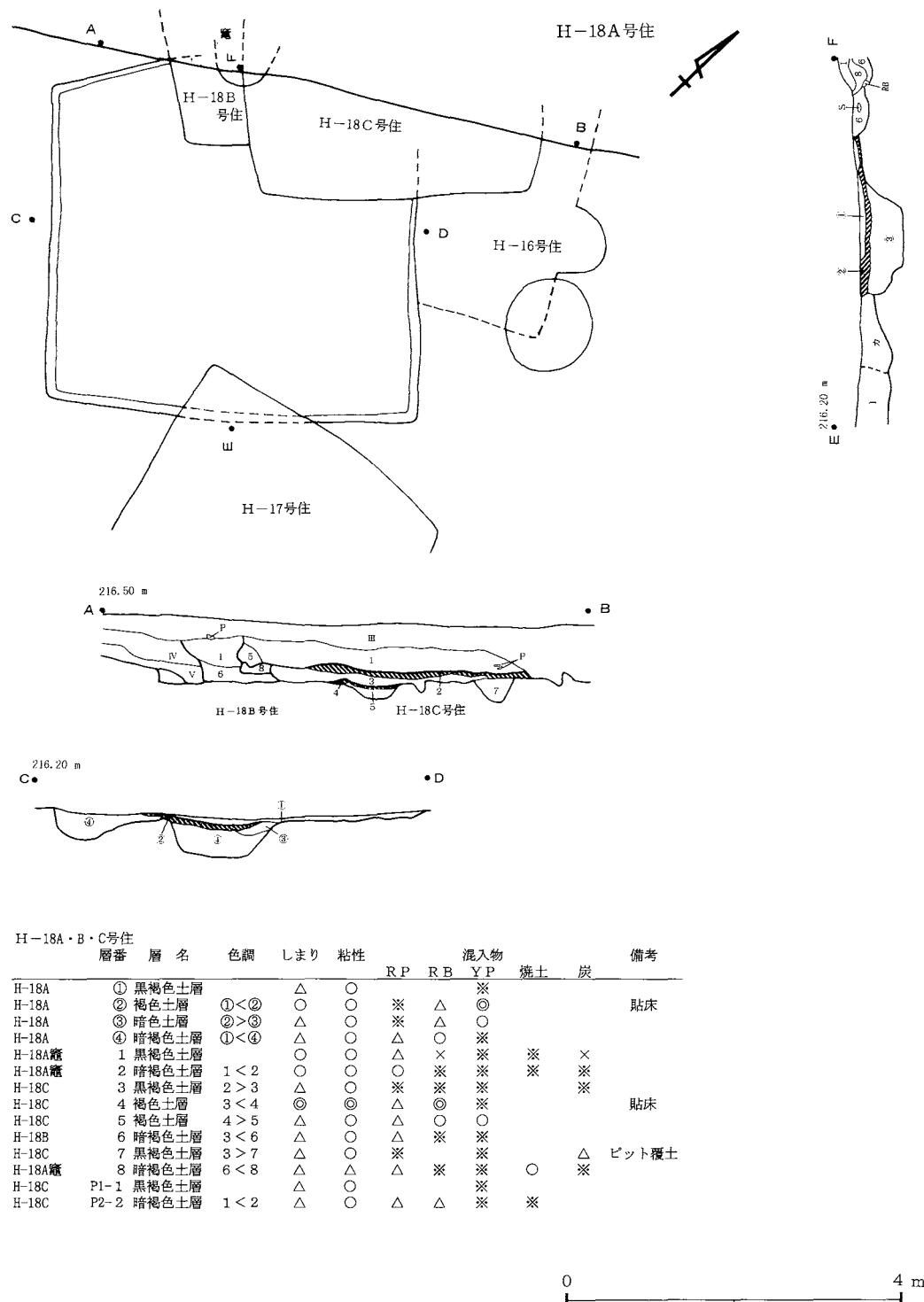


第50図 H-15号・H-16号住居址実測図

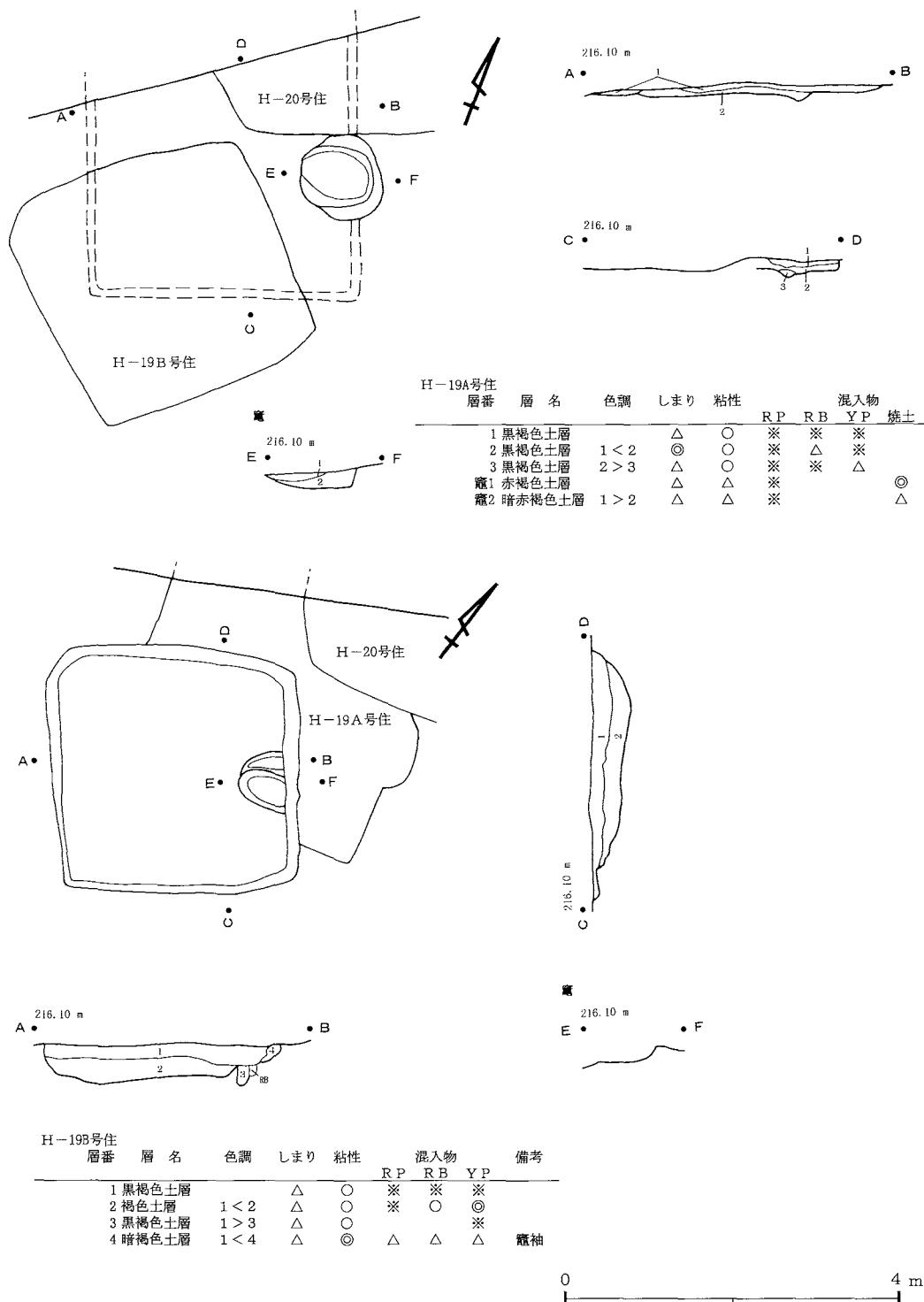


第51図 H-17号・H-18B号・H-18C号住居址実測図

#### IV 遺構各説



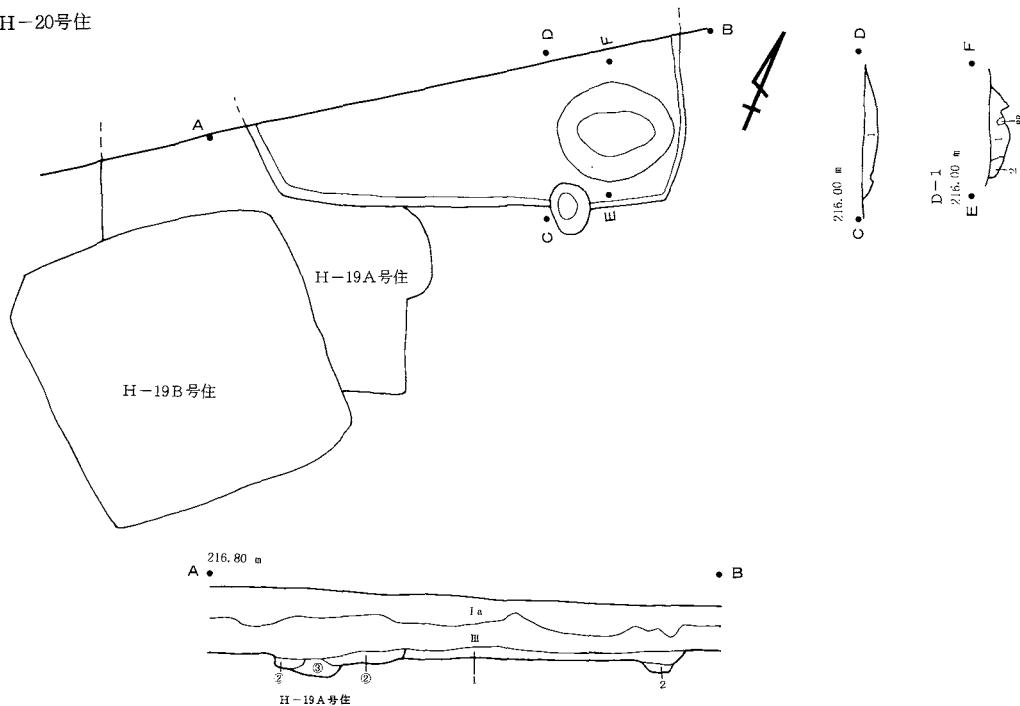
第52図 H-18A号住居址実測図



第53図 H-19A号・H-19B号住居址実測図

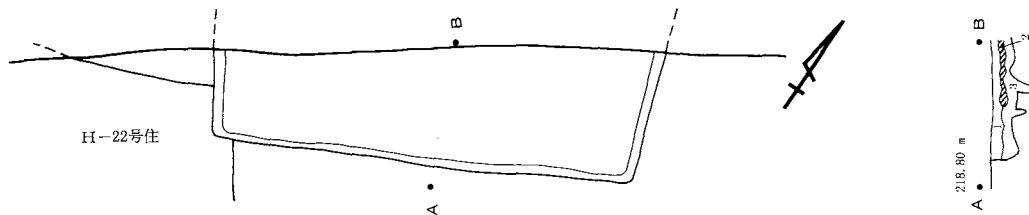
#### IV 遺構各説

H-20号住



層番	層名	色調	しまり	粘性	混入物			備考
					R P	R B	Y P	
1	黒褐色土層		○	○		※		
2	暗褐色土層	1 < 2	△	○○	△	○		
D1-1	暗褐色土層		△	○○	△	△		
D1-2	褐色土層	1 < 2	△	○	○	△		

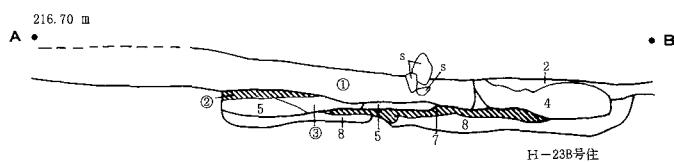
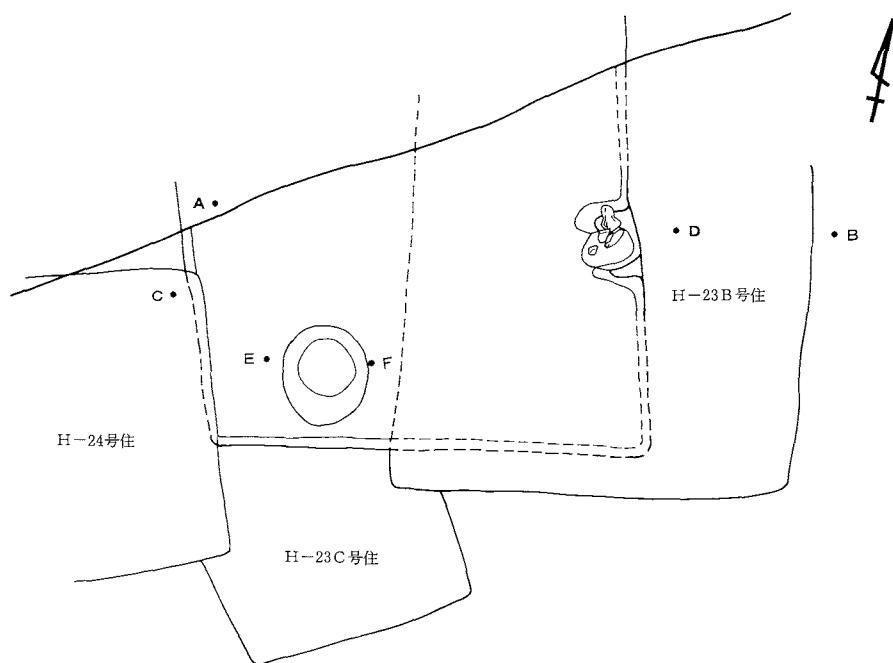
H-21号住



層番	層名	色調	しまり	粘性	混入物			備考
					R P	R B	Y P	
1	黒褐色土層		△	○		△	※	
2	暗褐色土層	1 < 2	○	○	※	△	△	
3	暗褐色土層	2 > 3	○	○	※	△	※	貼床



第54図 H-20号・H-21号住居址実測図

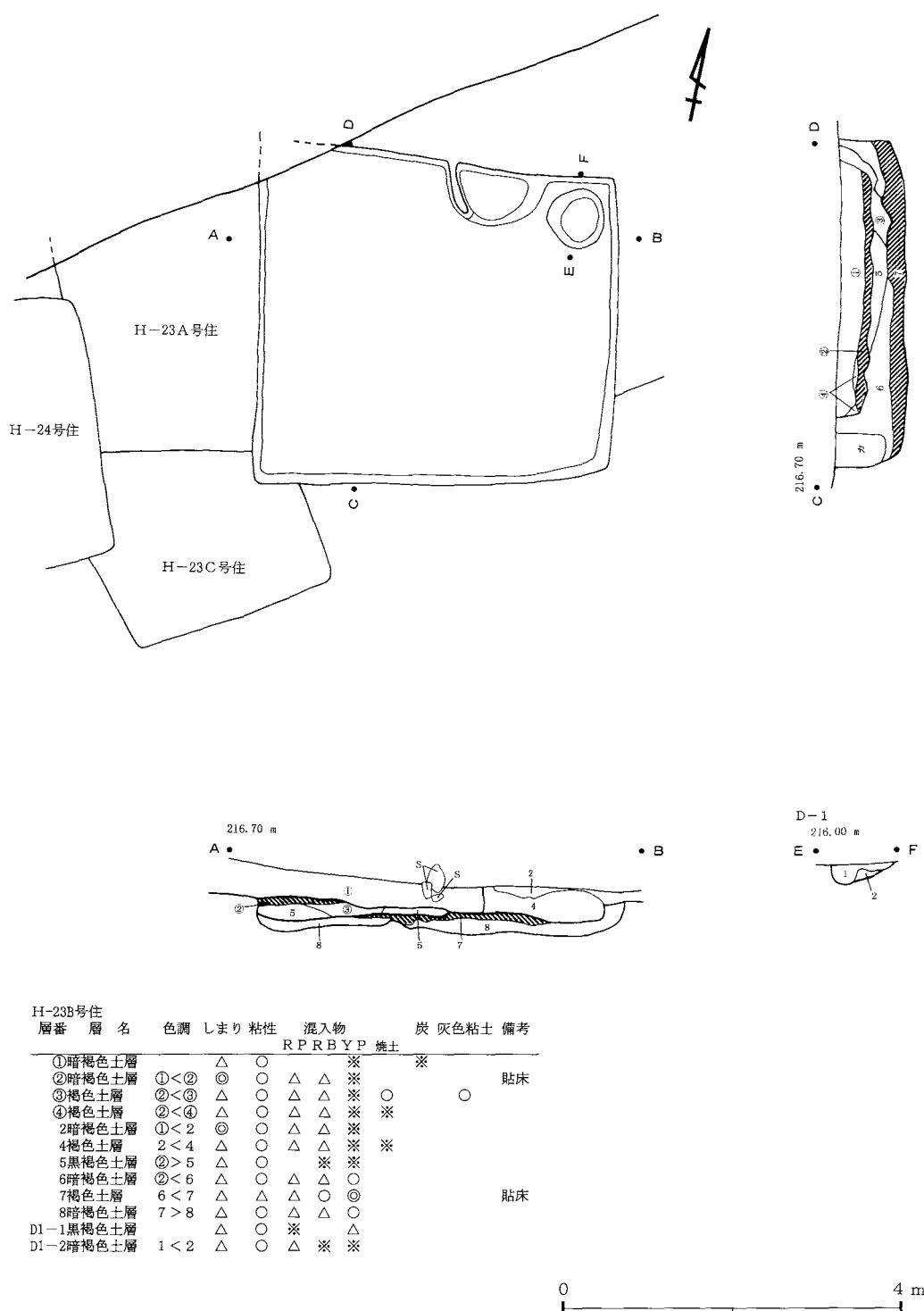


H-23A号住 層番	層名	色調	しまり	粘性	混入物			備考
					R P	R B	Y P	
① 暗褐色土層		△	○	※				
② 暗褐色土層	①<②	○	△	△	※			
③ 褐色土層	②<③	○	△	△	※	○	○	貼床
⑥ 黒褐色土層	△	○	△	△				
D1-1 黒褐色土層	△	○	※	△	※			
D1-2 黒褐色土層	1 < 2	△	○	※	△	○		

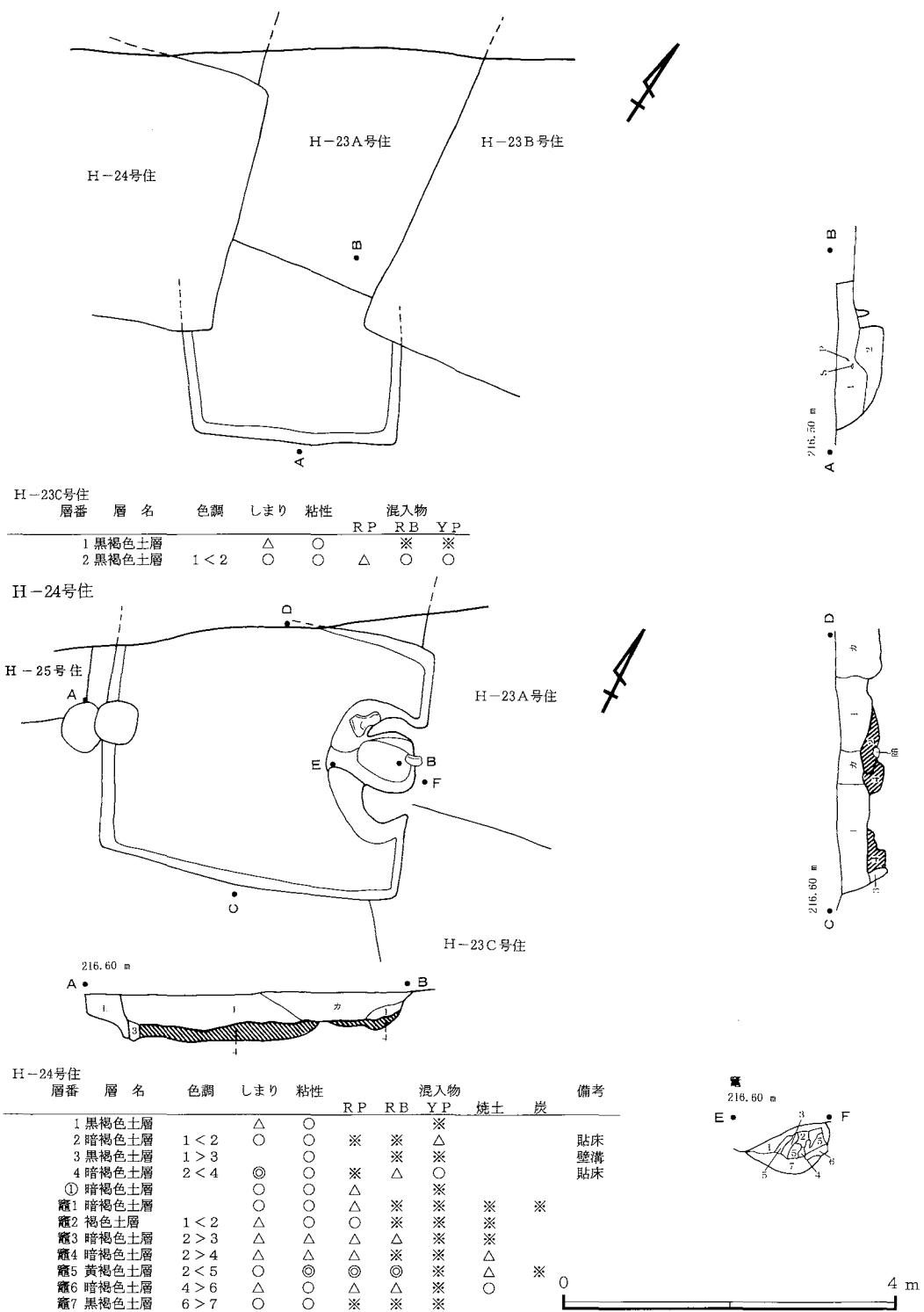


第55図 H-23A号住居址実測図

#### IV 遺構各説



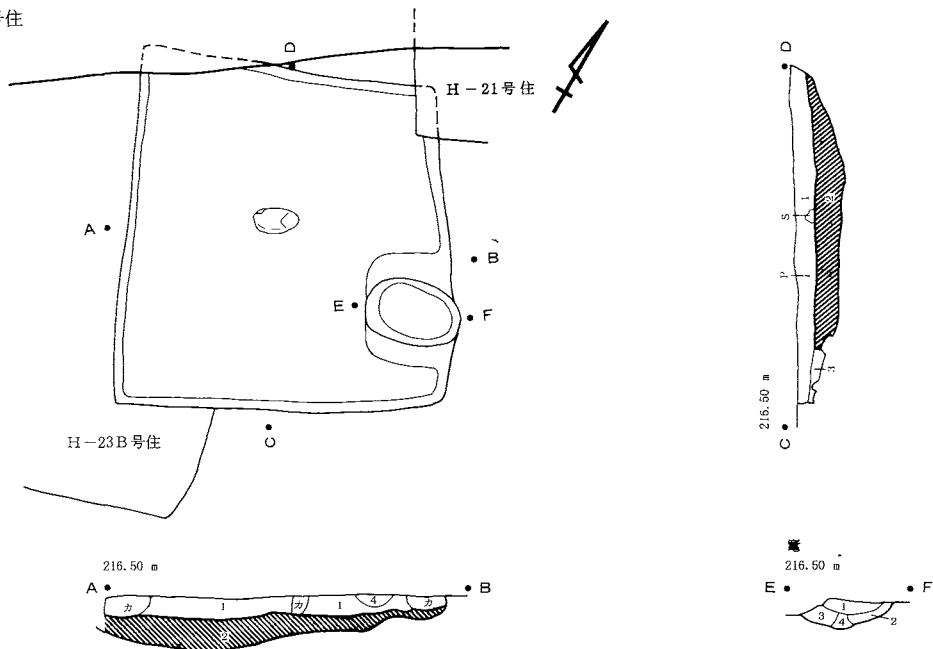
第56図 H-23B号住居址実測図



第57図 H-23C号・H-24号住居址実測図

#### IV 遺構各説

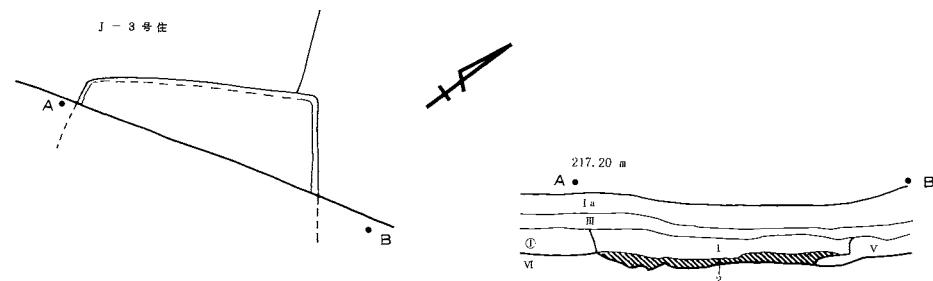
H-22号住



H-22号住

層番	層名	色調	しまり	粘性	R P	R B	混入物 Y P	焼土	炭	備考
1	黒褐色土層		△	○	※	※	△	※		
2	褐色土層	1 < 2	○	○	△	○	○	◎		
3	黒褐色土層	1 > 3	△	○	※	※	○	※		
4	褐色土層	1 < 4	○	○	○	○	※	※	△	
巖1	褐色土層		△	○	△	○	※	※	△	
巖2	暗褐色土層	1 > 2	△	○	※	※	※	※	△	
巖3	黒褐色土層	1 > 3	△	○	※	※	※	※	※	
巖4	赤褐色土層	2 < 4	△	○	△	※	※	※	△	

H-26号住

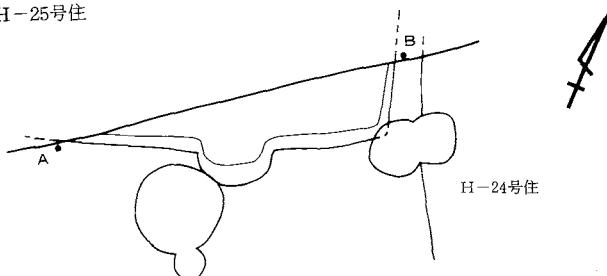


H-26号住

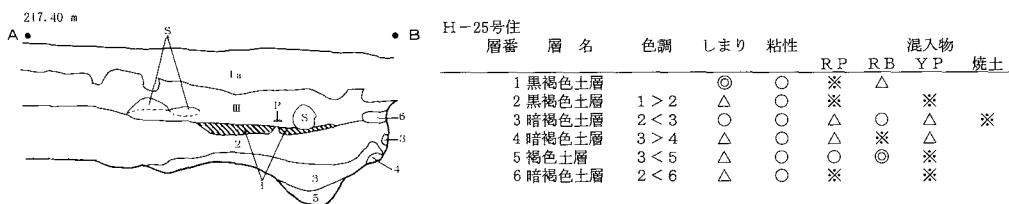
層番	層名	色調	しまり	粘性	R P	R B	混入物 Y P	備考
1	黒褐色土層		△	○	※	※	※	
2	褐色土層	1 < 2	◎	○	△	○	※	貼床 0

第58図 H-22号・H-26号住居址実測図

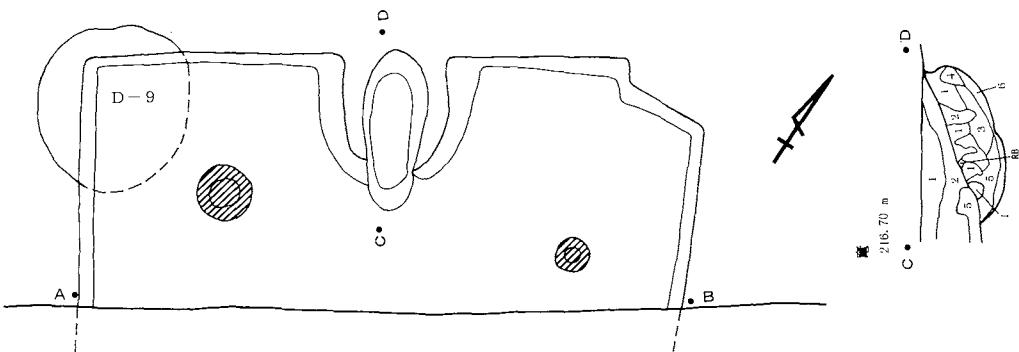
H-25号住



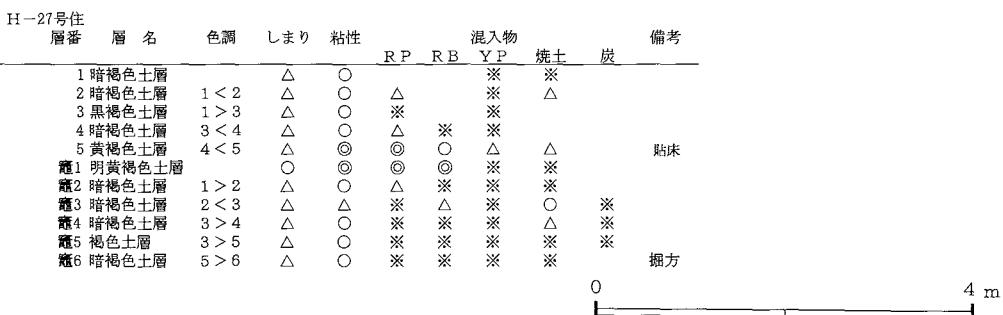
H-24号住



H-27号住

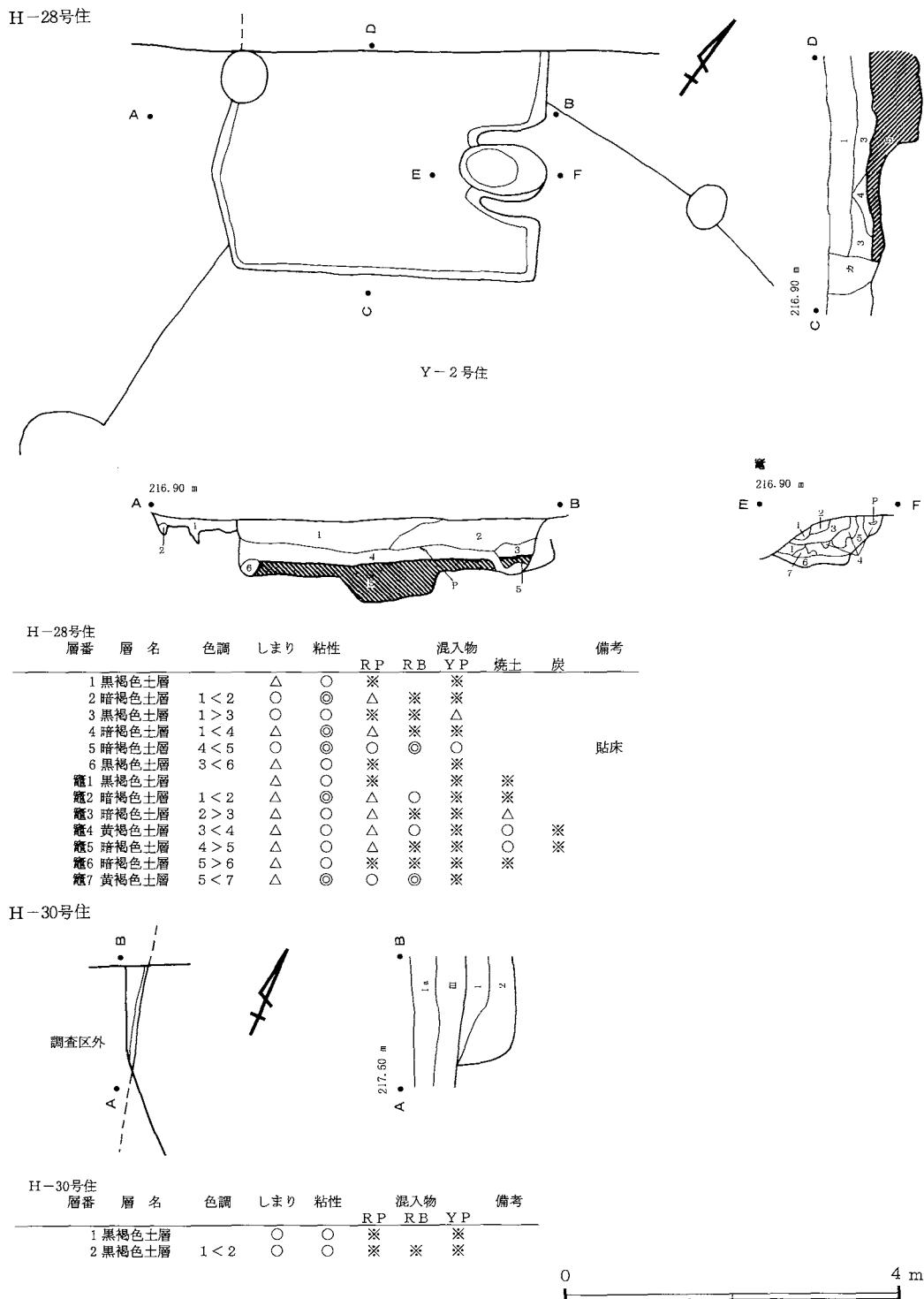


H-27号住

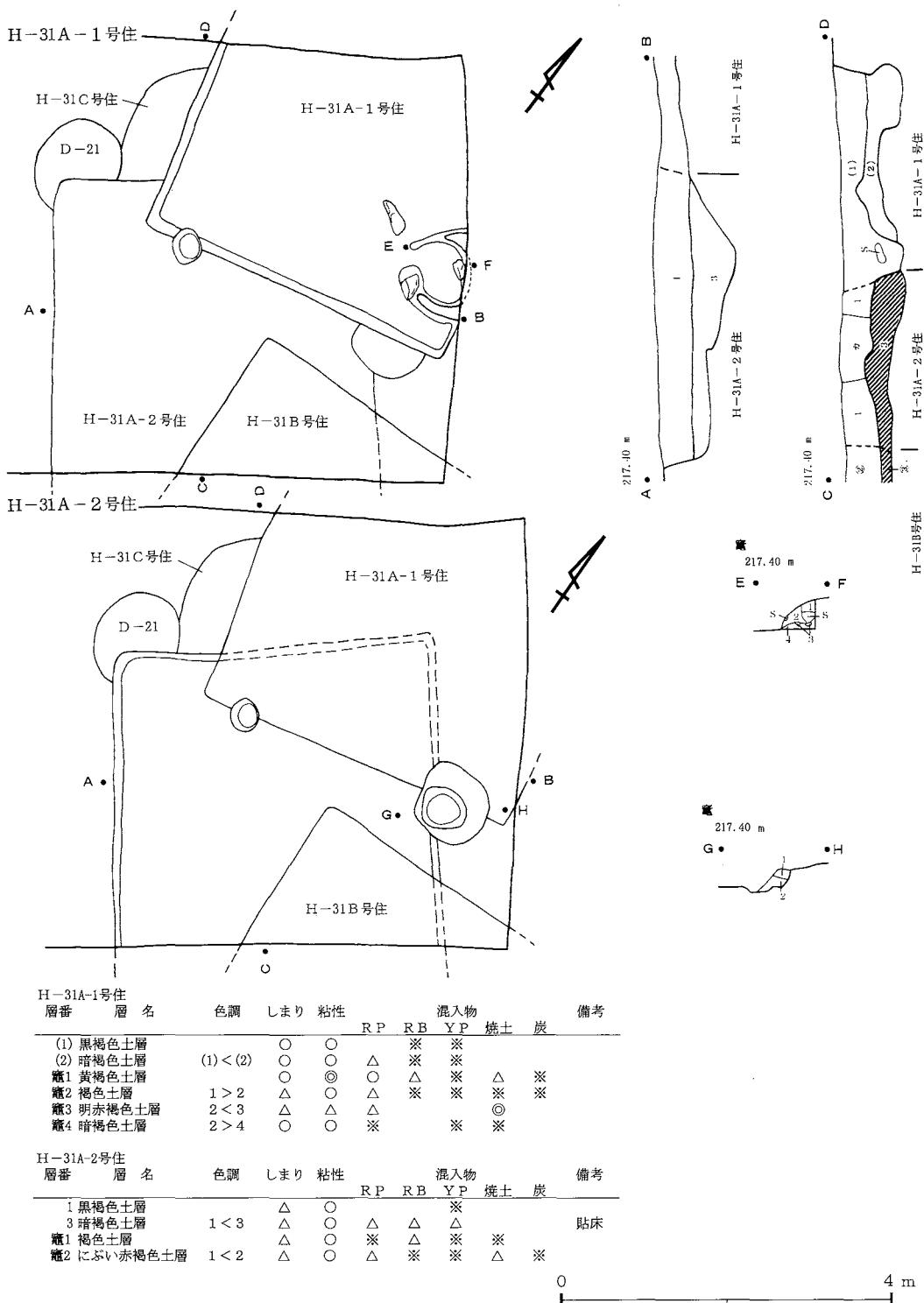


第59図 H-25号・H-27号住居址実測図

#### IV 遺構各説

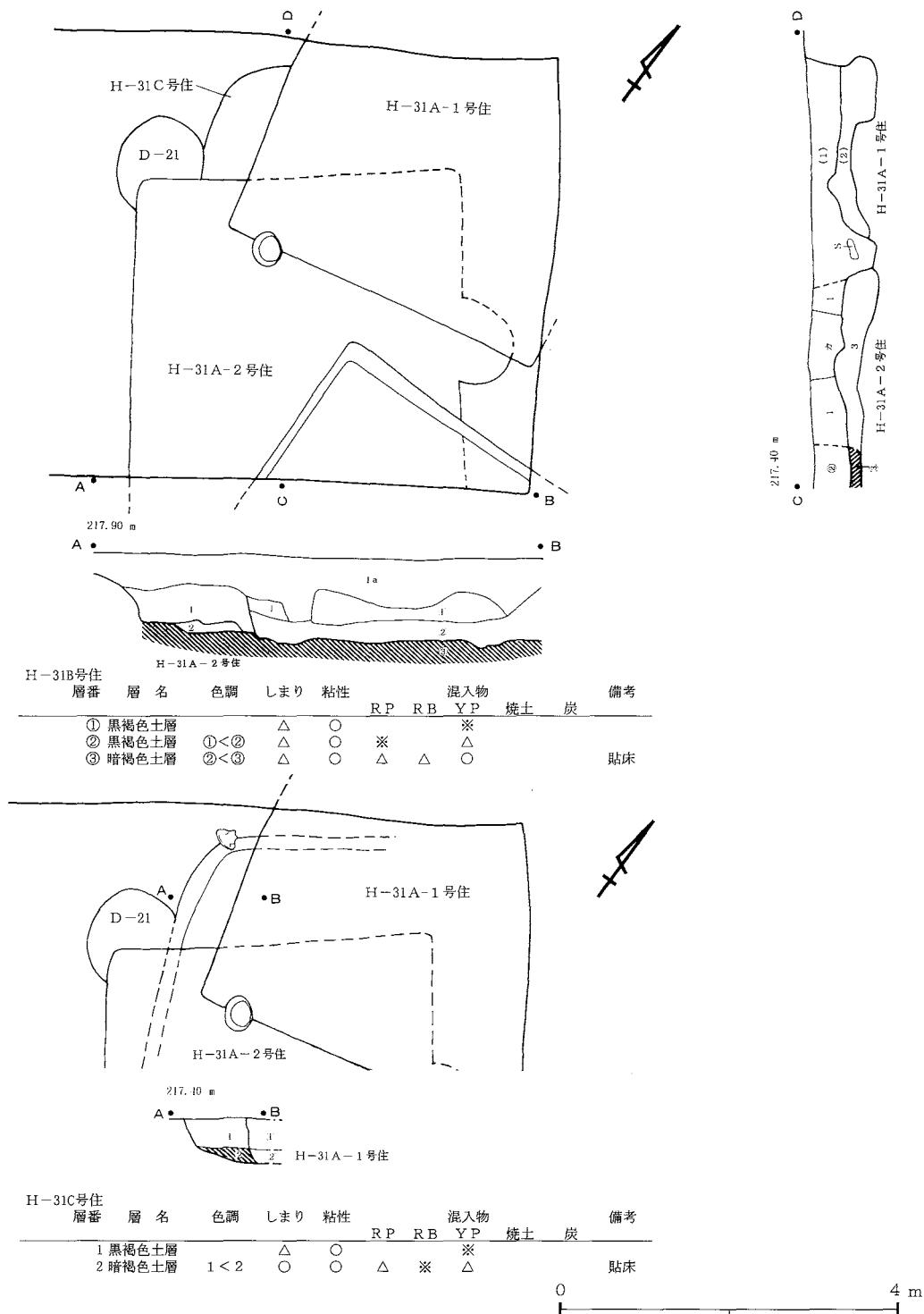


第60図 H-28号・H-30号住居址実測図

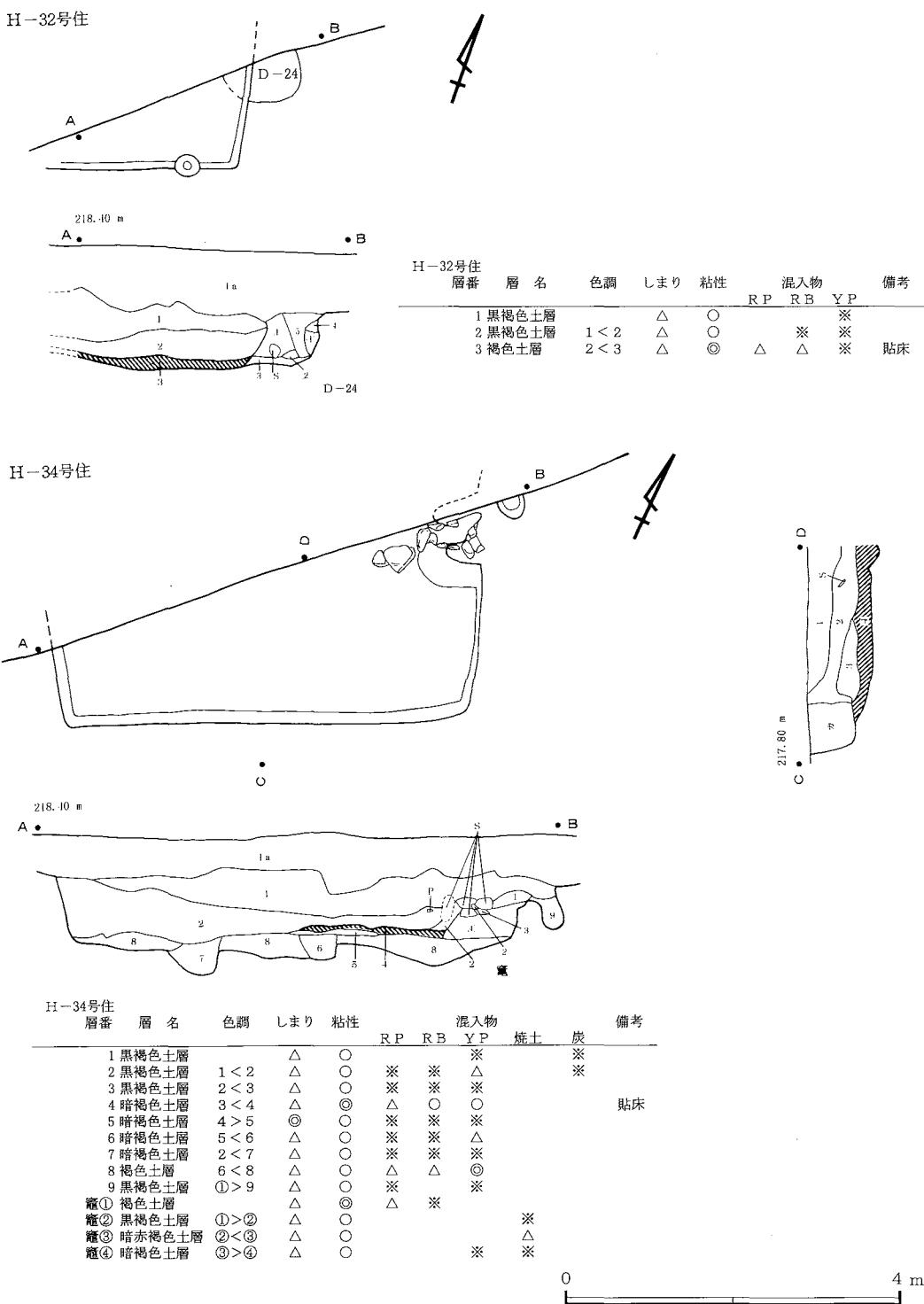


第61図 H-31A-1号・H-31A-2号住居址実測図

#### IV 遺構各説

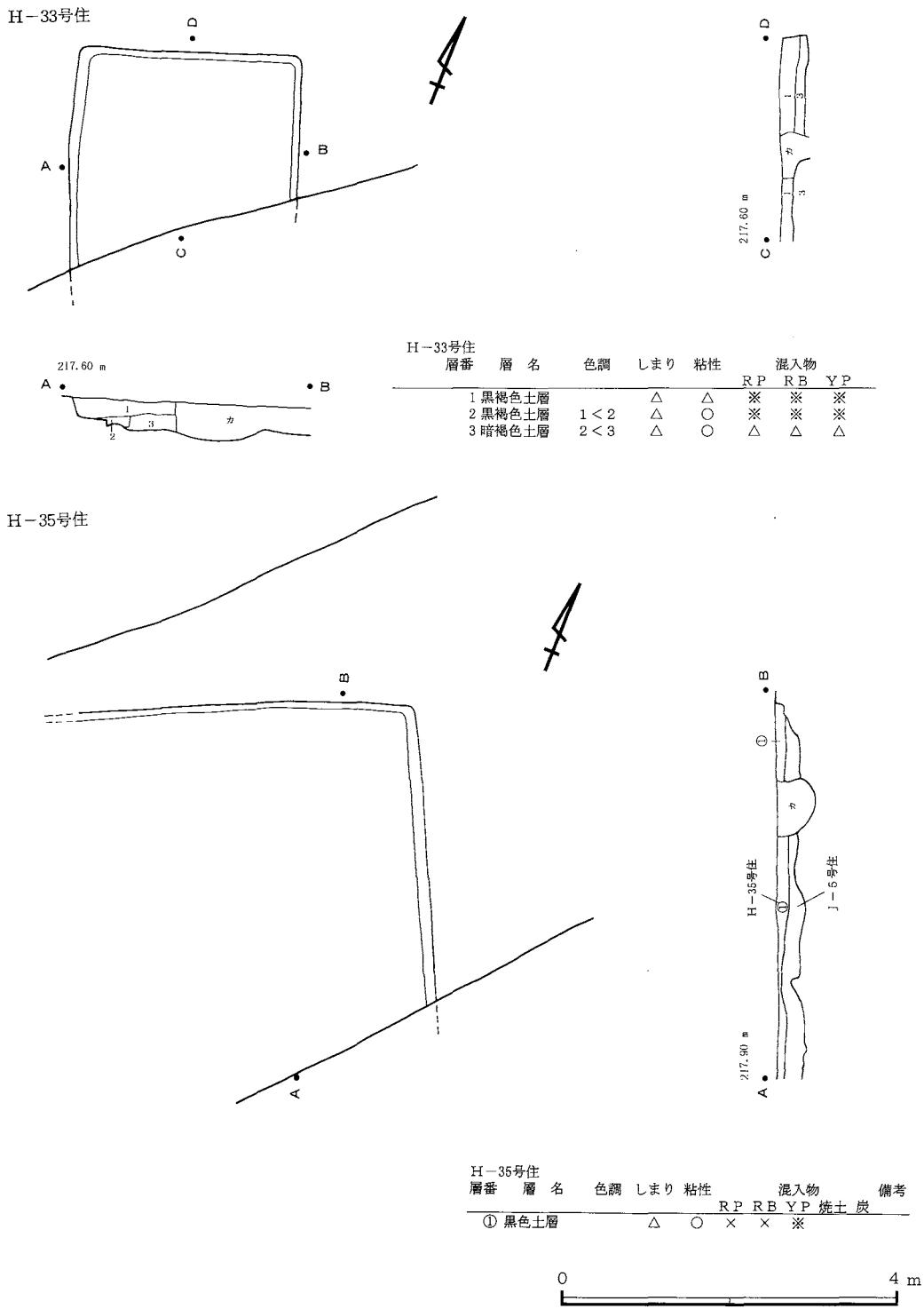


第62図 H-31B号・H-31C号住居址実測図



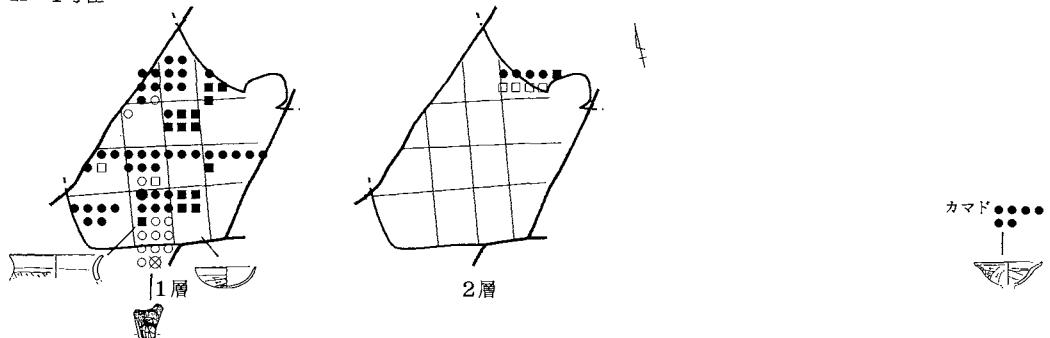
第63図 H-32号・H-34号住居址実測図

#### IV 遺構各説

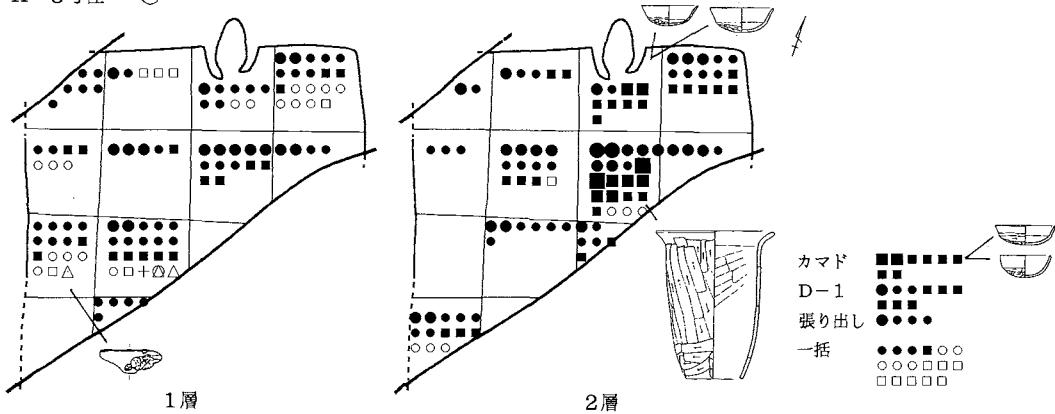


第64図 H-33号・H-35号住居址実測図

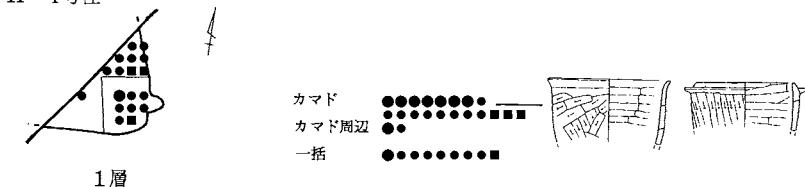
H-1号住



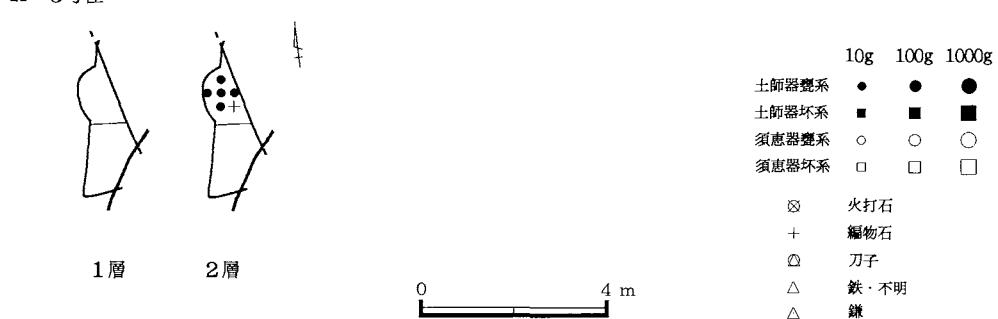
H-3号住



H-4号住

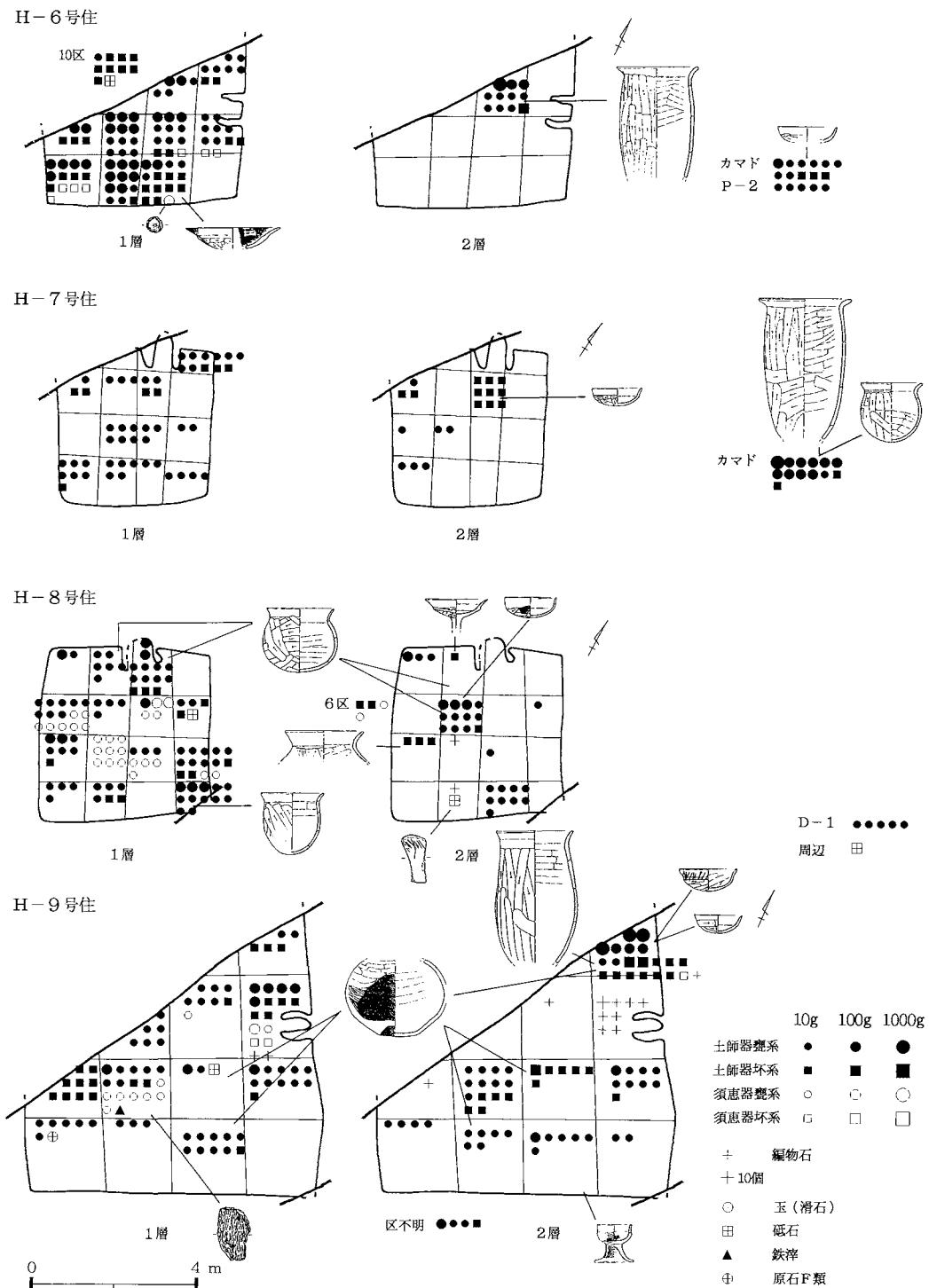


H-5号住



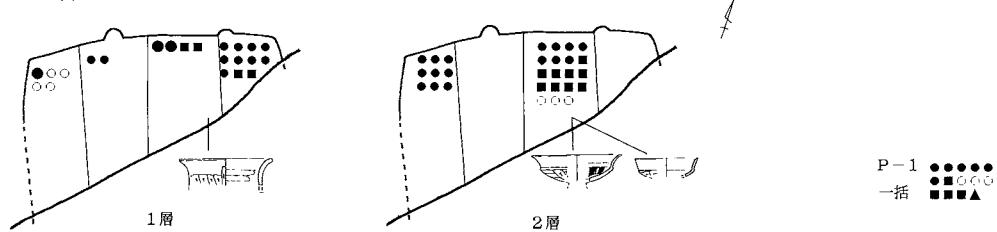
第65図 H-1・3・4・5号住居址遺物分布図

#### IV 遺構各説

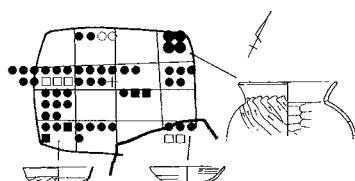


第66図 H-6・7・8・9号住居址遺物分布図

H-10号住

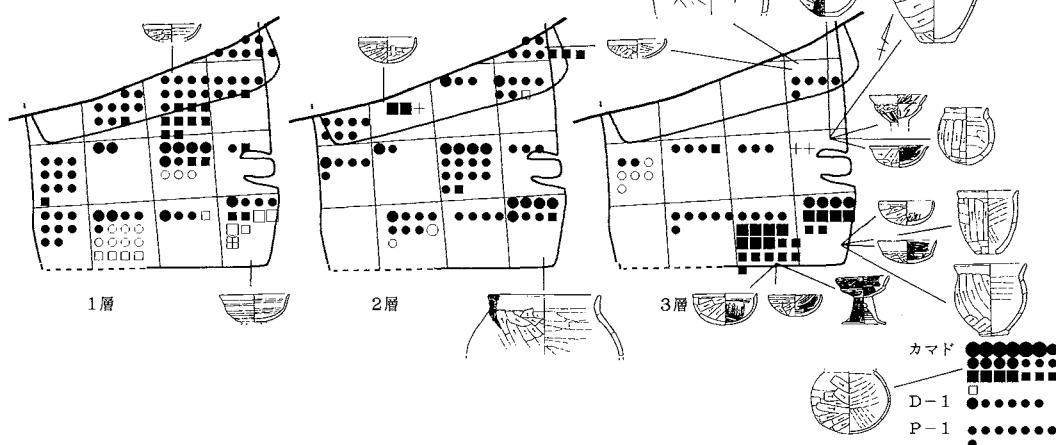


H-11号住

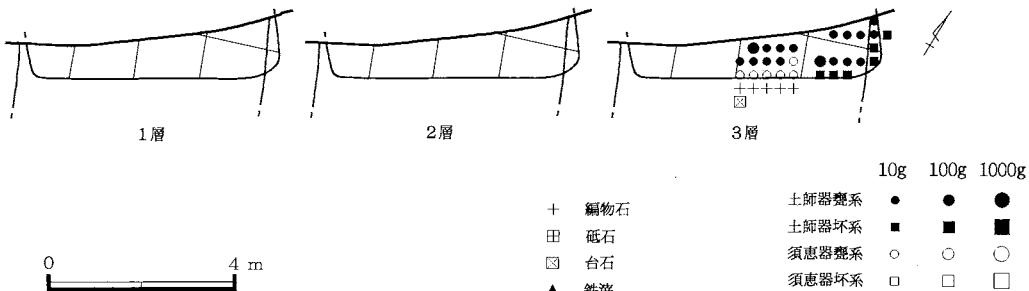


1層

H-12A号住



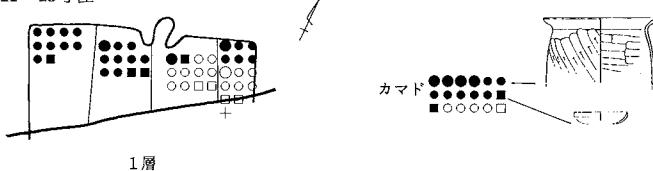
H-12B号住



第67図 H-10・11・12号住居址遺物分布図

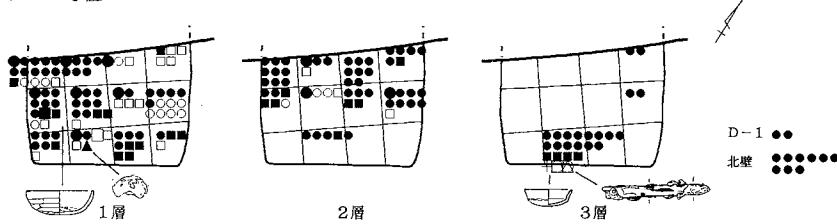
#### IV 遺構各説

H-13号住

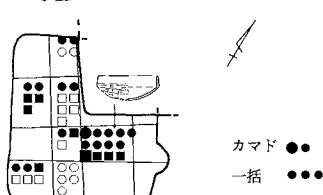


1層

H-14号住

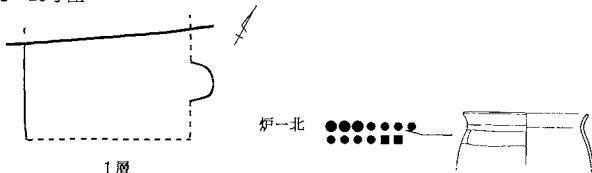


H-15号住



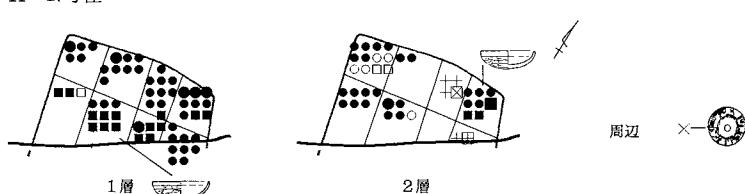
1層

H-16号住



1層

H-17号住



1層

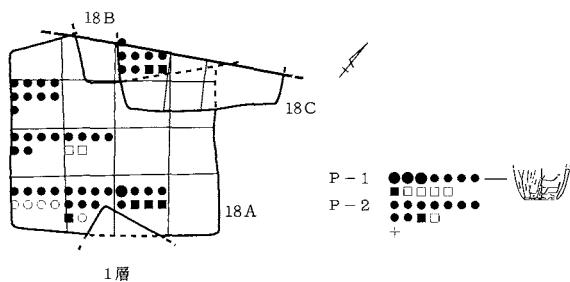
2層

+	編物石			
X	紡錘車	10g	100g	1000g
田	砥石	●	●	●
■	台石	■	■	■
□	敲石	○	○	○
▲	鉄滓	□	□	□
△	刀子			

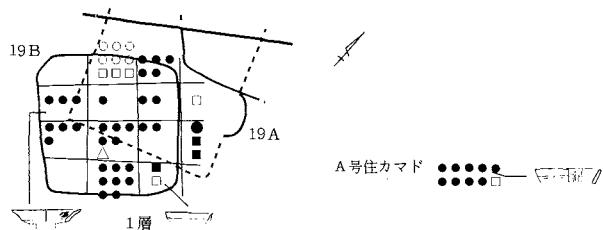
0 4 m

第68図 H-13・14・15・16・17号住居址遺物分布図

H-18A・18B・18C号住



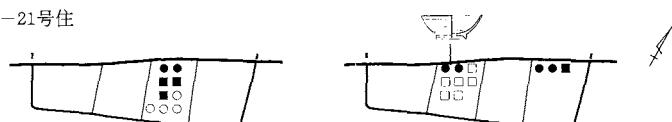
H-19A・B



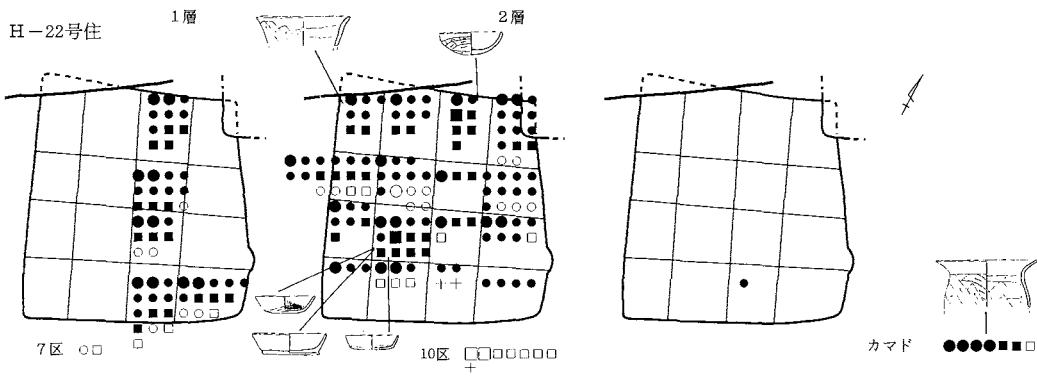
H-20号住



H-21号住



H-22号住

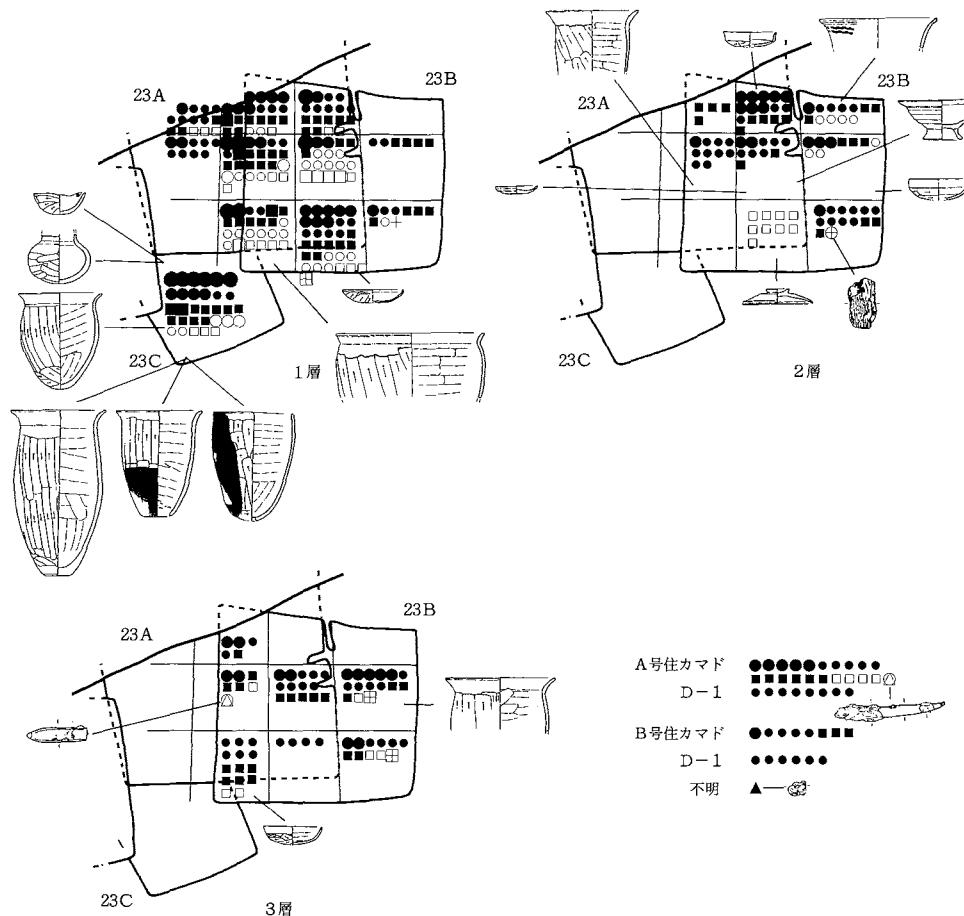


0 4 m

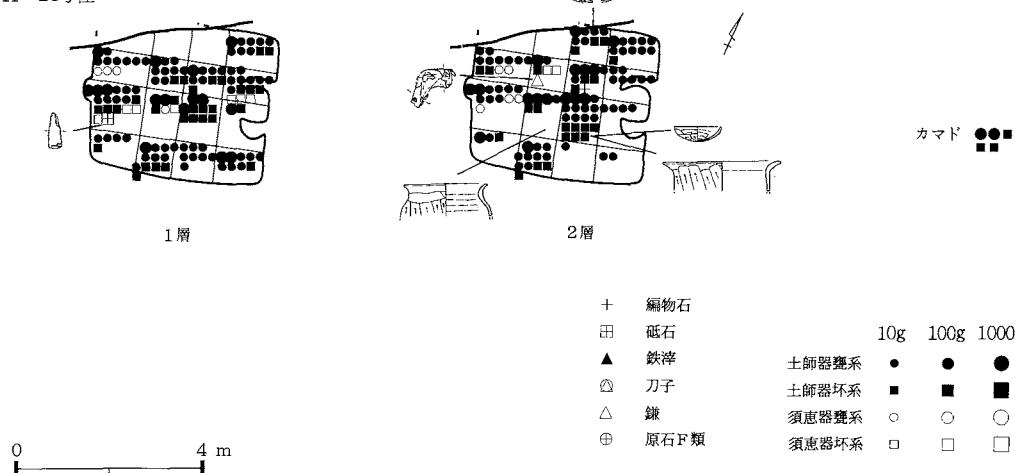
第69図 H-18・19・20・21・22号住居址遺物分布図

#### IV 遺構各説

H-23A・23B・23C号住



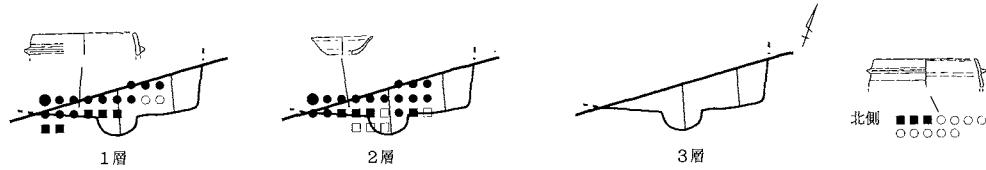
H-24号住



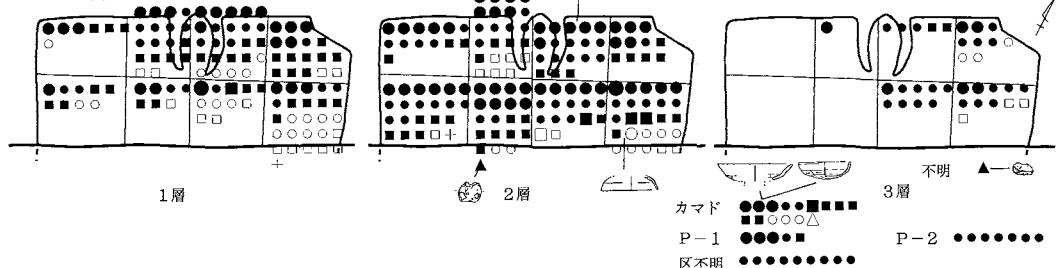
第70図 H-23・24号住居址遺物分布図

1 上ノ久保遺跡

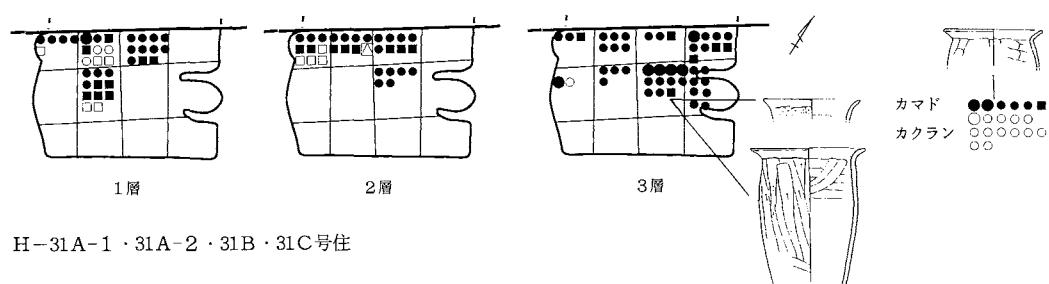
H-25号住



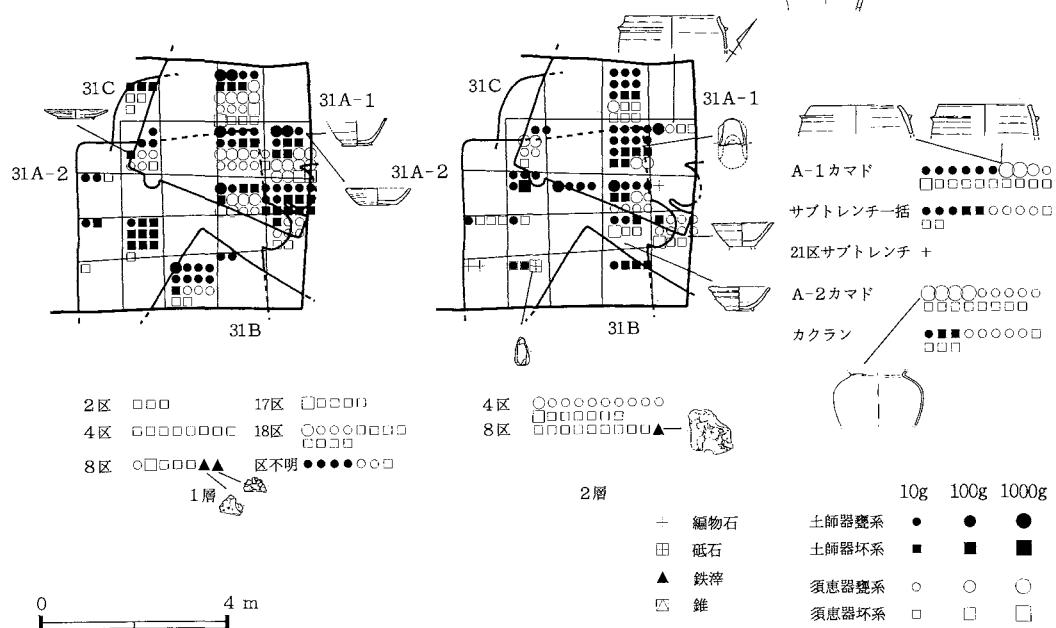
H-27号住



H-28号住



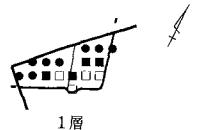
H-31A-1・31A-2・31B・31C号住



第71図 H-25・27・28・31号住居址遺物分布図

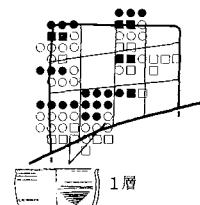
#### IV 遺構各説

H-32号住



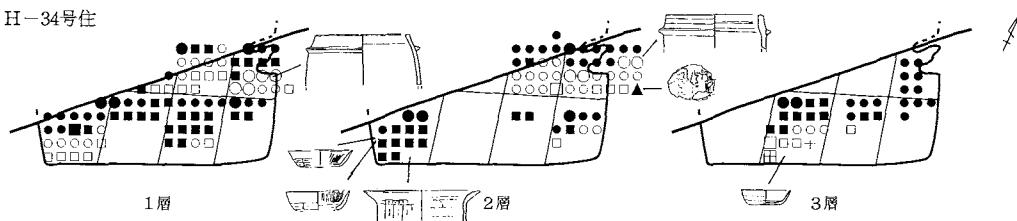
1層

H-33号住



1層

H-34号住

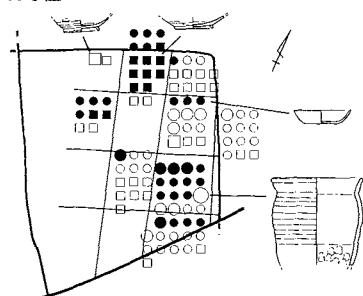


1層

2層

3層

H-35号住



1層

0 4 m

	10g	100g	1000g
+	編物石	●	●
田	砥石	■	■
▲	鐵滓	○	○
		須恵器甕系	○
		土師器甕系	□
		土師器坏系	□
		須恵器坏系	□

第72図 H-32・33・34・35号住居址遺物分布図

### 掘立柱建物址

HT-1A号掘立柱建物址とHT-1B号掘立柱建物址が、調査区の中央から2棟が重複して検出された。いずれも同じ主軸方向を向いており、柱穴位置が少しずれているだけであることと、規模もほぼ同じ程度であることから、近接した時期内での建て替えと推定される。諸属性は第9表のとおりである。

重複関係のある2軒の住居址（H-24・27号住居址）より新しいことが、切り合い関係で確認されている。H-24号住居址は7世紀後半であるので、少なくともこれより新しい。また、近接するH-25号住居址は10世紀第1四半期であり、同時併存は困難であると判断される。また、この住居址の覆土最上層には礎石の可能性のある大形扁平河川礎が数個並んで検出されており、ここから北にかけて礎石を有する建物址が存在していた可能性がある。掘立柱建物址から礎石建物への変化は、同じ鷺宮地区遺跡群に属する荒神平遺跡 HT-1号掘立柱建物址でも確認されており、同様な建物変遷が行われた可能性もある。

しかし、出土遺物は少なく、縄文土器が多いため、時期決定の根拠となり得ない。明確な時期を決定することができないが、住居址との重複関係から8世紀以降の時期であることは確実である。さらに、8世紀から9世紀には本遺跡の住居址がほとんど存在しないことと、H-25号住居址以降に礎石を有する建物が構築された可能性があることから、10世紀前半以降のもの、おそらく11世紀代と推測される。

なお、この位置は平安末期（12世紀後半）に成立したとみられる中世館址（上ノ久保館）のほぼ中心に当たり、その後へ継承されていったことも推測される。

**HT-1A号掘立柱建物址（第73図）** 東西3間、南北2間以上と推定される。南北は調査区外へ及んでおり、さらに延びる可能性もある。柱穴の平面形は隅円方形を呈しており、建物の方向と同じ方向性を示している。

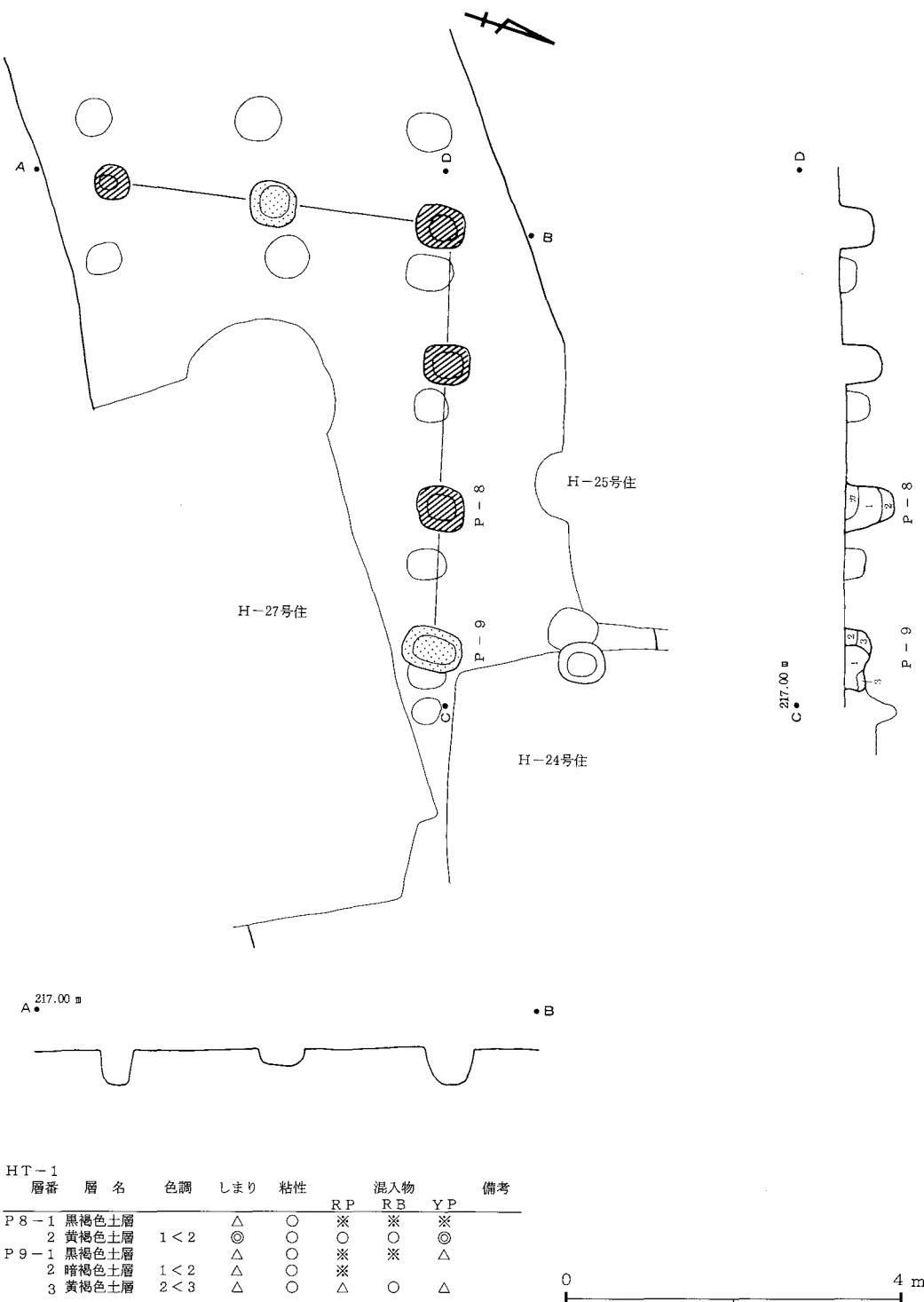
**HT-1B号掘立柱建物址（第74図）** 東西3間、南北2間以上で、北側と西側に庇が付くと推定される。柱穴位置はややずれるものの、HT-1A号掘立と主軸方向は全く同一である。柱穴の切り合い関係から、この建物址の方がHT-1A号掘立より新しいことが確認されている。柱穴の平面形は隅円方形を呈する。

（大工原 豊）

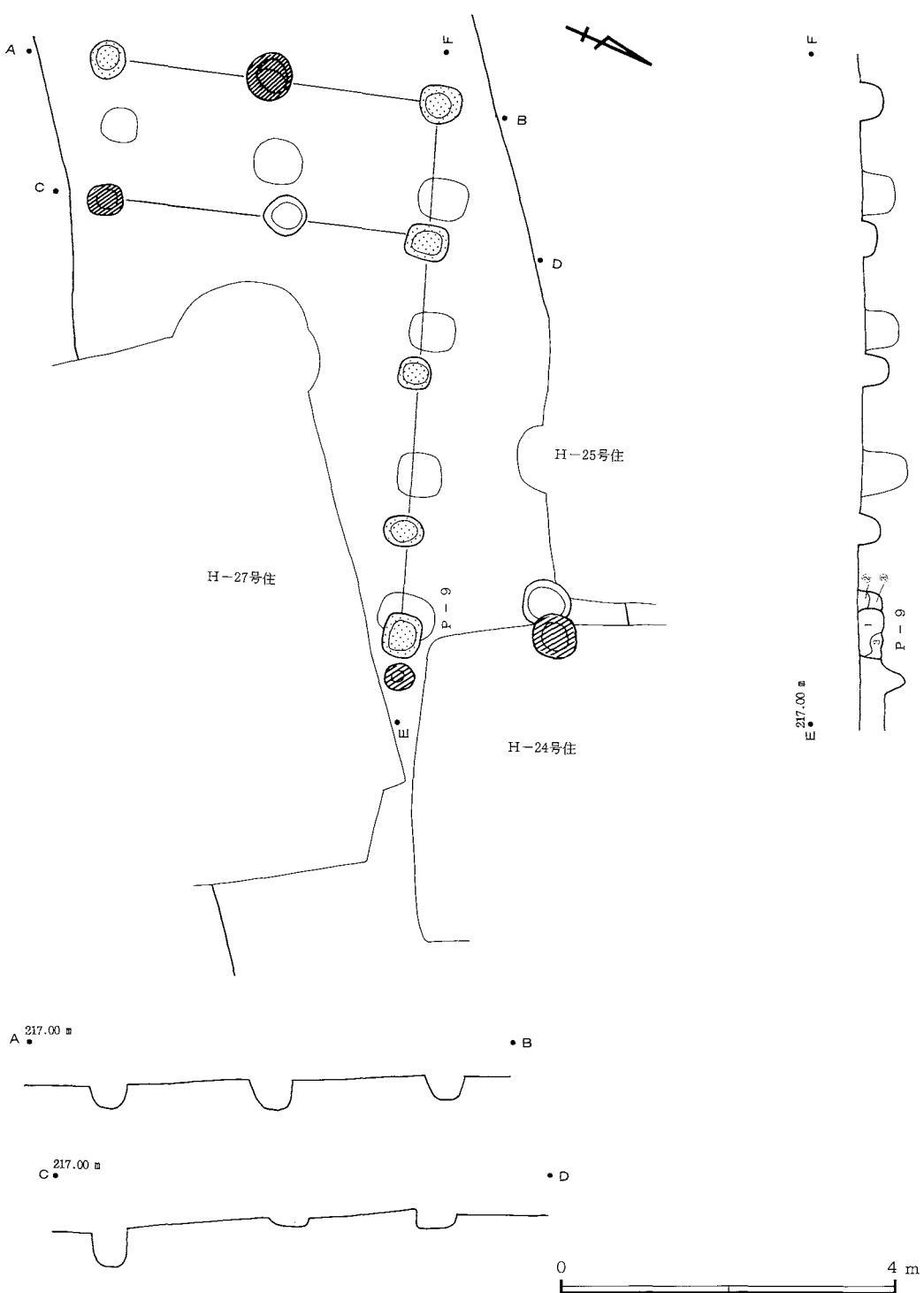
遺構名	形態	規模(芯芯・m)		柱間平均(m)		主軸方向	備考
		東西	南北	東西	南北		
HT-1A	3×2間以上	5.08	3.98	1.69	1.99	N-72°-E	
HT-1B	3×2間以上	6.36	5.86	1.59	1.95	N-72°-E	北・西に庇

第9表 掘立柱建物址観察表

IV 遺構各説



第73図 HT-1 A号掘立柱建物址実測図



第74図 H-T-1 B号掘立柱建物址実測図

## IV 遺構各説

### b 遺 物

#### 土師器・須恵器

住居址出土の遺物は第75図～第89図に示した。また、諸属性は第10表～第14表のとおりである。住居址の項でも示したが、8世紀～9世紀の遺構は少ないので、この時期の資料は少ない。しかし、6～7世紀、10～11世紀の資料は比較的多い。ただし、住居址が完掘されていないものが多いことと、重複が多いいため、良好な一括資料は少ない。唯一、H-12A号住居址出土資料は6世紀前半段階の良好な一括資料である。土師器では壺・高壺・甕・小形甕・甑、須恵器では高壺が共伴関係にある。

10～11世紀の資料（H-4・25・31A等）は、安中市域では下受地・十二遺跡（東上秋間地区）、西裏・西新井遺跡（磯部新寺地区）などで検出されているのみであり、これまででは資料が少なかった。この時期の遺物としては、碓氷川流域では比較的まとまった資料である。器種としては、羽釜・土釜・高台付碗・小皿・耳皿・灰釉碗・灰釉皿などが出土している。

**玉**（第90図1・2） 2点検出されている。1は小形の臼玉、2は未成品と推定される。滑石製である。2は7世紀前半の住居址から出土している。

**滑石素材**（第90図3・4） 2点検出されている。玉類や紡錘車などの素材と推定される。いずれも古墳時代後期の住居址から検出されており、この時期のものと推定される。

**紡錘車**（第90図5） 1点検出されている。滑石製である。

**砥石**（第90図7～9） 2点検出されている。研磨面は平坦で大きく湾曲している。デイサイト（砥沢石）製であり、仕上砥に分類される。9はたがねのような工具による整形痕が観察され、未成品とみられる。研磨面は観察されず、側面には穿孔した痕跡が認められる。

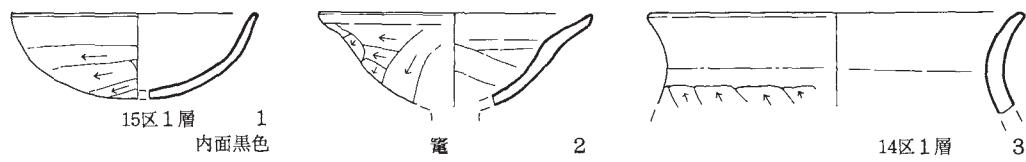
**火打石**（第90図6） 1点検出されている。石英製の礫を素材としている。縁辺部に微細な剥離が連続的に観察され、火打石と判断される。

**鉄製刀子**（第90図10～12） 3点検出されている。いずれも欠損品である。

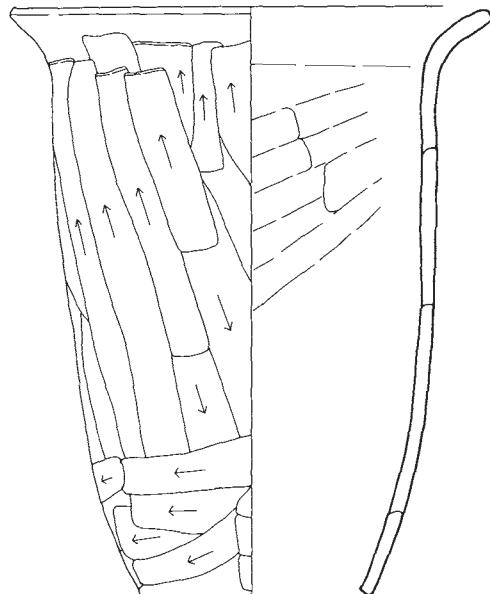
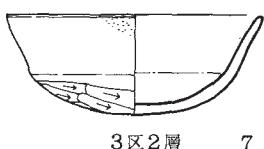
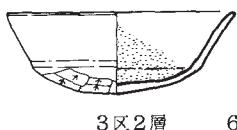
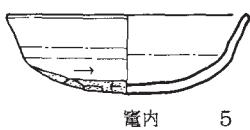
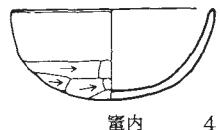
**鉄製鎌**（第90図13・14） 2点検出されている。いずれも鎌の一部である。14は鎌の基部と判断される。

**鉄滓**（第91図1～9） 9点検出されている。4・5は典型的な湾状滓である。同様なものは中野谷地区遺跡群下塚田遺跡の鍛冶工房址から大量出土しており、鉄器製作過程での中間段階の遺物（半製品）とみられる。なお本遺跡では特定の住居址から検出されているものの、鍛冶遺構は検出されていない。

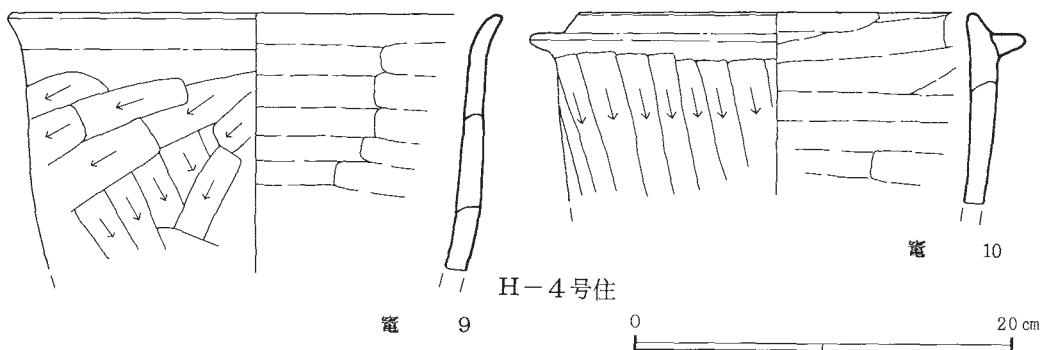
（大工原 豊）



H-1号住

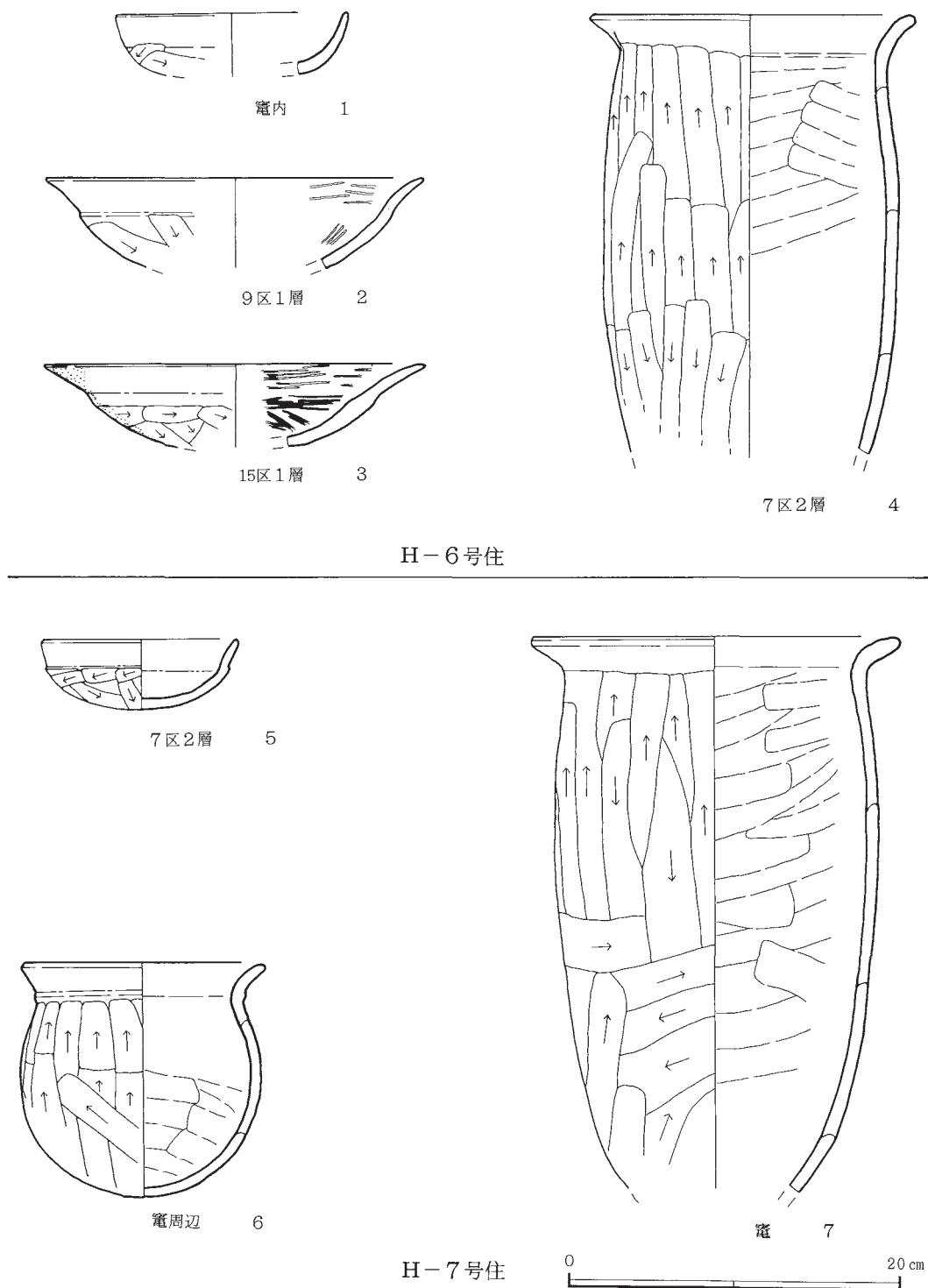


H-3号住



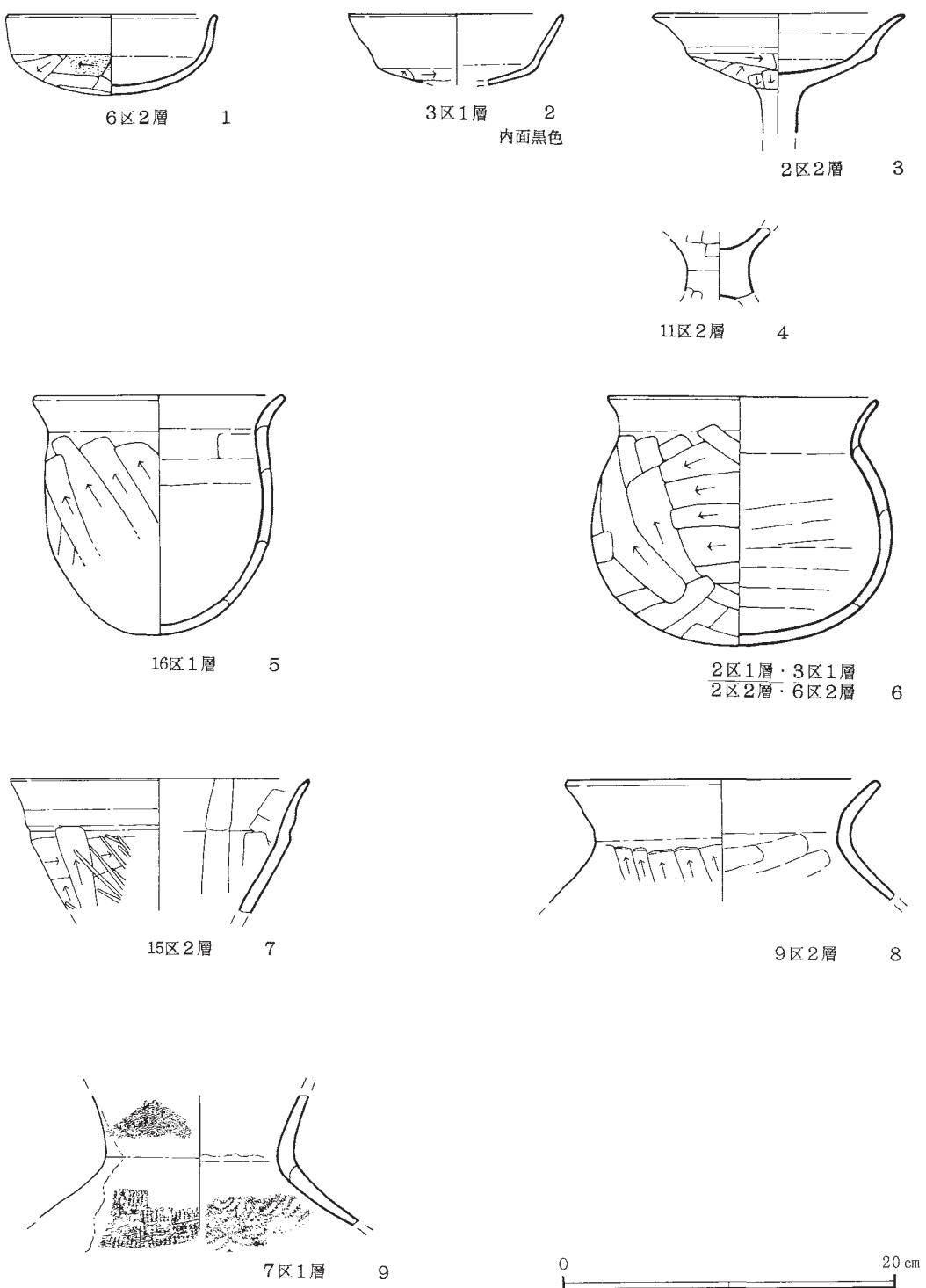
第75図 H-1号・H-3号・H-4号住居址出土の土器

IV 遺構各説



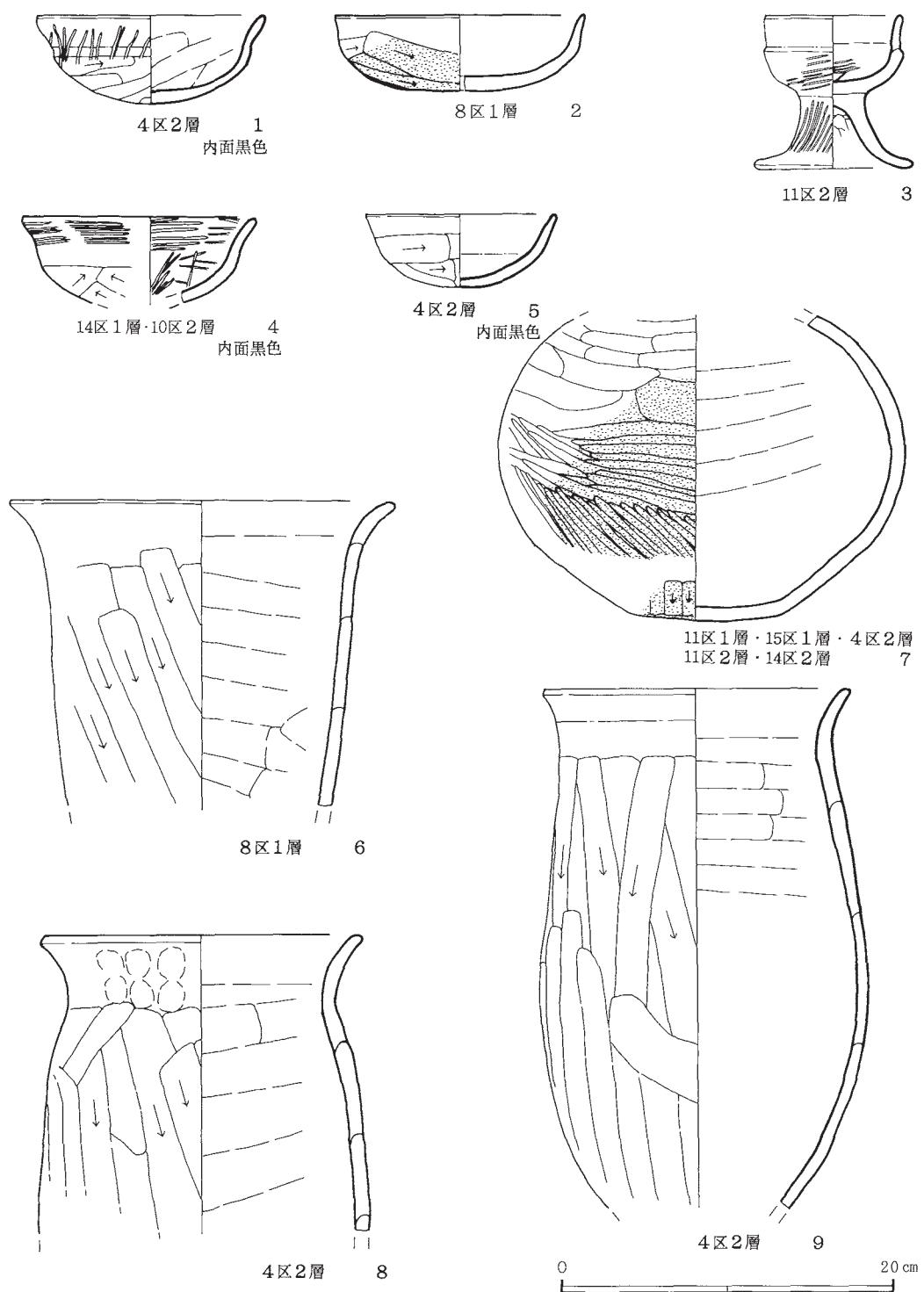
第76図 H-6号・H-7号住居址出土の土器

1 上ノ久保遺跡



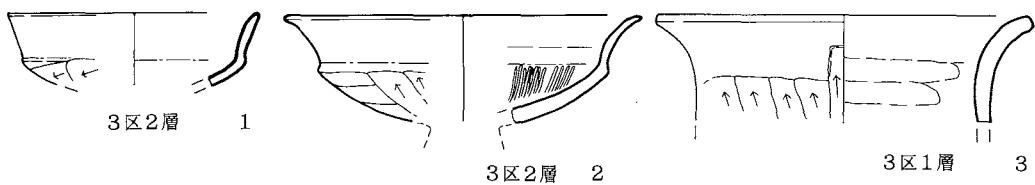
第77図 H-8号住居址出土の土器

IV 遺構各説

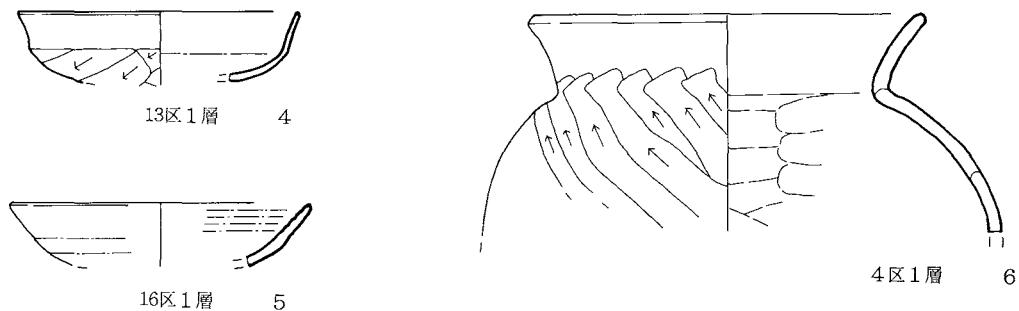


第78図 H-9号住居址出土の土器

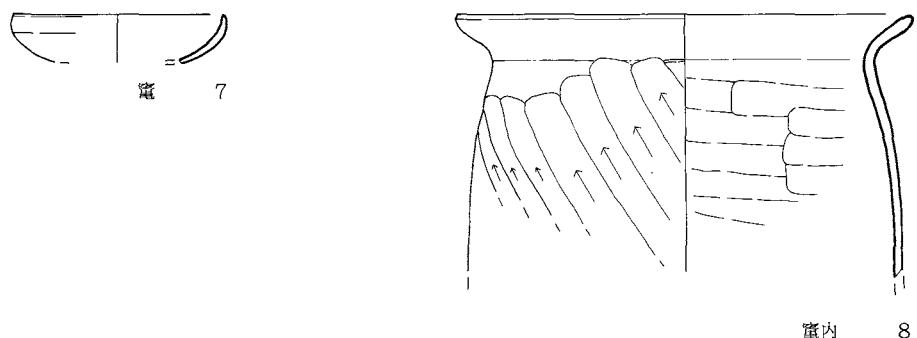
1 上ノ久保遺跡



H-10号住



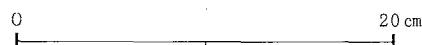
H-11号住



H-13号住

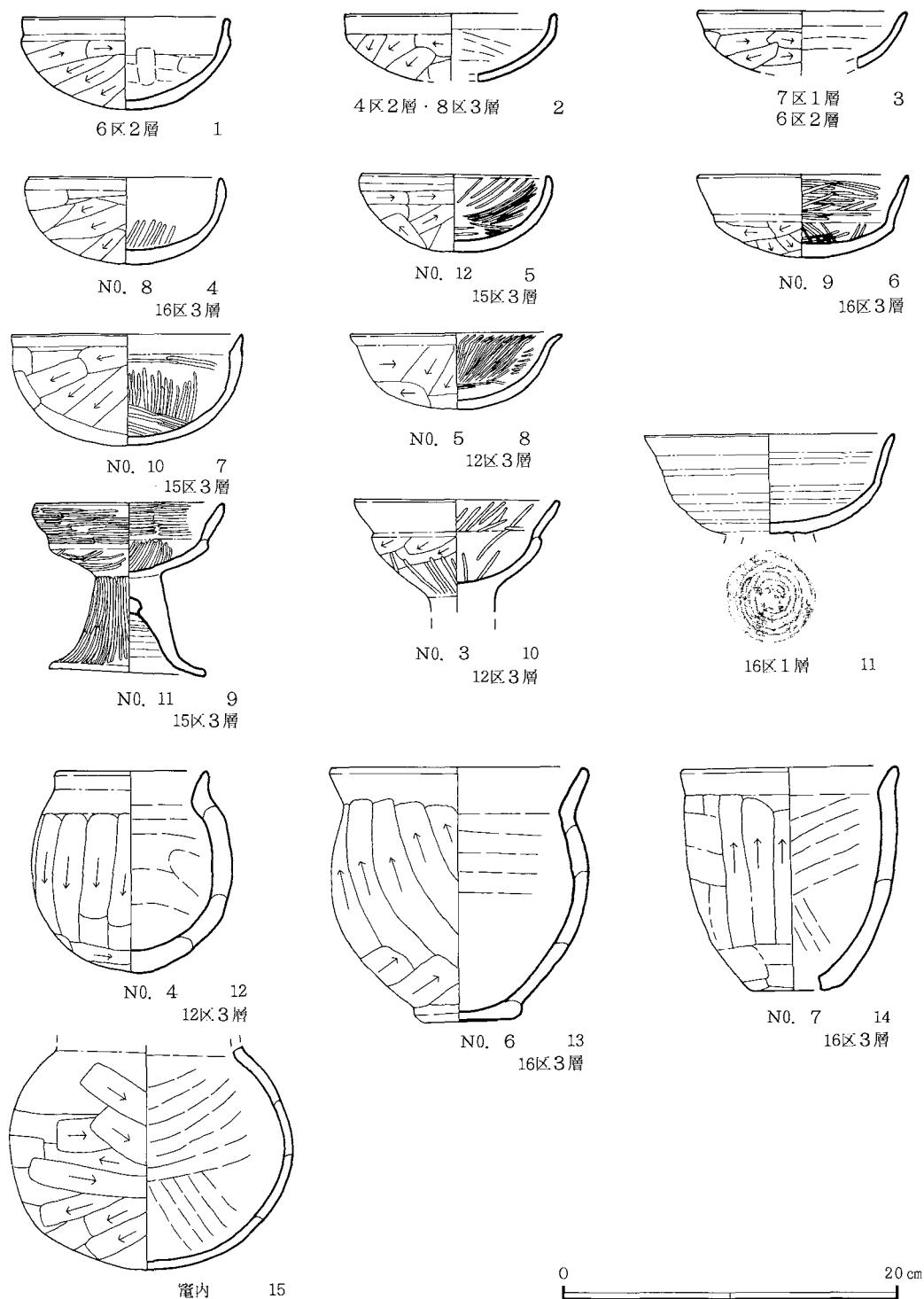


H-14号住

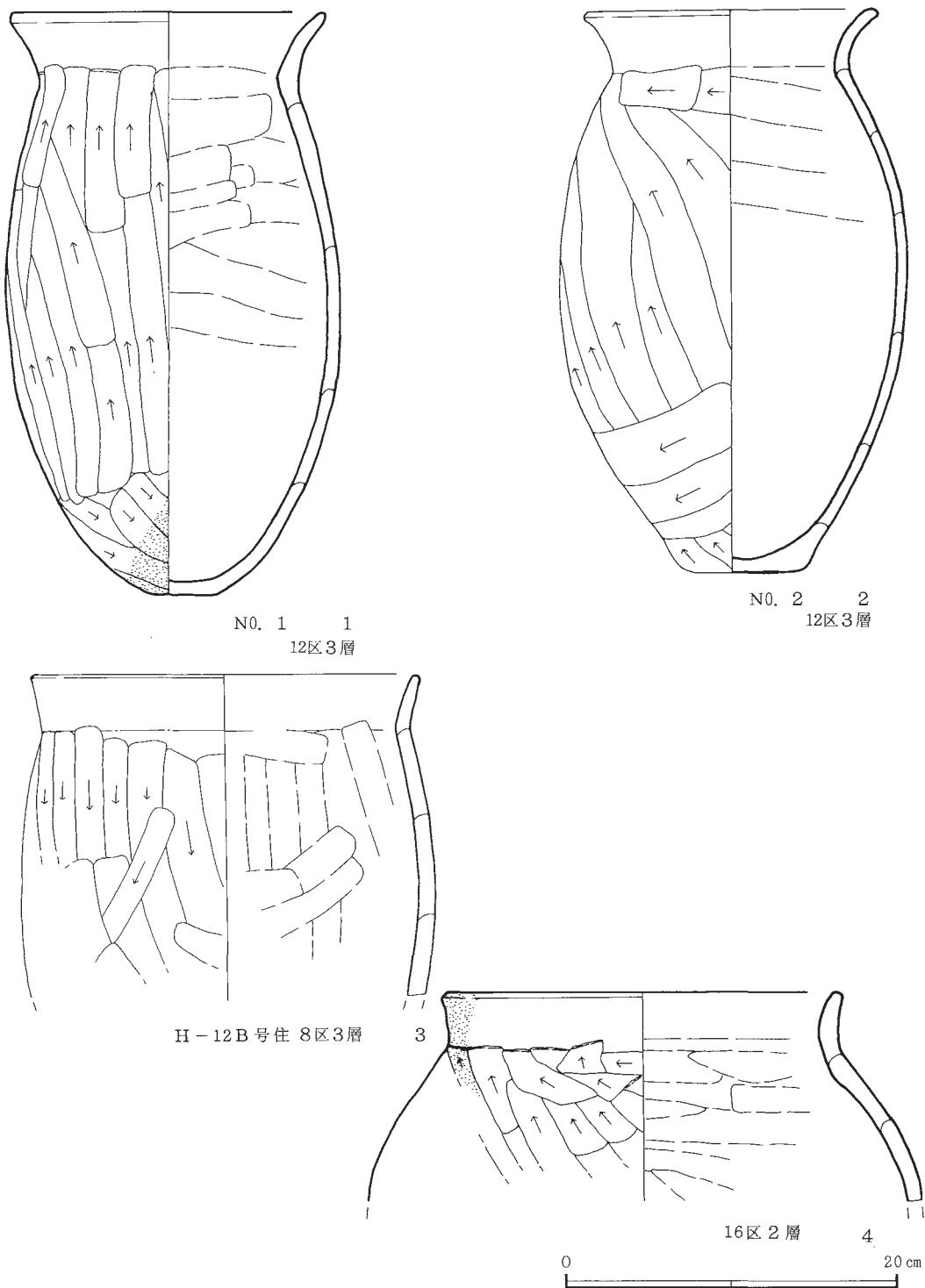


第79図 H-10号・H-11号・H-13号・H-14号住居址出土の土器

IV 遺構各説

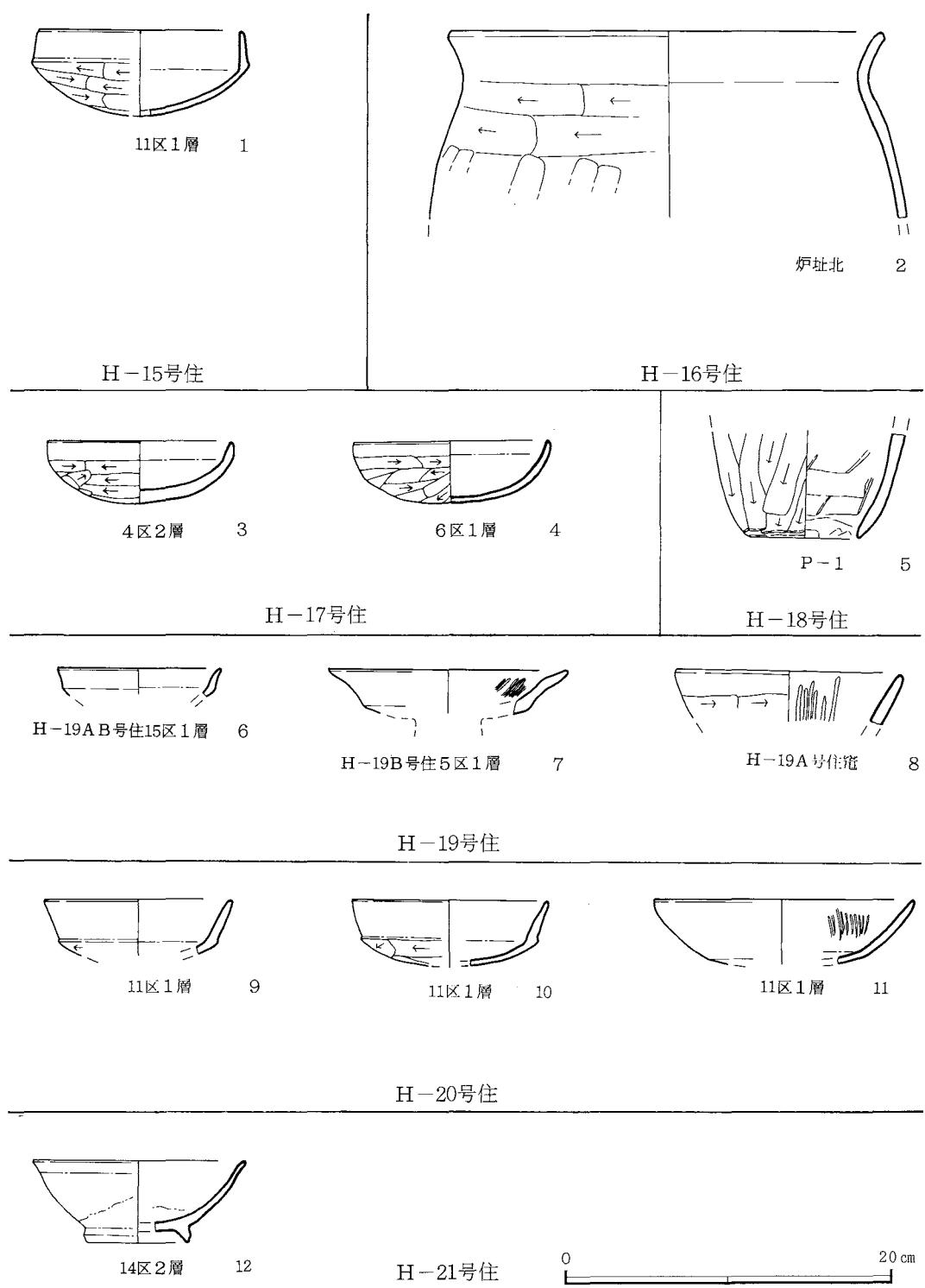


第80図 H-12A号住居址出土の土器（1）



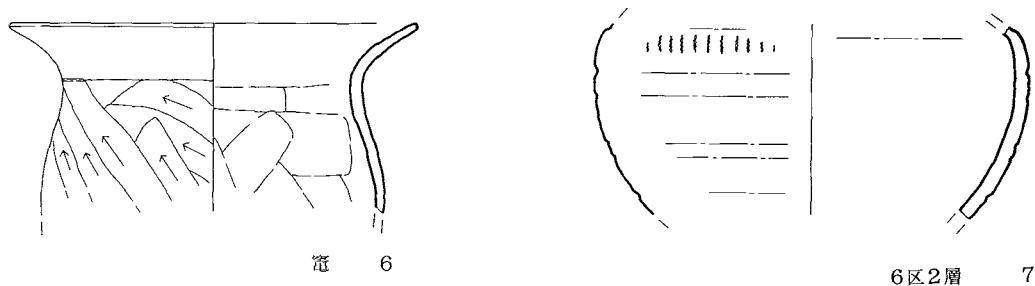
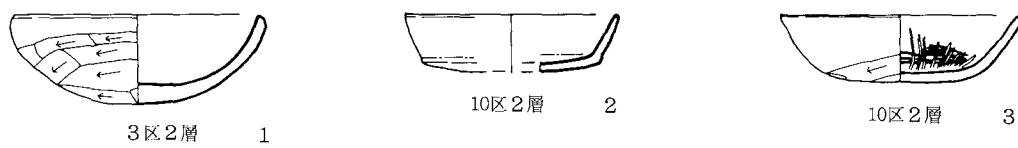
第81図 H-12A号住居址出土の土器（2）

IV 遺構各説

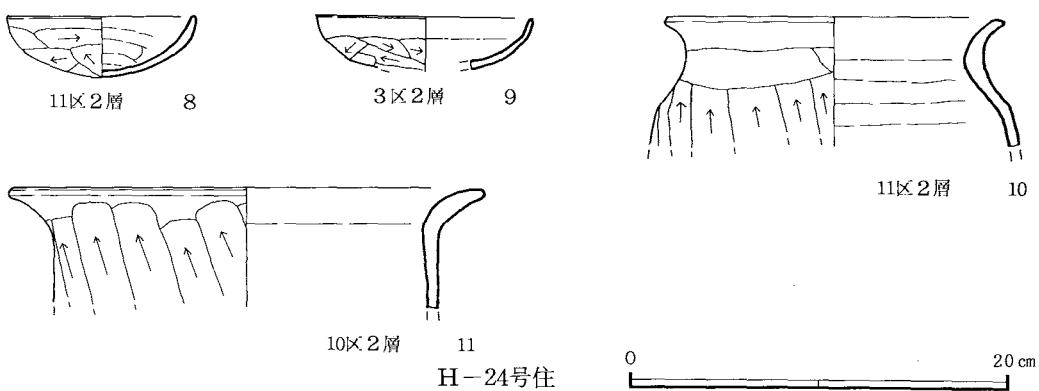


第82図 H-15・16・17・18・19・20・21号住居址出土の土器

1 上ノ久保遺跡

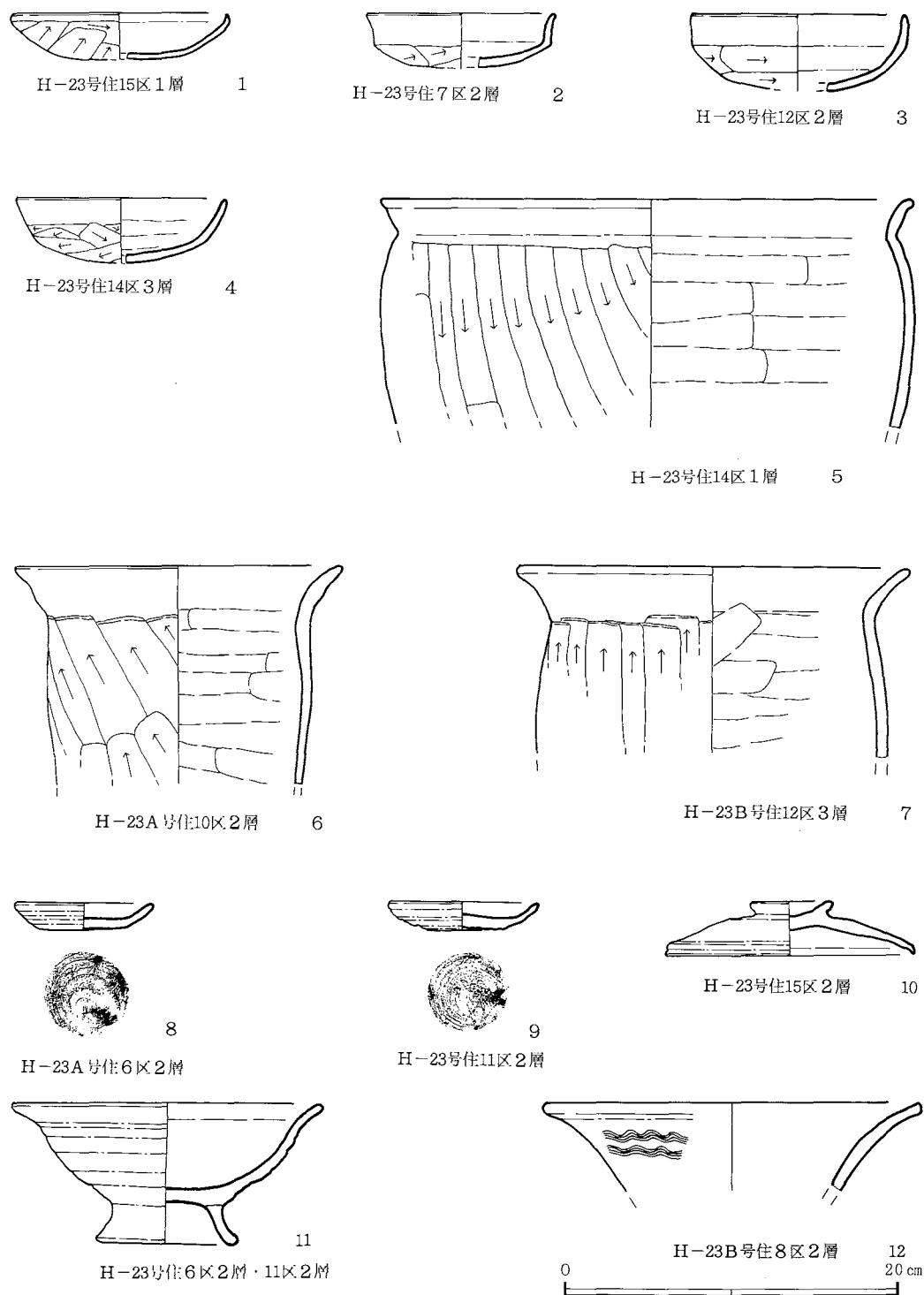


H-22号住

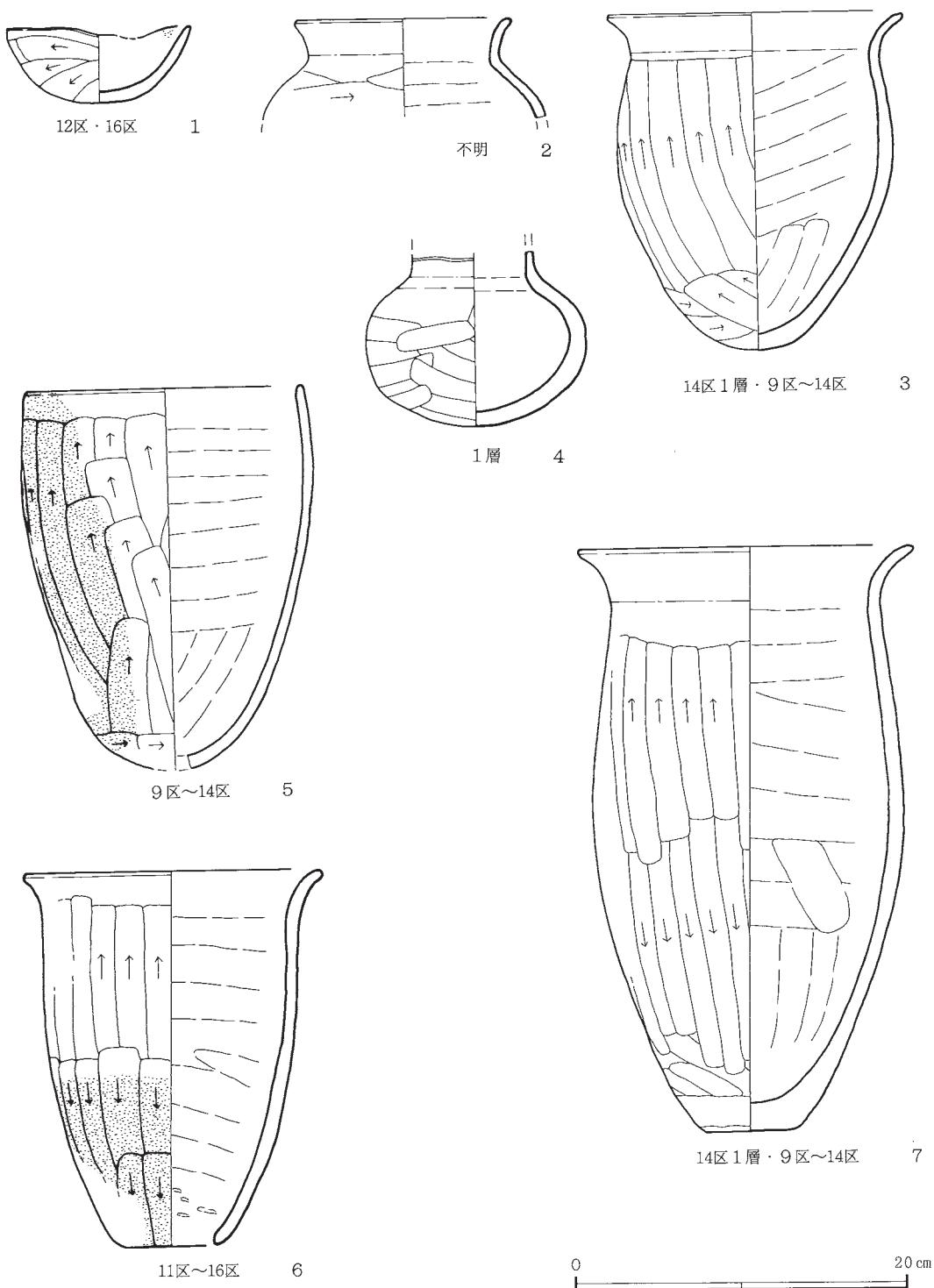


第83図 H-22・24号住居址出土の土器

IV 遺構各説

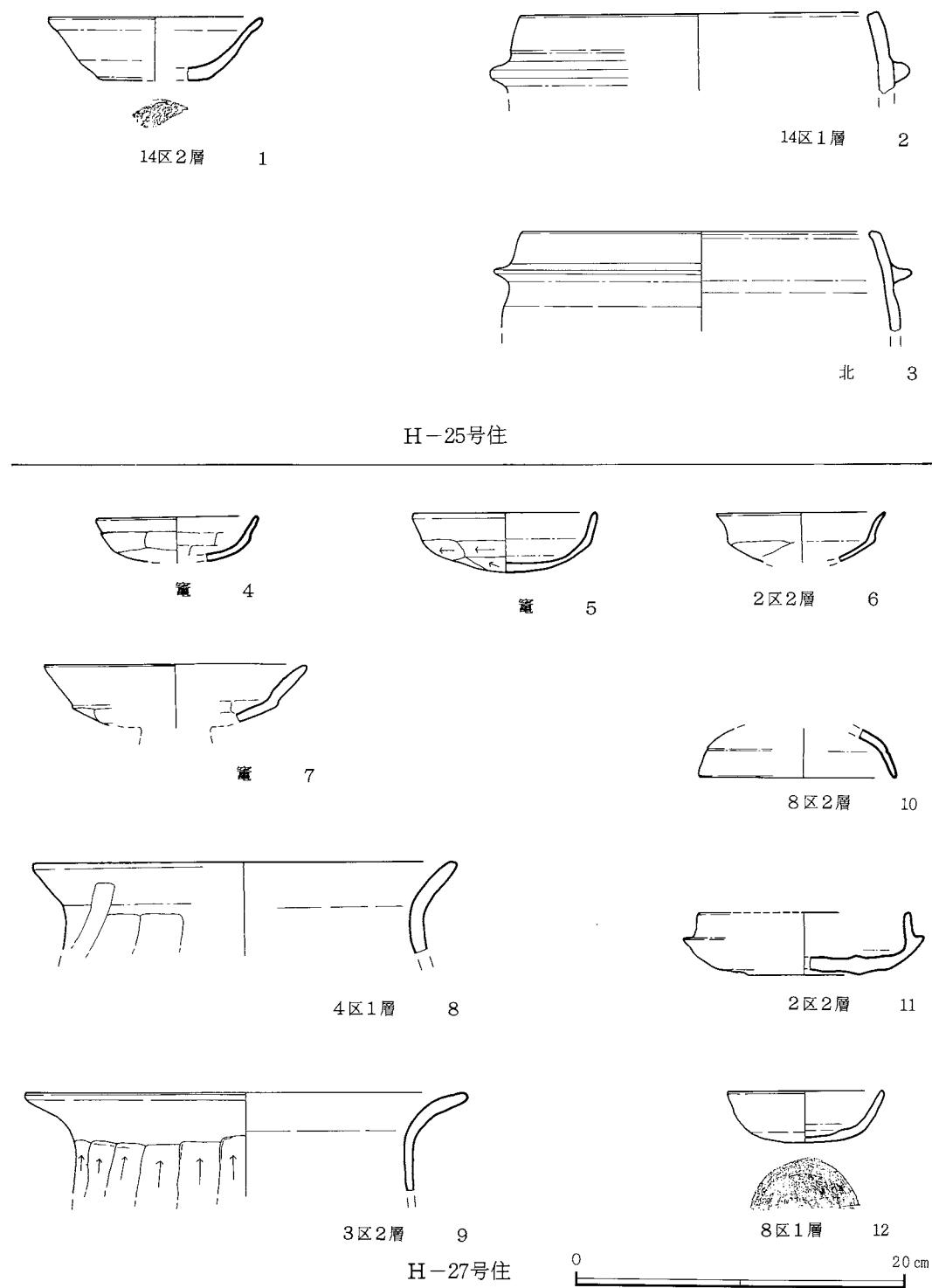


第84図 H-23号住居址出土の土器

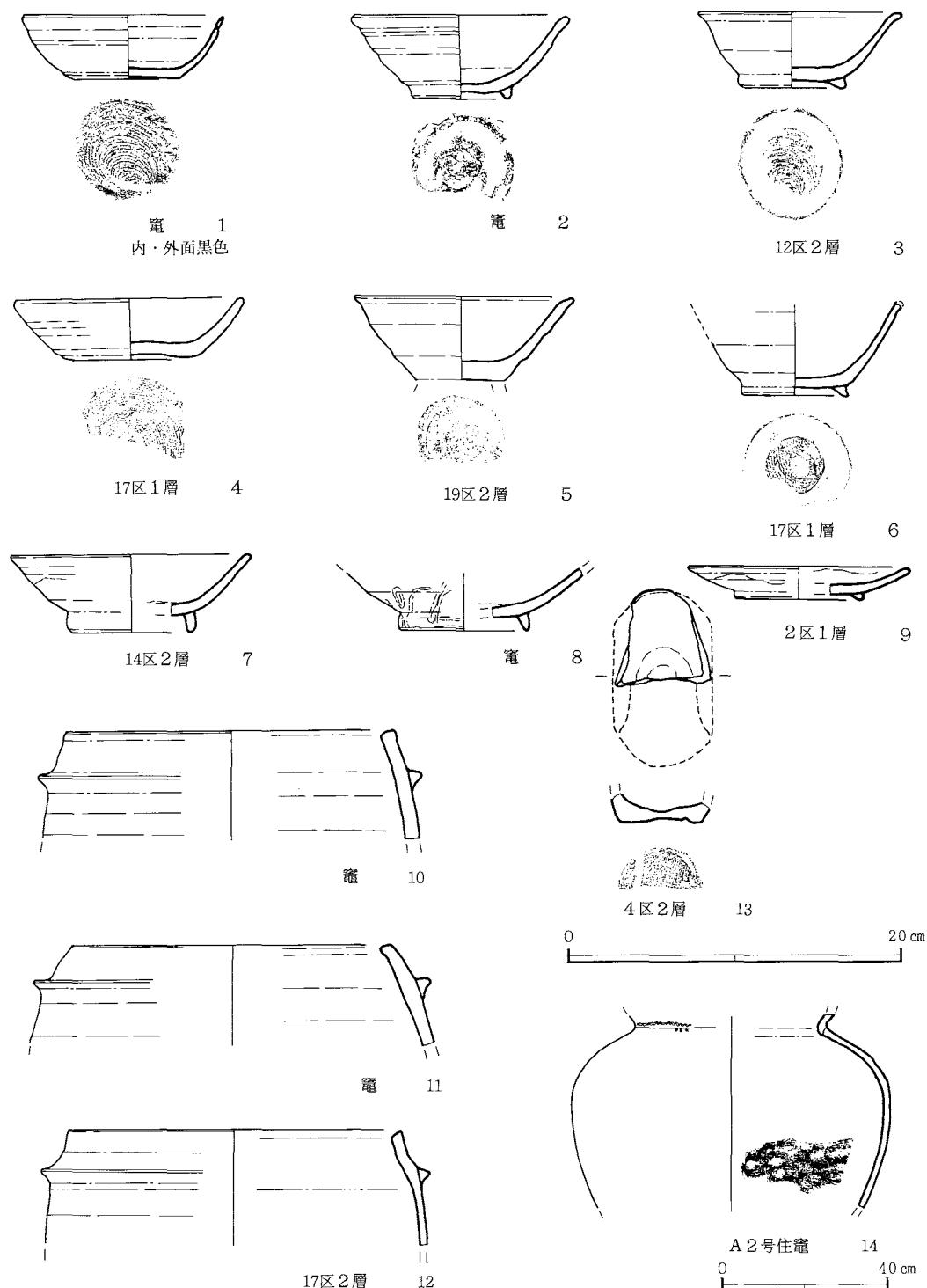


第85図 H-23C号住居址出土の土器

IV 遺構各説

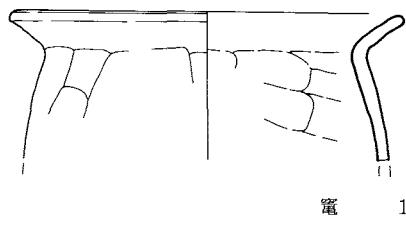


第86図 H-25号・H-27号住居址出土の土器

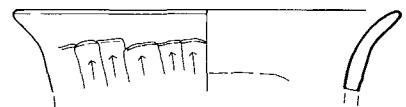


第87図 H-31A-1・2号住居址出土の土器

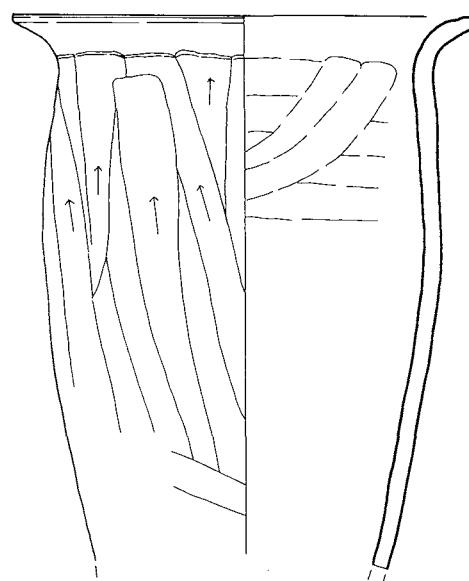
IV 遺構各説



竈 1

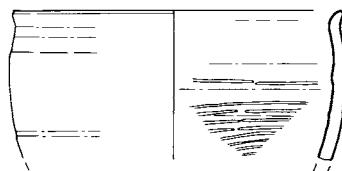


11区3層 2



11区3層 3

H-28号住

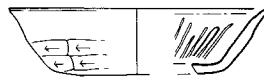


9区1層・10区1層 4

H-33号住



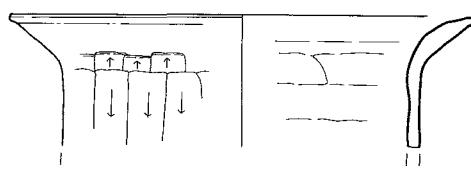
13区2層 5



13区2層 6



14区3層 7

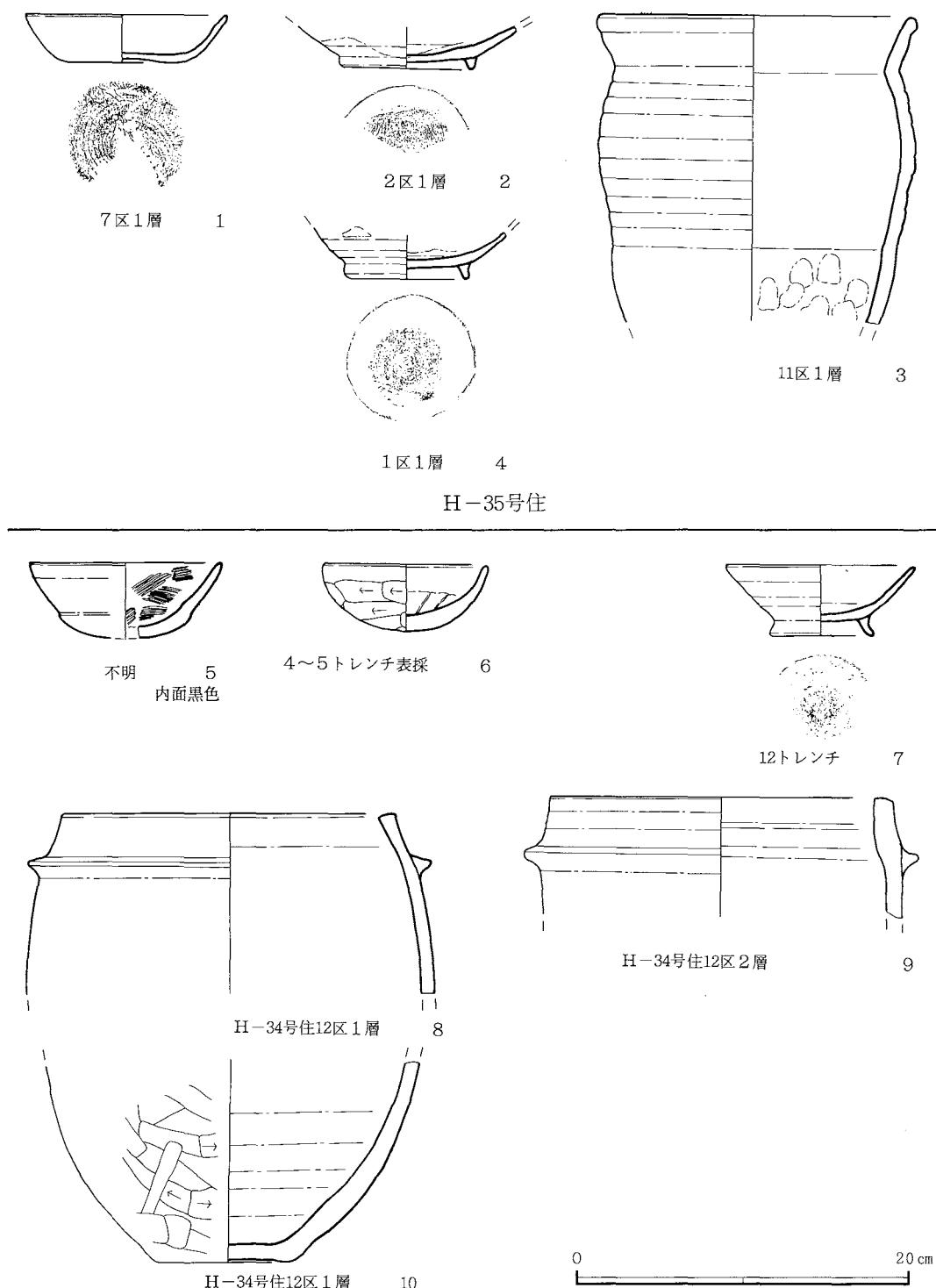


13区2層 8  
H-34号住



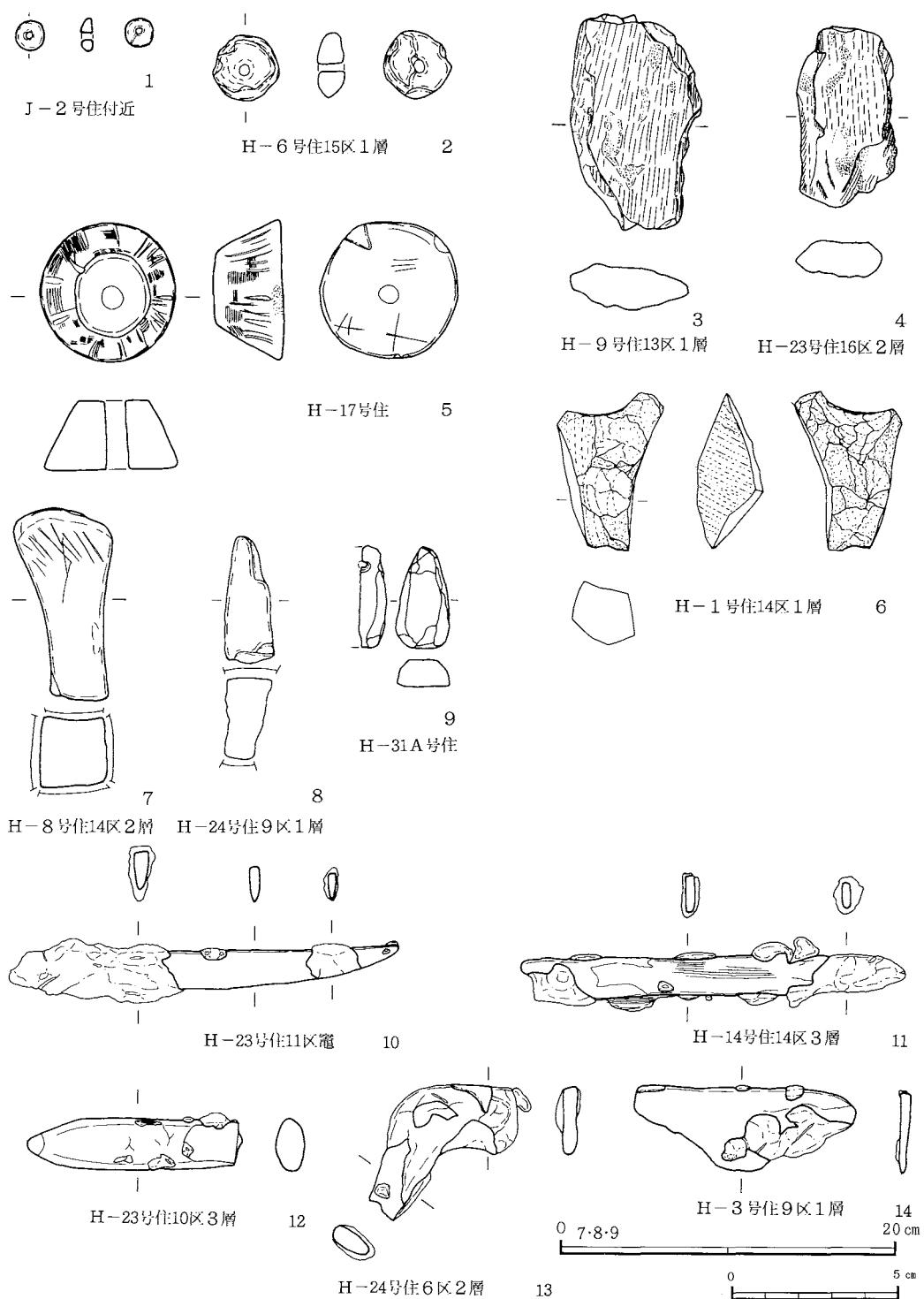
第88図 H-28号・H-33号・H-34号住居址出土の土器

1 上ノ久保遺跡



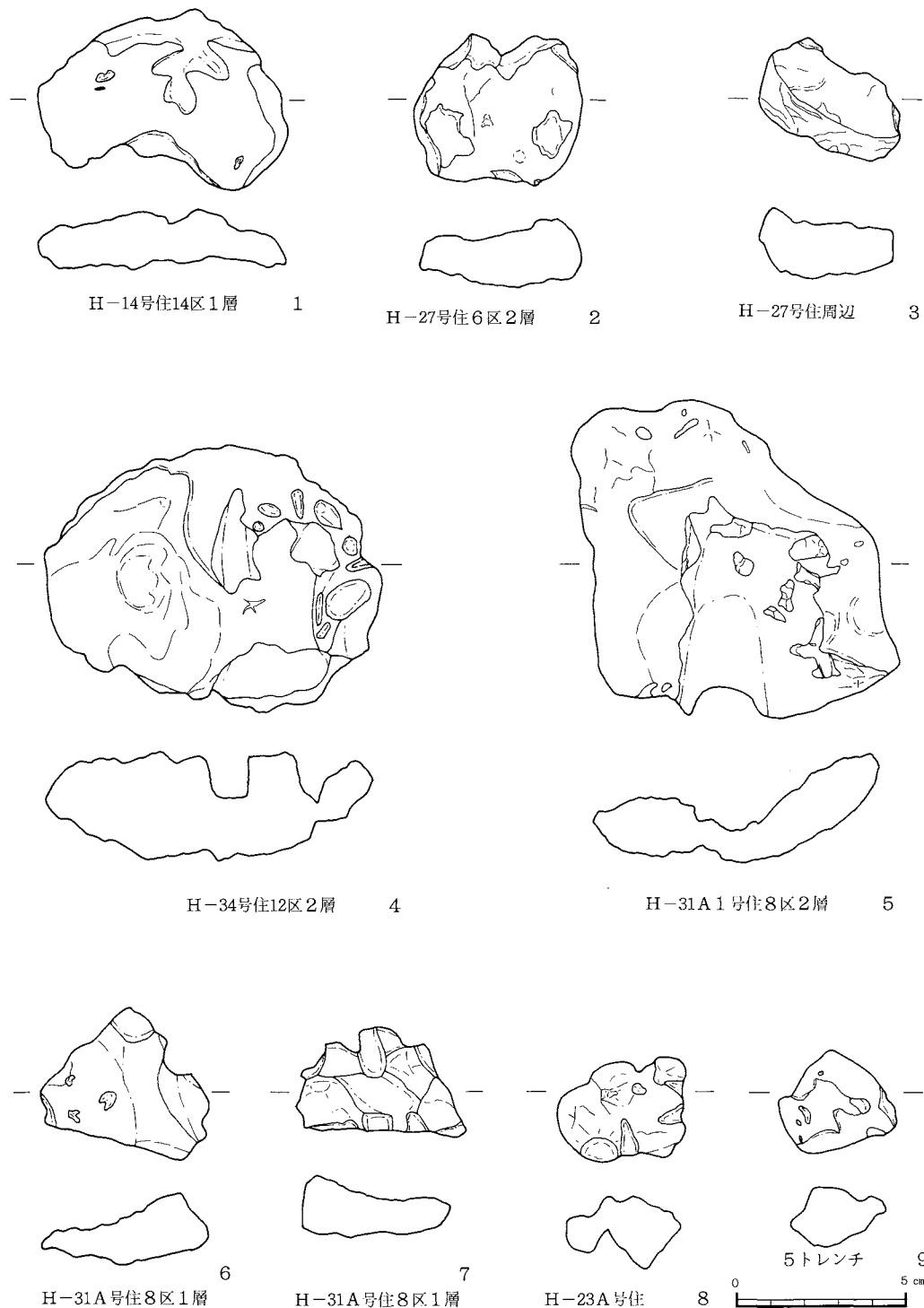
第89図 H-35号住居址・調査区出土の遺物

IV 遺構各説



第90図 白玉・素材剥片・紡錘車・砥石・鉄製品実測図

1 上ノ久保遺跡



第91図 鉄津実測図

揮団No	遺構名	区	層	種類	器種	法 量	成・整形技法の特徴			
							①焼成 口径 (13.0)	②色調 器高 (14.0)	③胎土 細砂粒含 沙粒含	④残存 口縁部～体部1/7 口縁部1/7 口縁部～体部窓削り 口縁部窓ナデ、体部窓削り
第75図 1	H-1号住	15	1	土師器	壺 高环 長胴甕	—	4.5 普通 —	褐色 普通 褐色	細砂粒含 沙粒含	口縁部窓ナデ、体部窓削り 口縁部窓ナデ、体部窓削り
2	H-1号住	15	1	土師器	壺 高环 長胴甕	(19.7)	—	—	口縁部窓ナデ、体部窓削り 口縁部～窓部窓ナデ、窓部窓削り	口縁部窓ナデ、体部窓削り
3	H-1号住	14	1	土師器	壺 長胴甕	—	—	—	口縁部窓ナデ、体部窓削り 口縁部窓ナデ、体部窓削り	口縁部窓ナデ、体部窓削り
4	H-3号住	15	1	土師器	壺 内	10.7	—	4.7 普通 —	褐色 細砂粒含 砂粒含	口縁部窓ナデ、体部窓削り 口縁部窓ナデ、体部窓削り
5	H-3号住	15	1	土師器	壺 内	12.9	—	4.1 普通 —	褐色 砂粒含	口縁部窓ナデ、体部窓削り 口縁部窓ナデ、体部窓削り
6	H-3号住	3	2	土師器	壺 环	12.1	—	4.2 普通 —	赤褐色 砂粒含	口縁部窓ナデ、体部窓削り 口縁部窓ナデ、体部窓削り
7	H-3号住	3	2	土師器	壺 环	13.6	—	5.2 普通 —	赤褐色 砂粒含	口縁部窓ナデ、体部窓削り 口縁部窓ナデ、体部窓削り
8	H-3号住	7	2	土師器	瓶 环	25.6	12.2	31.0 普通 —	褐色 砂粒含	口縁部窓ナデ、体部窓削り 口縁部窓ナデ、体部窓削り
9	H-4号住	7	2	土師器	土釜 須恵器	(25.4)	—	—	赤褐色 砂粒含	口縁部窓ナデ、体部窓削り 口縁部窓ナデ、体部窓削り
10	H-4号住	7	2	土師器	羽釜 壺	(20.8)	—	—	酸化焰 砂粒含	口縁部窓ナデ、体部窓削り 口縁部窓ナデ、体部窓削り
11	H-6号住	1	1	土師器	壺 内	—	—	(3.8) 普通 —	にぶい橙色 細砂粒含	口縁部～体部1/7 口縁部～体部1/7
12	H-6号住	9	1	土師器	高环 高环	(22.5)	—	—	にぶい橙色 細砂粒含	口縁部～环部1/5 口縁部～环部1/5
13	H-6号住	15	1	土師器	高环	(23.0)	—	(4.8) 普通 —	橙色 砂粒含	口縁部～环部1/5 口縁部～环部1/5
4	H-6号住	7	2	土師器	長胴甕	(19.5)	—	(26.5) 普通 —	明赤褐色 少環多含	口縁部～体部4/5 口縁部～体部4/5
5	H-7号住	7	2	土師器	壺 小形甕	(12.0)	—	(4.2) 普通 —	明赤褐色 少環少含	口縁部～环部2/3 口縁部～环部2/3
6	H-7号住	15	1	土師器	高环 邊	(14.6)	—	(14.2) 普通 —	にぶい橙色 少環少含	口縁部～体部4/5 口縁部～体部4/5
7	H-7号住	7	2	土師器	長胴甕	(22.4)	—	(33.4) 普通 —	明赤褐色 少環少含	口縁部～体部4/5 口縁部～体部4/5
第76図 1	H-8号住	6	2	土師器	壺 环	(12.4)	—	4.8 普通 —	にぶい橙色 細砂粒含	口縁部～体部1/2 口縁部～体部1/2
2	H-8号住	3	1	土師器	壺 环	(12.8)	—	(4.1) 普通 —	にぶい橙色 細砂粒含	口縁部～体部1/6 口縁部～体部1/6
3	H-8号住	2	2	土師器	高环	15.4	—	—	赤褐色 細砂粒含	口縁部窓ナデ、体部窓削り 口縁部窓ナデ、体部窓削り
4	H-8号住	11	2	土師器	高环	—	—	—	赤褐色 細砂粒含	上部ナデ、下部削り 口縁部窓ナデ、体部窓削り
5	H-8号住	15	1	土師器	小形甕	15.4	—	14.4 普通 —	赤褐色 小環多含	上部ナデ、下部削り 口縁部窓ナデ、体部窓削り
6	H-8号住	13*	1*	土師器	小形甕	16.2	—	15.6 普通 —	にぶい橙色 小環少含	口縁部窓ナデ、体部窓削り 口縁部窓ナデ、体部窓削り
7	H-8号住	15	2	土師器	小型瓶?	(18.0)	—	—	—	口縁部～体部1/5 口縁部～体部1/5
8	H-8号住	9	2	土師器	甕	19.2	—	—	橙色 細砂粒多含	口縁部～体部1/4 口縁部～体部1/4
9	H-8号住	7	1	須恵器	甕	—	—	—	青灰色 細砂粒含	口縁部窓目、頭部波状紋 頭部窓目を施す

第10表 住居址出土遺物観察表（1）

挿図No.	番号	遺構名	区	層	種類	器種	口径	底経	法	量				成・整形		技法の特徴		備考
										①焼成	②色調	③胎土	④焼成存	口縁部横ナデ、体部窓削り	内面			
第78図	1	H-9号住	4	2	土師器	壺	(14.8)	—	5.2	普通	橙色	細砂粒含	口縁部~体部2/3	口縁部横ナデ、体部窓削り	内面	口縁部横ナデ、体部ナデ	内面黒色	
	2	H-9号住	8	1	土師器	壺	(9.2)	(9.6)	9.4	普通	橙色	細砂粒含	片部1/4脚部2/3	口縁部横ナデ、体部窓削り	外面部	口縁部横ナデ、体部ナデ	外面一部スス付着	
	3	H-9号住	11	2	土師器	高壺	(14.2)	—	(5.2)	普通	橙色	細砂粒含	口縁部~体部1/3	口縁部横ナデ、体部窓削り	内面	口縁部横ナデ、体部窓削り	内面黒色	
	4	H-9号住	10	1・1	土師器	壺	(11.5)	—	4.4	普通	にぶい橙色	細砂粒含	片部1/4脚部2/3	口縁部横ナデ、体部窓削り	外面部	口縁部横ナデ、体部窓削り	外面一部スス付着	
	5	H-9号住	4	2	土師器	壺	(23.3)	—	—	普通	橙色	細砂粒含	口縁部~体部1/4	口縁部横ナデ、体部窓削り	内面	口縁部横ナデ、体部窓削り	内面黒色	
	6	H-9号住	8	1	土師器	長胴甕	—	—	—	普通	橙色	細砂粒含	口縁部~脚部1/4	口縁部横ナデ、体部窓削り	外面部	口縁部横ナデ、体部窓削り	外面一部スス付着	
	7	H-9号住	4	1・2	土師器	球胴甕	—	—	—	普通	橙色	細砂粒少含	脚部~底部2/3	脚部窓削り	内面	脚部窓ナデ	内面黒色	
	8	H-9号住	4	2	土師器	長胴甕	(19.4)	—	—	普通	淡橙色	細砂粒少含	脚部~底部2/3	脚上部窓削り、下部削り後範	内面	脚部窓ナデ	内面黒色	
	9	H-9号住	4	2	土師器	長胴甕	(18.6)	—	—	普通	橙色	細砂粒少含	脚部~底部2/3	脚上部窓削り、下部削り後範	内面	脚部窓ナデ	内面黒色	
第79図	1	H-10号住	3	2	土師器	壺	(13.3)	—	(3.8)	普通	橙色	細砂粒少含	口縁部~体部1/5	口縁部横ナデ、体部窓削り	内面	口縁部横ナデ、体部窓削り	内面	頭部指圧痕有
	2	H-10号住	3	2	土師器	高壺	(18.8)	—	—	赤褐色	細砂粒少含	口縁部~体部1/5	口縁部横ナデ、体部窓削り	外面部	口縁部横ナデ、体部窓削り	外面部	頭部指圧痕有	
	3	H-10号住	3	1	土師器	長胴甕	(20.0)	—	—	普通	にぶい橙色	細砂粒少含	口縁部~脚部1/4	口縁部横ナデ、体部窓削り	内面	口縁部横ナデ、体部窓削り	内面	
	4	H-11号住	13	1	土師器	壺	(14.8)	—	(3.8)	普通	橙色	細砂粒含	口縁部~体部1/5	口縁部横ナデ、体部窓削り	内面	口縁部横ナデ、体部窓削り	内面	
	5	H-11号住	16	1	須恵器	壺	(16.0)	—	(3.3)	普通	淡黄色	細砂粒少含	口縁部~体部1/5	回転横ナデ	内面	口縁部横ナデ、体部窓削り	内面	
	6	H-11号住	4	1	土師器	球胴甕	(21.0)	—	—	普通	にぶい橙色	細砂粒少含	口縁部~脚部1/5	回転横ナデ	内面	口縁部横ナデ、体部窓削り	内面	
	7	H-11号住	7	1	土師器	壺	(11.4)	—	(2.6)	普通	橙色	細砂粒少含	口縁部~脚部1/5	回転横ナデ	内面	口縁部横ナデ、体部窓削り	内面	
	8	H-13号住	3	1	土師器	壺	(24.2)	—	—	普通	にぶい橙色	細砂粒少含	口縁部~脚部1/6	回転横ナデ	内面	口縁部横ナデ、体部窓削り	内面	
	9	H-14号住	3	1	土師器	壺	(14.0)	—	(5.0)	普通	赤褐色	細砂粒少含	口縁部~体部1/3	回転横ナデ	内面	口縁部横ナデ、体部窓削り	内面	
	10	H-14号住	14	3	土師器	壺	(10.3)	—	(3.6)	普通	橙色	細砂粒少含	口縁部~体部1/4	回転横ナデ	内面	口縁部横ナデ、体部窓削り	内面	
第80図	1	H-12号住	6	2	土師器	壺	(12.3)	—	5.1	普通	にぶい橙色	細砂粒含	口縁部~体部1/3	回転横ナデ	内面	口縁部横ナデ、体部窓削り	内面	
	2	H-12号住	4	8	2・土師器	壺	(12.3)	—	4.9	普通	にぶい橙色	細砂粒含	口縁部~体部1/3	回転横ナデ	内面	口縁部横ナデ、体部窓削り	内面	
	3	H-12号住	7	1	土師器	壺	(13.0)	—	(4.1)	普通	にぶい橙色	細砂粒含	口縁部~体部1/3	回転横ナデ	内面	口縁部横ナデ、体部窓削り	内面	
	4	H-12号住	16	3	土師器	壺	(12.1)	—	5.4	良好	赤褐色	細砂粒少含	口縁部~体部1/3	回転横ナデ	内面	口縁部横ナデ、体部窓削り	内面	
	5	H-12号住	15	3	土師器	壺	(14.8)	—	4.6	良好	赤褐色	細砂粒少含	口縁部~体部1/3	回転横ナデ	内面	口縁部横ナデ、体部窓削り	内面	
	6	H-12号住	16	3	土師器	壺	(13.5)	—	5.1	普通	橙色	細砂粒少含	完形	口縁部横ナデ、体部窓削り	内面	口縁部横ナデ、体部窓削り	内面	
	7	H-12号住	15	3	土師器	壺	(13.7)	—	7.5	普通	橙色	細砂粒少含	完形	口縁部横ナデ、体部窓削り	内面	口縁部横ナデ、体部窓削り	内面	
	8	H-12号住	12	3	土師器	壺	(12.8)	—	4.5	良好	橙色	細砂粒少含	完形	口縁部横ナデ、体部窓削り	内面	口縁部横ナデ、体部窓削り	内面	
	9	H-12号住	15	3	土師器	高壺	(11.6)	—	10.6	良好	橙色	細砂粒少含	完形	口縁部横ナデ、体部窓削り	内面	口縁部横ナデ、体部窓削り	内面	
	10	H-12号住	12	3	土師器	高壺	(12.4)	—	—	赤褐色	細砂粒少含	完形	口縁部横ナデ、体部窓削り	内面	口縁部横ナデ、体部窓削り	内面		

第11表 住居址出土遺物観察表 (2)

揮園No.	遺構名	区	層	種類	器種	法 量	器高 口径 底経	器高 15.2	—	成・整形技法の特徴			内 面	備 考	
										①焼成 遷元焰	②色調 灰白色	③胎土 細砂粒含 砂粒少含	④残存 口縁部～坏部附近 はば完形	回転機ナデ	
11 H-12号住	須恵器	高坏	16	1	須恵器	—	9.5	—	14.8	普通	褐色	砂粒少含	口縁部～坏部附近 はば完形	回転機ナデ	回転機ナデ
12 H-12号住	土師器	小型甕	12	3	土師器	小型甕	—	15.8	6.7	普通	褐色	砂粒少含	口縁部～坏部附近 はば完形	回転機ナデ	回転機ナデ
13 H-12号住	土師器	小型甕	15	3	土師器	小型甕	—	15.3	6.7	普通	褐色	砂粒少含	口縁部～坏部附近 はば完形	回転機ナデ	回転機ナデ
14 H-12号住	土師器	甕	16	3	土師器	甕	(6.7)	5.3	12.8	普通	淡橙色	細砂粒含	口縁部～胴部1/3	回転機ナデ	回転機ナデ
15 H-12号住	土師器	小型甕	—	—	土師器	小型甕	—	—	—	普通	淡橙色	細砂粒含	胴部～底部2/3	削り	外側
第81図 1 H-12号住	土師器	長胴甕	12	3	土師器	長胴甕	19.2	4.2	35.1	普通	褐色	細砂粒多含	口縁部～胴部1/3	回転機ナデ	回転機ナデ
2 H-12号住	土師器	長胴甕	12	3	土師器	長胴甕	18.3	6.8	33.6	良好	褐色	細砂粒含	口縁部～胴部1/3	回転機ナデ	回転機ナデ
3 H-12号住	土師器	長胴甕	8	3	土師器	長胴甕	(23.0)	—	—	良好	褐色	細砂粒含	口縁部～胴部1/3	回転機ナデ	回転機ナデ
4 H-12号住	土師器	長胴甕	16	2	土師器	長胴甕	(23.2)	—	—	普通	褐色	細砂粒多含	口縁部～胴部1/3	回転機ナデ	回転機ナデ
第82図 1 H-15号住	土師器	坏	11	1	土師器	坏	(12.7)	—	—	普通	橙色	細砂粒含	口縁部～体部1/3	回転機ナデ	回転機ナデ
2 H-16号住	炉址	土師器	北	—	土師器	長胴甕	(26.8)	—	—	普通	赤褐色	細砂粒含	口縁部～胴部1/4	回転機ナデ	回転機ナデ
3 H-17号住	土師器	坏	4	2	土師器	坏	14.5	—	3.8	普通	橙色	細砂粒含	口縁部～体部1/3	回転機ナデ	回転機ナデ
4 H-17号住	土師器	坏	6	1	土師器	坏	12.1	—	3.6	普通	橙色	細砂粒含	口縁部～体部1/2	回転機ナデ	回転機ナデ
5 H-18号住	土師器	甕	P	1	土師器	甕	—	(7.1)	—	普通	明黄色	細砂粒少含	口縁部～胴下部1/4	削り	外側
6 H-19AB号住	土師器	坏	15	1	土師器	坏	(10.1)	—	—	普通	橙色	細砂粒少含	口縁部～体部1/8	回転機ナデ	回転機ナデ
7 H-19B号住	土師器	坏	5	1	土師器	坏	(14.7)	—	—	普通	赤褐色	細砂粒含	口縁部～胴部1/8	削り	外付着
8 H-19A号住	土師器	甕	—	—	土師器	小型甕	(14.0)	—	—	普通	赤褐色	細砂粒少含	口縁部～胴部1/8	回転機ナデ	回転機ナデ
9 H-20号住	土師器	坏	11	1	土師器	坏	(11.6)	—	—	普通	赤褐色	細砂粒少含	口縁部～体部1/4	削り	不明瞭
10 H-20号住	土師器	坏	11	1	土師器	坏	(12.0)	—	—	普通	赤褐色	細砂粒少含	口縁部～体部1/8	回転機ナデ	回転機ナデ
11 H-20号住	土師器	坏	11	1	土師器	坏	(13.8)	—	—	普通	橙色	細砂粒少含	口縁部～体部1/7	削り	外付着
12 H-21号住	須恵器	高坏	14	2	須恵器	高台付碗	(13.0)	—	—	遷元焰	灰白色	細砂粒少含	口縁部～体部1/3	回転機ナデ	回転機ナデ
第83図 1 H-22号住	土師器	坏	3	2	土師器	坏	(13.0)	—	4.6	普通	橙色	細砂粒含	口縁部～体部1/2	回転機ナデ	回転機ナデ
2 H-22号住	土師器	坏	10	2	土師器	坏	(11.2)	—	—	普通	橙色	細砂粒少含	口縁部～体部1/3	回転機ナデ	回転機ナデ
3 H-22号住	土師器	坏	10	2	土師器	坏	(13.0)	7.8	3.5	普通	橙色	細砂粒少含	口縁部～体部1/2	回転機ナデ	回転機ナデ
4 H-22号住	須恵器	盤状III	1	2	土師器	小型甕	(20.0)	—	—	遷元焰	明綠灰色	細砂粒含	口縁部～胴部1/4	削り	外付着
5 H-22号住	土師器	長胴甕	10	2	須恵器	盤状III	(15.7)	(11.8)	(4+5)	普通	褐色	細砂粒含	口縁部～体部2/3	回転機ナデ	回転機ナデ
6 H-22号住	土師器	甕	21	2	土師器	長胴甕	(21.2)	—	—	普通	褐色	細砂粒含	口縁部～胴部1/2	削り	外付着
7 H-22号住	須恵器	長厚壺?	6	2	須恵器	長厚壺?	—	—	—	遷元焰	灰白色	細砂粒多含	胴部1/6	回転機ナデ	回転機ナデ
8 H-24号住	土師器	坏	11	2	土師器	坏	(10.0)	—	—	普通	橙色	細砂粒少含	口縁部～体部1/5	削り	外付着
9 H-24号住	土師器	坏	3	2	土師器	坏	(11.4)	—	—	普通	橙色	細砂粒多含	口縁部～胴部1/4	削り	外付着
10 H-24号住	土師器	小型甕	11	2	土師器	小型甕	(18.0)	—	—	普通	褐色	細砂粒少含	口縁部～胴部1/2	削り	外付着
11 H-24号住	土師器	長胴甕	10	2	土師器	長胴甕	(25.2)	—	—	普通	褐色	細砂粒多含	口縁部～胴部1/2	削り	外付着

第12表 住居址出土遺物観察表 (3)

揮団No番号	遺構名	区	種類	器種	口径	底径	法 量	成・整形技法の特徴				備 考
								①焼成	②色調	③胎土	④残存	
第84図	H-23号住	15	1 土師器	壺	(12.8)	—	(2.8)	普通	細砂粒多含	口縁部～体部1/4	口縁部焼削り、体部焼削り	口縁部焼ナデ、体部焼ナデ
2	H-23号住	7	2 土師器	壺	(11.3)	—	3.2	普通	細砂粒多含	口縁部～体部1/2	口縁部焼ナデ、体部焼削り	口縁部焼ナデ、体部焼ナデ
3	H-23号住	12	2 土師器	壺	(12.8)	—	—	普通	細砂粒多含	口縁部～体部1/4	口縁部焼ナデ、体部焼削り	口縁部焼ナデ、体部焼ナデ
4	H-23号住	14	3 土師器	壺	(12.5)	—	—	普通	砂粒・小礫	口縁部～体部1/4	口縁部焼ナデ、体部焼削り	口縁部焼ナデ、体部焼ナデ
5	H-23号住	14	1 土師器	甕	(32.0)	—	—	普通	砂粒・小礫	口縁部～胴部1/3	口縁部焼ナデ、胴部焼削り	口縁部焼ナデ、胴部焼ナデ
6	H-23A号住	10	2 土師器	長胴甕	(19.8)	—	—	普通	明赤褐色	口縁部～胴上部1/5	口縁部焼削り、胴上部焼削り	口縁部焼ナデ、胴部焼ナデ
7	H-23B号住	12	3 土師器	長胴甕	(23.2)	—	—	普通	明赤褐色	口縁部～胴上部1/4	口縁部焼ナデ、胴部焼削り	口縁部焼ナデ、胴部焼ナデ
8	H-23A号住	6	2 須恵器	小皿	8.2	4.8	4.8	1.6	酸化焰	口縁部・小縫 砂粒・多含	回転機ナデ、底部回転窓切	回転機ナデ
9	H-23号住	11	2 須恵器	小皿	9.3	4.8	4.8	1.5	酸化焰	口縁部・小縫 砂粒・多含	回転機ナデ、底部回転窓切	回転機ナデ
10	H-23号住	15	2 須恵器	蓋	(14.8)	—	3.1	還元焰	灰白色	口縁部・小縫 砂粒・多含	回転機ナデ	回転機ナデ
11	H-23号住	6・11	2 須恵器	高台付碗	(18.8)	8.4	8.4	酸化焰	灰白色 にぶい橙色	口縁部・小縫 砂粒・多含	回転機ナデ	回転機ナデ
12	H-23B号住	8	2 須恵器	甕	(22.8)	—	—	還元焰	灰白色 にぶい橙色	口縁部・小縫 砂粒・多含	須恵器波状文	須恵器波状文
第85図	1 H-23号住	12～	土師器	壺	(11.0)	—	4.5	普通	にぶい橙色	口縁部・細砂粒含 ほぼ完形	口縁部焼ナデ、体部焼削り	一部スス付着
2	H-23号住	16	不明	土師器	小型甕	(13.0)	—	—	普通	口縁部～胴上部1/2	口縁部焼ナデ、胴部焼ナデ	口縁部焼ナデ、胴部焼ナデ
3	H-23号住	1	1・ 9～14	土師器	長胴甕	(18.0)	20.6	普通	橙色	砂粒・小縫 砂粒・多含	口縁部焼ナデ、胴部焼削り	口縁部焼ナデ、胴部焼ナデ
4	H-23号住	1	1	土師器	小型甕	(7.8)	—	—	普通	にぶい橙色 砂粒・多含	口縁部焼ナデ、体部焼削り	口縁部焼ナデ、胴部焼ナデ
5	H-23号住	9	~14	土師器	長胴甕	17.5	—	22	普通	にぶい橙色 砂粒・多含	口縁部焼ナデ、胴部焼削り	口縁部焼ナデ、胴部焼ナデ
6	H-23号住	11～	16	土師器	甕	(18.2)	5.4	22.6	普通	にぶい橙色 砂粒・多含	口縁部焼ナデ、胴部焼削り	口縁部焼ナデ、胴部焼ナデ
7	H-23号住	1	1・ 9～14	土師器	長胴甕	(21.4)	2.5	35	普通	にぶい橙色 砂粒・多含	口縁部焼ナデ、胴部焼削り	口縁部焼ナデ、胴部焼ナデ
第86図	1	H-25号住	14	2 須恵器	壺	(13.8)	(6.5)	(3.8)	酸化焰	口縁部～縫1/4 細砂粒少含	回転機ナデ	回転機ナデ
2	H-25号住	14	1 土師器	羽釜	(21.7)	—	—	酸化焰	砂粒	口縁部～縫1/7	回転機ナデ	回転機ナデ
3	H-25号住	北	土師器	羽釜	(21.8)	—	—	酸化焰	赤褐色	口縁部～縫1/7	回転機ナデ	回転機ナデ
4	H-27号住	甕	土師器	壺	(9.6)	—	—	普通	橙色	口縁部～体部1/7	回転機ナデ	回転機ナデ
5	H-27号住	甕	土師器	壺	11.5	—	4	普通	砂粒・小縫	口縁部・細砂粒含 砂粒・多含	回転機ナデ	回転機ナデ
6	H-27号住	2	2 土師器	壺	(10.1)	—	—	普通	砂粒・小縫	口縁部～体部1/7	回転機ナデ	回転機ナデ
7	H-27号住	甕	土師器	高不	(16.6)	—	—	普通	橙色	口縁部・細砂粒含 砂粒・多含	不明眞	不明眞
8	H-27号住	4	1 土師器	長胴甕	(25.2)	—	—	普通	砂粒・小縫	口縁部～胴上部1/8	不明眞	不明眞
9	H-27号住	3	2 土師器	長胴甕	(27.0)	—	—	普通	赤褐色 少含	口縁部～胴上部1/3	口縁部焼ナデ、胴部焼削り	口縁部焼ナデ、胴部焼ナデ
10	H-27号住	8	2 須恵器	甕	(11.4)	—	—	還元焰	灰色	口縁部・細砂粒含 砂粒・多含	回転機ナデ	回転機ナデ
11	H-27号住	2	2 須恵器	壺身	(12.8)	—	(3.7)	還元焰	灰色	口縁部・細砂粒含 砂粒・多含	回転機ナデ	回転機ナデ
12	H-27号住	8	1 須恵器	壺	(9.4)	—	(3.4)	還元焰	灰色	口縁部・細砂粒含 砂粒・多含	回転機ナデ、底部静止窓切	回転機ナデ

第13表 住居址出土遺物觀察表 (4)

拝図No	番号	遺物名	区	層	種類	器種	法 量	器高 口径 底径	成・整形技法の特徴			備考		
									①焼成 ②色調	③胎土 ④焼成 在	外 内 面			
第87図	1	H-31A1号住	竈	須恵器	环	須恵器	环	(12.1)	—	3.9 還元焰 灰色	口縁部～底部回転糸切り 細砂粒少含	回転横ナデ、底部回転糸切り 回転横ナデ		
	2	H-31A1号住	竈	須恵器	高台付碗	須恵器	高台付碗	(12.5)	—	5 酸化焰 灰色	細砂粒少含	回転横ナデ、底部回転糸切り 回転横ナデ		
	3	H-31A1号住	12	2	須恵器	高台付碗	須恵器	(12.4)	—	(4.8) 還元焰 灰白色	細砂粒少含	回転横ナデ、底部回転糸切り 回転横ナデ		
	4	H-31A1号住	17	1	須恵器	环	須恵器	(14.0)	(8.0)	3.5 還元焰 灰白色	細砂粒少含	回転横ナデ、底部回転糸切り 回転横ナデ		
	5	H-31A1号住	19	2	須恵器	高台付碗	須恵器	(13.2)	(5.8)	— 還元焰 灰色	細砂粒少含	回転横ナデ、底部回転糸切り 回転横ナデ		
	6	H-31A1号住	17	1	須恵器	高台付碗	須恵器	(14.4)	(7.5)	— 還元焰 灰白色	細砂粒少含	回転横ナデ、底部回転糸切り 回転横ナデ		
	7	H-31A1号住	14	2	須恵器	高台付碗	須恵器	(14.4)	(7.5)	— 還元焰 明青灰色	細砂粒少含	回転横ナデ、底部回転糸切り 回転横ナデ		
	8	H-31A1号住	竈	須恵器	高台付碗	須恵器	高台付碗	—	(7.8)	— 還元焰 灰白色	細砂粒少含	回転横ナデ、底部回転糸切り 回転横ナデ		
	9	H-31A1号住	2	1	須恵器	高台付皿	須恵器	(13.4)	(7.8)	(1.9) 還元焰 灰白色	細砂粒少含	回転横ナデ、底部回転糸切り 回転横ナデ		
	10	H-31A1号住	竈	須恵器	羽釜	須恵器	羽釜	(19.6)	—	— 酸化焰 赤褐色	口縁部1/6	回転横ナデ		
	11	H-31A1号住	竈	須恵器	羽釜	須恵器	羽釜	(19.0)	—	— 酸化焰 褐色	口縁部1/6	回転横ナデ		
	12	H-31A1号住	17	2	須恵器	耳皿	須恵器	(20.0)	—	— 酸化焰 にぶい紫色	口縁部1/6	回転横ナデ		
	13	H-31A1号住	4	2	土師器	耳皿	土師器	(10.6)	—	— 酸化焰 明青灰色	細砂粒多含 1/4	回転横ナデ、底部回転糸切り 回転横ナデ		
	14	H-31A2号住	竈	須恵器	大甕	須恵器	大甕	—	— 還元焰	細砂粒少含	頭部波状沈縫文 頭部波状沈縫文	頭部波状沈縫文		
第88図	1	H-28号住	竈	土師器	長胴甕	土師器	長胴甕	(20.8)	—	— 普通	口縁部～胸上部1/8	口縁部横ナデ、胸部窓削り	窓きか?	
	2	H-28号住	11	3	土師器	長胴甕	土師器	(20.3)	—	— 普通	細砂粒多含	口縁部横ナデ、胸部窓削り	口縁部横ナデ、胸部窓削り	
	3	H-28号住	11	3	土師器	長胴甕	土師器	(24.8)	—	— 普通	細砂粒少含	口縁部横ナデ、胸部窓削り	口縁部横ナデ、胸部窓削り	
	4	H-33号住	9-10	1	須恵器	土釜	須恵器	(17.2)	—	— 酸化焰	砂粒少含	口縁部横ナデ、胸部窓削り	口縁部横ナデ、胸部窓削り	
	5	H-34号住	13	2	土師器	环	土師器	(13.4)	—	— 普通	細砂粒少含	口縁部横ナデ、胸部窓削り	口縁部横ナデ、胸部窓削り	
	6	H-34号住	13	2	土師器	环	土師器	(14.0)	—	— 普通	砂粒少含	口縁部横ナデ、胸部窓削り	口縁部横ナデ、胸部窓削り	
	7	H-34号住	14	3	須恵器	环	須恵器	(10.5)	6.6	3.1 還元焰 灰白色	細砂粒多含 砂粒・小甕	口縁部横ナデ、底部静止窓切り 口縁部横ナデ、底部静止窓切り	口縁部横ナデ、底部静止窓切り 口縁部横ナデ、底部静止窓切り	
	8	H-34号住	13	2	土師器	長胴甕	土師器	(24.8)	—	— 普通	砂粒少含	口縁部横ナデ、底部静止窓切り 口縁部横ナデ、底部静止窓切り	口縁部横ナデ、底部静止窓切り 口縁部横ナデ、底部静止窓切り	
第89図	1	H-35号住	7	1	須恵器	环	須恵器	(12.0)	6.5	2.9 還元焰 灰黄色	細砂粒多含 少含	口縁部横ナデ、底部静止窓切り 回転横ナデ、底部静止窓切り	回転横ナデ、底部静止窓切り 回転横ナデ	
	2	H-35号住	2	1	須恵器	高台付碗	須恵器	高台付碗	(7.5)	— 還元焰 灰白色	細砂粒少含	回転横ナデ、底部静止窓切り 回転横ナデ、底部静止窓切り	回転横ナデ、底部静止窓切り 回転横ナデ	
	3	H-35号住	11	1	須恵器	高台付碗	須恵器	高台付碗	—	(7.5)	— 還元焰 灰褐色	細砂粒少含	回転横ナデ、底部静止窓切り 回転横ナデ、底部静止窓切り	回転横ナデ、底部静止窓切り 回転横ナデ
	4	H-35号住	1	1	須恵器	壺	須恵器	(19.5)	—	— 酸化焰	細砂粒少含	回転横ナデ、底部静止窓切り 回転横ナデ	回転横ナデ、底部静止窓切り	
	5	不明			土師器	环	土師器	(11.6)	—	(4.5) 普通	細砂粒少含	回転横ナデ、底部静止窓切り 回転横ナデ	回転横ナデ、底部静止窓切り	
	6	4~5トレンチ			土師器	环	土師器	(10.0)	—	(4.0) 普通	細砂粒少含	回転横ナデ、底部静止窓切り 回転横ナデ	回転横ナデ、底部静止窓切り	
	7	12トレンチ			須恵器	环	須恵器	(11.3)	(6.0)	(4.2) 酸化焰 にぶい紫色	細砂粒少含	回転横ナデ、底部静止窓切り 回転横ナデ	回転横ナデ、台付	
	8	H-34号住	12	1	須恵器	羽釜	須恵器	(20.0)	—	— 酸化焰	口縁部～露部1/4	口縁部横ナデ、底部回転横ナデ		
	9	H-24号住	12	1	須恵器	羽釜	須恵器	(20.6)	—	— 酸化焰	口縁部～露部1/6	口縁部横ナデ、底部回転横ナデ		
	10	H-34号住	12	2	須恵器	羽釜?	須恵器	(8.2)	—	— 酸化焰	細砂粒少含	回転横ナデ後窓削り	回転横ナデ	

第14表 住居址出土遺物観察表 (5)

**編物石** (第92図・第93図) 編物石と判断される棒状礫は55点検出されている。石材はすべて安山岩であり、碓氷川などの近場で入手した河川礫とみられる。大きさ・形状は、第92図のように長幅比2:1程度の棒状の形状のものが選択的に使用されている。また、長さ12cm・幅6cm程度のものを中心としていることが分かる。なお、住居址別にみても時期による変化は認められない。次に重量別にみると、第93図のように200g~900gまでバラついており、大きさ・形状のグラフのような集中は認められない。以上の結果からみて、編物石では選択時に重量よりも大きさ・形状が意味を持っていたと判断される。

碓氷川流域での編物石の場合、安山岩にほぼ限定されており、鏑川流域のような結晶片岩製のものはほとんど含まれていない。入手場所は碓氷川流域であった可能性が高い。編物石の入手場所から得られる情報については、行動領域を推定する際に重要な資料となり得る。計測値と石材組成データを集積してゆく必要があろう。

(大工原 豊・中澤信忠)

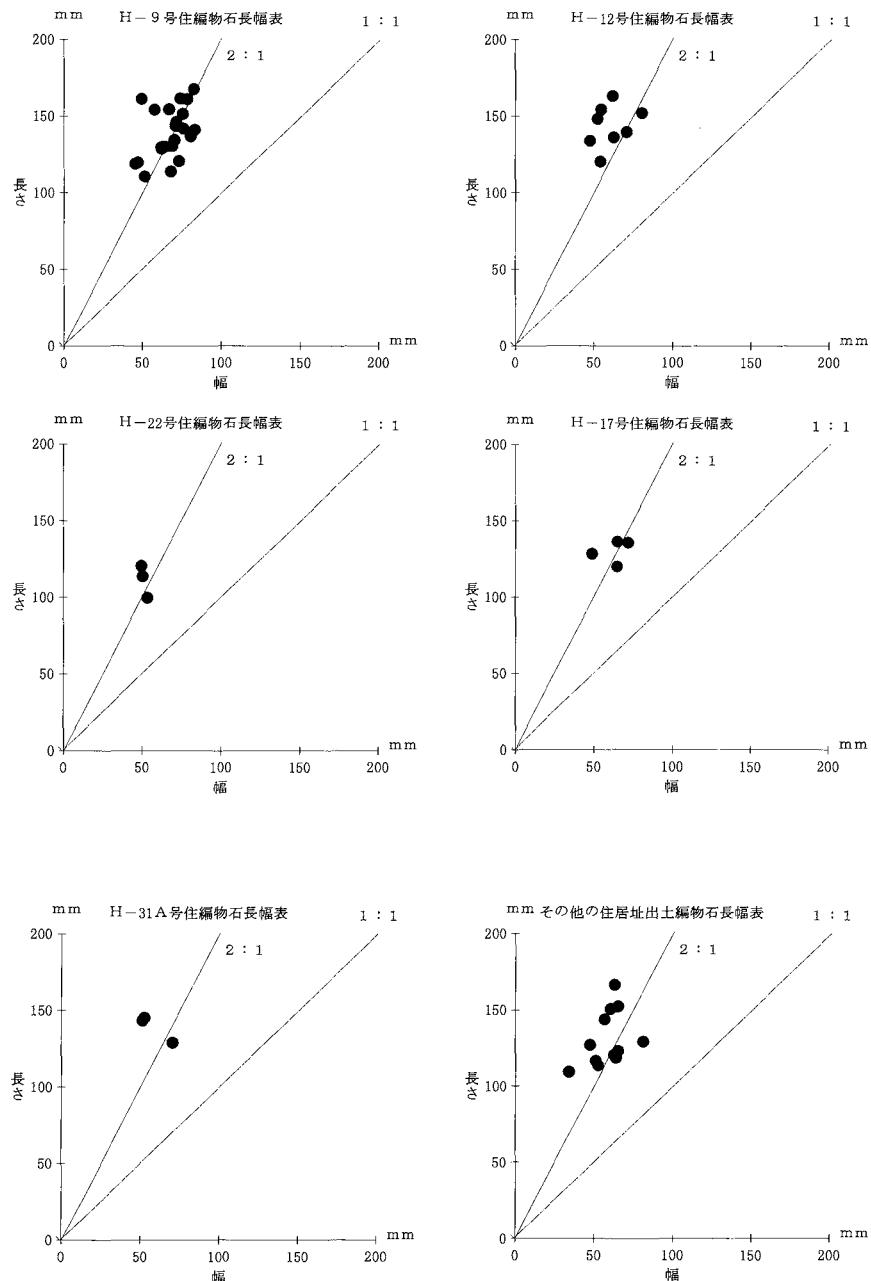
挿図No.	番号	遺構名	区	層	器種	石材	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重量(g)	特徴
第90図	1	J-2			白玉	滑石	9.14	8.75	3.76	(0.4)	
	2	H-6	15	1	白玉	滑石	20.23	18.96	12.67	6.7	未成品
	3	H-9	13	1	素材剥片	滑石	66.9	35.48	13.27	42.8	
	4	H-23	16	2	素材剥片	滑石	55.3	27.24	11.88	23.7	
	5	H-17			紡錘車	滑石	43.96	40.3	23	57.9	外面に夥しい製作痕がみられる、丹念に磨かれる
	6	H-1	14	1	火打ち石	石英	42.3	19.16	20.14	25.4	縁辺部に微細な剝離
	7	H-8	14	2	砥石	砥沢石	117	61.98	56.03	463.8	研磨面は大きく湾曲
	8	H-24	9	1	砥石	砥沢石	75.14	56.51	30.43	157.8	研磨面は大きく湾曲
	9	H-31A			砥石	砥沢石	60.87	32.63	16.16	(40.8)	未成品、側面に穿孔を有する

第15表 白玉・素材剥片・紡錘車・砥石観察表

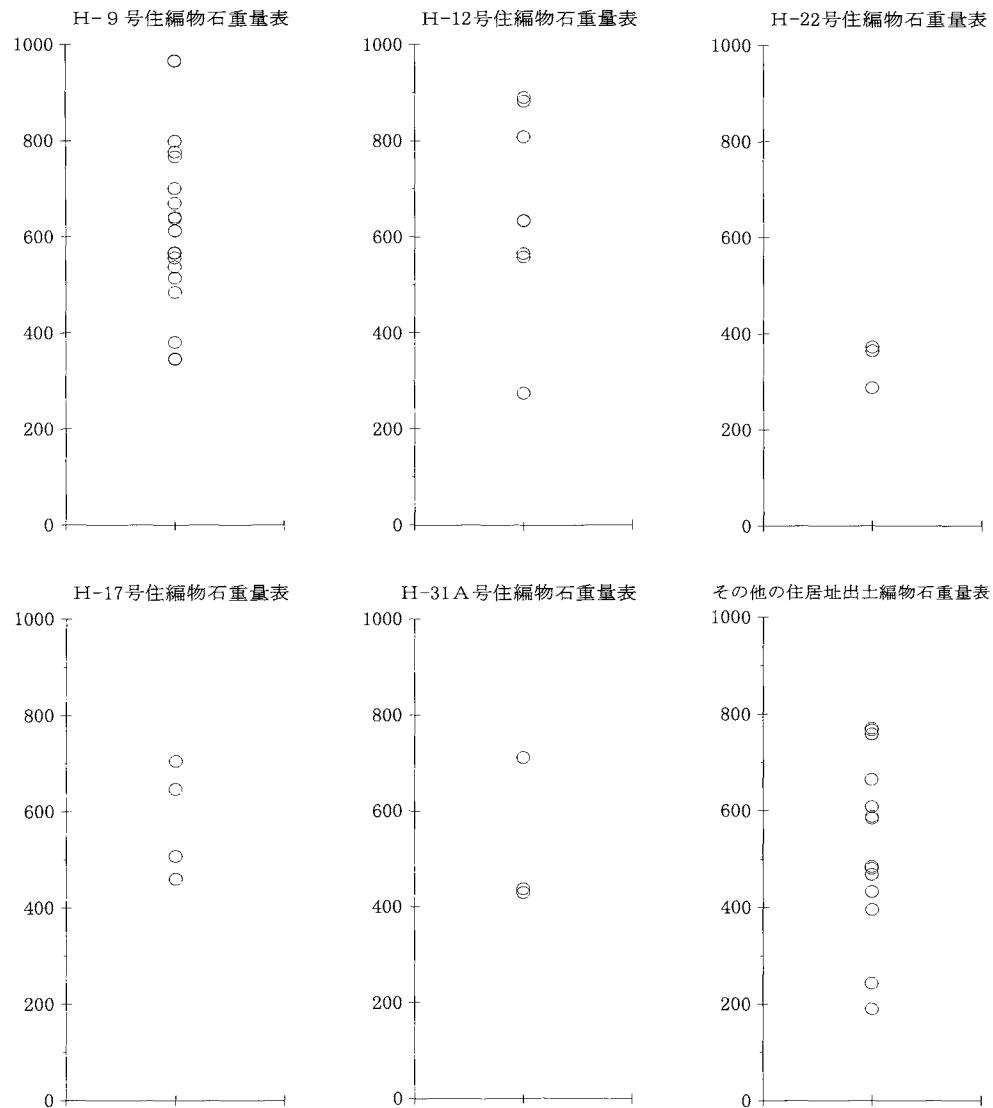
挿図No.	遺構名	器種	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重量(g)
—	H 3.10.1	刀子	64.48	16.45	—	10.9
—	H 3.10.1	不明	41.26	27.07	5.17	8.7
第90図	H 3.9.1	鎌	65.71	24.95	5.48	13.2
—	H 9.10.1	鉄滓	18.46	12.83	8.21	3.7
第91図	H14.14.1	鉄滓	74.94	47.18	27.64	100.1
第90図	H14.14.3	刀子	113.86	17.24	5.49	6.0
—	H19.10.1	不明	27.29	11.24	7.93	3.0
第90図	H23.11竈	刀子	113.86	12.61	4.66	20.4
—	H23A	鉄滓	36.93	26.99	20.30	19.6
第90図	H24.6.2	鎌	55.68	19.31	7.88	14.0
第91図	H27	鉄滓	43.40	20.14	20.02	22.4
第91図	H27.6.2	鉄滓	49.06	42.73	24.14	64.6
—	H28.6.2	錐	33.97	2.67	—	1.0
第91図	H31A.8.1	鉄滓	53.01	28.87	20.15	44.9
第91図	H31A.8.1	鉄滓	49.04	39.32	17.17	40.3
第91図	H31A.8.2	鉄滓(椀形滓鉄)	95.07	86.39	32.11	298.8
第91図	H34.12.2	鉄滓(椀形滓鉄)	100.07	73.17	35.22	248.6
第91図	5トレンチ	鉄滓	31.50	26.11	20.22	25.1

第16表 鉄製品計測表

#### IV 遺構各説



第92図 編物石の大きさ



第93図 編物石の重量グラフ

## IV 遺構各説

### (4) 中世

#### a 遺構

中世の遺構としては、館址の堀と判断される溝が2条検出された。この溝は約100mの距離を隔てて平行に走っており、規模は異なるものの、規則性が認められた(全体図参照)。また、現在の地割りを重ね合わせると、約100mの方形区画が浮かび上がってくる。したがって、中世館址の東辺と西辺を区画する溝と推定される。以下、各溝の特徴について述べる。

**M—1号溝** (第94図) 調査区のほぼ中央で検出された。Y—1号住居址の一部を壊して掘られている。確認面での上幅約4.0m、深さ2.0mでU字形を呈する。覆土には少なくとも2回以上、堀ざらいが行われたことを示す不整合面が認められる。また、下層覆土にも浅間B軽石(As—B: 1108年降下)が含まれているが、純層ではない。したがって、それ以降のものである。覆土中からは縄文時代以降の遺物が少量検出されたが、すべて流れ込みによるものであった。

特筆すべき遺物としては、特殊な状態で検出された松鶴鏡がある。この鏡は東側面の底面から約1mの位置に、鏡背を上にして水平に差し込まれた状態で出土した。検出されたのは、側面にこびりついていたローム性の覆土を除去している精査の最終段階であり、完全に側面に埋め込まれた状態で、掘り込みも確認されなかった。こうした状況から意図的開削直後に埋め込まれたものであった可能性が高い。この松鶴鏡鏡は後述のとおり、平安時代末～鎌倉時代初期(12世紀後半～13世紀初頭)のものと判断されることから、開削時期もほぼこの時期と推定される。これは浅間B軽石の堆積状態とも整合性がある。

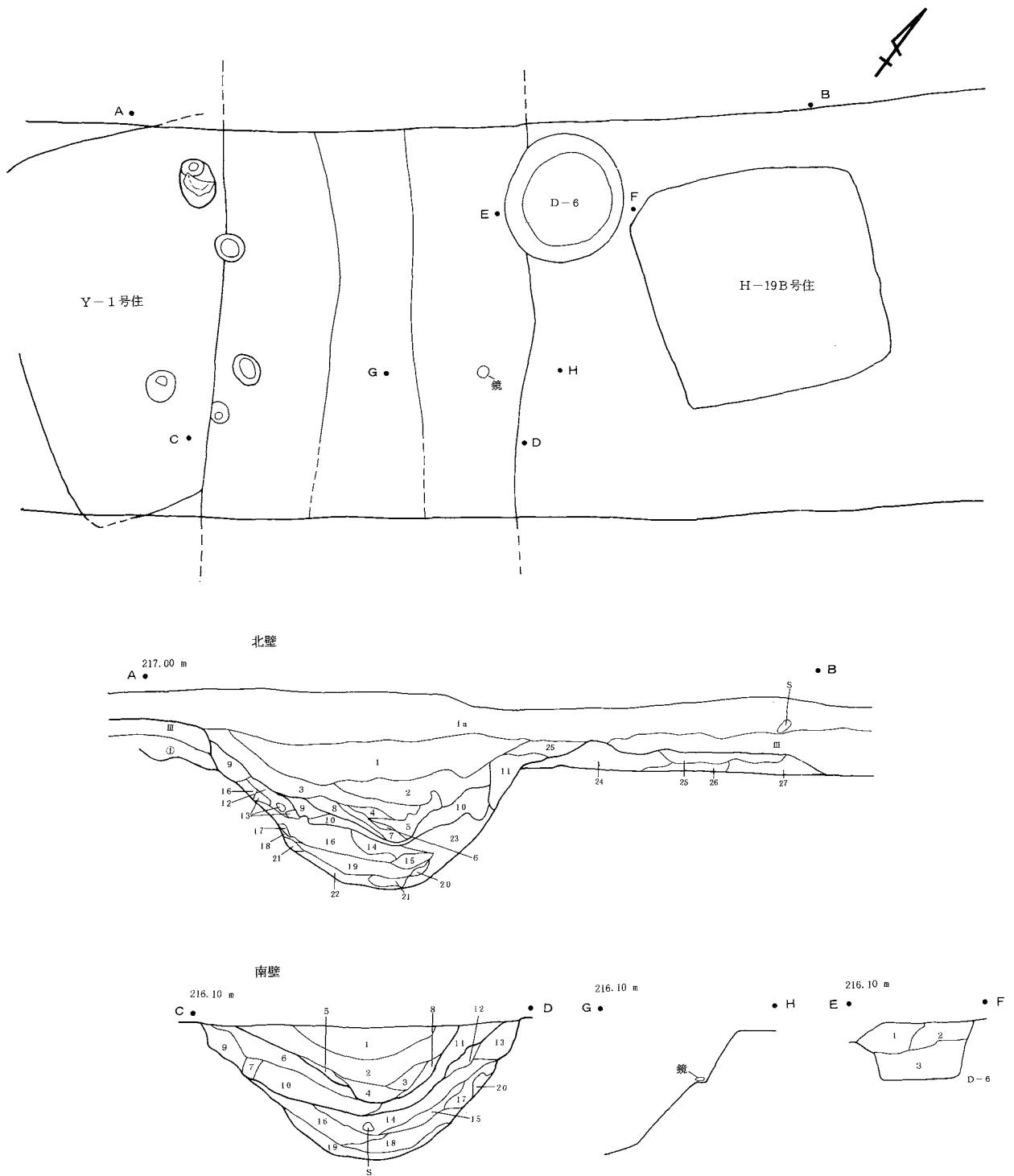
**M—2号溝** (第95図) 調査区の西端で検出された。J—5号住居址の一部を破壊して掘られている。確認面での上幅1.4m、深さ0.6mのU字形を呈する。覆土には浅間B軽石を含む土層(IIa層とほぼ同一)が堆積しており、中世の遺構であることは確実である。遺物は隣接する縄文時代のものが少量検出された程度であり、時期を特定できるものは検出されなかった。

(大工原 豊)

#### b 遺物

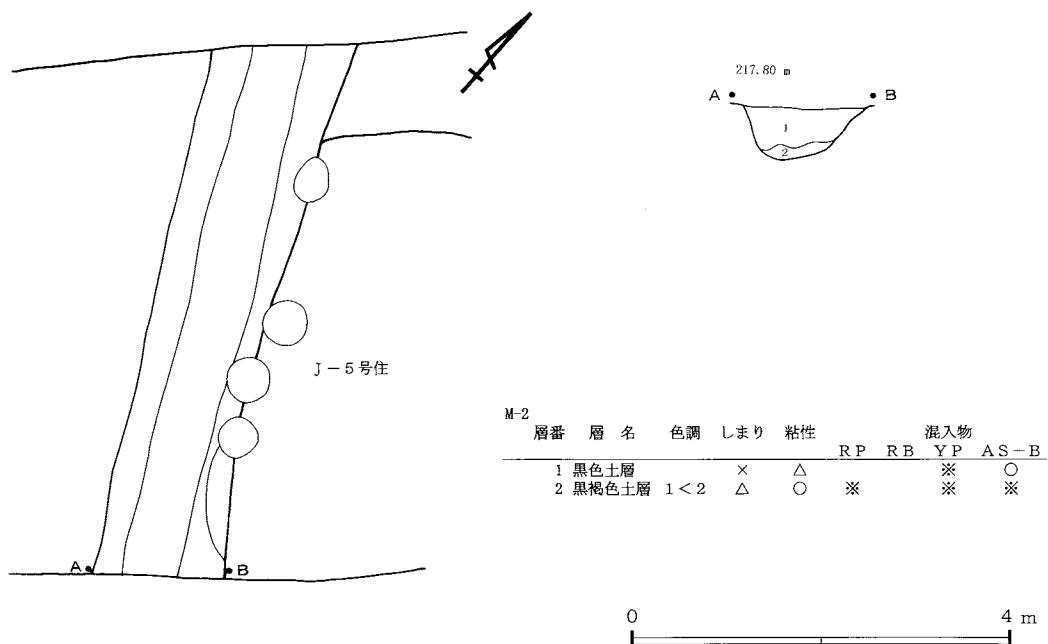
**和鏡** (第96図) 直径11.5cmの円鏡である。鏡背文様に松枝と2羽の鶴を組み合わせる、いわゆる松鶴鏡である。材質は白銅で、重量は191.14gである。厚さは2.0mmである。縁は直角式中縁で、高さは7.4mmである。界囲は中線単圈であり、鉢は花薬座鉢である。鏡背文様は、内区に二羽の鶴を鉢を隔てて両側に反対の方向に飛交させ、また、二つの松枝を1本づつ片方の鶴と同じ向きに描き分けている。外区には6本の松枝がある。鏡背文様の彫りはあまり深くない。

(深町 真)

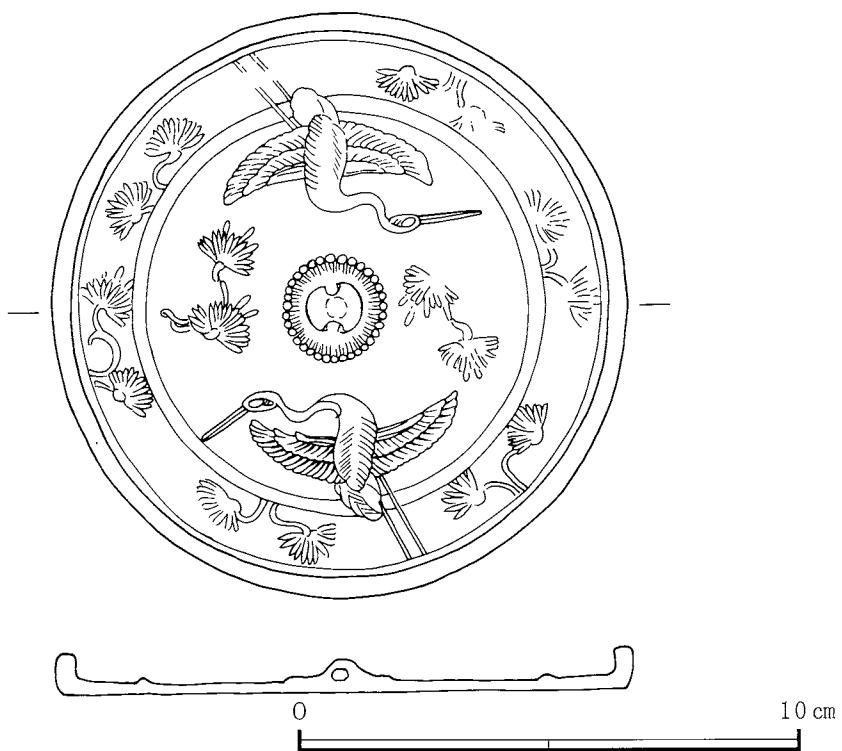


M-1号溝 層番	層名	色調	しまり	粘性	R P	R B	混入物	備考
北壁	1 暗褐色土層		○	○	△	※	※	△
北壁	2 暗褐色土層	1 > 2	○	△	△	△	△	△
北壁	3 褐色土層	2 < 3	○	○	○	○	△	△
北壁	4 黒褐色土層	3 > 4	○	○	○	※	△	△
北壁	5 褐色土層	3 < 5	○	○	○	○	△	△
北壁	6 黒褐色土層	4 > 6	○	○	○	※	△	△
北壁	7 暗褐色土層	6 < 7	△	○	○	△	△	△
北壁	8 黑褐色土層	7 > 8	△	○	○	※	△	△
北壁	9 暗褐色土層	8 < 9	△	○	○	※	△	△
北壁	10 暗褐色土層	5 > 10	△	○	○	※	△	△
北壁	11 黑褐色土層	10 > 11	△	○	○	※	※	※
北壁	12 褐色土層	3 > 12	△	○	○	○	△	△
北壁	13 黄褐色土層	12 < 13	△	○	○	△	△	△
北壁	14 暗褐色土層	11 < 14	△	○	○	△	△	△
北壁	15 黄褐色土層	14 < 15	△	○	○	○	○	○
北壁	16 黑褐色土層	14 > 16	△	○	○	※	○	○
北壁	17 暗褐色土層	16 < 17	△	○	○	○	△	△
北壁	18 黄褐色土層	17 < 18	×	○	○	○	○	○
北壁	19 暗褐色土層	16 < 19	△	○	○	○	△	△
北壁	20 暗褐色土層	19 < 20	△	○	○	○	○	○
北壁	21 明黄褐色土層	20 < 21	×	○	○	○	○	○
北壁	22 暗褐色土層	21 > 22	△	○	○	○	○	○
北壁	23 黑褐色土層	11 < 23	△	○	○	○	○	○
北壁	24 暗褐色土層	1 < 24	○	○	○	○	○	○
北壁	25 暗褐色土層	24 > 25	○	○	○	○	○	○
北壁	26 黑褐色土層	25 > 26	○	○	○	○	○	○
北壁	27 暗褐色土層	26 < 27	○	○	○	○	○	○
南壁	1 暗褐色土層		○	○	△	※	※	※
南壁	2 暗褐色土層	1 > 2	○	○	△	△	※	※
南壁	3 黑褐色土層	2 > 3	△	○	○	○	○	○
南壁	4 黑褐色土層	3 > 4	△	○	○	○	○	○
南壁	5 暗褐色土層	4 < 5	○	○	○	○	○	○
南壁	6 褐色土層	5 < 6	○	○	○	○	○	○
南壁	7 褐色土層	6 > 7	△	○	○	○	○	○
南壁	8 褐色土層	3 < 8	○	○	○	○	○	○
南壁	9 黑褐色土層	1 > 9	△	○	○	○	○	○
南壁	10 黑褐色土層	9 > 10	○	○	○	○	○	○
南壁	11 暗褐色土層	10 < 11	○	○	○	○	○	○
南壁	12 暗褐色土層	11 > 12	○	○	○	○	○	○
南壁	13 暗褐色土層	11 > 13	△	○	○	○	○	○
南壁	14 黑褐色土層	10 > 14	△	○	○	○	○	○
南壁	15 黑褐色土層	11 > 15	△	○	○	○	○	○
南壁	16 黑褐色土層	15 > 16	△	○	○	○	○	○
南壁	17 褐色土層	15 < 17	△	○	○	○	○	○
南壁	18 褐色土層	16 < 18	△	○	○	○	○	○
南壁	19 褐色土層	18 < 19	△	○	○	○	○	○
南壁	20 黑褐色土層	17 > 20	△	○	○	○	○	○
D-6 -1 黑褐色土層			△	○	○	○	○	○
2 黃褐色土層		1 < 2	×	△	○	○	○	○
3 褐色土層		2 ≈ 3	×	△	○	○	○	○

第94図 M-1号溝実測図



第95図 M-2号溝実測図



第96図 和鏡実測図

## 2 桜林遺跡

### (1) 平安時代

#### a 遺構

この時期の遺構としては、住居址3軒と、大溝1条が検出されている。

#### 住居址（第98図～第100図）

3軒検出された。諸属性は第17表のとおりである。3軒が重複しており、順次東から西へ造り替えられていったことが竈の検出状態からはっきりと確認できる。いずれの住居址も小形で竪穴も浅い。最も古いH-1号住居址は竈位置が北であるが、それ以外は東に位置している。

#### 遺物出土状況（第98図～第100図）

全体として遺物出土量は少ない。いずれの住居址でも竈周辺に遺物が偏在する傾向が認められる。この時期の住居址では一般的な傾向である。なお、H-2号住では1層（上層）では南半分に遺物が偏在するが、これは住居が北傾斜面に構築されているためである。

#### 溝

M-1号溝（第101図） 上幅約5m、深さ0.8mの規模である。断面は一部オーバーハングしていたり、底面には浅いピット状の窪みが多数認められ、形状が不規則である。また、中心部分には細い溝に沿ってピットが連続的に認められる。上幅の規模に比べて浅すぎることと、底面に多数のピット状の窪みがあることからみて、掘削途中であった可能性がある。なお、覆土上層にAs-B軽石が純層で堆積しており、奈良・平安時代頃の遺構と推測される。

### (2) 中・近世

#### 溝

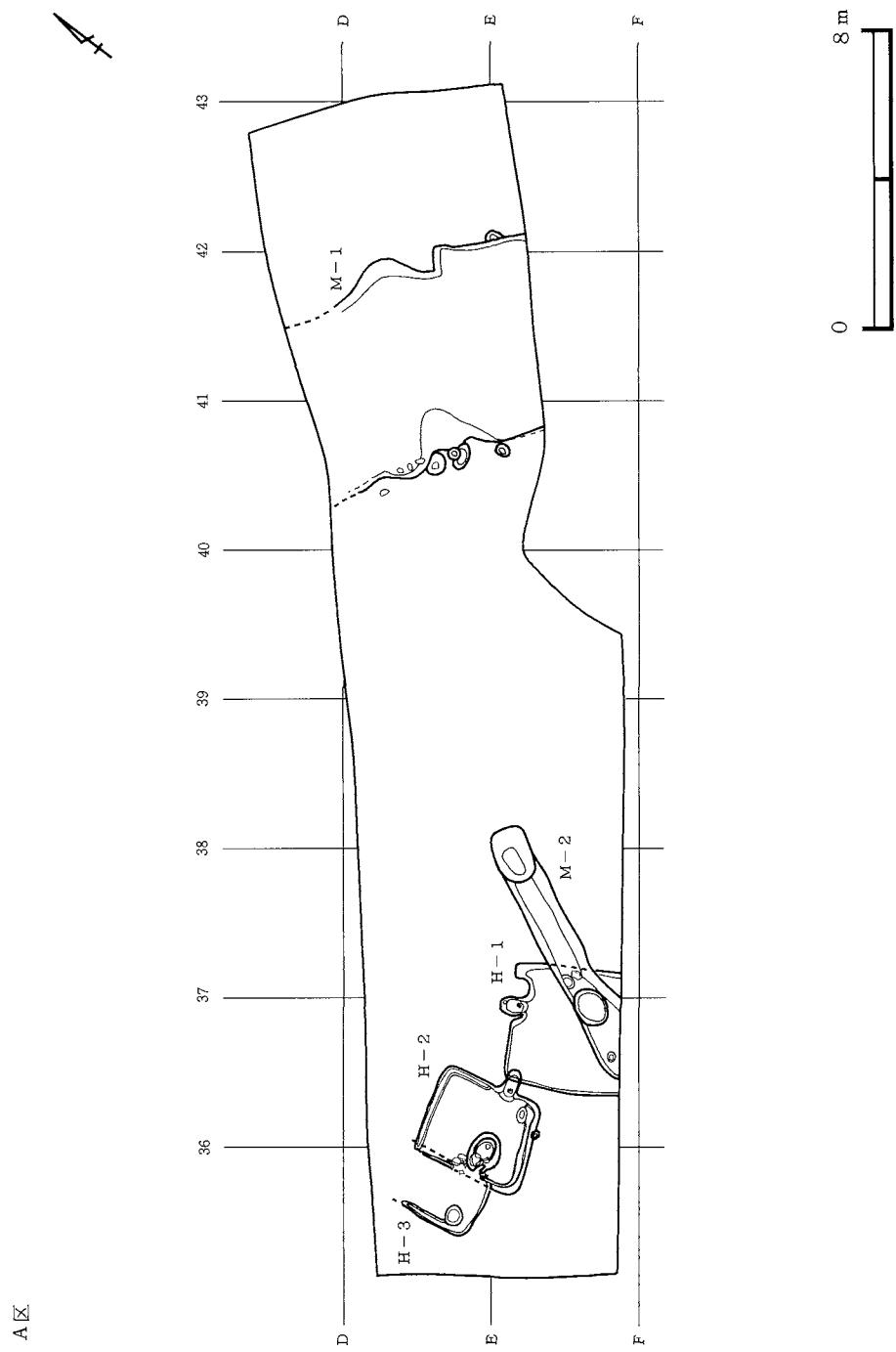
M-2号溝（第101図） 上幅約1m、深さ0.4mで断面は逆台形状を呈する。H-1号住居址を壊して掘られており、住居址の北約4mの位置で途切れている。覆土にはAs-B軽石を含む土層（IIa層相当）であり、中世から近世前半の遺構と判断される。

#### b 遺物

#### 土器（第102図）

住居址3軒であったことから出土遺物は比較的少ない。第102図に図示した。また、遺物の特徴は第19表のとおりである。

（大工原 豊）



第97図 桜林遺跡全図

住居名	平面形態	規 模 (m)			貼床	主軸方向	土 坑	柱穴 配列	竪 竪	構造	天 上 右 支脚	主軸方向	時 期	出土土器 重量 (kg)	備 考	
		長 軸	短 軸	深 さ												
H-1号住	小形長方形	-	3.22	0.13		N-330°-E				北・東寄	B		N-339°-E	9C後半	2.942	
H-2号住	小形方形	2.88	2.64	0.42		N-348°-E				東・南寄	B		N-72°-E	9C後半	2.118	
H-3号住	小形長方形	-	1.78	0.22	○	N-351°-E				東・南寄	C	○	N-85°-E	10C前半	1.111	壁溝

平面状態 大形：6m以上 中形：4～6m 小形：4m以下  
 竪構造 A：ローム+黒色土 B：ローム+黑色土+袖芯+河川礫 C：ローム+黒色土+河川礫 D：地山削り出し

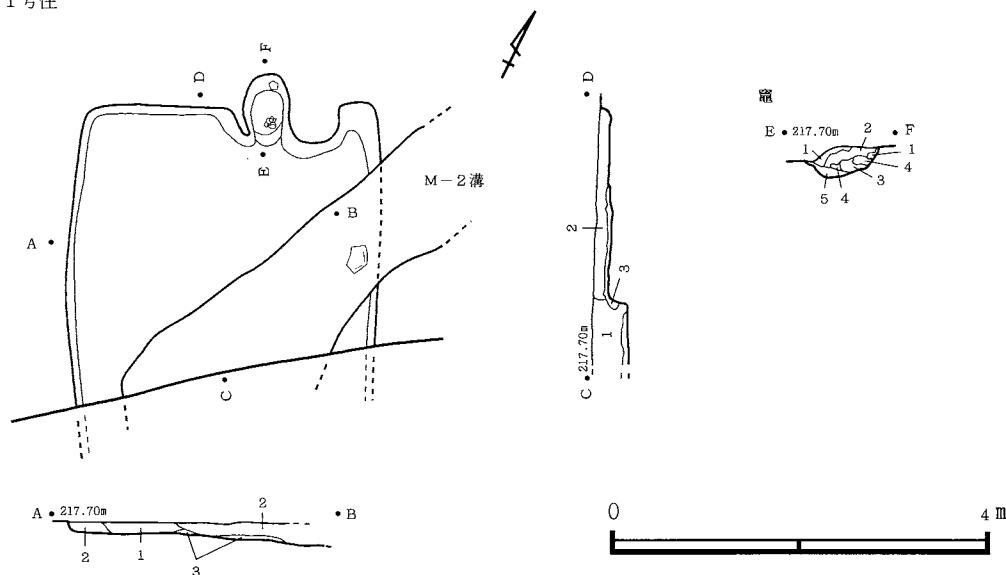
第17表 桜林遺跡・平安時代の住居址観察表

住居名	平面形態	規 模 (m)			貼床	主軸方向	土 坑	柱穴 配列	竪 竪	構造	天 上 右 支脚	主軸方向	時 期	出土土器 重量 (kg)	備 考	
		長 軸	短 軸	深 さ												
H-4号住	小形方形	-	-	0.39		N-358°-E		○		東・中央	A		N-60°-E	10C後半	0.865	
H-5号住	小形長方形	-	3.02	0.35		N-355°-E	○	○		東・南寄	A		N-88°-E	10C前半	2.436	

平面状態 大形：6m以上 中形：4～6m 小形：4m以下  
 竪構造 A：ローム+黒色土 B：ローム+黑色土+袖芯+河川礫 C：ローム+黒色土+河川礫 D：地山削り出し

第18表 五ヶ遺跡・平安時代の住居址観察表

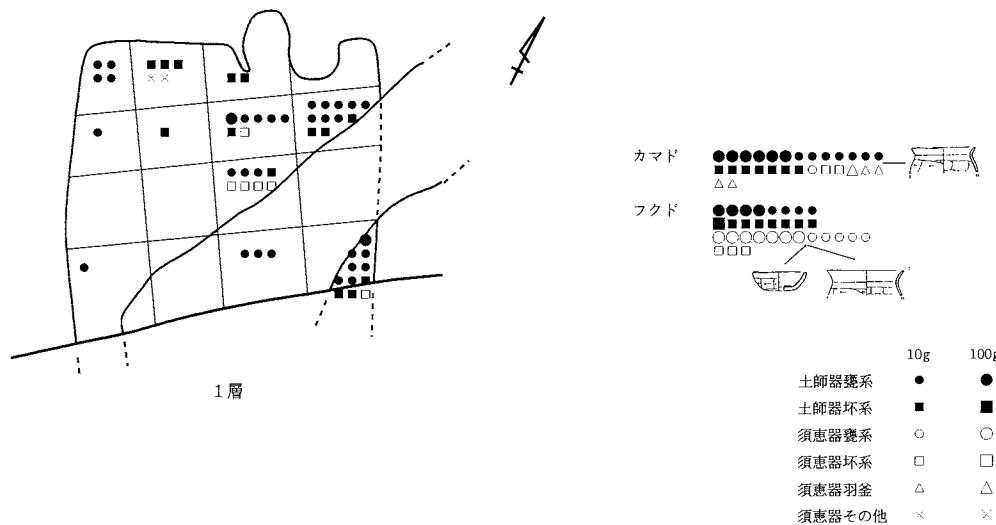
## H-1号住



## H-1号住

層番	層名	色調	しまり	粘性	混入物			
					R P	R B	Y P	焼土
1	暗黄褐色土層		×	△	○	◎	×	
2	黒褐色土層	1 > 2	△	△	※	×	×	
3	暗黄褐色土層	2 < 3	○	○	△	△	×	
1	黒褐色土層		△	△	※	※	※	△
2	暗黄褐色土層	1 < 2	△	△	△	○	△	○
3	暗赤褐色土層	2 > 3	△	△	△	△	※	◎
4	黄赤褐色土層	3 < 4	○	○	○	◎	※	○
5	暗赤褐色土層	4 > 5	△	△	△	※	※	◎

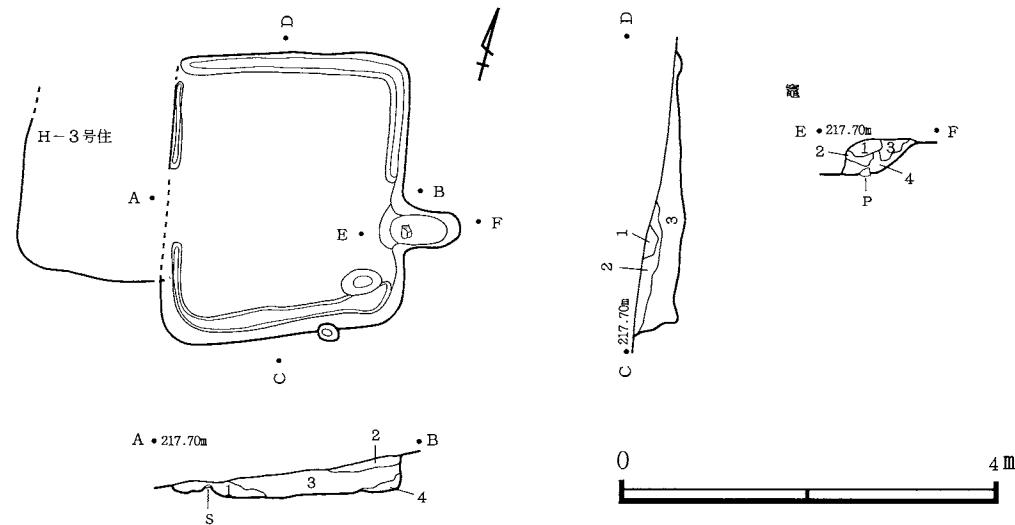
## 土器分布



第98図 H-1号住居址実測図

#### IV 遺構各説

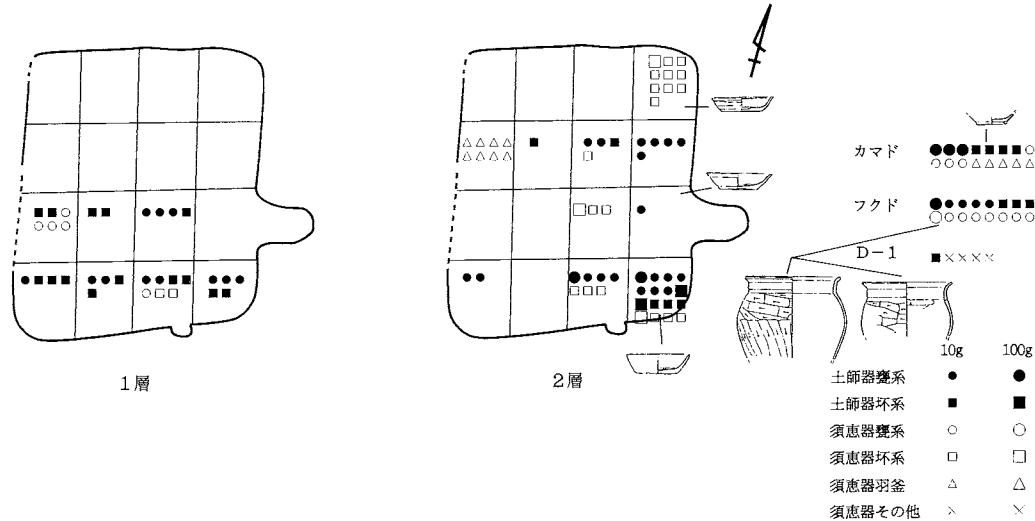
H-2号住



H-2号住

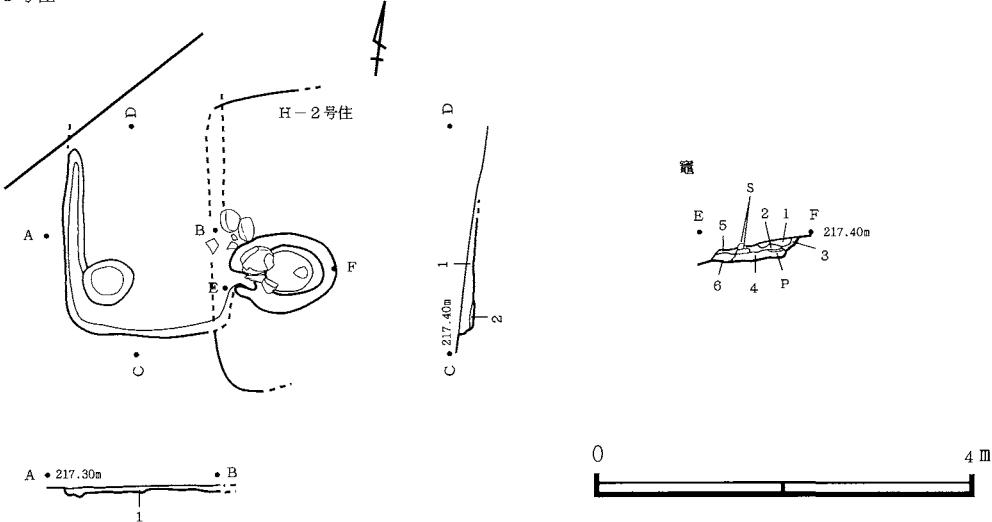
層番	層名	色調	しまり	粘性	混入物			
					R P	R B	Y P	焼土
1	暗赤褐色土層		△	△	※	×	×	△
2	黒褐色土層	1 > 2	△	△	※	×	×	×
3	黒褐色土層	2 < 3	△	△	※	×	×	×
4	暗黄褐色土層	3 < 4	△	○	○	◎	×	×
竈	1 暗黄褐色土層		△	○	△	○	※	△
竈	2 黒褐色土層	1 > 2	△	△	※	※	△	△
竈	3 暗黄赤褐色土層	2 < 3	△	○	△	○	※	◎
竈	4 暗赤褐色土層	3 > 4	△	△	※	※	※	○

土器分布



第99図 H-2号住居址実測図

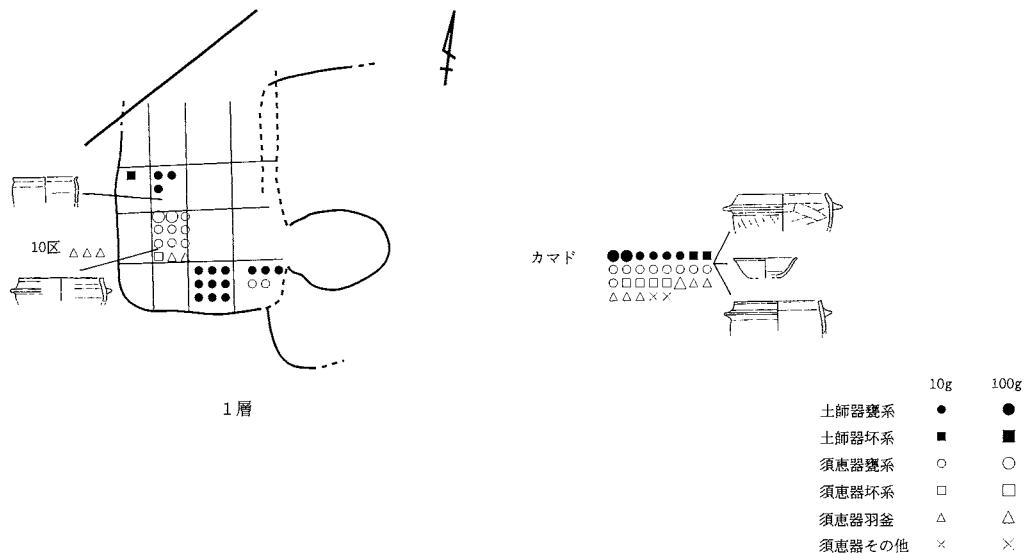
H-3号住



H-3号住

層番	層名	色調	しまり	粘性	混入物			備考
					R P	R B	Y P	
1	黒褐色土層		△	△	※	※	×	
2	暗黄褐色土層	1 < 2	○	○	○	○	×	
竪1	暗赤褐色土層		△	△	※	※	×	貼床
竪2	黄褐色土層	1 < 2	○	○	△	◎	※	
竪3	暗褐色土層	2 > 3	△	△	×	×	×	◎
竪4	暗赤褐色土層	3 > 4	△	△	※	△	×	△
竪5	黄赤褐色土層	2 < 5	○	◎	○	◎	×	○
竪6	黑色土層	5 > 6	◎	○	×	※	×	×

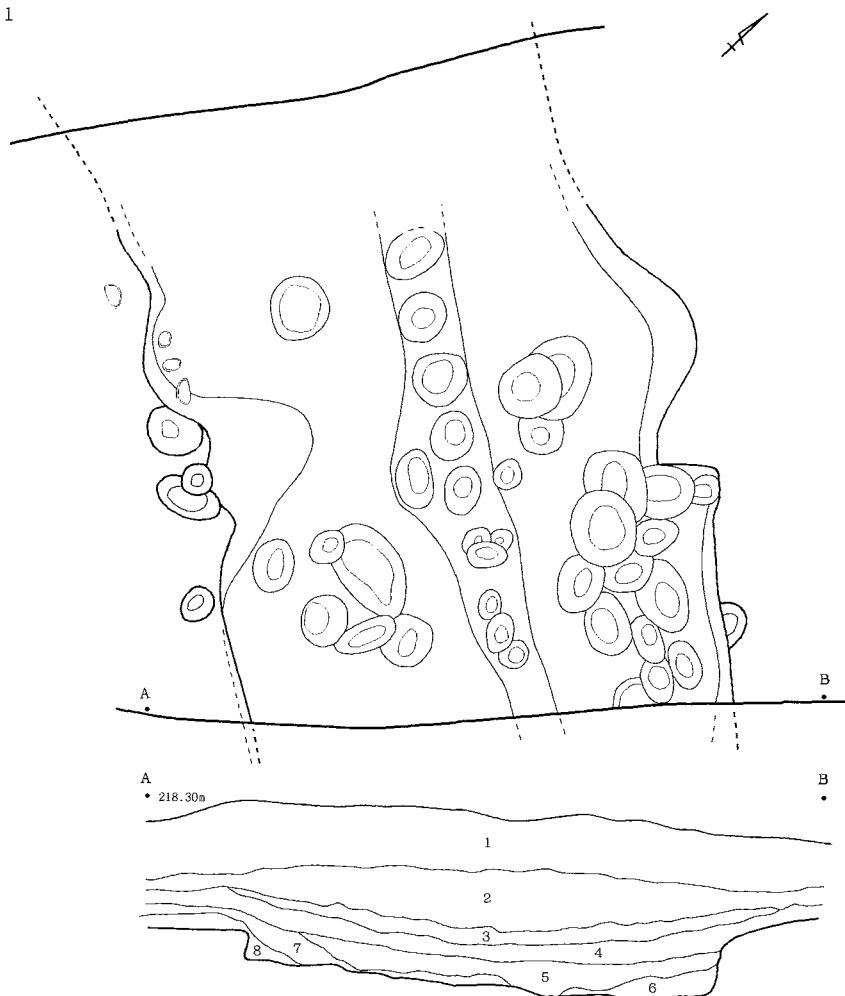
土器分布



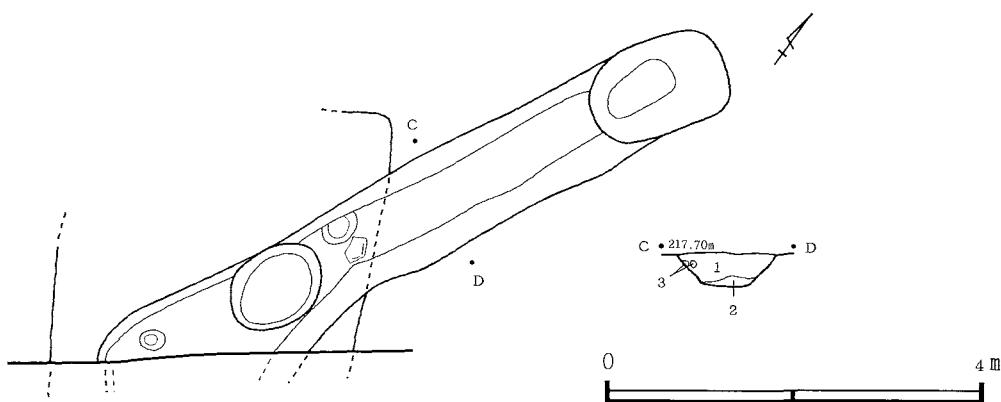
第100図 H-3号住居址実測図

IV 遺構各説

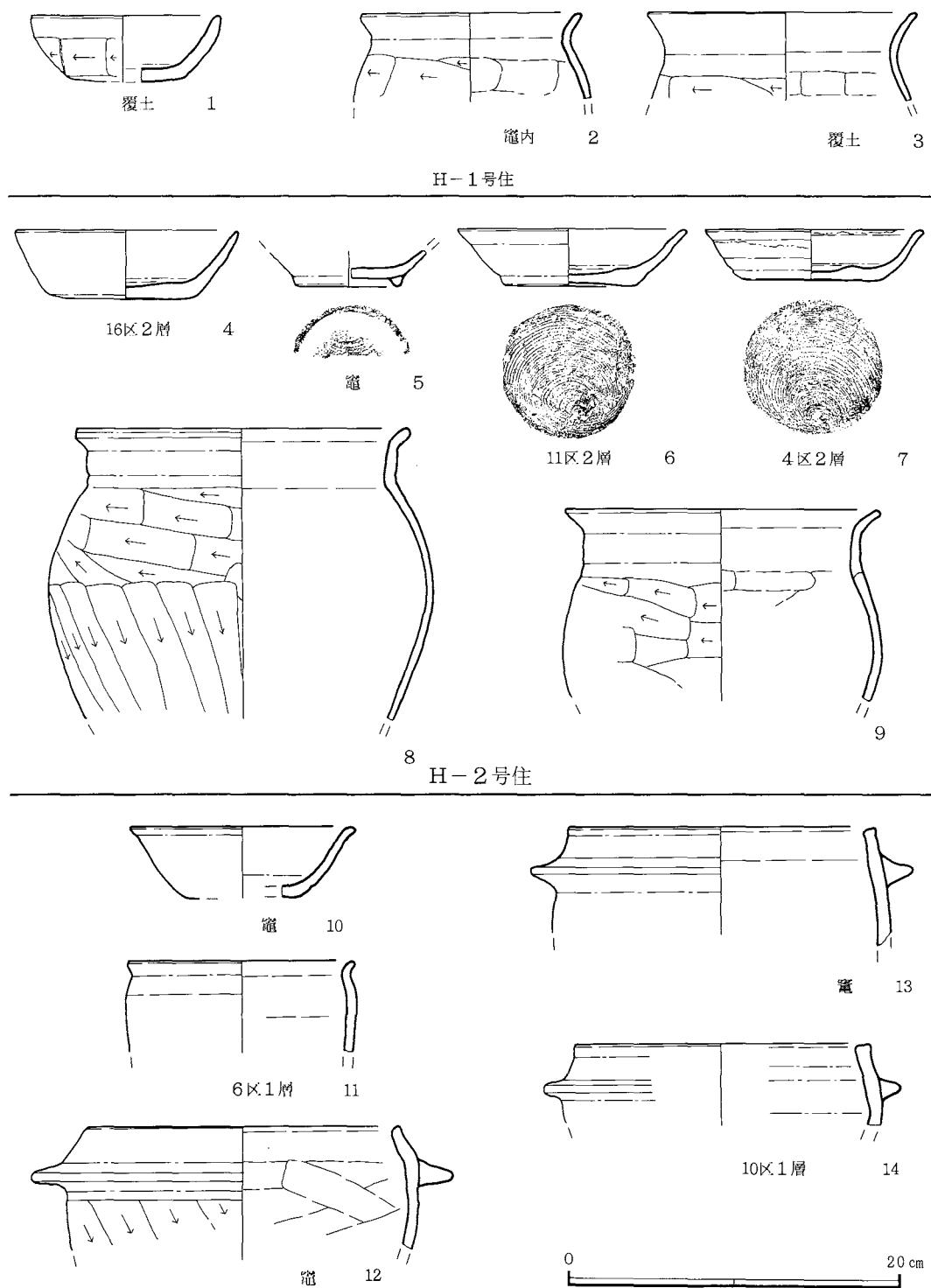
M-1



M-2



第101図 M-1号・M-2号溝実測図



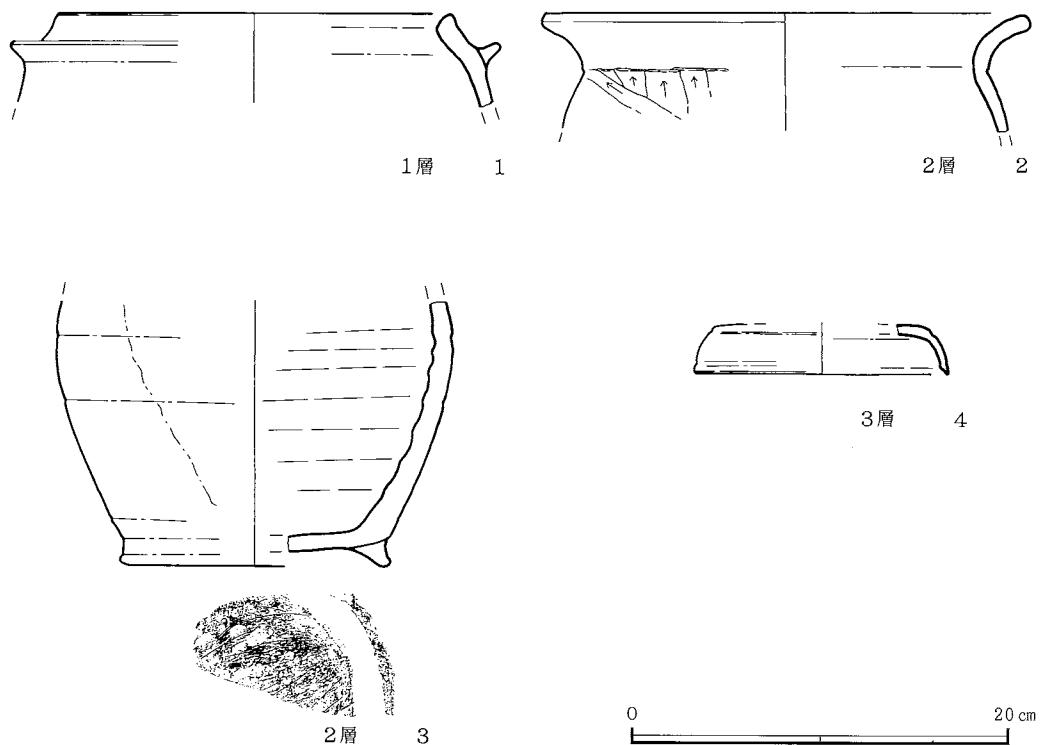
第102図 H-1号・H-2号・H-3号住居址出土の土器

#### IV 遺構各説

層番	層名	色調	しまり	粘性	混入物				備考
					R P	R B	Y P	A s - A A s - B	
1	暗褐色土層		△	△	×	×	×	○	I a 層
2	黒褐色土層	1 > 2	△	△	×	×	~	◎	II a 層
3	灰褐色土層	2 < 3	×	×	×	×	~	◎	II b 層
4	黒褐色土層	3 > 4	△	○	×	×	~		III 層相当
5	暗褐色土層	4 < 5	△	○	※	※	※		
6	暗黃褐色土層	5 < 6	△	○	△	△	○		
7	暗黃褐色土層	6 < 7	△	◎	○	◎	※		
8	黒褐色土層	7 > 8	△	○	△	△	△		

層番	層名	色調	しまり	粘性	混入物				備考
					R P	R B	Y P	A s - A A s - B	
1	黑色土層				×	×	~	※	×
2	黒褐色土層	1 < 2	×	×	~	△	×	~	◎
3	暗黃褐色土層	2 < 3	○	○	△	△	~	~	×



第103図 M-1号溝出土の土器

捕図No.	番号	遺構名	区	層	種類	器種	法	量	成・整形技法の特徴					備考	
									口径	底径	器高	①焼成	②色調	③胎土	④残存
第102図															
1	H-1号住	覆土			土師器	壺	(11.5)	—	4.0	普通	褐色	小砾多含	口縁部～体部1/3	口縁部横撫で、体部窓削り	口縁部横撫で、体部窓無で
2	H-1号住				土師器	小形甕	(13.0)	—	—	普通	明赤褐色	細砂粒多含	口縁部～胴部1/6	口縁部横撫で、体部窓削り	口縁部～底部窓無で
3	H-1号住				土師器	小形甕	(16.4)	—	—	普通	橙色	細砂粒含	口縁部～胴部1/6	口縁部横撫で、体部窓削り	口縁部～底部窓無で
4	H-2号住	16	2		土師器	壺	13.4	7.8	4.2	普通	橙色	砂粒少含	完形	不明瞭	不明瞭
5	H-2号住	電			須恵器	壺	—	(6.2)	—	酸化焰	にぶい橙色	細砂粒含	底部1/2	不明瞭	不明瞭
6	H-2号住	11	2		須恵器	壺	(13.9)	7.8	3.4	還元焰	灰白色	砂粒含	1/2	回転拂無で、底部回転糸切り	回転拂無で
7	H-2号住	4	2		須恵器	壺	13.1	8.2	3.0	還元焰	青灰色	細砂粒含	ほぼ完形	回転拂無で、底部回転糸切り	回転拂無で
8	H-2号住	覆土			土師器	甕	(19.0)	—	—	普通	にぶい橙色	砂粒少含	口縁部～胴部1/2	口縁部横撫で、脛部窓削り「コ」の字	口縁部横撫で、脛部窓無
9	H-2号住	覆土			土師器	甕	(20.0)	—	—	普通	明赤褐色	砂粒少含	口縁部～胴部1/2	口縁部横撫で、脛部窓削り「コ」の字	口縁部横撫で、脛部窓無で
10	H-3号住	電			須恵器	壺	(13.5)	(6.7)	4.2	還元焰	灰黄色	細砂粒少含	口縁部～胴部1/4	回転拂無で、底部回転糸切り後窓削り調整	回転拂無で
11	H-3号住	6	1		須恵器	小形甕	(13.6)	—	—	還元焰	にぶい橙色	細砂粒少含	口縁部～胴上部1/6	回転拂無で	回転拂無で
12	H-3号住	鐵			須恵器	羽釜	(19.0)	—	—	酸化焰	浅黄褐色	砂粒多含	口縁部～胴上部1/4	口縁部～脣部横撫で、脣部縦窓削り	横窓無で
13	H-3号住	電			須恵器	羽釜	(18.6)	—	—	酸化焰	にぶい橙色	砂粒含	口縁部～鷄部1/4	回転拂無で	回転拂無で
14	H-3号住	10	1		須恵器	羽釜	(18.0)	—	—	酸化焰	浅黃褐色	細砂粒含	口縁部～鷄部1/8	回転拂無で	回転拂無で
第103図															
1	M-1号	1	須恵器	羽釜	(21.0)	—	—	酸化焰	灰黄色	細砂粒含	砂粒含	口縁部～胴上部1/5	回転拂無で	回転拂無で	
2	M-1号	2	須恵器	長胴甕	(25.0)	—	—	普通	橙色	砂粒含	口縁部～胴上部1/5	口縁部横撫で、脣部窓削り	口縁部横撫で、脣部窓無で		
3	M-1号	2	須恵器	長颈壺?	—	(14.3)	—	還元焰	灰色	砂粒多含	胴部～底部1/2	脣削り調整	脣削り調整	回転拂無で	
4	M-1号	3	須恵器	壺	(13.0)	—	(2.6)	還元焰	灰色	細砂粒含	1/8	回転拂無で	自然灰釉	回転拂無で	

第19表 桜林遺跡土器観察表

### 3 五ヶ遺跡

#### (1) 平安時代

##### a 遺構

###### 住居址（第105図～第106図）

2軒検出されたのみである。諸属性は第18表のとおりである。いずれの住居址も掘り込みが浅く、北傾斜面に構築されているため、北側が削られてしまっている。遺存状態はあまり良好ではない。H-4号住では竈前面に大きな攢乱が存在する。両住居とも竈は東に位置する。また、床下土坑も両者に認められる。

###### 遺物出土状況（第105図～第106図）

竈周辺に遺物が偏在する一般的な遺物出土状況である。特別な傾向は認められない。

##### b 遺物

###### 土器（第107図）

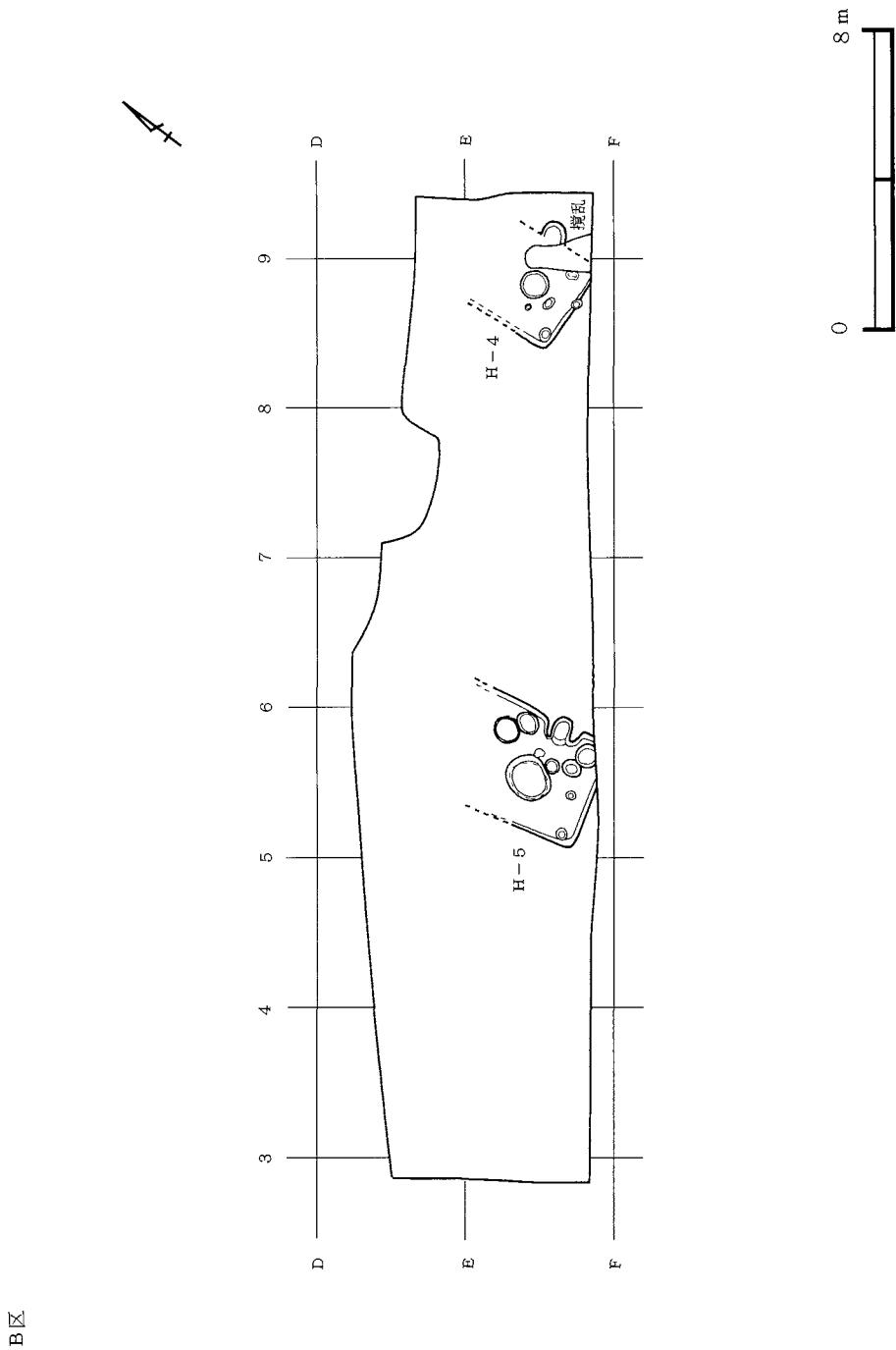
遺物は比較的少ない。第107図に図示した。また、遺物の諸属性は第20表のとおりである。

（大工原 豊）

###### 砥石（第107図12）

1点検出されている。現存長5.8cm 3.6cm、厚さ2.7cm、重量45.5g。欠損品である。研磨面は平坦で、細かい溝がみられる。デイサイト（砥沢石）製であり、仕上げ砥に分類される。

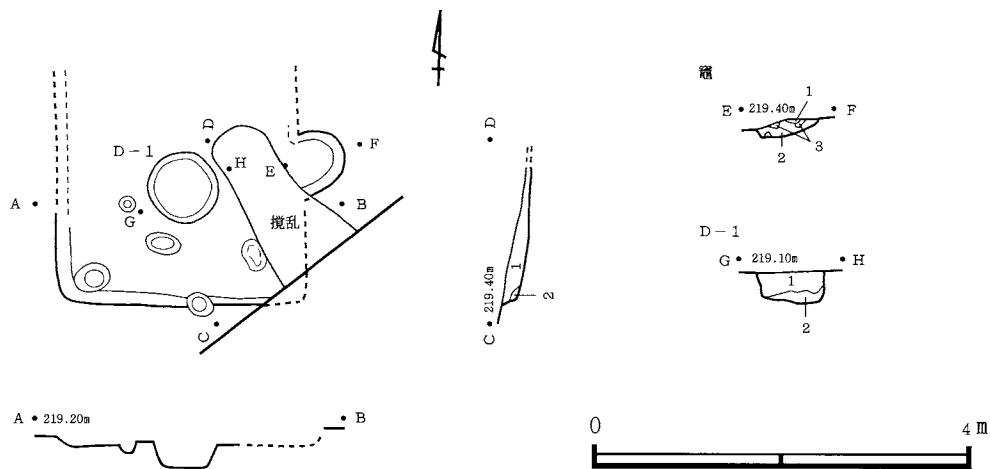
（中澤信忠）



第104図 五ヶ遺跡全体図

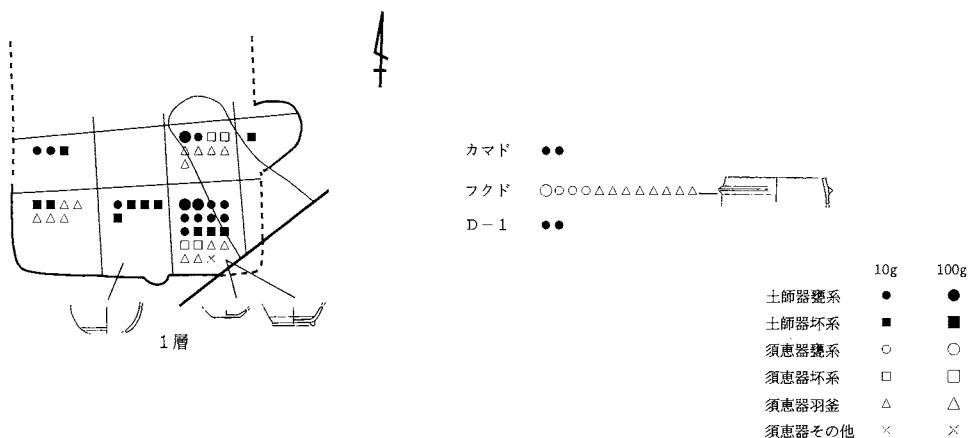
#### IV 遺構各説

H-4号住



層番	層名	色調	しまり	粘性	混入物			
					R P	R B	Y P	焼土
電	1 黒褐色土層		△	○	×	×	×	×
	2 暗褐色土層	1 < 2	△	○	※	×	×	×
窓	1 黒色土層		×	△	×	×	×	△
	2 黄赤褐色土層	1 < 2	×	△	△	○	×	※
窓	3 暗赤褐色土層	2 > 3	×	△	※	※	×	○
	D-1 1 黒色土層		△	○	×	×	※	×
D-1	2 暗黄褐色土層	1 < 2	△	○	×	×	※	×

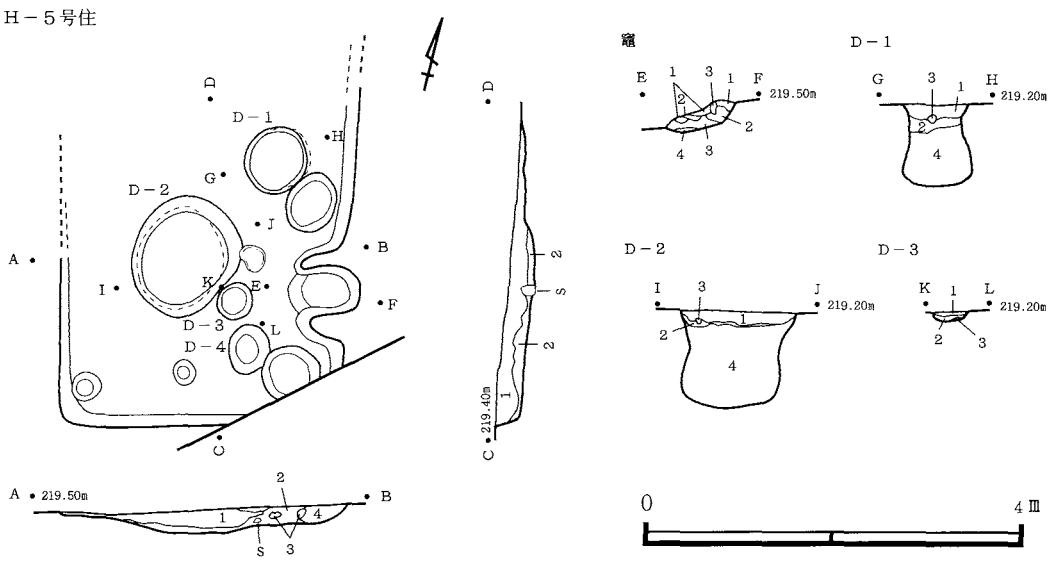
土器分布



第105図 H-4号住居址実測図

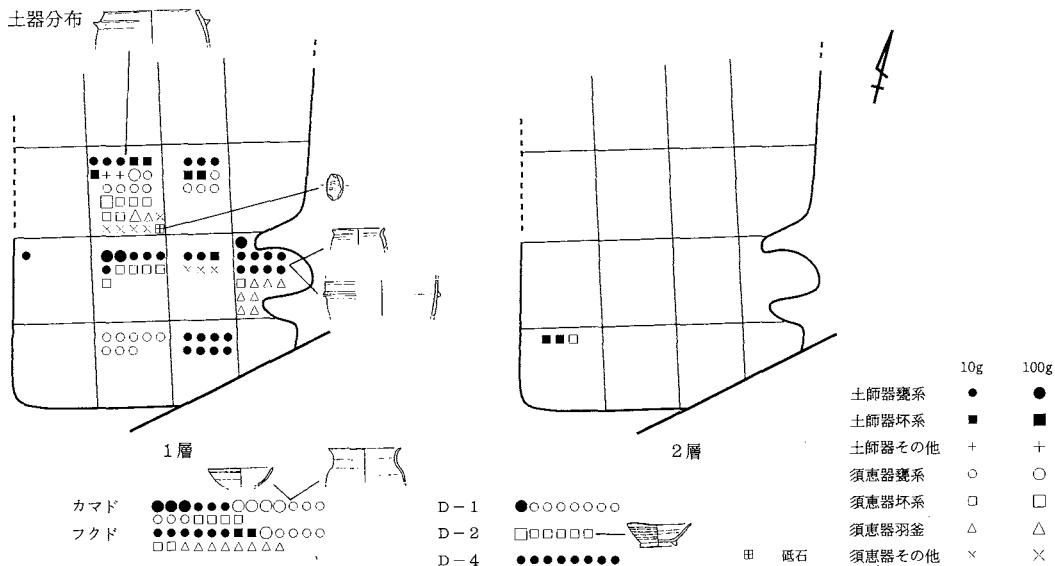
## 2 桜林遺跡

H - 5号住



H - 5号住

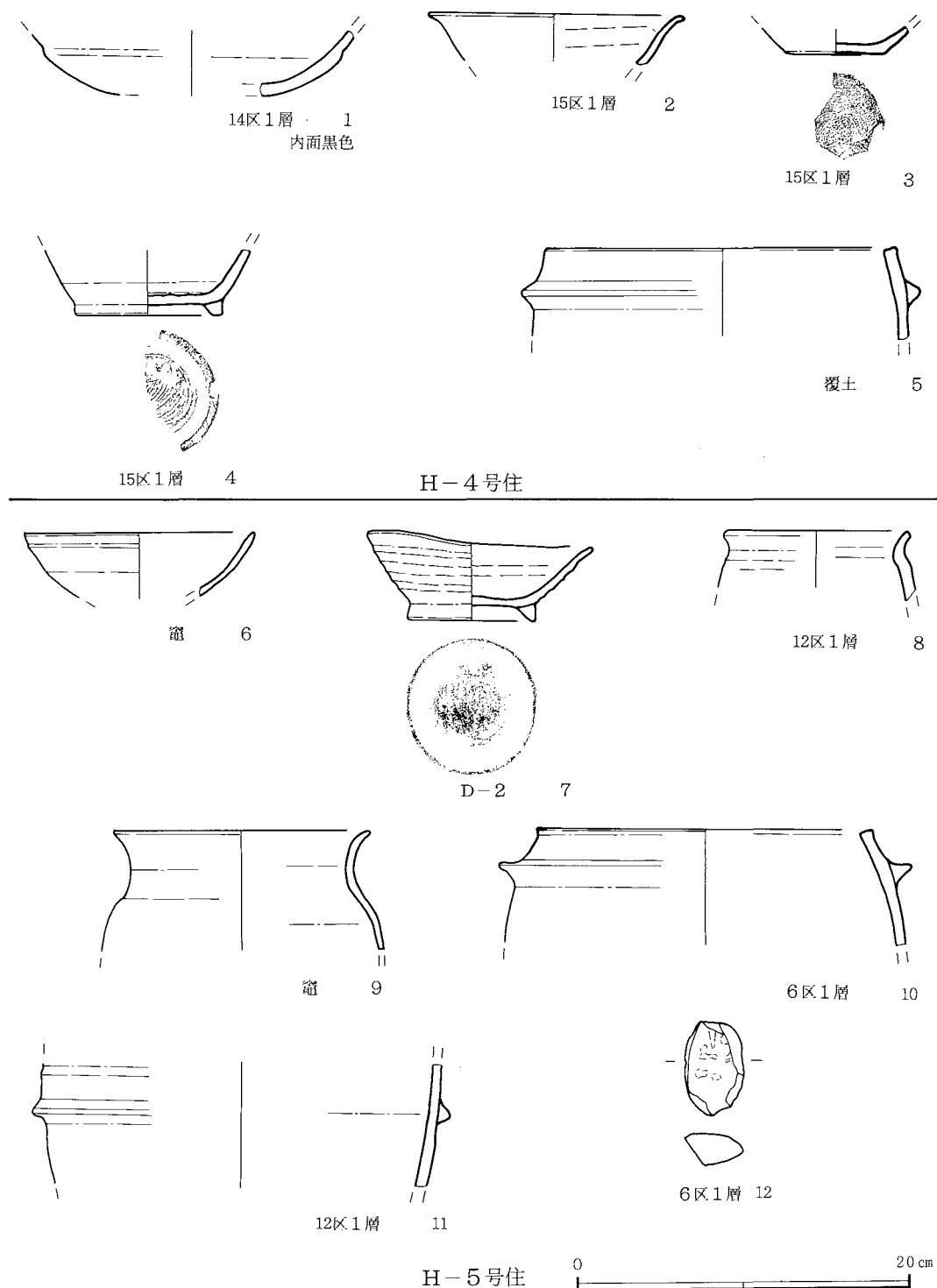
層番	層名	色調	しまり	粘性	混入物				層番	層名	色調	しまり	粘性	混入物			
					R P	R B	Y P	焼土						R P	R B	Y P	焼土
1	黒色土層				△	○	×	×	D - 1	1	黒色土層			△	○	×	×
2	暗褐色土層	1 < 2	△	○	△	*	*	△	2	暗黄褐色土層	1 < 2	△	○	×	※		
3	暗黄褐色土層	2 < 3	△	◎	○	○	*	△	3	暗黃褐色土層	2 > 3	○	×				
4	黒色土層	1 < 4	△	○	×	×	×	×	4	黒褐色土層	3 > 4	×	×	×	×	×	×
竈	1 黒色土層				×	△	×	×	1	黒色土層				△	○	×	×
	2 暗赤褐色土層	1 < 2	△	△	*	*	*	○	2	暗褐褐色土層	1 < 2	△	○	△	※	※	※
	3 暗赤褐色土層	2 < 3	△	△	×	×	◎		3	暗黃褐色土層	2 < 3	△	△	×			
	4 暗赤褐色土層	3 < 4	△	△	△	×	×	◎	4	黒褐色土層	3 > 4	×	×	×	×	×	×
D - 2	1 黒色土層								D - 2	1 黒色土層				△	○	×	×
	2 暗褐色土層								2	暗褐色土層	1 < 2	△	○	△	※	※	※
	3 暗褐色土層								3	暗褐色土層	2 < 3	△	△	×			
D - 3	1 黑褐色土層								4	黒褐色土層	3 > 4	×	×	×	×	×	×
	2 暗黄赤褐色土層	1 < 2							1	黑褐色土層				×	×	×	※
	3 黑褐色土層	2 > 3							2	暗黄赤褐色土層	1 < 2	×	×	※	△	※	○



第106図 H - 5号住居址実測図

揮図No	番号	遺構名	区	層	種類	器種	法 量			成・整 形 技 法 の 特 徴				備考
							口径	底径	器高	①焼成	②色調	③胎土	④ 残 存	
第107図														内面黒色
1	H-4号住	14	1	土師器	壺	壺	—	—	—	普通	褐色	砂粒含	体部1/5	不明瞭
2	H-4号住	15	1	須恵器	壺?	(15.3)	—	—	酸化焰	にぶい橙色	細砂粒含	口縁部～体部1/5	回転横撫で	
3	H-4号住	15	1	須恵器	壺	(6.0)	—	遷元焰	灰白色	細砂粒含	底部1/3	底部回転糸切り、未處理	不明瞭	
4	H-4号住	15	1	須恵器	壺?	(9.0)	—	酸化焰	にぶい橙色	砂粒少含	底部1/2	底部回転糸切り後高台付	不明瞭	
5	H-4号住	覆土	須恵器	羽釜	(21.2)	—	—	酸化焰	褐色	砂粒少含	口縁部～鋸解1/5	口縁部、鋸部回転横撫で	回転横撫で	
6	H-5号住	電	須恵器	壺	(13.8)	—	4.0	遷元焰	灰白色	細砂粒多含	口縁部～体部1/4	回転横撫で	回転横撫で	
7	H-5号住	D-2	須恵器	高台付碗	13.2	7.8	4.5	酸化焰	灰白色	細砂粒含	ほぼ完形	回転横撫で、底部回転糸切り後台付	回転横撫で	
8	H-5号住	12	1	須恵器	小形甕	(10.9)	—	酸化焰	明赤褐色	細砂粒含	口縁部～洞上部1/8	回転横撫で	回転横撫で	
9	H-5号住	電	土師器	甕	(15.4)	—	—	普通	浅黄褐色	細砂粒含	口縁部～洞上部1/8	口縁部横撫で、胴部削り。「コ」の字口縁	口縁部横撫で、胴部削り。「コ」の字口縁	
10	H-5号住	6	1	須恵器	羽釜	(20.0)	—	酸化焰	にぶい黄橙色	砂粒少含	口縁部～鋸部1/6	口縁部、鋸部回転横撫で	回転横撫で	
11	H-5号住	12	1	須恵器	甕	—	—	酸化焰	橙色	砂粒少含	洞上部1/8	不明瞭	不明瞭	

第20表 五ヶ遺跡土器観察表



第107図 H-4号・H-5号住居址出土の土器

## V 成果と問題点

### 1 弥生時代～平安時代の集落の変遷について

鷺宮地区遺跡群は、弥生時代以降継続的に営まれた大規模な集落遺跡である。碓氷川以南では新寺・大王寺地区遺跡群がこれに匹敵する規模の大規模集落遺跡である。そこで、両集落の変遷過程を比較することで、この地域の弥生時代から平安時代の歴史的・社会的様相について、若干検討を行ってみたい。

#### (1) 鷺宮地区遺跡群の集落変遷

鷺宮地区遺跡群は台地ごとに支群を形成している。咲前神社の北の台地には、諏訪遺跡、荒神平・吹上遺跡の2支群が存在する。また、咲前神社と同じ台地には上ノ久保遺跡の支群が存在する。そして、神社東の台地にも支群が存在しているとみられる。また、神社南の台地には桜林・五ヶ遺跡の支群が存在している。

このうち、発掘調査によりある程度集落の様相が解明されたのは、荒神平・吹上遺跡、上ノ久保遺跡、桜林遺跡・五ヶ遺跡の3支群である。各支群の時期別住居数の推移は第108図1・2のとおりである。以下に鷺宮地区遺跡群の集落変遷を時期ごとに示す。(註1)

#### 弥生時代後期

荒神平・吹上遺跡で樽1期に集落が出現する。この時期の集落は、北の台地に集中している。この河岸段丘縁辺部は樽式期の典型的な集落立地であり、本遺跡群も模式的な立地環境を備えている。東に隣接する諏訪遺跡を含めて大規模な集落遺跡であったとみられる。

碓氷川流域では、中期後半（竜見町式期）に集落が形成されるようになるが、新寺・大王寺地区遺跡群では住居址が検出されているが、この集落は樽式期まで継続せずに途絶えてしまう。その後、樽1期に本格的な弥生集落が出現するのが本遺跡群である。質・内容的にみて、樽2期までは碓氷川中流域における大規模な拠点集落であったと推測される。しかし、樽3期には規模が縮小するようである。この時期以降は、東約1.8kmの位置に存在する蔵畠遺跡群（諏訪ノ木遺跡・蔵畠遺跡等）に大規模な集落遺跡が形成されており、これと連動する動きと考えられる。

#### 古墳時代前期（4世紀）

この時期には弥生系（樽式、赤井戸式）、と古式土師系（石田川式）の土器群が併存する状態が認められ、荒神平・吹上遺跡において、小規模な集落が営まれる。現在のところ最古段階の古式土師器は認められず、古墳時代になっても弥生系の文化伝統が継続していたと推定される。

## 1 弥生時代～平安時代の集落の変遷について

### 古墳時代中期（5世紀）

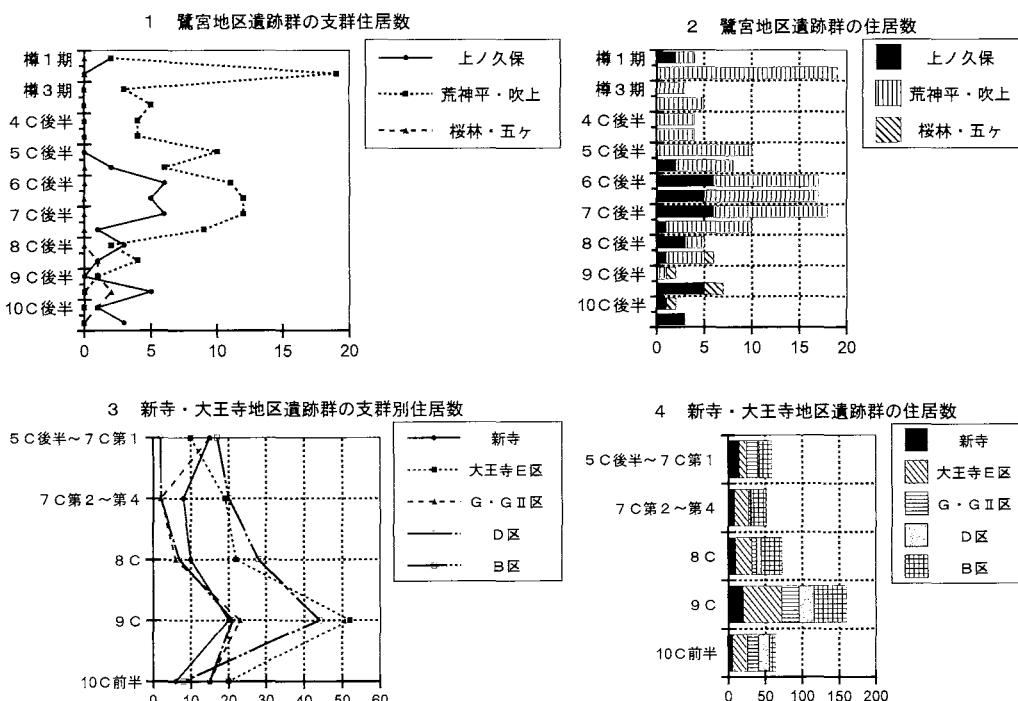
前段階同様、荒神平・吹上遺跡に小規模な集落が営まれる。5世紀後半になると集落規模が拡大するようになる。

### 古墳時代後期（6世紀）

荒神平・吹上遺跡では集落の規模が拡大する。そして、6世紀前半には上ノ久保遺跡でも住居が造られるようになり、6世紀後半以降は荒神平・吹上遺跡と拮抗する規模に発展する。この時期以降が本遺跡群の最盛期となる。

### 古墳時代終末期（7世紀）

前段階同様、大規模な集落が継続的に営まれる。荒神平・吹上遺跡と上ノ久保遺跡はほぼ同じ規模となっており、本遺跡群の最盛期が続く。



第108図 鶯宮地区遺跡群と新寺・大王寺地区遺跡群の住居数の推移

## V 成果と問題点

### 奈良時代（8世紀）

集落の規模が縮小する。8世紀前半には上ノ久保遺跡の住居数減少が顕著であり、8世紀後半には荒神平・吹上遺跡で同様な減少化が生じている。

### 平安時代（9世紀～11世紀）

集落は低迷し、特に9世紀後半には激減する。また、9世紀前半には桜林遺跡・五ヶ遺跡にも住居が造られ始め、集落域は南へ移る。そして、荒神平・吹上遺跡では10世紀以降住居が消滅する。11世紀以降は住居構造の変化があり、竪穴形式の住居自体造られなくなるため、実体は判然としなくなる。

### 遺跡群の動態

全体の動態を整理すると次のようになる。本遺跡群は弥生時代後期、樽1期に居住が開始される。そして、樽2期まで増加し、樽3期以降減少し、4世紀後半まで低迷する。5世紀以降再び増加に転じ、6～7世紀にピークを迎える。8世紀には減少し、9世紀以降規模が縮小する。

また、支群ごとに住居数の推移が異なっている。北に位置する荒神平・吹上遺跡は樽2期にピークがあり、その後も集落は8世紀前半までは継続的に営まれる。ここでは全体的に古い時期に住居数が多い傾向が認められる。これに対し、上ノ久保遺跡では、全体的に新しい時期に住居数が多い傾向にある。すなわち、6世紀前半に住居が出現し、6世紀後半から7世紀後半までの時期に安定期があり、10世紀前半にもピークがある。そして、桜林遺跡・五ヶ遺跡はサンプル数が少ないものの、さらに新しく9世紀前半に住居が出現し、10世紀後半まで継続している。

以上のように、鷺宮地区遺跡群では北の台地に最初に集落が形成され、徐々にその中心を南へ移していったことが判明した。

### (2) 新寺・大王寺地区遺跡群との関係

第108図3・4は新寺・大王寺地区遺跡群の住居数の推移を示したものである。鷺宮地区遺跡群とは時期別増減が異なっている。これは、一つの集落の分析のみでは地域の歴史的・社会的様相を普遍化できないことを示すものである。

新寺・大王寺地区遺跡群では、9世紀代に住居数が突如として倍加することが確認されている（大工原・金井・和田 1991）。この場合、各支群がすべてこの時期に増加しており、鷺宮地区遺跡群のような集落中心の移動ではない。その要因については、①住居建て替え頻度の変化（住構造の変化）、②鉄製品普及による耕地増による人口増（農業技術発展）、③中野谷地区の「牧」の発展伴う人口増（産業構造の変化）の各説が推定されている。

ここで、鷺宮地区遺跡群の住居数の推移と対比してみよう。9世紀に最も住居数が減少してお

り、新寺・大王寺地区遺跡群での住居数急増にほぼ対応していることが理解される。こうしてみると、上記の3説に加え、④鷺宮地区遺跡群から新寺・大王寺地区遺跡群への居住人口の大量移動（集団移住）説を考える必要が出てくる。この場合、移住の要因に②・③の理由が含まれていた可能性もあり、これらの説と相反するものではない。今後とも留意する必要がある問題である。

なお、矢田遺跡を中心とした推定多胡郡内の時期別推移については、中沢悟氏による分析がある（中沢 1997）。ここでは6世紀後半に住居数が激増する点に注目して、爆発的人口増加の要因について、「竈の導入や鉄製農工具の普及、社会体制の変化等多くの要因が総合的に関係して」いると指摘する。6世紀後半に住居数が急増する傾向は本遺跡群と共に通しており、広域的に認められる傾向のようである。また、推定多胡郡内での8世紀以降の推移をみると、8世紀前半と9世紀後半から10世紀前半に多い傾向が認められる。しかし、本遺跡群や新寺・大王寺地区遺跡群でみられるような急激な減少・増加は認められない。明らかに碓氷川流域とは動態が異なっており、広域的に生じた現象ではないことが分かる。

### (3) 小 結

これまでみてきたように鷺宮地区遺跡群は、碓氷川流域において本格的な農耕文化が受容されていく過程で、中核的大規模集落であったものと推定される。集落自体は弥生時代後期に段丘崖線に接した台地に最初に形成され、古墳時代後期以降は咲前神社のある内側の台地へ集落域を拡大させていったことも判明した。この過程は農耕集落の順調な発展段階として理解することができる。

しかし、8世紀以降集落は集落規模は縮小する。この際、支群ごとに住居数減少時期が異なっている点が注目される。集落自体が動搖している状態であったものと思われる。この時期の本遺跡群の居住人口の減少は、前述したとおり、新寺・大王寺地区遺跡群の住居数の倍加と関連するものとみられる。つまり、集落規模の個別の変化はこの時期に地域社会が流動化した状態であったことによると考えられる。この歴史的要因については、今後さらに考察を進めてゆく必要があろうが、ここでは問題提起に留めたい。

註1 弥生時代以外は実年代により示し、従来の年代観によっている。しかし、最近弥生時代～古墳時代前期の年代観が再検討されつつあり、古く比定する傾向がある。この場合、ここで示す実年代をある程度古く考えてもらいたい。

(大工原 豊)

## 2 中世館址について

### (1) 遺構と地割りとの関係について

**館址実在の検証** 今回の調査により、約100m（1町）の間隔で平行する溝が2条検出された。この溝は規模は異なるものの、浅間B軽石の混入する覆土から中世の遺構であることが確認された。また、東側に位置するM—1号溝は2回以上の堀ざらいの後放棄されたが、浅間A軽石は覆土中には堆積しておらず、少なくともそれ以前に完全に埋没していたことが判明した。そして、溝の側面に意図的に埋め込まれた松鶴鏡の型式学的検討から明らかにされた平安時代末から鎌倉時代初期という年代観から、大きく隔たりのない時期に開削された溝であることも確認することができた。しかし、これだけの事実だけでは、ここに館址の存在を示すことはできない。

そこで、次に歴史地理学的方法から、検討を行ってみたい。地籍図から中世城館址の存在を推定する方法は、歴史地理学の中では一般化している。この方法により多くの城館址の存在が明らかになってきた。群馬県においては山崎一氏がこの方法により、全県下の城館址を踏査して集大成を行っており、この業績は全国的にみても大きく評価されるものである。ただし、この方法にも大きな欠点が存在していた。すなわち、この方法だけでは時期を特定することができないので、地名や文献・伝承に依存することになり、確定的な内容を持ち得ない点である。山崎一氏も晩年にはこの点を十分承知しており、発掘調査により検出された遺構に大きな関心を寄せられていたのである。

そうはいっても、人為的に造り出された不自然な地形や地割りは、大きな情報を有しているので、この方法を用いて上ノ久保遺跡周辺の地籍図を検討してみたい（第109図）。

まず、周囲の字名は上ノ久保、宮、五ヶであり、直接館址と結びつく地名は存在していない。次に、地割りを見てみよう。一瞥しただけで、1町四方の方形区画の存在が推定される。さらに細部について検討することにする。

東側の溝（M—1号溝）は南北に延びていることは確実であり、地割りとも一致している。これを南北に延長してゆくと、長さ約100mの位置で西へほぼ直角に曲がっている。北東のコーナーは地割りが不自然である。また、南東のコーナーはこの部分で一段低くなってしまっており、やはり不自然なクランク状の地割りが認められる。これは、北東コーナー部分とほぼ一致しており、中世館址の「折り」と呼ばれる構造と推定される。次に西側の溝（M—2号溝）付近について見てみよう。この溝は地割りとは一致しておらず、直線的に南北に延びていることは分かってもどこまで延びているかは不明である。館址の西辺については、遺構をもとに区画を推定することしかできない。

以上のように、館址の東側部分については、地割りに不自然箇所が多く、それらは中世館址の

特徴と一致する内容であった。しかし、西側は地割りとは無関係な状態であった。この原因は溝の規模の違いによるものとみられる。西側のM—2号溝では堀ざらいの痕跡もなく、溝が掘られた後、短期間で埋没してしまったことに起因すると考えられる。こうした不明瞭な部分があるとしても、この場所に人為的遺構とよく一致する人為的地割りが存在してすることは確実であり、規格性のある1町四方の方形区画の存在は、中世館址の名残りとみられる。かくして、上ノ久保遺跡に中世館址が実在していたことが検証された。これを上ノ久保館と呼称することにしたい。

**松鶴鏡の出土位置** 上ノ久保館では松鶴鏡が溝の外側に何らかの意図をもって埋納されていた。そこで、館址と出土位置の関係について調べてみたい。

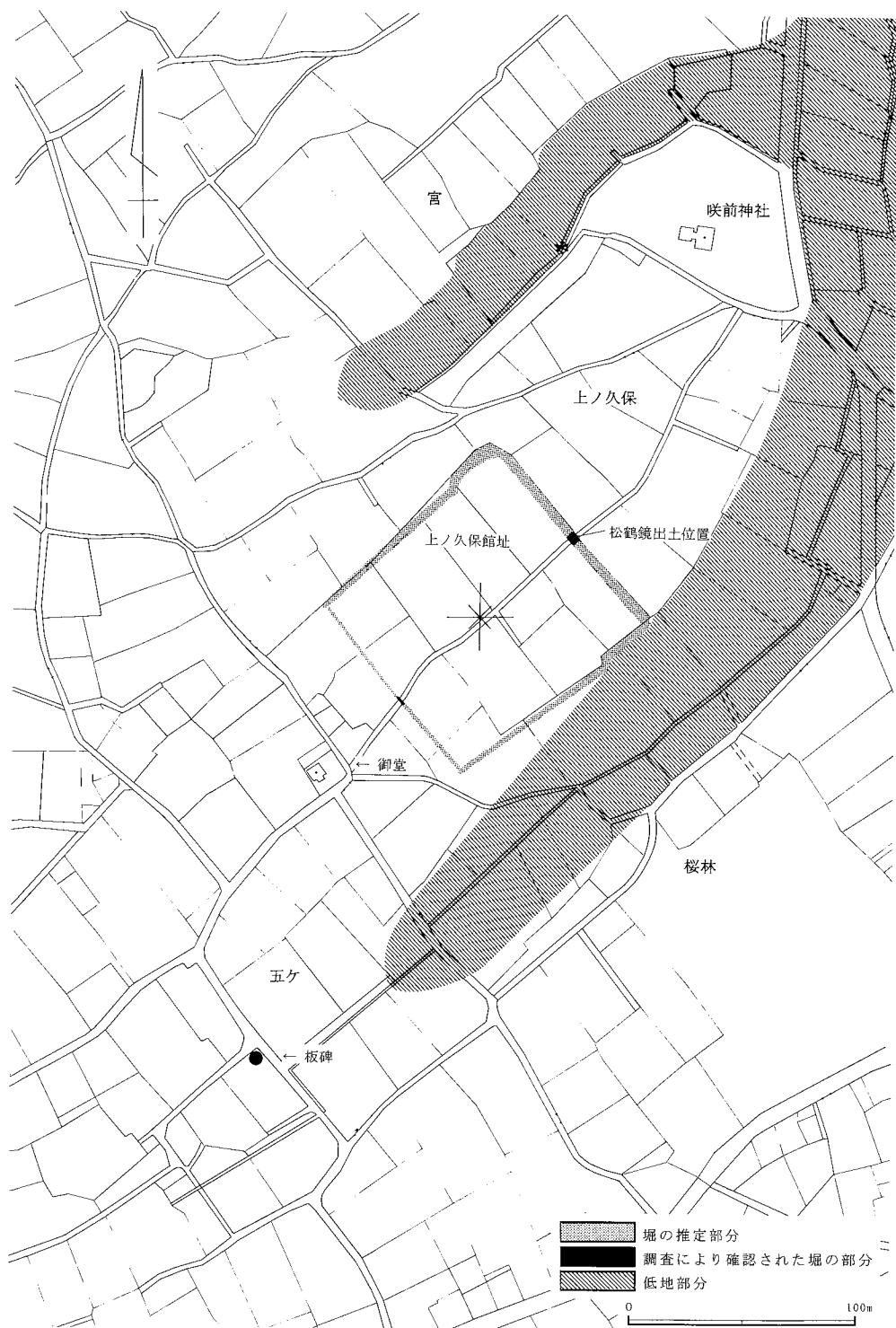
東辺を基準とした場合、館址の主軸方向は北西、正確には真北からN—42°—Wの方向を向いている。この館址は、かなり南北軸とはずれているが、地形的なものであった可能性もある。

次に、ほぼ方形の館址の対角線の交点を仮館中心点としよう。松鶴鏡出土地点は、仮館中心点から北東方向、N—51°—Eの位置である。厳密には南へ6°ほどずれているが、仮館中心点自体も単純な方法で割り出されたものなので、北東方向の位置が意識されていたと考えることも許されよう。この北東方向は、陰陽道における12分法の丑寅の方向であり、鬼門に当たる。鏡には魔力があるとの考え方もあることから、鬼をはね返す意味で鬼門封じのために埋納されたものと推定される。

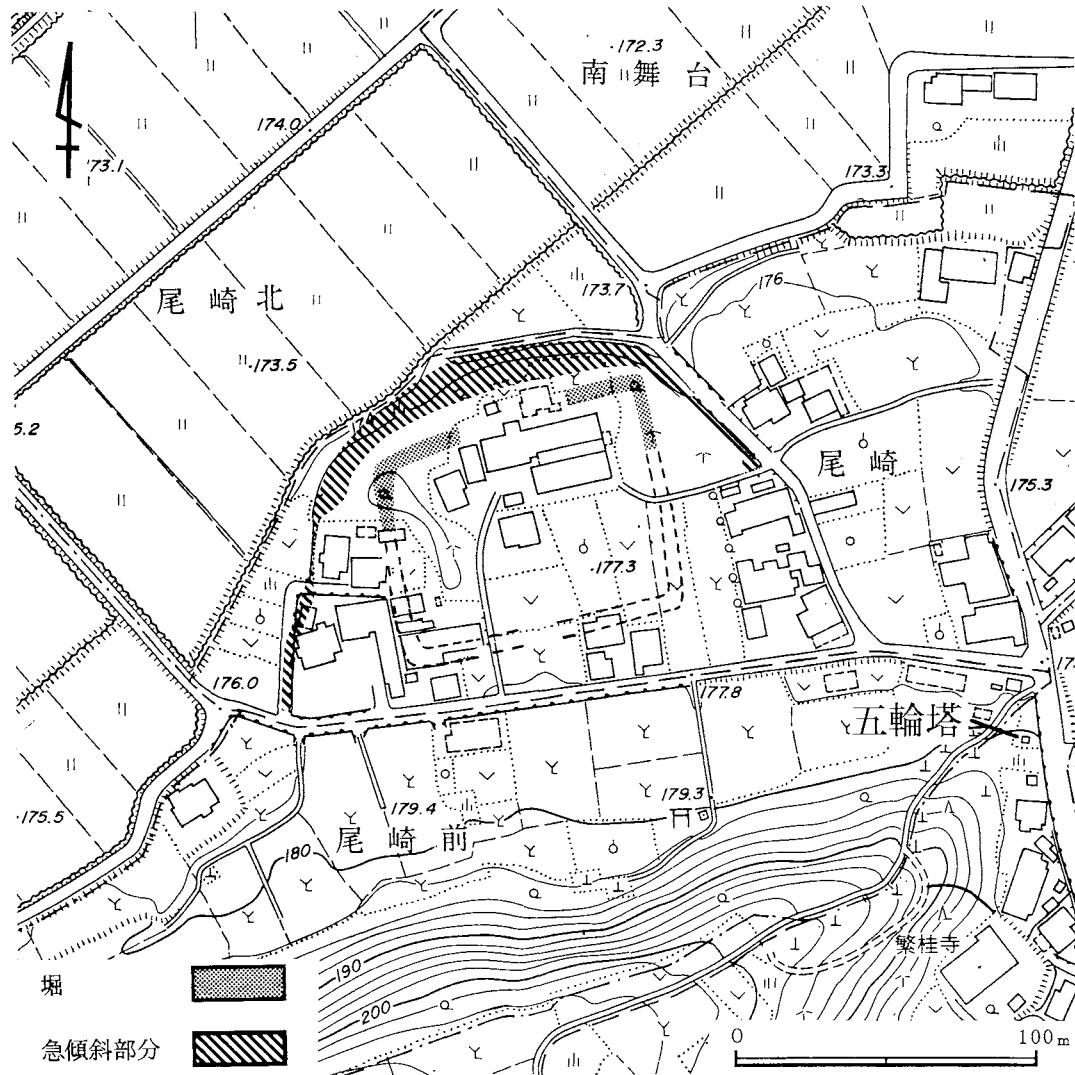
なお、反対側の館址南西、裏鬼門の位置には御堂が存在しており、墓石から少なくとも江戸時代まで遡れる墓地となっている。これも偶然ではなく、裏鬼門除けの名残りとも思われる。また、中世まで遡ることができる板碑が2基、さらに西の場所に存在している。

ちなみに、陰陽道祭祀の成立時期は9世紀後半から10世紀初めであり、11世紀には祭祀の体系がほぼ完成し、中央の貴族層だけではなく、地方まで広まっていたと考えられている（岡田1984）。鏡が埋納された頃に、陰陽道に基づいた祭祀行為がなされていたとしても矛盾はない。また、菊池誠一氏は平安時代の集落遺跡出土鏡を集成し、その性格について検討を加えている（菊池 1987）。この中には溝からの出土事例はあるものの、本遺跡と同じような祭祀行為がなされた事例はない。また、菊池氏は「この祭祀を実修する呪術的宗教者は、公的祭祀に従事するよりも私的な祭祀傾向が強かった」とも述べている。後述するように、上ノ久保館の主が神主であった可能性が高い。まさに陰陽道に精通した祭祀行為者であったと推測される。そして、神社ではなく隣接する居館という私的空间においてさなれた祭祀であることも、菊池氏の指摘と整合性がある。

## V 成果と問題点



第109図 上ノ久保館址と周辺の地籍



第110図 尾崎屋敷とその周辺

## V 成果と問題点

### (2) 咲前神社関係の文献記録

上ノ久保館の歴史的背景　これまで上ノ久保館の存在は知られていなかった。そこで、隣接する咲前神社に関わる文献記録の中から、この館址の由来について検討することにする。

貫前神社の神主であった尾崎家所蔵の「御神譜」という古文書には以下の記述がある。

抑々抜鉢大神御由緒之儀は、往古、人皇廿八代、安閑天皇元年甲寅六月、初の申の日に、上毛野國磯部の郷に出現存ます。時の守護職奏進せられしかば、則小倉季氏といふ者に、磯部の姓を給はり、奉幣使として雜掌高椅（後に橋と改む）貞長、同峯越（後に岸と改む）舊敬両人を召連れ、當國へ下向有り。祭禮始る。殊に二百貫文の社領を御寄附遊ばされ、其の子孫続いて正神主として、世々に祭祀を司るものなり。父子三代の後邦祝の代、居住を同郷小崎（後に尾と改む）村に移す。故に諸人小倉といはずして小崎殿と稱號す。是より以來、小崎を家名とす。是れ敏達天皇元年壬辰の頃なり。前々住居地をば、末世に小倉（後に御と改む）屋敷といひ傳ふ。季氏より十一代目、邦平の時代、神託によりて、白鳳元年壬申三月中旬、同國神樂の郡蓬丘菖蒲谷神宮寺村へ遷座あり。是よりして、彼の處を尾崎の里といふ。供奉の道筋に、七五三木原、明戸坂といふ名所有り。又御旅所は、宇田なり。是れ日向によるものなり。磯部郷前の宮跡をば先の宮と置くなり。正神主尾崎家の住居跡には、三輪の御神を立て、杉を植ゑ置き末世に尾崎の三輪神明と申すなり。稱徳天皇天平神護年中乙巳年、邦平より五代孫鎮陳召しに應じて参内す。御感の餘り、故あつて物部姓を給はり從四位上左衛門督物部守前とぞ號しける。守前より六代、對馬守尚守の時、即ち清和天皇貞觀元年己卯年勳五等の神階を受けられ、此州の宗廟第一宮たり。（後略）（『北甘楽郡誌』）

前段に示されている安閑天皇と守護職は時代的に食い違っており、この記述そのものの信憑性に疑わしいところがあるものの、ここに記載のある小崎村（尾崎）は磯部地区にある大竹字尾崎を指すものと推定される。ここには尾崎屋敷と呼ばれる二重の堀に囲まれた中世館址が存在していることから、これに比定される（第110図）。（註1）また、七五三木原は注連引原を指し、明戸坂、宇田も実在する地名である。したがって、この文書の後段の記載はある程度歴史的事実を反映している可能性が高い。

こうしてみると、その前に記載されている部分についても史実が反映されているとみられる。すなわち、尾崎に居住を移す前に咲前神社周辺に居住していたことが推察され、今回確認された上ノ久保館が小倉邦祝以前に居住していた館に相当するものと推定される。また、上ノ久保館の築造年代を松鶴鏡の埋納時期とみた場合、平安時代末期から鎌倉時代初期に当たる。少なくとも鎌倉時代に咲前神社正神主の小倉氏が居住していた居館であったものと考えられる。

## 2 中世館址について

註1 上ノ久保館址の西方には板碑が存在している。また、尾崎屋敷の南東の御堂の中に五輪塔の空風輪が数基納められている。いずれも館址に関連する遺物であるのであれば、存続時期を探る際の参考資料となる。一般的には板碑が時期が古く、五輪塔の方が新しい傾向があるが、この点では文献に記されている館址の順序と整合性がある。

(大工原 豊)

### 3 上ノ久保遺跡出土の和鏡について

遣唐使の廃止後、10世紀後半に唐からもたらされた舶載の唐鏡のうち唐花双鸞鏡を元に、八稜鏡で、上下の唐花を瑞花に、左右の鸞が鳳凰に置き替えて瑞花双鳳鏡が作られた。しかし、これはまだ完全に和様化していないので、唐式鏡といわれる。12世紀初め頃になって、瑞花双鳳鏡の瑞花が松・梅・山吹・菊・秋草・萩・楓等の日本の自然風物に中によく見られる植物に置き替え、鳳凰を鶴・鴎鳩・雀・尾長鳥・千鳥・雁等の日本で親しまれる鳥に置き替えることによって和鏡が成立した。常緑の松と長寿の象徴である鶴の組み合わせは和鏡の成立時から江戸時代まで続くが、二羽の鶴が松枝をくわえた松喰鶴鏡は平安時代後期に製作された和鏡を代表するものである。今回出土した和鏡の鶴は松枝をくわえていないが、鉦を中心に二羽の鶴が反対方向きに飛行するように描かれている。この和鏡の鏡背文様に類似する文様を持つ和鏡としては、県内では榛名神社に松藤松喰鶴鏡（鎌倉時代）や貫前神社の松鶴流水鏡（鎌倉時代）がある（註1）。県外では長野県坂城町の経塚から出土した松鶴鏡（註2）や羽黒山所蔵の松枝双鶴鏡がある（註3）。

広瀬都異氏の『和鏡の研究』（註4）に掲載されている和鏡のうち、平安時代の円鏡で白銅製のものの直径（単位cm）を横軸、重量（単位g）を縦軸にして散布図したものが第111図1である。同じようにして鎌倉時代の白銅製円鏡の散布図が第111図3である。この2つの散布図のデータの回帰分析を行って得た推定値をつなぐ推定値が、第111図2と第111図4のようになり、このとき、平安時代の白銅製和鏡の相関係数は0.96、鎌倉時代は0.90で、直径と重量の間に相関関係があることが推定される。そして、ここに今回上ノ久保遺跡から出土した和鏡の直径と重量のデータを当てはめてみると、第111図2のように鎌倉時代の推定値より平安時代の推定値に近いことがわかる（註5）。

次に和鏡の造りをみてみると、厚みはあまり厚くなく、彫刻の彫りもあまり深くない。しかし、縁は直角式中縁であり、内区と外区を区切る線が中線である。こういうことを総合して考えると、平安時代の末（12世紀末）に作られたと考えれば妥当であろう。

（深町 真）

註1 群馬県立歴史博物館 1980『群馬の古鏡』（企画展「群馬の古鏡」図録）

註2 中野政樹編 1969『和鏡』至文堂

註3 保阪三郎 1973『和鏡』人文書院

註4 広瀬都異 1974『和鏡の研究』角川書店

註5 今回行った回帰分析では、使用したデータ数が少ないので、確実に傾向をつかむためにはさらにデータの集積が必要であることは否めない。

3 上ノ久保遺跡出土の和鏡について

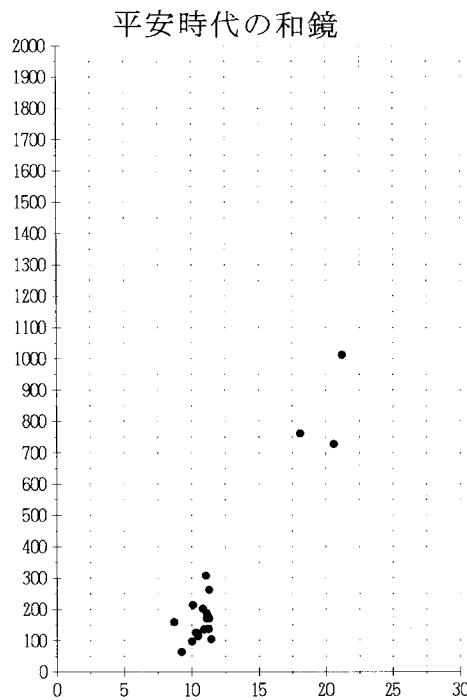


図 1

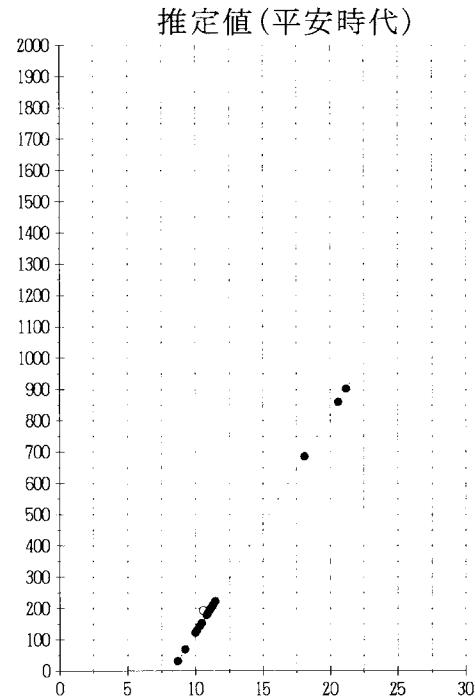


図 2 ○は上ノ久保遺跡出土鏡

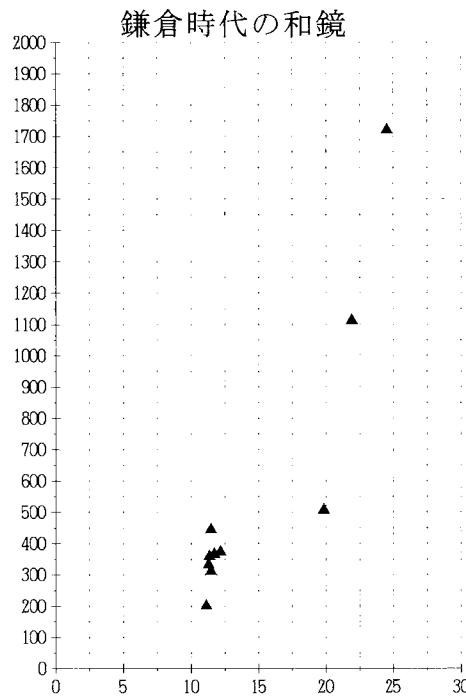


図 3

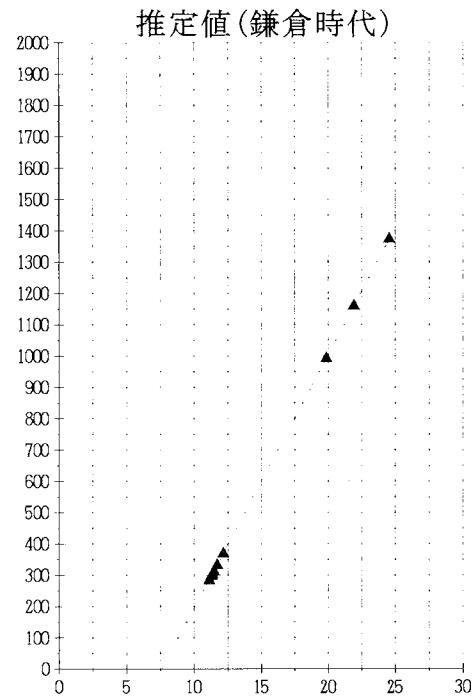


図 4

第111図 和鏡直径・重量散布図

番号	鏡名	時期	所蔵者	銚	縁	高さ(cm)	径(cm)	材質	由来	重さ(g)
1	端花鶴鳶鏡	平安後期	三重県多度村平野直氏	花葵形穹窿座鉢	急斜へ字縁 緩斜へ字縁	9.10	11.06	白銅	土中古	307.50
2	端花鶴鳶鏡	平安後期	東京都今村繁三氏	蓮華式底座鰐頭形鉢	内傾式高縁 内斜外直式厚縁	6.40	21.20	白銅	土中	1,012.50
3	唐草千鳥鏡	平安後期	東京都高麗健自氏	花形中隆座鉢(無鉢)	直角式細縁	7.00	11.30	白銅	伝世	262.50
4	草花蝶鳥鏡	平安後期	鹿児島県川内市宮内町新田神社	花形底座鉢	蒲鉾式中縁	6.10	18.09	白銅	伝世	761.30
5	草花蝶鳥鏡	平安後期	大阪市立美術館	六葉低座鉢	内傾式細縁	7.30	10.30	白銅	土中	126.05
6	唐草文鏡	平安後期	大阪府高石町山川七左衛門氏	菱形底座鉢	内傾式段縁	1.0	8.70	白銅	伝世	159.40
7	草花蝶鳥鏡	平安後期	京都市山田米太郎氏	轍頭円錐形素鉢	蒲鉾式中縁	3.60	11.27	白銅	伝世	174.00
8	垂柳飛鶴鏡	平安後期	東京都尾尾鷦弥氏	穹窿底座鉢	蒲鉾式細縁	3.00	11.45	白銅	水中古	104.30
9	花喰鳥鏡	平安後期	三重県桑名郡多度村多度神社	轍頭円錐形素鉢	蒲鉾式中縁	4.20	10.90	白銅	土中	135.75
10	竜胆蝶鳥鏡	平安後期	大阪府高石町山川七左衛門氏	轍頭円錐形素鉢	蒲鉾式細縁	0.30	10.45	白銅	伝世	114.40
11	蘆鷹方鏡	平安後期	東京国立博物館	轍頭方錐形素鉢	蒲鉾式中縁	3.30	10.00	白銅	土中古	97.50
12	海浦松鶴鳥鏡	平安後期	京都市広瀬都異氏	花形底座鉢	直角式中縁	6.10	11.12	白銅	伝世	170.68
13	菊枝蝶鳥鏡	平安後期	某氏	複合六葉中隆座鉢	珠文階段式段縁	6.10	10.45	白銅	伝世	183.80
14	双童鏡	平安後期	千葉県香取町香取神宮	穹窿素鉢	堤塘式中縁	4.50	20.60	白銅	伝世古	727.50
15	山水飛鷹鏡	平安後期	大阪府南河内郡天野村金剛寺	花形穹窿座鉢	直角式中縁	7.00	11.12	白銅	伝世	187.50
16	竹垣草花蝶鳥鏡	平安後期	京都市北西猪三郎氏	花形中隆座鉢	細線單縁	5.80	11.27	白銅	土中古	137.60
17	鰐代地双鶴鏡	平安後期	三重県桑名郡多度村多度神社	重葉形穹窿座鉢	直角式中縁	8.20	10.82	白銅	土中古	202.50
18	溝飛雀鏡	平安後期	東京都香取神真氏	花形底座鉢	坂状式段縁	7.00	10.09	白銅	伝世古	213.80
19	秋草蝶鳥鏡	平安後期	東京国立博物館	花形穹窿座鉢	階段式段縁	6.30	11.30	白銅	土中古	170.70
20	柏柳蝶鳥鏡	平安後期	山川七左衛門氏	花葵形中隆座鉢	細線單縁	4.50	9.24	白銅	伝世	64.55
21	松藤松鶴鳥鏡	鎌倉時代	群馬県榛名山榛名神社	半球形素鉢	蒲鉾式低縁	3.60	19.85	白銅	伝世古	511.90
22	甜瓜蝶鳥鏡	鎌倉時代	奈良市河瀬虎三郎氏	花葵形中隆座鉢	直角式厚縁	7.90	12.18	白銅	土中古	378.80
23	撫子蝶鳥鏡	鎌倉時代	東京都安田善次郎氏	花葵形穹窿座鉢	直角式厚縁	7.90	11.72	白銅	伝世古	371.30
24	絞代地双雀鏡	鎌倉時代	東京都關保之助氏	花形穹窿座鉢	急斜へ字縁	6.10	11.12	白銅	伝世古	206.30
25	梅樹雀鏡	鎌倉時代	京都市本能寺	円形穹窿素鉢	蒲鉾式低縁	6.40	24.54	白銅	伝世古	1,725.00
26	甜瓜蝶鳥鏡	鎌倉時代	京都市広瀬都異氏	瓜果心用鉢	直角式厚縁	7.90	11.48	白銅	伝世古	316.90
27	桧垣竹双鳳鏡	鎌倉時代	京都市小川白楊氏	花葵形穹窿座鉢	中線单縁	8.50	11.36	白銅	伝世古	363.80
28	楓樹庵雀鏡	鎌倉時代	京都府広瀬都異氏	花葵形穹窿座鉢	急斜へ字縁	7.30	11.30	白銅	伝世古	337.50
29	牡丹獅子蝶鳥鏡	鎌倉時代	滋賀県木之本町淨信寺	花葵形穹窿座鉢	蒲鉾式中縁	7.60	21.91	白銅	伝世古	1,117.50
30	七宝繁双雀鏡	鎌倉時代	島根県今市町大社	花葵形穹窿座鉢	中線单縁	9.70	11.48	白銅	伝世古	450.00

「和漢の研究」図版から白銅製刀鏡を抽出

第21表 平安時代～鎌倉時代の白銅製和境一覽表

## 引用・参考文献

### 全般

- 大工原豊・関根慎二他 1993『大下原遺跡・吉田原遺跡』安中市教育委員会  
大工原豊・関根慎二・林克彦他 1994『中野谷地区遺跡群』同  
同 1996『落合II遺跡・平塚遺跡・三本木II遺跡・三本木III遺跡』同  
大工原豊 1996『中野谷松原遺跡-縄文時代遺構編』同

### 縄文時代関連

- 塙原孝一他 1994『三輪仲町遺跡』 (財) 栃木県文化振興事業団  
細野雅男他 1986『清里・長久保遺跡』 (財) 群馬県埋蔵文化財調査事業団  
桜岡正信他 1989『大平台遺跡』 (財) 群馬県埋蔵文化財調査事業団  
山口逸弘他 1989『房谷戸遺跡I』 (財) 群馬県埋蔵文化財調査事業団  
大工原豊 1990「局部磨製石器の展開と意義」『青山考古』8 青山考古学会  
同 1996「石器」『考古学雑誌』82-2

### 弥生時代関連

- 青木和明・飯島克巳・若狭徹 1987「箱清水式と樽式土器」『弥生文化の研究4』雄山閣  
佐藤明人 1988『新保遺跡』II (財) 群馬県埋蔵文化財調査事業団  
飯島克巳・若狭徹 1988「樽式土器編年の再構成」『信濃』40-9

### 古墳時代～平安時代関連

- 坂口一 1986「古墳時代後期の土器編年」『群馬文化』208  
坂口一 1987「群馬県における古墳時代中期の土器の編年」『研究紀要』4 (財) 群馬県埋蔵文化財調査事業団  
坂口一・三浦京子 1986「奈良・平安時代の土器編年」『群馬県史研究』24  
中沢悟 1996「矢田遺跡周辺における古墳時代の土器について」『矢田遺跡』VI (財) 群馬県埋蔵文化財調査事業団  
同 1997「古墳～平安時代の住居址について」『矢田遺跡』VII 同  
同 1997「矢田遺跡周辺における古墳時代後期から平安時代の土器について」『矢田遺跡』VII 同

### 中世館址関連

- 本多龜三 1928『群馬県北甘楽郡史』  
岡田宗司 1984「陰陽道祭祀の成立と展開」『國學院大學日本文化研究所紀要』54

菊池誠一 1987 「平安時代の集落遺跡出土鏡の性格」『物質文化』49

『安中市誌』 1964 安中市誌編纂委員会

『群馬県の中世城館址』 1989 群馬県教育委員会

『群馬県碓氷郡東横野村誌』 1984 東横野村誌編纂委員会

『群馬県碓氷郡志』 1923 群馬県碓氷郡役所

『群馬県史』資料編8 中世4 1988 群馬県史編さん委員会

『郷土誌』 1910 碓氷郡東横野村

## 発掘調査報告書抄録

ふりがな	かみのくぼいせき さくらばやしいせき ごかいせき
書名	上ノ久保遺跡・桜林遺跡・五ヶ遺跡
副書名	市道東416号線・市道東418号線建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
卷次	
シリーズ名	
シリーズ番号	
編著者名	大工原豊・深町真・井上慎也・金井京子・中澤信忠
編集機関	安中市教育委員会
編集機関所在地	379-0192 群馬県安中市安中一丁目 23-13
発行年	西暦1998年8月31日

所収遺跡名	所在地	コード		北緯 ° / ' / "	東経 ° / ' / "	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
かみのくぼいせき 上ノ久保遺跡	あんなかし さざのみや 安中市鷺宮 あさかみのくぼ 字上ノ久保	102113	G26	36°17'50"	138°52'53"	19970116- 19970331	1,200m <sup>2</sup>	市道建設
さくらばやしいせき 桜林遺跡	あんなかし さざのみや 安中市鷺宮 あさかくらばやし 字桜林		G16A	36°17'44"	138°52'56"	19910716- 19910810	220m <sup>2</sup>	
ごかいせき 五ヶ遺跡	あんなかし さざのみや 安中市鷺宮 あさかごか 字五ヶ		G16B	36°17'41"	138°52'52"	19910716- 19910810	160m <sup>2</sup>	

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
上ノ久保遺跡	集落	縄文中期～後期	住居址4土坑32埋設土器1	土器・石器・礫	遺構はすべて中期 上ノ久保館址
	集落	弥生時代後期	住居址2	壺・甕・台付甕・高坏	
	集落	古墳時代～平安	住居址43掘立柱建物址2	土師器・須恵器・鉄器	
	館址	鎌倉時代	溝2	白銅鏡	
桜林遺跡	集落	平安時代(9～10C)	住居址3溝1	土師器・須恵器・砥石	
	その他	中・近世	溝1	なし	
五ヶ遺跡	集落	平安時代(10C)	住居址2	土師器・須恵器	

## 上ノ久保遺跡・桜林遺跡・五ヶ遺跡

—市道東416号線・市道東418号線建設

に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—

発行日 平成10年8月31日

編集・発行 安中市教育委員会

群馬県安中市安中一丁目23-13

印 刷 朝日印刷工業株式会社

群馬県前橋市元総社町67